REFRANERO ESPAÑOL
スペインの諺辞典
（2）

Bernardo　Villasanz
新　井　藍　子

REFRANERO ESPAÑOL
スペインの諺辞典
（2）

Bernardo　Villasanz
新　井　藍　子

H

634. Hábito (El) no hace al monje.
衣は僧を作らず

— バロス：人の本質が外見と一致しない時に言う。

— スバルビィ：いつでも外見がその人の内面を表わすとは限らない。反対に“El hábito hace al monje. 衣が僧をつくる”とも言う。何故なら、世間では服装で人を判断する場合がしばしばあるから。

— イリバレン（El porqué de los dichos）によると、この諺の由来にはいくつかある。
1）僧たちが僧職についているにもかかわらず、騎士のような外観を自慢しあっているのを見て聖ベルナルドらの聖人が嘆いた。2）修道会の聖職禄を授かるためには修練者や修道士になるだけでは充分ではない。そのためには誓願修道士にならなければならない。3）外見で人を判断すべきではないと言っている諺“El hábito no hace al fraile”は、フランス人作家、Carlos Rozán によると、“El traje de lino no hace el sacerdote de lsis. 麻の衣はイシスの僧を作らず”を真似たものである。当時修道院の聖職禄を授けるのに、修練者や修道士になるだけで充分かそうでないかが議論された、そこからこの諺はきている。（著者－“イシス”とは古代エジプトの豊饒の大母神）

— コレアス諺集には上記の標題の諺と“El hábito y la capilla no hace fraile. 衣と礼拝堂だけで僧はできぬ”が載っている。

— 日本の諺には“衣は僧をつくらず”の他に次のようなのがある。“衣ばかりで和尚はできぬ”、“数珠ばかりでは和尚はできぬ”などで、意味はスペインの諺と全く同じで、人は見かけによらぬもの、外見だけで判断してはいけないと教えている。

635. Hablando se entiende la gente.
話せばわかる

— コレアス：“Hablando en las cosas se saben; hablando se saben las cosas. それらの事を話しているうちにわかってくる、話しているうちにそれらの事がわかってくる”人と話していると、知りたいと思っていた事や知らなかった事などがわかってくるものである。

— 黙っていたのでは互いに理解しあうことができない。話すことによって折り合いをつけることもできるようになるということ。日本の諺“言わぬ事は聞こえぬ”は、大事なことは念を押してきちんと話しなさいと、戒めている。

636. Habla poco, escucha asaz, y no errarás.
しゃべるのはほどほどに、聞くのは充分に、そうすれば誤らないだろう

— 賢い人は、つまらないことは言わないで相手の話しに耳を傾ける聞き上手である。“口はこれ禍の門”だということを知っているので、常に言葉を慎んでいる。スペインの諺にはこういうのもある。“Harto sabe quien no sabe, si callar sabe. 知らぬ者でも、もし、黙っていることを知っているなら充分に知っていることになる”まさに日本の諺の“しゃべる者に知る者なし”とか“怜悧なる頭には閉じたる口あり”を指している。“君子は九度思いて一度言う”にあたるスペインの諺は、“Hablar sin pensar es tirar sin apuntar. 考えずにしゃべるのは、ねらわずに射るのとおなじである”がある。スバルビィの諺集にも次のような諺が載っている、“Sabio es quien habla poco y calla mucho. 賢い人は、ほとんどしゃべらず、よく聞く”、“¿En qué se parece un tonto a un sabio? En lo que calla. どんな時に愚者は賢者のようになるの？ それは黙っている時さ”このように、スペインにも日本にもおしゃべりはなるたけ慎みなさいと戒めている諺が多数あるのは、つまらぬことを話したばかりに損したり、災いを蒙ってきた市井の人が多いせいであろう。

637. Hablar de la mar y en ella no entrar.
海については話すが、海に入ったことはない

— スバルビィ：この諺から次のような熟語がある；“Hablar de eso es como hablar de la mar. できそうもないことを話す、人に話すにはまだ早すぎるような計画について喋る”

— コレアス諺集には上記の諺の他に同意義で次のようなのがある；“Hablar de la mar y estar en la tierra. 陸にいて海について話す”、“Hablar de la virtud es poco, hacer la obra es el todo. 徳について言うは取るに足りない、行うことがすべてである”つまり“言うは易く行うは難し”のことで、すでに見てきた（諺391参照）“Del dicho al hecho hay gran trecho.

言うことと行うことには大きなへだたりがある”と全く同じことを述べている。

638. Hablen cartas y callen barbas.
論より証拠

— あれこれ言葉で議論するよりも、書きつけたもの（証拠）を示すほうが物事を明らかにする上でもずっと重要であるということ。“論をせんより証拠を出せ”、“論は後証拠は先”などともいう。

— 例題：ドン・キホーテ第二部７章、ドン・キホーテとサンチョの三度目の出発にあたって、妻のテレーサからこう言われたと続けざまにサンチョがはなつ諺のうちのひとつがこれである、“–dijo Sancho–que ate bien mi dedo con vuestra merced, y que hablen cartas y callen barbas,...旦那様との約束をしっかりきめなせえ、証文にして、口約束はよすがいい...”（続編一、永田寛定訳）

639. Habló el buey y dijo mu.
牛が口を開いたら　モーと言った

— コレアス：知識のないものがやたらと話したがり、とんちんかんなことを言う。“Habló el asno, y dijo O.　ロバが口を開いたら、オーと言った”

— スバルビィ：愚かな者にかぎって、訳のわからないことを言い放つ。

— イリバレン：ふだんは黙っていることの多い愚かな者が、たまに口をきいたとおもったら、筋の通らないことを言う意。

— こういう訳のわからないことを言うのをたとえて“唐人の寝言”という。“故事、ことわざ（創拓社）”によると、“唐人”とは中国人または異人のことで、ことばが通じない者の寝言はちんぷんかんぷんに聞こえるから。

640. Haceos miel y comeos han las moscas.
蜜のように甘いと　ハエどもが食べてしまう

— スバルビィ：お人好しで、他人に恩恵を施すような人は、たいてい皆から都合のいいように利用されてしまう。

— コレアスの諺集には、“Haceos miel, y comeros han moscas.”、“Haceos oveja y comeros han lobos.　羊のようにおとなしいと、狼どもが平らげる”が載っている。意味は同じ。“mosca－ハエ、厄介な人、うっとうしい人”こういう諺もある、“Más moscas se cogen con miel que con hiel.　ハエは胆汁より蜜のほうがよくとれる”（厳しくするより優しいほうが

効果がある－西和中辞典、小学館）“lobo－狼、泥棒、抜け目のないやつ”狼のでてくる諺には、次のようなのがある、“Un lobo a otro no se muerden.　狼同士はかみ合わない”（悪人は悪人同士助け合う－西和中辞典）

— 日本の諺“甘い物に蟻がつく”は一般的に人というものは利にさといものである、ということを教えてくれる。

— 例題：ドン・キホーテ第二部43章、島の太守となるからには、せめて自分の名くらい署名できないと皆から馬鹿にされると心配するドン・キホーテに対し、サンチョは立て続けに諺をしゃべりまくる、そのうちのひとつがこれである、“No, sino haceos miel, y paparos han moscas; 蜜のように甘え人間とみられるがいい、蝿がたかるだけの話よ。”（続編二、永田寛定訳）

— 例題２：ドン・キホーテ第二部49章、島を統治しているサンチョは、島の人間はだれでもめいめいが油断は禁物だという、なぜなら“No, sino haceos miel, y comeros han moscas. ただね、甘い顔をすりゃ、蝿がたかるってことよ！”（続編三、高橋正武訳）

641. Hacer (El) bien a villanos es echar agua en la mar.
心卑しき者に善なすは、大海に水を注ぐがごとし

— 同じ意味の諺では、“Hacer bien donde no es agradecido es bien perdido.　感謝なきところに善を施しても無駄である”がある。反対の諺では、“Hacer (El) bien nunca se pierde. 情けは人の為ならず”（人に親切にしておけば必ずよい報いがあるから、人には親切にせよ）、“Hacer bien y no mirar a quién.　だれにでも人には情けをかけよ”がある。コレアス諺集にも“Haz bien y no cates a quién; haz mal y guárdate.　だれにでも人にはよくせよ、もし悪いことをするなら用心せよ”（後半は、その悪行の報いは巡り巡って自分の上にいつか返ってくるから、気をつけよの意）コレアスによると、後半の“haz”は命令形ではなく、条件法の“si hicieres mal, guárdate.”を意味する。

— 例題：ドン・キホーテ第一部23章、自由にしてあげた囚人たちからさんざんな目にあわされたドン・キホーテが嘆いてサンチョにこう言う、“Siempre, Sancho, lo he oido decir, que el hacer bien a villanos es echar agua en la mar.　わしもな、サンチョ、＜心なき者に善をなすは大海に水をそそぐがごとし＞のことわざを、しじゅう聞いとったよ。”（正編二、永田寛定訳）

— 日本の諺にも、苦しい時に受けた人の恩も、そのときが過ぎてしまうとすぐに忘れてしまうものだというのが多い、次のもそのうちのひとつである。“恩を知る者は少なく恩をきる者は多し”

642. Hacer como el zapatero, que tira el cuero con los dientes hasta que le hace llegar donde él quiere.
革のはしっこを　口にくわえて　好きなところまで延ばす　靴屋のように

— スバルビィ：欲するものを手に入れたり、何事かを成就するためには、強い意志と頑張りが必要であることをたとえて言っている。
— つまり、“志ある者は事ついに成る”（後漢書）、“意志あれば通ず”、“念力岩をも通す”ということ。しっかりした志をもっている人は、どんな事でも成し遂げることができるということを教えている。
— 例題：ドン・キホーテ第二部59章、凶暴な牛の群れにさんざんな目にあわされたドン・キホーテは、このまま飢え死にしたいとサンチョに訴えるが、サンチョは食べるのをやめようともせずに諺を引用してこう返答する、わしはめし食って、命を引っぱり延ばすと、“...；antes pienso hacer como el zapatero, que tira el cuero con los dientes hasta que le hace llegar donde él quiere;...　わしは靴屋がやるみてえにやるつもりだ。靴屋が革の端を口にくわえて、延ばせるかぎり引っぱり延ばせるだろう、あれだ。”（続編三、高橋正武訳）

643. Hacer de tripas corazón
歯を食いしばってこらえる

— コレアス：“Hacer de las tripas corazón.”勇気を奮い立たせて頑張ること。
— バロス：恐怖心を抑えること。
— コバルビアス：内心はびくびくしているのに、勇気があるようにふるまうこと。
— イリバレンによると次のようにいくつかの解釈がある；１）恐怖とかの感情を悟られないようにこらえる事を表現する比喩的で巧妙な成句である；勇気（corazón）がない者は、胸のくぼみまで腹（tripas）を上げると、ため息がそとにもれず平常心を保つことができる。２）不快感、恐怖感、苦しみの感情などが顔にでないように精一杯努力する意。腸の動きをとめ勇気を奮い立たせることによりこれらの感情を抑えることができる。
— 腹の底から深く息を吸い、そこで少し息をとめ、それから少しづつ息を吐き出していくとすっかり心が落ちついてくるものである。このように腹式呼吸を10回ぐらいすると恐怖心などを抑えることができる。たぶん“hacer de tripas corazón”もこの事を言っているのではないかと思う、確かに腹式呼吸をすると、腹が上のほうに上がってくるし（イリバレン１）、腹の動きもとまる（同２）。

644. Hacer orejas de mercader.
聞こえぬふりをする

— スバルビィ：“Hacer orejas（u oídos）de mercader.”聞こえなかったようなふりをする、あたかも商店の主人が、客からいやな事を言われた時などにするように。（例えば、もっとまけろと言われたような時）

— コレアス：抜け目のない商人が訴訟とか、財産の没収を怖れてわずらわしい事には耳をかさないように、つんぼのふりをしたり、わからなかったようなふりをするのをたとえていう。

— 例題：ドン・キホーテ第二部48章、老女ドニャ・ロドリーゲスは娘の結婚のことで、公爵に何回もお願いしたが、公爵はいつも、“...hace orejas de mercader y apenas quiere oírme; ... 馬の耳に風と聞き流してしまわれるのでございますの。”（続編三、高橋正武訳）とドン・キホーテにめんめんと訴える。

— 人の言うことや、意見、忠告などに耳を貸さない、聞こうともしない、或いは聞き流して気にもとめない“馬耳東風”（李白詩集）、“柳に風”、“どこ吹く風”、“馬の耳に念仏”などと同意義のことわざ。成句に“hacerse el sordo. つんぼのふりをする、聞こえないふりをする”がある。

645. Hacer una raya en el agua.
水の中に線を引く

— スバルビィ：とても信じられぬような事を見た時に用いる表現。たとえば、非常なけちんぼうが施しをしたり、社交嫌いがパーティに出席していたりとかなど。

— 例題：セレスティーナ第3幕、恋人の姿を一日に二回も見て、びっくりしてエリシアが叫ぶ、“¡Santiaguarme quiero, Sempronio; quiero hacer una raya en el agua! あら、センプロニオ、あたしは十字をきりたいほどびっくりしたわよ！ ああ、おったまげて、水のなかに線でもひきたいくらいだわ！”（魔女セレスティナ、大島正訳）注194（La Celestina, Bruno Mario Damiani 解説）：“hacer una raya en el agua <para que no se deshaga>: あまりにも珍しく、習慣にないような事は、そんなに長くは続かないだろう、の意”

— 日本の諺には、意味は違うが類似の表現の“水に絵を描く”、“水に描く”、“水に文字描く”などがある、これらは“苦労するだけ損である、物事がはかないことのたとえ”だそうである。又、諺ではないが、日本語の表現で、聞いた話しがうたがわしい、あやしい、信用できないような時に使われるのに、“その話しは眉唾物だ”という言いかたがある。また、見たり聞いたりした事が信じられないような場合には、“眉につばをぬって”だまされないように用心する。国語辞典（講談社）によると、初めは、キツネにだまされないようにまゆにつばをつけたらしい。

646. Hacer un hoyo para tapar otro.
穴を塞ぐために　別の穴を掘る

— バロス：悪に対処するために、別の悪を犯す。“Un clavo saca otro clavo.　ひとつの釘で別の釘を抜く（軽い苦痛は別のもっと大きな苦痛によって忘れてしまう）”も同意義の諺である。
— スペインの諺の“ひとつの釘で別の釘を抜く”は、日本の諺の“楔を以て楔を抜く”と表現も意味も同じである。釘とか楔を抜くには別の釘や楔を打ち込み、ゆるめてから抜くの意。“毒を以て毒を制す”と同じ意味で、悪を除くのに悪を用いることをたとえている。その他にも“火は火で治まる”、“油を以て油煙を落とす”などとも言われている。

647. Hacer un pan como unas hostias.
とんでもないへまをやらかす

— パンをホスチア（聖餐用の薄いパンで、キリストの肉体の象徴）のように作ってしまう失敗をすること。パンはパンでも、ホスチアのほうは、カトリックのミサで、神父さまが信者の口の中にいれてくれる薄いウエハースのような聖餅である。普通のパンの代用とはならない。スバルビィによると、結果的にまずく出来上がったり、仕上がったりした時、或いは、見当はずれな事をしたような時に用いられる。やり方にはいろいろあるが、工夫をこらして、ていねいにやっているから、できあがりをみて批判してくれの“細工はりゅうりゅう仕上げをごろうじ”の仕上がりにたいする自信はここにはない。“como una hostia”という表現は、また、ひどく細いものの形容としても使われる（スバルビィ）。その他にも次のような俗語表現が西和中辞典にでている；“estar de mala hostia－不機嫌である”、“ponerse de mala hostia－不機嫌になる、怒る”、“tener mala hostia－心が汚い、怒りっぽい”など。

648. Haces mal, espera otro tal.
悪を行えば、悪の報いあり

— “因果応報”、“身から出た錆”、“仇も情も我が身より出る”と同じで、行いの善悪に応じて、それ相応の報いがあるということを教えている。孟子の御言葉にも“汝に出ずるものは汝に返る”がある。自分がした行為は善くても、悪くても報いとして自分自身に返ってくる。故に、禍福はすべて、自分が招いた結果である。太平記に出てくる“情は人の為ならず”も同じで、人に善くしておけば必ずよい報いがあるから、人には善くせよと教えている。（筆者の“スペインの諺辞典”の263を参照）

649. Hados y lados hacen dichosos o desdichados.
禍福は運と人できまる

— バロス：生まれつきの運と交友関係が人を幸福にしたり、不幸にしたりする。
— スバルビィ：人の幸、不幸は天命によって定まる運が良いか、悪いか、また誰を頼るかによって決まる。
— つまり、ひとくちで言えば、“運は天にあり”、“運を天に任せる”の運と、“寄らば大樹の陰”の人に頼るなら、なるたけ勢力のある者に頼ることが、人の幸、不幸を決める鍵となりそうである。これは、ある面では、“人事を尽くして天命を待つ”の心境にも通じそうである。

650. Hambre (La) despierta el ingenio.
空腹が智を目覚めさせる

— 空腹ほど人にやる気をおこさせて、いろいろ知恵を働かせるものはないというハングリー精神を謳っていることわざであるが、次のように、日本のことわざでは反対を言っているものが多い；“人困窮すれば智短し”、“貧すれば鈍する”、“貧には知恵の鏡も曇る”、“馬痩せて毛長し”、など、いずれも人は貧乏すると、精神も貧しくなり、頭の働きも鈍くなり、金欲しさからさもしいことまでするようになるとさんざんである。しかし、“ingenio”は“ingenio”でも、次の例題に見られるように“悪知恵”なら、人は、飢えをしのぐためにはどんないやしい事でもするという日本のことわざにも通ずる。空腹を謳ったスペインのことわざには次のようなものもある；“Hambre larga nunca repara en salsas.　飢えては食を択ばず”（飢えている時は、食べ物のえり好みなどはせずに何でも食べるように、生活に困窮したときは、安易な不平不満などは言っていられないということ）、“A buen hambre no hay pan duro.　空き腹にまずい物なし”など。
— 例題：セレスティーナ第9幕、セレスティーナのあの悪賢さは、一体どこからきたのだろうか、というセンプロニオに、もうひとりのカリストの従者パルメノがこう答える、“La necesidad y pobreza, la hambre, que no hay mejor maestra en el mundo, no hay mejor despertadora y avivadora de ingenios.　それは暮らしに困るということと、貧乏、それに腹がへるからさね。ことに、この飢えというやつより秀れた師匠は、この世にはないんだぜ。またそれ以上に悪知恵を呼びさまし、生き生きさせるものはないのさ。”（魔女セレスティナ、大島正訳）

651. Hambre que espera hartura, no es hambre.
満腹を夢みる空腹は、空腹ではない

— スバルビィ：骨折りや、苦労をしたりするのも、辛抱強くがんばれば、当然それに見合うだけ

の報酬がやってくるものである。

— バロス：“Hambre que espera hartura, no se puede llamar hambre.”たとえ現在が辛くても、よりよい将来を期待できるなら、どんな苦労も我慢できるものである。

— 将来、好きな職につくことを夢みて一生懸命勉強している苦学生などには、励ましとなる諺である。日本のことわざには、“大食腹に満つれば学問腹に入らず”とか、“腹の皮が張れば目の皮がたるむ”などがあるので、何事かを成し遂げるためには、満ち足りた生活よりは、少々不足しているほうががんばれるのではないだろうか。

652. Hambre, sed y frío meten al hombre por casa de su enemigo.
飢え、渇き、寒さが敵の家に追いやる

— “逃ぐる者道を択ばず”と同意義で、追いつめられて苦境に立った者は、どんなことでもするというたとえ。“貧すれば鈍する”、“敵の金でもあれば使う”も同じく、生活に苦しくなれば、人はどんなさもしいこともするということ。コレアス諺集には、次のようなバリエーションが載っている；“Hambre, sed y frío, te entregan a tu enemigo.　飢え、渇き、寒さが敵に引き渡す”、“Hambre y frío, entregan a su hombre al enemigo.　飢えと寒さが敵に引き渡す”

653. Hambre y esperar, hacen rabiar.
腹がへることと待つことは、腹が立つものである

— ずばり、日本のことわざでも同じ事を言っている；“腹へり男に腹たち男”、“待たるるとも待つ身になるな”と。人を待つことと、腹がすくことは実に辛いものである。そのうちに、段々と気が立ってきて、あちこち当たりちらすようになる。しまいには絶望的な気持ちにまで追いやられてしまう。

654. Hartas riquezas tiene el que más no quiere.
足るを知る者は富む

— バロス：本当に富む者は、持っているものに満足する。古い哲学のおしえである。

— “足るを知る”（老子）こと。人の欲望には際限がなく、誰もがもっともっとと思っている。自分の能力や環境などにも、いつでも不平不満があるのが常である。ことわざは、分相応のところで満足しなさいとおしえている。次のことわざも同意義である；“禍は足るを知らざるより大なるはなし”、“分相応に風が吹く”、“大きな家には大きな風”など。

655. Harto es necio quien a los sesenta años no adivina.
六十にして当たらぬ者は　大なる愚者である

— バロス：つまり、今までの人生経験を活かすことができなかったことになるから。
— 孔子のお言葉には“五十にして天命を知る。六十にして耳順う”がある。こちらのほうは、60才になって、他人の言うことを素直に聞くことができる境地に到達できるようになるということ。いずれにしても60という年は、人が生きていく長い歳月の中でひと区切りつける年齢なのだろう。60才はまた、還暦といって生まれた時の干支にもどる年でもある。

656. Hasta los gatos quieren zapatos.
猫までが　靴を欲しがる

— バロス：“Hasta los gatos tienen tos. 猫まで咳をする”と同じで、自分の境遇にふさわしくないような事についてえらそうな口を聞く人をたとえていう。
— “身の程を知れ”ということ。自分の身の程も知らずに、大きな口をきいたり、うぬぼれたりする者を“身知らずの口叩き”という。同じ意味で“鵜の真似をする烏”、“人真似すれば過ちする”などがある。いずれも、ある事をしてよいかどうかを判断するときは、自分の身分や実力をよく考えなさいとおしえている。

657. Hasta salir de casa es la peor jornada.
いちばん面倒な仕事は　家を出るとき

— 勤めに出かけるにも、学校へ行くにも重い腰をあげるときがいちばん厄介であるということ。また、どんな事でも、始めるまでが億劫だが、いったん始めてしまうと後は比較的すらすらと物事を簡単に押し進められる。日本のことわざにも“始めが大事”、“始めよければ終わりよし”、“始め半分”などがあり、いずれも、物事は始めが肝腎である、とおしえている。

658. Haya cebo en el palomar, que las palomas ellas vendrán.
ハト小屋に餌があれば、ハトが集って来るだろう

— “甘い物に蟻がつく”、“水積もりて魚集まる”などのように、人は利益があるところに自然に集ってくるものである。いい人材が欲しければ、それ相応の給料をだせばよい。
— 例題：ドン・キホーテ第二部7章、三回目の出発にあたり、従士としての給料をきちんと決めてほしいというサンチョに、ドン・キホーテが次のように諺で答える、“...que si al palomar no le falta cebo, no le faltarán palomas. Y advertid, hijo, que vale más buena esperanza

que ruin posesión y buena queja que mala paga.　鳩小屋に餌があるならば、鳩は寄ってこようからな。それに、知っとかっしゃい、わしの息子、よい希望はつまらぬ所有にまさり、よい嘆息はわるい支払にまさる...”（続編一、永田寛定訳）

659. Hay más días que longanizas.
急ぐことはない　時間は充分にある

— “longaniza” －ソーセージ、腸詰。途方もなく長いものを表現するためにしばしば比喩として用いられる。直訳すると、“腸詰より長い日にちがある”。この諺は、今日では、スバルビィによると、ある事をしたり、言ったりするのに、時間は充分にあるので、急いですることはない、という意味で使われる。しかし、もともとはコバルビアス（カスティーリャ語宝典）の解釈によると、財産、お金はたとえ沢山あるからといって使いきってしまうものではない、生きる期間は充分に長いのだから、明日を考えて使わなければならないと、貯金とか、先のことを考える予見の意味で使われていた。
イリバレンによると、この諺は15世紀の“Marqués de Santillana”の諺集にすでに拾われていたほど古いものである。

660. Hay ojos que se enamoran de legañas.
惚れた目にはあばたもえくぼ

— スペインのことわざの直訳のほうは、“めやににまで惚れる”好きになると、相手の欠点も長所に見えることのたとえ。“愛してその醜を忘る”、“惚れた欲目”なども同じ。
— スバルビィ：“Quien feo ama, hermoso le parece.　惚れた目には、醜女も美女”人の好みは理屈ではない。
— バロス：“Hay gustos que merecen palos.　悪口に値する趣味もある”悪趣味な選びかたをする者を非難している。
— 例題：セレスティーナ第9幕、恋人が他の女をほめたので嫉妬してこう言う、“...¡Mal me haga Dios, si ella lo es ni tiene parte de ello; sino que hay ojos que de lagañas se agradan!　あたいは神さまから禍いをちょうだいしていいわ。だけどあの姫が上品だなんて見えるのは、あばたも笑くぼというやつさ！”（魔女セレスティーナ、大島正訳）
注：“lagañas”は“legañas”のこと。（Bruno Mario Damiani）

661. Hay que quemar la casa sin que se vea el humo.
煙が立たぬように　家は燃やさなければならぬ

— バロス：“La ropa sucia, en casa se lava.　汚れものは、家の中で洗う”と同じで、内輪の事情は、公けにすべきではないということ。
— どこの家庭でも隠したい恥のひとつや二つはあるものである。思いがけないときに、“骨肉の争い”などが外にでることもある。

662. Haz bien y no mires a quién.
善い行いをせよ　誰にするかは考えるな

— コレアス：“Haz bien y no cates a quién; haz mal y guárdate.　善い行いをせよ、誰にするかは考えるな、もし悪い行いをしたら、用心しなさい”これは、慈悲にあふれた高貴な諺である。後半の部分は、前半にあわせるために命令形が使われているが、本来はこう書くべきである、“si hicieres mal, guárdate.”もし、悪い行いをしたら、必ずその報いがあるから用心しなさい、という意である。善い行いのほうも、情けをかけた人とは再び会うことがないかもしれないが、その善行の報いはいつかは自分の上に返ってくるものであるということ。（注：現在のスペイン語では、“si hicieres mal”は、“si hicieras mal”として用いられる。筆者）
— “情けは人の為ならず”とぴったりの諺である。とくに誰にするというのではなく、人に親切にしておけば、必ずよい報いがあるから、人には善行を施しなさいとおしえている。

663. Haz ciento y no hagas una y como que no has hecho ninguna.
百してあげても、一つしてあげなかったら、何にもしてあげなかったと思われる

— ここでも“Haz ciento y no hagas una”と命令形が使われているが、本来は、譲歩と条件文で、書き直すと次のようになる；“Aunque hicieras ciento, si no haces una, es como si no hubieras hecho ninguna.”人というものは、たとえ、以前たくさんの恩恵を受けたにもかかわらず、ひとつの頼み事を断られただけで怒ってしまい、以前してもらった、親切な行為もすっかり忘れてしまうものである、ということ。こういう事は、誰にでも起ることで“喉元過ぎれば熱さを忘れる”という現象である。そのときは、どんなに助かったかもしれない、人から受けた恩も、時がたてば忘れ去ってしまう。また、人というのは、してもらった事は、忘れ易いが、してもらわなかった事は、時が経ってもいつまでも覚えている厄介な代物である。

664. Haz lo que tu amo te manda, y siéntate con él a la mesa.
主人が命じることをせよ、そしていっしょに食卓へつきなさい

— 上の人たちに従っていれば、彼らの親愛を獲得することができるようになる、つまりかわいがってもらえるということ。

— コバルビアスの宝典には標題の諺の基となっている次の諺が収載されている；“Haz lo que tu amo te manda, y sentarte has con él a su mesa.　主人が命じることをせよ、そしていっしょに彼の食卓へつきなさい”コバルビアスによると、多くの主人は、一人で家で食事をする時、或いは旅の宿で食事をする時など数名の奉公人やお伴の中の一人を食卓につかせる習慣があった。食事の間中、他の呼ばれなかった者たちは、よろこんで彼らにサービスするそうである。何故なら、いつ自分たちも主人の食卓に呼ばれる立場になるかもしれないので。

— コレアスの諺集には、同意義で表現が少しずつ異なる次のようなバリエーションがある；“Haz lo que te manda tu amo, y sentarte has con él en el escaño.　主人が命じることをせよ、そしていっしょにベンチに座りなさい”、“Haz lo que te manda tu señor, y sentarte has con él al sol. ...,　そしていっしょに日なたぼっこしなさい”、“Haz lo que tu amo te manda, y sentarte has con él en la tabla. ..., そしていっしょに屋台に座りなさい”など。

— 論語ではこう教えている、“我が身を立てんとせばまず人を立てよ”と。自分が身を立てたいと思うなら、まず人を引き立てるようにしなさい、そういう心がけでいれば、いつかは自分の望みも達することができるようになる。日本のことわざでは、“袖の下に回る子は打たれぬ”とか“尾を振る犬は叩かれず”というのがある、いずれも、頼りにしてすがってくる者は、かわいくて酷い仕打ちはできないという意。

— 例題：ドン・キホーテ第二部29章、幻術にかけられた小船の章で、船をみつけたドン・キホーテは、サンチョに馬とロバを繋ぐように命じた、それに対し、サンチョはことわざを口にのせてこう答える、“... no hay sino obedecer y bajar la cabeza, atendiendo al refrán <haz lo que tu amo te manda, y siéntate con él a la mesa. ... ＜おまえの主人が命じることをしな。そして主人と一しょに食卓へつきな＞のことわざに従ってね、わしゃ承知しやしたと、頭をさげるだけの話でさ。”（続編二、永田寛定訳）

665. Haz primero lo necesario y después lo voluntario.
最初に必要なことをせよ　その後で好きなことをせよ

— “まず必要なことをせよ、その後でボランティアを”と訳せば、今日でも通じることわざである。しかし、いつまでもそのようなことを言っていては、ボランティアはなかなか始められないのも事実である。

— さて、バロス諺集には、類似のことわざとして“Antes es la obligación que la devoción. お祈りより、まずすべきことをせよ”がある。仕事をほっぽりだして教会に行ったり、お祈りばかりしている人にぴったりの諺である。バロスによると、好きかってなことよりまず必要なことを先にせよ、とおしえている。日本のことわざでは、自分の家のことは怠けていて、隣の家の仕事は頼まれなくてもする者を皮肉って“無精者の隣働き”などという。

666. Hazte viejo temprano y vivirás sano.
早く年寄りになりなさい、そうすれば健康に生きられるだろう

— “年寄りになる”ということは、色事を慎む、ということ。バロスによると、“Si quieres llegar a viejo, guarda el aceite en el pellejo. 長生きしたかったら、つやつや肌を保ちなさい”と同意義のことわざ。
コレアスは、“私は44才で年寄りになりました。”とコメントしている。日本では、“よいうちから養生”といって、体が健康なうちからいたわるのが最良の健康法であるとおしえている。江戸時代には、家督を長男に譲って、早々に隠居生活に入る者が数多くいた。その中には健康な者もいれば、色事に溺れて身を滅ぼす者もいたようである。

667. Hecha la jaula, muerta la urraca.
新しいカゴに、死んだカササギ

— バロス：“Jaula nueva, pájaro muerto. 新しいカゴに、死んだ鳥”も同じで、新しい鳥カゴに、鳥を入れると、死んでしまうとよく言われるが、これは根拠のない迷信である。また、このことわざは、達成されたばかりの仕事とか目的が、無駄になってしまったときにも使われる。

— せっかくの苦労を無駄にしてしまうの意では、“湯を沸かして水にする”（世間胸算用）があるが、それよりも、新しい家に引っ越すと、その家の主人が死んでしまうということは、よくあることである。家を新しく建てることは、それほど気苦労が多い。たいてい見積もりより経費がかさむし、近ごろでは、不正建築、欠陥住宅、マンションなどが多いし、また体に有毒な新建材などが使用されているので、アレルギーやアトピーなどを発生させたりして尚更である。スペインのことわざも迷信ではなく、事実をたとえて言っているのだとおもう。

668. Hermano (El) para el día malo.
凶日には兄弟

— いざというときに頼りになるのは、やはり身内であるということ。“血は水よりも濃い”がぴっ

たりだが、その反対に“兄弟は他人の始まり”とか“遠い親戚より近くの他人”などということわざも日本にある。昔は、スペインでも家族の繋がりが非常に緊密であったが、近ごろでは、日本と同じようにそうではなくなった。

669. Hermano quiere a hermana y marido a mujer sana y braciarremangada, y mujer, a marido que gana.
兄弟は姉妹を好き、亭主は健康で働きものの女房が好き、
女房はよく稼ぐ亭主が好き

— スバルビィの諺集には、“El hermano quiere a la hermana, y el marido a la mujer sana. 兄弟は姉妹を好き、夫は健康な妻が好き”という前半が載っている。スバルビィによると、兄弟（姉妹）愛は、私心がないが、夫婦愛は条件付きである。妻のふるまいによっては、夫は妻を求めなくなるものである。この事はことわざがよく言い表している。昔も今も、どこの国でも夫が妻に求めること、妻が夫に求めることは不変であろう。日本のことわざには、同じような事をいっているのがたくさんある；“嫁は手をみて貰え”、（手をみれば、働きものであるか、そうでないかがわかるから）、“女房は台所から貰え”（家計のやりくり上手な女房を貰えの意）など。現在の妻は“亭主は元気で留守がいい”と言っている、どちらもどちらだ。

— “braciarremangada”は、“腕まくりした”の意で、“brazo－腕（名詞）”と“arremangado－まくりあげた（形容詞）”の複合語。ふつう働くときには、腕まくりをするから。

670. Hermosa (La) es la primera y principal parte que enamora.
美しさは惚れるための　肝心な条件

— コレアス諺集には、次のようにいろいろなバリエーションがある；“Hermosa（La）abrasa en sólo mirarla.　美しい人は、目で焦がす”、“Hermosa（La）al desdén, parece bien. さりげない美しさは、感じがいい”、“Hermosa es la buena mujer.　善良な女は美しい”、“Hermosa es, por cierto, la que es buena de su cuerpo.　堕落していない女が美しい”（貞潔な女のこと）、“Hermosa（La）revuelta, la fea ni compuesta.　着飾った醜女は、くしゃくしゃの美人においつけない”（美人は、身なりをととのえていなくても、装飾品をつけていなくても美しいが、醜女はどんなにめかしこんでも美しくはならない）など。
美人を謳った日本のことわざには、“目で殺す”、“美人に年なし”、“美女は悪女の仇”（美人は醜女からしっとされる）、“美人は言わねどかくれなし”などがある。

— 例題：ドン・キホーテ第二部58章、アルティシドーラという娘っこがドン・キホーテのどこに惚れたか、まるっきり見当がつかないというサンチョ、なぜなら、“...; y habiendo yo también oído decir que la hermosura es la primera y principal parte que enamora, no teniendo

vuestra merced ninguna,... それに、女を惚れさせる肝心要は、きれいでなきゃなんねって聞いたことがあるけんど、おめえさまには、何ひとつそなわってねえだで、...”（続編三、高橋正武訳）

671. Herrero (El) de Arganda, él se lo sopla y él se lo macha y él lo saca a vender a la plaza.
アルガンダの鍛冶やは、ふいごを吹き、鎚を叩き、市場に売りにいく

— コバルビアスもスバルビィも同じようにこう説明している、“El herrero de Arganda, que él se lo fuella, y él se lo macha, y él se lo lleva a vender a la plaza. アルガンダの鍛冶やは、自分でふいごを吹き、自分で打ち、自分で市場に売りにいく”必要なことは、他人の助けとか、好意をあてにしないで、なにからなにまで自分自身でやりとげるような人をたとえていう。

コレアスの諺集には、“Herrero（El）de Arganda, él se lo suella, y él lo macha, y él se lo saca a vender a la plaza.”が収載されている。コレアスによると、“suella”は、“sopla con el fuelle－ふいごを吹く”、また、“suena, de sonar－ふいごを鳴らす”イリバレンは“カスティーリャ語辞書”（Terreros）を引用して、このことわざがたとえている者は、誰とも付き合いたくないのか、それとも他人を煩わすのがよほどいやなのか、どちらかだとしている。また、“アルガンダ”は、マドリッド地方にある村の名であるという。

— なにからなにまで自分でしないと気がすまない、人には任せられないという気質の人をたとえて言っているのだろう。こういう人は、おうおうにして他人のやり方が気に入らないという完璧主義者に多い気がする。

672. Herrero (El) de Arganda, que a puro de machacar se le olvidó el oficio.
アルガンダの鍛冶やは、鎚を叩いているうちに、仕事を忘れてしまった

— コレアス諺集には、同意義で表現が少し違うのがある、“Herrero（El）de Arganda, que a puras martilladas olvidó el oficio.”

バロスによると、冗談まじりに、よく知っていることを間違えた者に対して言うたとえである。バロス諺集には、こういうのもある、“Habar（El）de Cabra se secó lloviendo. カブラのソラマメ畑は、雨が降っているのに、渇いてしまった”バロスによると、標題のことわざと意味は同じだが、次のような解釈もあるとしている、つまり、稼いでいるのに、ますます貧乏になっていく者をたとえている。スバルビィによると、このことわざは、よくしてもらえばもらうほど、感謝しなくなる者を咎めていう。

— 名人、達人でもときには失敗することがあることをたとえて、“弘法にも筆の誤り”、“猿も木から落ちる”などという。またどんなに一生懸命働いても、ますます貧しくなっていくほうは、“稼ぐに追い抜く貧乏神”がある。忘恩については、“飼い犬に手を噛まれる”などがある。

673. Hiel y miel es menester.
苦も楽もどちらも　あったほうがいい

— 人生をこころから味わうことができるために。また、“浮世の苦楽は壁一重”だから。この世は、望む、望まないにかかわらず、くるくる変転していくものであるから、苦境にあっても悲観することなく、楽境にあっても楽観はしないほうがいいとおしえている。“No hay miel sin hiel.　楽あれば苦あり”ということわざもある。意味は同じ。

674. Hierba mala nunca muere.
雑草は決して死なない

— “憎まれっ子世にはばかる”と同じで、人から嫌われているような悪い人は、いつでもどこにでも現われては幅を利かせ、威勢よく振る舞うものだということ。コレアス諺集には、類似のスペインの諺がいくつかある；“Hierba mala, no la empece la helada.　雑草は霜にもめげぬ”、“Hierba mala, presto crece.　雑草はすぐ伸びる”、“Hierba (La) mala, presto crece, y antes de tiempo envejece.　雑草はすぐ伸びるが、すぐ萎れる”など。“mala hierba”には“与太者、ごろつき”の意味もある。また、日本の諺には、取り柄のない者や悪人などが長く身を保つことをたとえて言う“渋柿の長持ち”や、人から憎まれて、嫌われている者ほど長生きするという“呪うに死なず”などがある。

675. Hija (La) tuya, hermosa, y la mía, venturosa.
あなたのお嬢さんはきれいだけど、私の娘は運がいい

— 好運は美にまさるということ。すでに、同意義でこういう諺があった、“Dicha (La) de la fea, la bonita la desea.　醜女の好運、美女がうらやむ”（Dの項目を参照）確かに、“佳人薄命”という言葉がある通り、美しい人は生まれつき病弱であったり、ふしあわせであったりする場合があるかもしれないが、“みめは果報の基”というように美貌が幸運を得る場合がしばしばある。スペインのことわざのほうは、あまりきれいでない娘をもった母親の負け惜しみにも聞こえる。

676. Hijo de la cabra, de una hora a otra, bala.
ヤギの子は、いつでもメエー、メエーと鳴いている

— バロスによると、“かえるの子はかえる”ということ。子供は親に似るのがふつうで、くせや習慣までそっくりである。バロス諺集には、類似のことわざが次のようにある；“Hijo（El）del asno dos veces rebuzna al día. ロバの子は、一日に二回鳴く”、“La hija de la cabra, qué ha de ser sino cabrita. ヤギの子は、子ヤギにしかならない”、コレアス諺集にも似たようなのがある；“Hijo（El）de la cabra, siempre ha de ser cabrito. ヤギの子は、いつでも子ヤギになるにちがいない”、“Hijo（El）de la gata, ratones mata. ネコの子はネズミを殺す”など。

— 日本にも同意義でたくさんの諺がある；“瓜の蔓に茄子（なすび）はならぬ”、“親に似た蛙の子”、“蝮（まむし）の子は蝮”、“鳶（とんび）の子は鷹にならず”など。

677. Hijo (El) de tu vecino, quítale el moco y cásale con tu hija.
隣の小僧の鼻をふいてやって、娘っ子の聟に貰え

— 小さい時からよく知っているので、善良かそうでないかがわかるから。コレアス諺集にも同意義で、表現が少々異なった次のことわざが見られる；“Hijo（El）de tu vecina, quítale el moco y cásale con tu hija.”、“Hijo（El）de tu vecino, quítale el moco y mételе en casa, y dale a tu hija por marido. 隣の小僧の鼻をふいてやって、家に引っ張りこんで、娘っ子の聟に貰え”

— 日本のことわざでは、嫁についてではあるが反対をいっているのがある；“嫁と猫は近所から貰うな”、嫁も猫もひんぱんに生家にかようからだそうである。

678. Hijo eres y padre serás; cual hicieres tal habrás.
親にしたように　子からされるだろう

— 親を見て子は育つということ。老いた親にやさしければ、自分が老いた時には子からやさしくされ、そうでなければ、子に同じように邪魔もの扱いにされるだろう。バロスは“Con la vara que mides te medirán. 人をおしはかるものさしで、人からもおしはかられる”（筆者の諺283を参照）と、広い意味では見出しと類似のことわざであるという。
日本の類似のことわざでは、“親に似ぬ子なし”、“親が鈍すりゃ子も鈍する”、“親が親なら子も子”などがある。

679. Hijo malo, más vale doliente que sano.
悪い息子、元気でいるより病んでいるほうがまし

— コレアスによれば、病いはすぐになおるが、道徳的に悪いほうは、なかなか直らないから。スバルビィによれば、親が悪い息子を持った時は、息子が病気で寝ていてくれたほうがましである。なぜなら、悪さができないので、親が困ったり、苦しんだりすることもなくなるから。バロスは、悪い息子は、いっそ死んでくれたほうがましであると言う、元気でいればいるほど好き放題をして皆に迷惑をかけるから。
日本のことわざ、“死んだ子は賢い”、“死んだ子に阿呆はいない”などを見ると、バロスが言ってることと相通じるところもある。死んだ子はいいところだけが思い出されるから、親は子の欠点などすっかり忘れてしまって子を愛しい、なつかしいと感じるだろう。また、“親の心子知らず”ということわざは、子を思う親の深い愛情もわからないで、子は勝手な振る舞いをするという。

680. Hijos (Los) de Mari-Sabidilla, cada uno en su escudilla.
マリ・サビディジャの子供たちは、めいめいがめいめいの碗で食べる

— てんでんばらばらで、好き勝手なことをしているまとまりのない家族をいう。まるで現在の日本の核家族を指しているようである。めいめいがめいめいの時間に合わせて、ひとりで食事をする家庭がどんどん増えている。“escudilla”とは、スープとかミルクを注ぐ丸く、深いおわんのこと。

681. Hincharse como la rana que quiso igualarse con el buey.
牛に負けまいとした蛙のように　思いあがる

— “身のほど知らず”ということ。“鵜の真似する烏”とか“人真似すれば過ちする”と全く同じ。スバルビィによると、イソップのお話しにでてくる蛙のように、自分の身分や実力を考えずに、勢力のある者と競べたり、とうてい出来もしないような事にも同じ結果を求めたがる羨ましがり屋を指す。人の真似をして失敗しないために大事な事は、自分自身の才能や実力を見極める判断力であろう。“hincharse- ふくれ上がる、うぬぼれる、のぼせ上がる”

— 例題：ドン・キホーテ第二部42章、これからいよいよ太守になって任地に赴くというサンチョに向かってドン・キホーテが、思いあがりを戒めてこう言う、“Del conocerte saldrá el no hincharte como la rana que quiso igualarse con el buey, ...おまえ自身を知りさえすれば、牛に負けまいとした蛙のように、ふくれ上がることもなかろう。”（続編二、永田寛定訳）
注178：牛に負けまいとした蛙... 一蛙が牛に負けまいとどんどん体をふくらましたところ、

ふくらみすぎて、破裂したという昔話。

682. Hincharse las narices.
怒る、かっとなる

— “hinchársele las narices a <uno>－怒る、むかっ腹を立てる、かっとなる”

— 例題：セレスティーナ第12幕、自分の母親のことを持ちだしてぐちるセレスティーナに、かっとなるカリストの従者パルメノがこういう、“-No me hinches las narices con esas memorias; そんなことを思い出させやがって俺の鼻をふくらませてさ、俺さまを怒らすなっていうんだぜ。”（魔女セレスティナ、大島正訳）

683. Hispe el huevo bien batido, como la mujer con el buen marido.
よい亭主を持った女房は、よくかき混ぜた卵のようにふっくらふくらむ

— “hispe-levanta, crece, 大きくなる、伸びる、成長する、etc.” バロスによると、いい結婚をしている妻は、いい夫のお陰で、精神的に成長する、大きくなれる。スバルビィは、ことわざの趣意からいって、次のように順序を逆にしたほうが自然な表現になるのではないかという、“Como el huevo bien batido, hispe la mujer con el buen marido.” 筆者は標題のことわざをこのように訳した。

— 幸せな結婚をしている妻は、精神的にも外見もふっくらしている。いかにも満ち足りている様子がうかがえるものである。基本的には、亭主が女房に惚れていることが大事であろう、“女房にほれて家内安全”、“女房は家の宝” などの日本のことわざは、いかにも妻が大切にされて、家の中が平和で楽しい様子がする。

684. Hombre apercibido, medio combatido.
用意万端整える者は、半分勝ったようなもの

— 何事も始める前に充分に準備を整えておけば、戦う前にすでに半分勝っているようなものであるという。人が事にあたって用心深く、慎重に準備をすすめれば、成功するためにどんなに有利であるかをおしえていることわざである。一連の類似のことわざが次のようにある；“Hombre apercibido, anda seguro el camino. 用心深い者は、安全に道を歩む”、“Hombre apercibido / advertido / prevenido /, vale por dos. 準備を整えている者／気をつける者／用心深い者／は、倍の価値がある” など。コレアス諺集には、標題のことわざ以外に “Hombre apercebido, no es decebido. 用心深い者は、だまされない” がある。（apercebido は、apercibido, decebido は、engañado の意）同意で逆から言ったことわざには、“Hombre

atrevido, odre de buen vino y vaso de vidrio, duran poco. 無鉄砲な者、良質なワインの革袋、ガラスのコップは少ししか持ちこたえない”がある。

— 例題：セレスティーナ第12幕、真夜中になって、恋する女の屋敷にでかけようとしているカリストは従者たちに武装して行こうという、なぜなら、“..., y así iremos a buen recaudo, porque, como dicen: <el hombre apercibido medio combatido>. さて、こうして用心堅固にして行こうぞ。諺にもあるように、用意万端整えたる者は、半分勝ったも同然というからな。”（魔女セレスティナ、大島正訳）

— 何事も失敗しないようにあらかじめ充分な準備をし、用心することが大切であるという“用心は前にあり”、“用心に怪我なし”、“念には念を入れよ”などの日本のことわざが同意義である。反対のことわざには、“危ない橋を渡る”がある。

685. Hombre avariento, por uno pierde ciento.
一文惜しみの百失い

— バロスは、この諺の由来は聖書にあるという。筆者が調べて見ると、たしかにルカ福音書15に“見失った羊のたとえ”と“無くした銀貨のたとえ”があった。しかし、ここでは、“hombre avariento－欲深い人”とは全然関係のない話しが語られる；キリストに対して、ファリサイ派の人々や法律学者たちが、“この人は罪人たちを迎えて、食事まで一緒にしている”と不平を言いだした。そこで、イエスはいくつかのたとえを話された。初めのたとえは、百匹の羊のうち、一匹を見失った人が、九十九匹を野原に残して、一匹を見つけ出すまで捜した。そして、見つけたら非常に喜んだ。そこで、キリストはこう言われた、“悔い改める一人の罪人については、悔い改める必要のない九十九人の正しい人についてよりも大きな喜びが天にある。”次のたとえは、銀貨十枚持っている女が、その一枚を無くしたので、見つけるまで念を入れて捜した。そして、見つけたら、非常に喜んだ。そこで、キリストはこう言われた、“一人の罪人が悔い改めれば、神の天使たちの間に喜びがある。”

— ことわざのほうは、目先のわずかな出費を惜しんで、後で大損する欲深い人の愚かさをたとえていっている。日本のことわざも文字通り同じで、見出しの訳以外にも“一文おしみの百損”、“一文儲けの百遣い”、“小利を貪り大利を失う”、“安物買いの銭失い”などがある。

686. Hombre cano, ni viejo ni sabio.
白髪が、年取っていたり、物知りとは限らない

— 白髪が生えてきたからといって、必ずしも年取っているわけではないし、年をかさねたからといって賢くなるわけでもないということ。日本のことわざでは、年老いて体力や知力が衰えて凡人にも及ばなくなるという“麒麟も老いては駑馬に劣る”、“昔の剣今の菜刀”などがある。

むろん、“腐っても鯛”、“老馬の智”（韓非子）など反対のことわざもある。

687. Hombre (El) de seso, ahorra tiempo.
賢い人は、時間が節約できる

— 何事に対しても理解が早いので時間がかからない。余計な手間、暇かけずに直接物事を処理できるということ。論語に見える句“一を聞いて十を知る”、英語にでてくる“賢い人には一言で足りる”などを見ると、聡明な人は、自分の時間ばかりではなく、相手の時間も節約してくれる。それに対して、“一を知って二を知らず”（荘子）、“木を見て森を見ず”の人々のほうが世間にはいっぱいいる。

688. Hombre (El) es fuego y la mujer estopa; viene el diablo y sopla.
男と女は、燃えやすい火と木くずのようなもの

— “遠くて近きは男女の仲”なので、ほんのきっかけさえあれば、すぐに燃え上がる危険があるということ。スバルビィによると、男と女を入れ替えて、こうも言うことができる、“La mujer es fuego, el hombre es estopa, y el diablo fuella. 女と男は火と木くず、そこに悪魔がやってきて、ふっーと吹きかける”（fuella-sopla のこと）だから、“No está bien / no está segura / la estopa junto al fuego. 火の傍に木くずがあるのは危ない”

— “遠くて近きは恋の路”ともいうように、男女の仲は、遠いように見えても結ばれる時は簡単で早い。また、男については“女ならでは夜が明けぬ”、女については“女のかたいは膝頭ばかり”という日本のことわざがある。

689. Hombre honrado, antes muerto que injuriado.
高潔な人は、侮辱されるより死

— 節義を守る人は、名誉が傷つけられた場合には、死を選ぶということ。一般にスペイン人は、誇り高い民族である。スペイン人と接していても、スペイン文学を読んでいても、その事がとてもよく感じられる。特に、“馬鹿にされる、侮辱される”ということは、誰に対しても我慢がならないようである。しかし、現在では、自分が死ぬより侮辱した相手をやっつけるほうが易しい。

この名誉を重んずるという節義は、昔の日本の武士に相通ずるものがある、“武士（もののふ）は名をこそ惜しめ”、“命より名を惜しむ”、“武士は食わねど高楊枝”などが謳っているように。また、仮名手本忠臣蔵には“鷹は飢えても穂を摘まず”が見られ、高潔な人は、たとえどんなに窮しても不正な財貨には手を触れないことをたとえている。これは、現在の日本人がすっか

り失ってしまった尊い道徳心である。

690. Hombre maldiciente, en mi casa no entre.
悪口言う人は、わたしの家に入らないで

— バロスによると、だれのことでも悪口言う者は、人のあらゆる欠点の中でも、一番悪い欠点である。確かに、どこの隣近所の家に行っても、そこに居ない人の悪口を言いまくる者が必ずいるが、当然、自分の悪口も、あちこちで言われているであろう事を考えれば、そういう人に家に来てもらうのは愉快ではない。なおさら、“人の口に戸はたてられぬ”のが世間だから。また、“人のうわさを言うはかもの味がする”という諺があるが、うわさの中でも、悪いうわさほど人にとって興味津々のものはないであろう。

691. Hombre perezoso, en la fiesta es acucioso.
怠け者の節句働き

— スペインのことわざと日本のそれがぴったり一致した例。表現も意味も。ふだん怠けている者に限って、人がゆっくりと休んでいるときにわざと忙しそうに働く。また人が休む日にあえて働く者を非難し、あざけっていう。バロスによると、怠け者はぎりぎりの最後までしなければならない事を放っておくので、いちばん折りの悪い時に、忙しいおもいをしなければならない。上記の他に、同意義でいろいろの日本のことわざがある；“怠け者の宵働き”、“不精者の一時働き”、“横着者の節句働き”など。

692. Hombre pobre, con poco se alegra y socorre.
貧しき者は、少しのものでうれしがり、うまくやる

— コレアス諺集にはこうでている、“Hombre pobre, con poco se alegra y socorre; o compone.”意味は同じで、惨めな者は、ふだんから少しに慣れているので、どんな事にでも簡単に喜び、満足する。類似の日本のことわざには“小人の腹は満ち易し”、“小人の腹は肥え易し”がある。小人物は少しの利益ですぐに誘われてしまうことをたとえて言っている。スペインの諺の“貧しき者”には、精神的に貧しい、心が卑しいという意味もある。

693. Hombre (El) propone y Dios dispone.
人が考え、神が行う

— スバルビィ：“El hombre pone, o propone, y Dios dispone. / El hombre piensa y Dios

dispone. 人が考え、神が行う”われわれの決心、或いは決意が成るか成らぬかは、ただ神の御意志にかかっている。

— イリバレン（El porqué de los dichos）によると、もともとはラテン語文“Homo proponit, sed Deus disponit”からきている、或いは、ラテン語文の“Homo semper aliud, fortuna aliud, cogitad.（Siempre el hombre piensa una cosa, y la fortuna otra.）いつでも人がある事を考え、運がほかの事を考える”の新しいバージョンとも考えられる。また、聖書（格言16－9）には、次のような文が見られる、“El hombre elige su camino y Dios conduce sus pasos. 人がおのれの道を選び、神がその一歩一歩を導いていく”

— 人としてなしうる限りのことをしたうえは、その結果を神の意志に任せるという“人事を尽くして天命を待つ”（初学知要）も、同じような意味の格言である。この世では、人の力だけではどうすることもできないことがたくさんあるということ。

— 例題：ドン・キホーテ第二部55章、さんざんな目に会わされて、島を捨ててきたサンチョは、こういう情ねえざまで、出て来るはずではなかった、だけど、“...el hombre pone y Dios dispone, ･･･ 人が考え、神がよしなに、なされるだ。･･･”（続編三、高橋正武訳）と、たて続けにことわざをドン・キホーテに浴びせる。

694. Honra (La) y el vidrio, no tienen más que un golpecillo.
名誉とガラスは、一撃で壊れる

— バロスによると、どんな軽率な行いによっても簡単に名誉は汚され、損なわれてしまうので、よほど注意深く、一生懸命守らなければならない。バロス諺集には、名誉について次のようなことわざがある；“A la honra y al vidrio, un golpecillo. 名誉とガラス、一撃で（砕かれる）”、“Honra y provecho no caben bajo el mismo techo. 名誉と利益は、同じ屋根の下にはいられない／Honra y provecho no caben en un saco. 名誉と利益は、同じ袋には入らない”（人は、名誉と利益を同時に求めることは難しい）、“Honra y vicio no andan en un quicio. 名誉と悪徳は、ひとつの枠には収まらない”（反対の性質なので、ひとりの人間が両方を持つなんてことはありえない）

— 利益か名誉か、どちらかしか手に入らないらしい。日本のことわざにも“得を取るより名を取れ”、“名を得て実を失う”がある。利益を追うより名誉を得ることを重んじよとおしえている。その名誉にしても、油断しているとガラスのように脆くすぐに砕かれてしまうと、スペインのことわざは警告している。また、実利のほうを取る“名を棄てて実を取る”ということわざもある。

695. Hoy por ti, mañana por mí.
今日は人の身、明日は我が身

— スペインのことわざと日本のそれが、意味も表現もぴったり一致している。人ごとだと思って見ていることも、いつかは自分の身の上に起こってくるものである。だから、人は互いに助け合わなければならない。また、人にふりかかった災難は、他人事と思わないで自分自身の戒めとしなければならないとおしえている。コレアス諺集では、語順を換えてこういう、“Hoy por mí y mañana por ti.　今日は我が身、明日は人の身”コレアスによると、死者が生きている者に言う、また、境遇、出来事、手紙などについても同じことが言える。日本のことわざでは次のようにいう；“昨日は人の身今日は我が身”、“人の事は我が事”、“人の上に吹く風は我が身に当たる”など。

— 例題：ドン・キホーテ第二部65章、銀月の騎士との果し合いに敗北して、すっかり弱気になったドン・キホーテを慰めてサンチョが言う、“...; que hoy por ti y mañana por mí; y en estas cosas de encuentros y porrazas no hay tomarles tiento alguno, ...きょうは人の身、あしたはわが身って言うだ。勝負ごとや殴りあいのことは、あんまり気にするもんでねえだ。”（続編三、高橋正武訳）

696. Huésped con sol, ha honor.
早く着いた旅客は、歓待される

— “早いが勝ち”ということ。スバルビィによると、他の者たちより早く旅籠に着いた旅人は、そこでいろいろな便宜を図ってもらえる。あわてて遅くなってから着いた旅客たちより、ゆっくり、親切に歓待してもらえる。

— コバルビアス（宝典）によると、メソン（地方の料理屋兼宿屋）やベンタ（宿屋）に夜遅く着く旅人は部屋も食事もあるかどうかわからないし、同様に友人の家を予告なしに夜遅く訪れる者は歓迎されないし、場合によっては、すでに床についているという口実のもとに門も開けてもらえないかもしれぬ。

— 確かに、“先んずれば人を制す”（史記）、“先手必勝”、“機先を制する”などと言われているように、戦闘ばかりでなく、何でも人より先に行えば、人を抑えて有利な立場に立つことができる。

旅人について、スペインのことわざには次のような辛辣なものもある、“Huéspedes (Los) parecen bien por las espaldas.　旅人は、背中からのほうがよく見える”つまり、宿屋から帰って行く時の旅人を指す。又家に滞在していた客がやっと帰ってくれてほっとしたという気分がこのことわざにはでている。

697. Huéspedes vinieron y señores se hicieron.
庇を貸して母屋を取られる

— スペインのことわざの直訳は、“泊まり客として来たのに、主人になってしまった”もうひとつ同じ意味のスペインのことわざ“De fuera vendrá quien de casa nos echará. 外から来た者が、われわれを家から追い出す”バロスによると、親切なもてなしにつけこむ者をいう。日本の諺と全く意味は同じで、好意で自分の所有している一部を貸したために、つけこまれてその全部を取られてしまう。また、同意義で“鉈を貸して山を伐られる”、“恩を仇で返す”などのことわざもある。

698. Huésped (El) y el pece, a los tres días hiede.
泊まり客と魚は、三日目に悪臭放つ

— バロスによると、“pece-pez, 魚”で、“hiede- うんざりさせる”こと。客が泊まっていると数日でうんざりするということ。スバルビィによると、親戚の者でも、何日か泊まっていると、しだいに疲れてきてしまいには、早く帰ってほしい、もう二度と来るなとまで思うようになる。次のことわざはずばりこう言っている。“Huésped (El) que está despacio, cansa y da enfado. 客の長逗留は、うんざりさせ、いらいらさせる”人の費用で長逗留されることは大迷惑である。“Los huéspedes parecen bien por las espaldas. 宿泊客は、背中からの方がよく見える”という諺（筆者の諺696を参照）は真意を鋭く突いている。日本のことわざにも類似の表現、同義で“客と白鷺（しらさぎ）は立ったが見事”が見られる。こちらは、座り込んだ客が腰をあげる（立つ）ことを、優美な白鷺の飛び立つ様になぞらえたと言われている。“ことわざ辞典（岩波）”によると、江戸中期の使われはじめの頃は、客に立ちあがって舞いを舞うようにうながす言葉だったそうである。

699. Huí de la ceniza y caí en las brasas.
灰を逃れて　燃えさしに陥る

— ひとつの災難から逃れたら、別のもっと大きな災難に遭って苦しむことをたとえていう。コレアス諺集には、同意義でいろいろな表現のことわざが載っている；“Huí de la luz y metíme en el fuego. 明かりを逃れて、火に陥る”、“Huí del trueno, topé con el relámpago. 雷を避けて、稲妻にでくわす”、“Huir un peligro y dar en otro. 一難去って又一難”など。反対に大きな危険から逃げて小さな災難にみまわれることわざもコレアス諺集に見られる、“Huyendo del toro cayó en el arroyo. 雄牛を避けて、小川に陥る”これとそっくりの諺“牛を避けて水に陥る”が日本にもあるが、案外源はスペインかもしれない。ひとつの災難を

やっと切り抜けた途端、また別の災難がふりかかってくるという意味のことわざは、上記に記したのをあわせて日本にもいくつかある；“虎口を逃れて竜穴に入る”、“火を避けて水に陥る”、“前門の虎後門の狼”など。

700. Humo y gotera y la mujer parlera, echan al hombre de su casa fuera.
煙と雨もりと怒鳴る女房が、亭主を家から追いだす

— また、こうも言う、“Humo y mala cara sacan a la gente de casa.　煙と不機嫌な顔が、人を家から放りだす”コレアス諺集には、標題の他にこういうのがでている、“Humo y gotera, y mujer brava, echan al hombre de su casa.　煙と雨もりと威張った女房が、亭主を家から追いだす”スバルビィ諺集にも、“Humo y gotera, y mujer parlera, o vocinglera, echan al hombre de su casa fuera.”こういうものからは、一刻も早く男は逃げ出すべきだ、とスバルビィは述べている。(vocinglera-わめき立てる、大声でしゃべる)

— 日本では、亭主が家から逃げだしたくなるような悪妻についてこう言っている；“悪妻は百年の不作”、“悪妻は家の破滅”など。

701. Huye la ociosidad si quieres reposar.
休息したいのなら　怠惰から逃れよ

— 本当に休養を楽しみたいのならば、まずよく働きなさいということ。無為と休息は同じではないことを謳っていることわざ。忙しい中にも時々暇なときがあったり、また休養の時間をつくりだしたりすることをたとえて“忙中閑あり”という。その心境をスペインのことわざでも言っている。

I

702. Iglesia, o mar, o casa real, quien quiera medrar.
成功したいなら、教会か、海か、王宮へ行け

— スバルビィ：昔は富を築くのに三つの方法があった、即ち、教会の高僧になること、海を渡って物資を輸送すること、王宮で王に仕えることである。

— 例題：ドン・キホーテ第一部39章、父親が三人の息子にこの諺を引用して説いてきかせる。父親の言葉にはよく諺の真意が表れている。“... ; Iglesia, o mar, o casa real, como si más claramente dijera: <Quien quisiera valer y ser rico, siga, o la Iglesia, o navegue, ejercitando el arte de la mercancía, o entre a servir a los reyes en sus casas> ; ... ＜教会か、海か、王様の御所＞でな、もちっとはっきり言うと、＜身に箔をつけ金持ちになりたかったら、教会の人となるか、海外に出て商業にたずさわるか、王様の御所へお仕えするか＞となるのじゃ。”（正編三、永田寛定訳）

— 絶大な権力と土地を所有していた教会の聖職者になるか、すでにこの頃には新大陸が発見されていたので、海を渡り貿易に携わるか、王になんらかの形で仕えるかが、出世の道だった。15世紀の後半から16世紀にかけて流布された諺であろう。16世紀には農業も非常に重要で、それに従事する人も多かったのでこういう諺もある、“O corte o cortijo－（金持ちになりたかったら）王宮か荘園か”

703. Ignorancia es, todo a tropel aseverar o temer.
無知な者は、あらゆる事を断定するか、あやふやであるかどちらかだ

— バロス：この諺は、人が何らかの決断をする時には、後で後悔しないように深く考えるべきであると教えている。

— コレアス諺集には同意義で“Ignorancia es todo lo afirmar; y locura todo lo que pudo ser, negar. 愚かなことは、すべてを肯定するか、すべてそうだったかもしれないことまで否定すること”、“Ignorancia es todo lo aseverar, y lo que pudo no ser afirmar. 愚かなことは、すべてを断定し、そんなはずがなかったことまで肯定すること”などがある。

— 人は行動をおこす前にはよく熟考し、軽率にあらゆる可能性をただ肯定したり、或いはその反対に否定したりすべきではないと教えている。

704. Imposible a quien tiene oficios, estar sin enemigos.
仕事を持っていれば、必ず敵ができる

— バロス：“¿Quién es tu enemigo? 誰が君の敵？ El de tu oficio.　仕事の仲間だよ”と同じ意味の諺で、互いに同じ職場で競い合っている人々を指して言う。
— コレアス：“Imposible es quien tiene oficios estar sin enemigos.”国政と司法に携わっている人々を指して言う。厳しく行うと不服を示し、適当にすると、不平を言う。何故ならあらゆる人々を満足させることはほとんど不可能であるから。
— 日本には、激しく争い、競い合うことを“鎬（しのぎ）を削る”と言う。“男子家を出ずれば七人の敵あり”、“敷居をまたげば七人の敵あり”、“門を出ずれば敵あり”などの諺が見出しのスペインの諺にぴったりである。

705. Infierno (El) está lleno de buenos propósitos,
y de buenas obras el cielo.
地獄は善き志しでいっぱい、天国は善き行いでいっぱい

— バロス：善人であるためには、善意があるだけでは充分ではない、その善意を行いで示すことが不可欠であるということ。
— スバルビィ：“El infierno está empedrado de buenas intenciones.　地獄は善意で覆われている”われわれに善意の施しをしたいと思っている人々は、われわれに気まずいおもいをさせるものである。
— コレアス諺集には標題の諺の他に同意義で“Infierno（El）está lleno de buenos deseos, y el cielo de buenas obras.”がある。
— イリバレン（“El porqué de los dichos”）によると、この格言は昔から流布されていたが、その由来ははっきりしないらしい。ただし、1651年にイギリス人の神学者によって出版された書物（“Jacula prudentum”）には、上記の格言に類似したつぎのようなフレーズが載っていると、Walter Scott を引用して説明している；<Hell is full of good meanings and wishings.>
— 諺の真意は、新約聖書の“ヤコブの手紙２”の“行いを欠く信仰は死んだもの”の中に明確にでてくる；“信仰もこれと同じです。行いが伴わないなら、信仰はそれだけでは死んだものです。(17) ...あなたは<神は唯一だ>と信じている。結構なことだ。悪霊どももそう信じて、おののいています。(19) ああ、愚かな者よ、行いの伴わない信仰が役に立たない、ということを知りなさい。(20)”（日西対照　新約聖書、日本聖書協会）
— 日本でよく使われているのは“言うは易く行うは難し”、“言うは行うより易し”であろう。

706. La ingratitud es hija de la soberbia.
忘恩は尊大の娘

— スバルビィ：人のしてくれた恩恵に感謝せずに、あたりまえの事として受け取る人は、罪の中でも最も大きい罪である傲慢さを持っているからである。
— コレアス諺集には忘恩について、“Ingratitud seca las fuentes y mengua de piedad las corrientes. 忘恩は泉を涸（か）らし、無慈悲は流れをとめる”、また、バロス諺集には“Ingratitud（La）seca la fuente de la piedad. 忘恩は慈悲の泉を涸らす”の諺がある。
— 例題：ドン・キホーテ第二部、51章、バラタリア島太守サンチョにあてたドン・キホーテの書状に、サンチョに恩義を施してくれた主君である公爵御夫妻に書信を差し上げ感謝の意を表せよと諺が使われる、“... ; que la ingratitud es hija de la soberbia y uno de los mayores pecados que se sabe, ...それ忘恩は驕慢より出づる者にして、世に知られたる重罪の一たり。”（続編三、高橋正武訳）
— 一般的に人から受けた恩は、大恩であれ、すぐに忘れてしまうが、どんなに小さい怨みでもなかなか忘れられないのが人間である。故に“怨みほど恩を思え”とか、“喉元過ぎれば熱さを忘れる”などという諺が日本にもある。

707. Ira de hermanos, ira de diablos.
骨肉相食む

— バロス：兄弟姉妹間の争いは、非常に激しいことを言う。
— スバルビィ：他人同士での争いより、近い血縁関係の者同士が争い合うほうが悪化しやすい。
— 親子兄弟など、身近な血縁関係にある者同士が、互いに争い合い、殺し合うのをぴったり言い当てたのが、日本の諺の“骨肉相食む”であり“骨肉の争い”である。スペインのほうは、直訳すると、“兄弟の争いは、悪魔の争い”となり、やはり血の繋がった者同士の争いの激しさを表現している。

708. Las iras de los amantes suelen parar en maldiciones.
恋人同士の怒りは、終いにはののしり合いになる

— スバルビィ：恋している者同士の怒りは、結局このような羽目に終わる。怒りにまかせてあらゆる事柄が口からとびだす。
— 例題：ドン・キホーテ第二部、67章、公爵夫人の腰元の一人、アルティシドーラが自分に惚れこんでいるのに、その思いを遂げさせてやるわけにはいかなかったと思いこんでいるドン・キホーテは娘について諺を引用してこう評する、“... ;que las iras de los amantes suelen

parar en maldiciones.　恋する者の立腹は、えてして呪いに変わる。”（続編三、高橋正武訳）

709. Ir a la guerra ni casar no se ha de aconsejar.
戦争に行くことと　結婚することは　忠告すべきではない

— バロス：次のようにも言う、“Ir a la guerra, navegar y casar, etc.　戦争に行くこと、航海すること、結婚することは、...”先の予測がつかないような危険かつ重要な事柄に関しては、人は自らの直観で決めなければならぬ、とおしえている。
— スバルビィ：成功するとはっきりわかっている場合のみ、人は他者に助言できるとこの格言はおしえている。
— “痘痕もえくぼ”式で選ぶ結婚の場合には、反対すると一生恨まれることになる。

710. Ir por lana y volver trasquilado.
ミイラ取りがミイラになる

— 目論でいたことが、反対の結果に終わる時に使われる。
— ぴったり同意義の諺が“本朝二十四孝”の“木乃伊（みいら）取りが木乃伊になる”である。“故事ことわざ活用辞典”によると、ミイラを取りに出かけた者が、ミイラになってしまって帰ってこないという意から、人を説得しようとした者が逆に説得されてしまったり、人を連れ戻しに行った者が先方に留まって帰ってこないような、役目や責任を果たさないことをたとえて言う。
— スペインの諺の詳しい語源的な説明は、筆者の諺219“El carnero encantado, que fue por lana y volvió trasquilado”を、又同諺601をあわせて参照して下さい。類似には、“Ir romera y volver ramera. 巡礼者になって出かけたのに、売春婦として帰ってくる”という通俗な諺がある、特にこの場合は、女性の貞節を言う。“romera”と“ramera”が一字違いの同韻で、ことわざ特有のものとはいえ“巡礼者”と“売春婦”の表現のコントラストが強烈である。

711. Irse al hilo de la gente.
人の後ろについていく

— 諺というより成句である。
— コバルビアス：前になり後になって、数珠つなぎに道を歩いていく人々についていくこと。
— コレアス：他人がする通りにする。おもうように尋ねることが出来ない外国人にしばしば見られる。
— 例題：セレスティーナ第2幕、主人の身を思って耳に痛い忠告をしたお陰で、主人から忠義づ

らをしやがってとさんざん罵倒された従者のひとり、パルメノは、これからはこんなへまは金輪際しないとかたく決意する、“¡El mundo es tal! Quiero irme al hilo de la gente, pues a los traidores llaman discretos, a los fieles necios. 世の中とはこんなものさ！ 世間並みの道を行きたいものだな。煮ても焼いても食えぬ奴が分別のある人間だといわれたり、忠実な者が馬鹿呼ばわりされたりするのだからな。”（魔女セレスティナ、大島正訳）

712. Irse por los cerros de Úbeda.
本筋からはずれる

— スペインでは成句としてよく使われる表現である。

— コバルビアス（“Tesoro de la lengua castellana”1611年）によると、“Úbeda”は、アンダルシア地方にある町（筆者－現在はスペインのアンダルシア地方の Jaén 県の町）で、昔は“Idubeda”とか“Oubeta”と呼ばれ、グァダルキビル川のほとりに建てられた最初の町である。ウベダの丘陵（los cerros de Úbeda）は、広範囲の場所にまたがっていて、場所々により名前が変わっていく。ここから、人が遠く離れた場所に迷いこんだ時のことを表現する格言＜Esto es ir por los cerros de Úbeda－これは本題からはずれている＞がうまれた。

— コレアス（Vocabulario de refranes, 17世紀）によると、この慣用的表現は、言っていることが常識からはずれている時、とっぴな理由で言い訳をする時とか、或いは、説教していたり、反対意見を述べている時などにこんがらがったり、本題からそれたりした時に使われる。

— スバルビィ（“El diccionario de refrán”19世紀）によると、比較の副詞“como－･･･のように、･･･のような”をつけて<como por el cerro, o los cerros, de Úbeda.>として用いられ、話題にしている事柄にとんちんかんな返事をしたり、訳のわからないことを述べたりする人をたとえて言う。

— イリバレン（“El porqué de los dichos”1974年）は、スペイン王立アカデミーの辞書を引用して次のように説明している；“Por los cerros de Úbeda”は、慣用的、比喩的な言い回しで、“人が的外れに、或いは、でたらめに話すことを意味し、また、へんぴな人里離れた場所とか、地帯を比喩的に表現する時にも用いられる。この熟語の由来については、イリバレンは、次の二つをあげている；1）ウベダ（Úbeda）の山地にひとりの町長がいた。彼はウベダの小高い丘に住んでいた若い娘っ子にぞっこん惚れこんでいた。ある日、会議に現れたこの哀れな町長がたわごとを言い初めたので、ひとりの出席者がこう注意した、<No se vaya usía por los cerros de Úbeda>. 2）他の人が言うところによると、この上記の町長はウベダの町に住んでいて、娘は町に近い丘に住んでいた。ある日、会議で町長が演説をしている最中に、しだいにそれが本題からそれ初めたので、ひとりの娘が彼に言った、<Señor alcalde, no se le entiende; usía se va por los cerros.>

— 例題1：ドン・キホーテ第二部33章、サンチョがこの比喩的表現をいかにもサンチョらしく言

い替えて、ドン・キホーテの思い姫ドゥルシネーアの幻術の件を公爵夫人にこう説明している；“..., que le he dado a entender que está encatada, no siendo más verdad que por los cerros de Úbeda. ...じつは根も葉もまったくねえ話なのに、お姫様が幻術にかかったと主人に思いこませた件でがす。”（続編二、永田寛定訳）

— 例題２：ドン・キホーテ第二部43章、島の統治に赴くサンチョにいろいろな注意を与えるドン・キホーテが、ことわざをでたらめに使うのはやめなさいと言っているまさにその時、立て続けにサンチョがことわざを口にする、“..., y en un instante has echado aquí una letanía dellos, que así cuadran con lo que vamos tratando como por los cerros de Úbeda. ...ことわざは無用とわしが言っとる最中に、おまえはたちまちそのつるべ打ちをやってのけたな、問題の点へはまるでつながらぬことわざばかりをよ。”（続編二、永田寛定訳）

— 例題３：ドン・キホーテ第二部57章、再び、サンチョの口からとんでもねえ見当ちがいだと比喩的に使われる、“-Los tres tocadores sí llevo; pero las ligas, como por los cerros de Úbeda.＜被り衣は三枚持って来ただが、留め紐は、爪のあかほども持っちゃあ来ねえ＞”（続編三、高橋正武訳）

J

713. Jo, que te estrego, burra de mi suegro.
みえすいた　お世辞はよしてくれ

— “Jo, que te estriego, asna coja ” とも言う、Fernando de Rojas の“La Celestina”（1499年）の中にこの諺がでてくる。注釈者のBruno Mario Damiani（“La Celestina”, Cátedra, 1984年）によると、不適当な褒め言葉を拒絶する時に使われる。ここでは、身分の高い恋する若者のカリストが、全く当てはまらない賛辞をやり手婆あであるセレスティーナに言ったのに対するセレスティーナのコメントである、“...：que de las obras dudo, cuanto más de las palabras. <Jo, que te estriego, asna coja>. あたしは、ひとのすることなんてのは疑っているし、まして口先のことなんて、本当にしやしないからね。なにさ、どう、どう、ひっぱたくよ、びっこの驢馬。”（魔女セレスティナ、第１幕、大島正訳）“Jo, que te estriego, asna coja ” の直訳が、“どう、どう、ひっぱたくよ、びっこの驢馬”である。

— コバルビアス（“Tesoro”, 1611年）によると、“estregar” は、或ものを他のものにつよくこする意。諺 <Xo, que te estriego, burra de mi suegro.> 驢馬が痒くてくすぐったがる時に、手荒く扱うと驢馬は足で蹴ったり、噛みついたりする。（筆者―そこから驢馬をおとなしくさせるための表現であろう。）農民たちはこの諺をいろいろな意味に用いていた；そのひとつが、女房がおとなしくしないので、一発食らわせるような時に使った。

— バロス（“Refranero español”）は、こう解釈している。人からなんらかの親切を受けることを拒否する人たちを言う。筆者の上記の見出しの訳は“La Celestina”に依る。

714. Juegos de manos, juegos de villanos.
手のだし合い遊びは、下衆の遊び

— 今の日本の中高生がしているように、ふざけあって集団の仲間が空手チョップや、あし蹴りや、或いは、手で殴りあう場面を想像するとわかりやすい。そういう遊びはいやしいと非難している諺。バロスによると、遊びから手のだし合いを始めたが、時には本気になってしまう、そういう時にこの諺が用いられる。西和中辞典（小学館）では、“やたらに体を触るようななれなれしい態度は下品だ。”と訳されている。コバルビアスは、会話をする時には礼儀正しくしなさいと教えている格言であると言う。そうすれば殴り合うような事態にならないですむからであろう。

715. Juegos, pendencias y amores, igualan a los hombres.
賭けごと、けんか、色恋は人をみな等しくする

— バロス：なぜなら、それらは誰からも思慮とプライドを奪うから。
— “恋は思案の外”、“色の道は分別外”などと日本でも言われている。スペインのことわざは、それにつけ加えて、賭けごとやけんかも恋と同じように、人の理性を失わせ、とても思慮分別の及ぶようなものではないとおしえている。

716. Junta de cuatro, junta del diablo.
四人の会合は、頭痛の種

— バロスによると、合意に達するのが難しいから。普通の常識からすると、四人ぐらいの人数では、それほど難しいとも思えぬが、スペイン人は自己主張の強い民族であるし、また一人ひとりがしっかりとした自己の意見を持っていて、他者と異なった考えを堂々と人前で述べる習慣が小さい頃からある。四という数字にこだわらずに他人が何人か集まるとと考えるとすんなり理解できる。日本人のように右へ倣えではない。故に、このような格言ができたのであろう。
— 西和中辞典：“del diablo, de（todos）los diablos- 大きな、大変な”、“un problema de todos los diablos, del diablo- 頭の痛い問題、大事”
— コバルビアス：“Es un diablo- 腕白である、いたずらっ子である、悪党である”、“すべての有害な事に対して、 pesa como diablo/amarga como diablo－非常に重くのしかかってくる／酷くつらい思いをさせる”

717. Juntáronse el codicioso y el tramposo.
同じ穴の狢（ムジナ）は、集まりやすい

— バロス：悪い仲間がふたりで商売を始めようとしている時に用いられる。
— コバルビアスの宝典には、類似の諺がある、“El codicioso y el tramposo, fácilmente se conciertan. 欲張りとぺてん師は、すぐに同意する”よくない仲間、悪人は集結しやすく、悪い相談もすぐにまとまるということ。
— 悪い者には悪い仲間が集まり易いという日本の諺にはいくつかある、“臭い物に蠅たかる”、“腐った物に虫がわく”、また、同類は自然に寄り集まることをたとえて、“目の寄る所へは玉も寄る”、“類を以て集る”などがある。

718. Juras del que ama mujer no se han de creer.
女に愛を誓う男を　誰も信じない

— スバルビィ：多くの場合、恋愛に関しての不満は、盲目的に男の誓いや約束を信じて誘惑に陥り、堕落することである。男を信頼し過ぎなければ後で後悔せずにすむであろう。
— バロス：何故なら、男が愛を誓うのは、欲情からであるから、それさえ果たせば誓いは遂げられないのが常である。
— 偽りの誓いを謳うスペインのことわざにはこういうのがある、“Jura mala en piedra caiga. 偽りの誓いは、石の上に落ちるようなもの”嘘の誓いは不毛で、どんな実も結ばないということ。そして結局は、こうなってしまうと次のことわざがおしえてくれる“La que a los hombres cree jurando, sus ojos quebranta llorando. 誓う男を信じる女は、泣いて目を損なう”恋愛だけではないが、すべての事柄に応用できる類似のことわざがある。“Juras de tahur, saltos (pasos) son de liebre. ぺてん師の誓いは、うさぎの跳躍と同じ”素早いこと。機会があれば、どんなに小さな物でも、食指が動けば、その後を追って跳んでいくということ。獲物をつかまえる動作もとても早く、まるでうさぎが獲物に跳びかかるようである。“tahur－賭博師、ぺてん師”
— 男のきまり文句はどこでも同じらしい。“一生添うとは男の習い”はぴったり同意義の日本のことわざである。男が女の愛を得たいために、あなたを妻として、一生仲よく暮らしますと女に誓うと女はすっかりその気になってしまうのだろう。

719. Justa razón, engañar al engañador.
だます者をだますのは　もっともだ

— 類似のスペインのことわざには次のようなのがある；“Quien roba a un ladrón tiene cien años de perdón. 泥棒から盗んでも、百年間許してもらえる”、“El que engaña, engañado se halla. 欺く者は、欺かれる”（筆者のスペインの諺辞典の474を参照せよ）日本のことわざの“悪事身に返る”、“因果応報”と同じで、悪事をする者は、やがて同じような悪事を身に蒙るということ。
— 例題：セレスティーナ、第19幕、カリストの従者のひとりが仲間にことわざをいくつか引用して説教する、あの女はお前を騙そうとしている、そうとわかれば、お前が女を騙すんだ、“...、cual yo te diré : que <quien engaña al engañador...俺はお前に言っといてやるぜ。つまりごまかす奴をごまかす者はだ....,>”（魔女セレスティナ、大島正訳）

720. Justicia (La) de Peralvillo, que ahorcado el hombre hacíale pesquisa del delito.
ペラルビジョの裁判は、絞首刑の後で判決下す

— コレアス諺集には、異表現としてこういうのもある、“Justicia（La）de Peralvillo, que después de ahorcado el hombre le leen la sentencia del delito. ペラルビジョの裁判では、絞首刑の後で罪の判決文を読みあげる”コレアスの解釈によると、“Peralvillo”は、“Ciudad Real”県にある村で、そこでは、“Santa Hermandad- 神聖兄弟団、15－16世紀のスペインの警察組織”が罪を犯した犯罪者を訴訟なしに死刑に処していた。そして処刑の後で立証された宣告分を読み上げた。

— スバルビィの諺辞典には、同意義で“Como la justicia de Peralvillo, que después de asaeteado el hombre le fulminan el proceso. ペラルビジョの裁判のように、囚人を射った後で宣告する”の諺が掲載されている。裁判の判決を素早く決定した裁判所、官憲を咎めている諺である。また、比喩的には、仕上げの段階を最初にもってきて仕事をしたり、商売をしようとする人を非難するものである。見出しの諺はサンタ・エルマンダの驚くべき裁判のやり方からきた、田舎や荒野で犯罪を犯した者は、ペラルビジョ村に連れて来られすぐに、死刑に処された。そしてまだ葬られていない死体を前にして、ごく簡単に犯した罪が調べられ、起訴され、判決文が読まれ、宣告が下された。

— “非理の前には道理なし”ということだろうか。不条理な出来事はわれわれの社会にはいっぱいある。また、スバルビィのようにことわざを比喩的、広範囲に解釈すると“本末転倒”という語句が浮かんでくる。つまり、始めと終わりをさかさにするということである。

721. Justicia, mas no por mi casa.
人の裁きは、よその家でしてくれ

— バロス：他者が犯した罪を非難したり、裁いたりするのはなんと容易いことだろうか。反対に自分自身の罪は、懸命になって隠そうとする。また、広い意味では、自分自身がすることにはとても寛容なのに、他者には義務の遂行を厳しく要求する。

— スバルビィ：他者には厳格さをもって法を適用しようとし、己自身はそれから免れようとする人を咎めていることわざである。

— 一般的な意味では、人間というものは、誰でも自分には甘く、他人には厳しい傾向があるが、そうではいけない、自分を厳しく律し、他人には寛容であるべきであると、ことわざは教えている。

722. Juzgan los enamorados que todos tienen los ojos vendados.
恋している者は　ほかの者は眼帯していると　思っている

— スバルビィ：恋愛に夢中になっている者は、そのことだけにしか思いがいかないので、他のものたちが、自分たちをじっと見ていることに気づかない。

— バロス：上記と類似のことわざがある、“Piensan los enamorados que otros tienen los ojos quebrados. 恋している者は、ほかの者は眼が悪いと思っている”恋に情熱を燃やしている者は、他の者たちが彼らの行動を冷ややかにうかがっていることに気がつかない。

— “tener los ojos vendados- 真実に目をふさいでいる、真相を知らないでいる”まさに、“恋は盲目”ということ。スペインのことわざにでてくる“目に眼帯をしている者や、眼が悪い者”は、恋愛の当事者であることに当人たちは気づいていない。

L

723. Labor comenzada, no la muestres a suegra ni cuñada hasta que esté acabada.
仕事は　終わるまで　姑にも小姑にも　見せるな

— バロス：われわれのプロジェクトとか仕事は、妨害されないように敵に伝えるべきではない。
— スバルビィ：“Labor comenzada, no te la vea suegra ni cuñada. 始めたばかりの仕事は、姑にも小姑にも見せるな”嫁と仲がよくない姑と小姑、親戚は嫁を批判したくてうずうずしている。そういう事態を避けるためにも、始めた仕事は延ばさないでさっさとかたづけなさいとおしえている。広い意味にも応用できることわざ。
— “天機泄（も）らすべからず”がスペインのことわざと同類であろう。“天機”は天の機密、転じて、重大な秘密のこと。（故事ことわざ活用辞典）国であれ、企業であれ、個人であれ、どんな重要な秘密、プロジェクト、事業は人に漏らしてはいけない。人に話すわけにはいかないということ。

724. Ládreme el perro y no me muerda.
吠えてもいいけど　噛まないでくれ

— バロス：実行しないという確信があれば、どんな脅迫も無視するがよいと教えている。
— コレアス諺集には“..., y echarle he la cuerda. ロープを犬にかけなくてはならぬ”の後半もある。虚勢を張っている者は相手にするなということ。日本の諺では、そういうのを“犬の遠吠え”、“負け犬の遠吠え”、“えせ侍の刀いじり”などという。臆病な者ほど虚勢を張り、威張ってみせることをたとえて言っている。

725. Lágrimas y suspiros, mucho desenconan el corazón dolorido.
涙とため息は　心の痛みを　とても和らげてくれる

— まるで演歌の歌詞のようであるが、泣くことと、ため息をつくことにより苦しんでいる心が軽くなる。涙を謳っている諺がバロス諺集にはいくつかあるが、そのうち二つを見てみよう；“Lágrimas de las damas, son agua en la fragua. 女の涙は、炉にふりかかった水のようなもの”（見せかけの時間しかもたないということ—バロス）“fragua- 鍛冶屋の炉”
“女の涙と犬のちんばはうそである”という類似のことわざが日本にはある。“今泣いた烏がもう笑う”のほうは、今まで泣いていると思ったら、もう笑っているというほほえましい変わりようの早さをたとえている。“Lágrimas del que hereda, son risa encubierta. 相続する

者の涙は、隠された笑い”同じように人間の欲の深さ、浅ましさを皮肉った川柳が日本にもある；“泣く泣くも良い方を取る形見分け”

— 例題：セレスティーナ第１幕、カリストの従者のひとりセンプロニオが、主人が恋心に苦しんでいるのを見て独り言を言う、“...；dejemos llorar al que dolor tiene, que las lágrimas y sospiros mucho desenconan el corazón dolorido. 傷をもつ人は泣かせてあげよう。涙とため息が、心のいたみをうんと、やわらげてくれるからな。”（魔女セレスティナ、大島正訳）

726. La que con muchos se casa a todos enfada.
全ての人の友は　誰の友でもない

— コレアス：数多くの男たちと結婚の同意をする女は、その中の一人に決めることが出来ず、毎週新しい男とつきあうようになり、結婚ばなしをするようになる。終いには、どの男をもいらだたせてしまう。

— スバルビィ：結婚したいと言い寄る男たち全てに、たやすく同意してしまう女を非難している。広い意味では、敵をつくりたくないので、たとえ相手が互いに正反対の意見を持っていようとも、それらの人たちの意見に同意してしまうことをたとえて言う。

— 簡単に言えば“八方美人”のことで、誰彼の区別なく調子よくつき合うこと。スペインのことわざの直訳は、“多くの男たちに同意する女は、みんなを怒らせる”標題の訳“全ての人の友は誰の友でもない”は、アリストテレスの“エウデモス倫理学”に見える言葉だそうである。（筆者の諺辞典、諺58を参照）

727. La que es deseosa de ver, también tiene deseo de ser vista.
見たがる女は、見られたがっている

— スバルビィ：好奇心とか物好きは、しばしばその下に色気や媚びを覆い隠しているものである。

— 例題：ドン・キホーテ第二部49章、領地の夜回りをしていて、サンチョは男装の乙女を捕え、得意のことわざをいくつかちりばめて諭すうちのひとつがこれである、“...；y la que es deseosa de ver, también tiene deseo de ser vista. No digo más. 見たがる女には、やっぱり見られたがる気持ちがあるんだ。そんだけだ”（続編三、高橋正武訳）

— “女の心は女知る”と言われているように、女の微妙な心は女だけが知っている。果たしてこのことわざは本当だろうか。

728. La que luce entre las ollas, no luce entre las otras.
台所で輝いている女は、外ではぱっとしない

— バロス：たぶんこういう女の方が価値がある。また、こういう解釈も成り立つ。つまり、いまにも汚しそうになりながら外出着で家事をする女をいう。

— 一般的に、現在なら専業主婦とキャリアウーマンの相違であろう。やはり外でやりがいのある仕事に従事している女性の方が輝いている。バロスのこの諺集の出版が1968年なので、まだまだスペインでも専業主婦が圧倒的に多かった。これでバロスの女性に対する見方がわかるであろう。ちなみにこの諺がつくられたのは、ずっと以前である。17世紀のコレアス諺集にも載っている。反対のことわざもある、“La que no pone seso en la olla no lo tiene en la toca. 料理ができない女は、おしゃれもできない”バロスはこう説明している；一番大事なことに気が配れないような女は、全ての事に分別がないと。コレアス諺集には、少し表現を変えて、“La que no pone seso a la olla no tiene cholla. 料理ができない女は頭が悪いから”がある。“cholla- 頭”男から見て、家事、特に料理の下手な女はこのように手厳しい非難を受ける。日本のことわざにも“嫁は手をみて貰え”というのがある。働きものであるか、そうでないか、手をみればわかるという。

729. La que no tiene suegra ni cuñada, ésa es bien casada.
姑も小姑もいない嫁が、いい結婚している

— ずばりと真実をついていることわざ。いつでも、どこでも“小姑鬼千匹”、“姑が無事で嫁にくし”（姑が元気だと、いつまでも嫁いじめが続く）、“姑の気に入る嫁は世が早い”（それほど気を使うと早死するのである）、“嫁と姑犬と猿”なので、スペインのことわざがなるほどとうなずける。

730. La que presto empieza, presto lo deja.
すぐ始めた者が、すぐやめる

— コレアスは、これは産婦のお産について言っているとしているが、バロスはそれだけではなく、全ての事柄にも当てはめることができると言う。広い意味にとると、あまり考えないで物事を始めたり、仕事についた者は長続きしない事がしばしばあるので、何か事を始める前には、よく熟考することが必要ですよと教えていることわざになる。

— 日本の次のようなことわざとも類似している；“早合点の早忘れ”、“早呑み込みの早忘れ”、“早覚えの早忘れ”など、早のみ込みしてわかったつもりでいても、すぐに忘れてしまう人を言う。

731. Largas se debe dar a mucho y aun a todo, si no se quiere vivir poco.
あらゆる事はゆっくりと、もし早死にしたくなかったら

— “dar largas a <algo>－＜何か＞を引き延ばす”前のことわざ730.とも相通ずるところがあることわざで、何事もあわてずにゆっくりやれば、ストレスにもならず楽しくやれるということ。以前、スペインでは、“また、明日”という精神で物事をやっていたが、そのほうがいいという事らしい。日本のことわざでも“慌てる乞食は貰いが少ない”、“走ればつまずく”、“急いては事を仕損じる”などと言って、どんな事も平静さを失うなと教えている。そのほうが着実に長生きもできるだろう。

732. Largo, largo, maldito lo que valgo.
のっぽの能なし

— 背ばかり高くて、役に立たない人をたとえている。日本の川柳やことわざには同じようなのがいくつかある；“独活（うど）の大木”、“大男の見かけ倒し”、“大きな大根辛くなし”、“でっかの能なし”、“大男総身に知恵が回りかね”など、身体の大きい男にたいして辛辣なことわざである。

— スペインでは、スバルビィの解釈によると、背ばかりひょろひょろ高くて、たいてい痩せているような男は、体も弱く、役にたたない。

733. Leche (La) y el vino, hacen el viejo niño.
牛乳とワインが、年寄りを赤ん坊にする

— スバルビィ：乳製品の食べ物やアルコールによって生じる楽しい気分は、年寄りを生まれたての赤ん坊のようにする。人生における永遠のユーモアは、棺もゆりかごも、たぶん同じ材料でできているということではないだろうか。

— 日本でも最近は、大いにワインが飲まれているのは、いい傾向である。ワインは気分を楽しくさせてくれるだけではなく、ワインに含まれているポリフェノールが体に大変よいと実証されている。牛乳はカルシウムがたっぷり入っているので骨折の予防になる。昔の人の知恵はたいしたもので、牛乳とワインを毎日適当に飲めば若返ることは間違いない。しかし、ワインは飲みすぎると体に悪いので、スペインの別のことわざはこう教えている、“El vino, como rey, y el agua, como buey. 水は牛のように、しかし酒は王のように”（水はふんだんに、酒は控えめに飲みなさい）ワインについての諺がコバルビアスの宝典にふたつ出ている；“Pregonar vino y vender vinagre. 羊頭（ようとう）を懸げて狗肉（くにく）を売る”（直訳―ワインを懸げて酢を売る）、“El vino no trae bragas ni de paño ni de lino. ワインはウールであ

ろうと、麻であろうとパンツをはかせない”（酒を飲んだ者は、秘密をぼろぼろともらすから）

— 日本のことわざでは、“秋刀魚（さんま）が出ると按摩が引っ込む”、“蜜柑が黄色くなると医者が青くなる”、“柿が赤くなると医者が青くなる”などといって、これらの食べ物や、それらが出回る頃の気候も大変健康によく、按摩も医者もいらなくなると言う。

734. Leña (La), cuanto más seca más arde.
たきぎは　乾いていればいるほど　燃えやすい

— “老いらくの恋”は激しいということ。しかし、恋愛だけでなく、年寄りがすることは何でも世間から冷ややかに見られる。“年寄りの冷や水”とか“老いの木登り”、“年寄りの夜歩き”などとひやかされ、揶揄される。恋愛などおちおちしていられないのが、今の日本の高齢者である。

— “leña- たきぎ”についての諺に“Llevar leña al monte. たくさん持っている人に同じものを少しあげること”（コバルビアス、宝典）がある。西和中辞典ではこう訳されている、“よけいな骨折りをする”“leña”の口語表現—“añadir/echar/poner leña al fuego- 火に油を注ぐ、煽る、悪化させる、けしかける”

735. La letra con sangre entra.
学問は血のにじむような努力をして覚える

— コレアス：“Letra（La）con sangre entra, y la labor con dolor. 学問は努力して、また仕事は苦労して、覚える”子供らをこらしめながら覚えさせるという意。

— コバルビアス：“La letra con sangre entra, el que pretende saber ha de trabajar y sudar. 学問は（血のにじむような）努力をして覚える、学ぼうと志を立てる者は、苦労し、額に汗しなければならない”という意味であって、“sangre- 血”は、あのいわゆる野蛮な教師がするように、生徒をムチで打つことではない。

— スバルビィ：学びたい者、何かを身につけたい者は、相当な苦労をしなければならないと教えている。17世紀初めの辞典（著者は、スペイン、コルドバの医者Francisco del Rosal）の項目“disciplina”の意味は、“azote- ムチ打ち”のことで、ラテン語では、“教義、教育”の意。そこから、“discípulo”は、学ぶ者、生徒の意味となる。というのも、規律とかしつけは教育の手段である。更に、辞典はこの格言“La letra con sangre entra”についてこう評している；これは、今まで間違って解釈されてきた。“sangre”は、“懲罰”ではなく、“欲求、愛情、熱意”の意味である。

— バロス：勉強を教えたり、仕事を覚えさせるためには、特に相手が子供の場合には、厳格さが必要である。

— いろいろな解釈があるが、学問は、苦労し額に汗してこそ身につくということ。しかし、ある者は、上記の格言の“con sangre”は、“con sangre del discípulo－生徒の努力と汗”であるより、“con sangre del maestro－先生の努力と汗”であるべきであるという。すなわち、先生の熱意によって初めて生徒は学び、覚えることができるとしている。

— 例題：ドン・キホーテ第二部36章、ドゥルシネーアの幻術をほどくために、夜のうちに手で打ったというサンチョに、公爵夫人は、格言を引用してそれではだめだ、身にこたえさせることが必要ですと言う、“...；porque la letra con sangre entra, ... ＜学問は血を流して身につく＞と言いますもの。...”（続編二、永田寛定訳）注：130—＜文字、学問は血といっしょにはいる＞というのは、今もいきている格言で、何ごとにも血みどろな努力が必要なことを意味しているが、クレメンシンの注釈によると、子供に国語を教えるにあたっては、笞で打ち、血を流さなくてはならないという考え方が支配的であった、と言う。

— 日本では、学問を身につけるためには、“学は及ばざるが如くせよ”、“学問に近道なし”、などと言って、不断の努力が必要であると教えている、また学問は若い時にするだけではなく、幾つからでも思いついたらするがよいという“学に老若の別なし”がある。

736. Letras sin virtud son perlas en el muladar.
徳なき学問は　はきだめの真珠

— 役に立たないこと。

— スバルビィ：俗界の学問に思い上がり、己自身の魂の救済を忘れているような輩（やから）を咎めていることわざ。

— 例題：ドン・キホーテ第二部16章、ドン・キホーテとサンチョの道連れになった郷士が、息子は学ばせたい法律学にも神学にも、いっこう興味を示さずに、詩学にばかり没頭していると嘆き、ことわざを引用する、“...；porque letras sin virtud son perlas en el muladar. たしかに、道徳を忘れた文字は、はきだめの真珠ですよ。”（続編—、永田寛定訳）

— “役に立たない”という意味では、“論語読みの論語知らず”がある、“論語”の説く道徳をいくら頭で理解していても、その教えを実行しなければ何にもならない。また、同じように、“学んで思わざれば則ちくらく、思うて学ばざれば則ちあやふし”は、学ぶだけで思索しないものは、道理がわからず、思うだけで学ばない者は思索したものが、道理にあうかどうかわからず危ういという。

737. Libro cerrado no saca letrado.
閉じられた書は　学を出さぬ

— 勉強しなければ何も学ぶことは出来ぬし、知識を得ることは出来ぬ。自明の理である。反対に

学問の好きな者のところには、自然によい書物が集まってどんどん知識を積んでいくようになる。日本のことわざでは“学の前に書来る”という。また、どんなによい素質を持っていても、すばらしい才能があっても、学問、修養を積む努力をしなければ有能な、優れた人物にはなれない。そういうのを“玉琢（みが）かざれば器を成さず”（礼記）とか“玉磨かざれば光なし”（実語教）と言う。

738. Liebre (La) diestra, presto sale a la vereda.
巧みな野兎は、すばやく細道に逃げる

— バロス：経験を積んでいる者は、難局をうまく切りぬけたり、成功できるような場所に身を置くようにつとめるものである。

— コレアス諺集には上記の諺の他に、類似のことわざがある、“Liebre（La）vieja coge la vereda; la nueva, o la matan o enseña. 古つわものの野兎は細道を選び、新米は、殺されるか、学んでいくかのどちらかだ”経験を積んでいるか、積んでいないかの違いは、難局に面したときにわかるということ。野兎についてのことわざが次のようにいくつかある；“Liebre（La）lo que en el arenal gana lo pierde en el agua. 砂地では野兎が勝ち、水たまりでは負ける”（砂地では、猟犬より早く走ることが出来るが、湿地帯では、追いつかれる－コレアス）、“Liebre（La）que has de matar, cuesta abajo la has de echar. 野兎を殺すつもりなら、坂下へ追いやらなければならぬ”、“En diciembre siete galgos a una liebre. 12月は、一匹の野兎に七匹の猟犬”（乾燥して寒い冬には、野兎はまるで飛ぶように走る－コバルビアス）
経験を積んだ者は、事態を正しく把握できるし、物事の方針を誤らないことをたとえて、“老馬の智”（韓非子）、“老いたる馬は道を忘れず”、“馬に道まかす”、“いかの甲より年の却（こう）”などという。

— スバルビィの諺辞典には、“liebre”を用いた次のような熟語がある；“Más cobarde que una liebre－とても臆病である”、“Más ligero que una liebre, o que un gamo－とても敏捷である”、“Más medroso que una liebre- とてもこわがりである”

739. Limpieza y dineros hacen los hijos caballeros.
身だしなみと金で　紳士となる

— “limpieza”には、“清潔、正直、誠実”などの意味があるが、筆者はこのことわざには、“身だしなみのよさ”という内面より、外面的な訳を与えた。何故なら、たいていの人は、簡単に“dineros－金”と高価な衣服で紳士、淑女となることが出来るからである。日本のことわざの“金が言わせる旦那”と同義であろう。つまり、金を持っていれば、世間から“旦那、旦那”ともち上げられるが、それは決して人間が立派であるからではなく、金の力によるものである。

また、“清人に金なし”と言われるように、清廉潔白に、身を持している人は、貧乏で金など持っていない。スペインの諺にも類義がある；“Poderoso caballero es don dinero. 勢力のある紳士は、お金である”（金で得られないものは何もない）

740. Lo barato es caro y lo caro es barato.
安物は高物、高物は安物

— バロス：（高いか安いかは）品質が良いか、悪いか、長持ちするか、しないかで決まる。
— コレアス諺集には、“Lo malo, de balde es caro ; lo mejor es más barato. 悪くて、ただの物が高い、最上の物がいちばん安い”日本の諺の“ただより高い物はない”と同義である。また、“安物は高物”の類似のことわざがいくつかある；“安物買いの銭失い”、“安かろう悪かろう”、“一文吝（おし）みの百知らず”など、値段の安い物は、それだけ品質も悪いので長持ちせず、結局損をすることになる。また、目先のわずかな出費を惜しんだばかりに、後で大損をすることに気がつかない愚かさをたとえて言う。そこから、何事も目先の損得だけを考えないで、将来の利益を考えて金を使うことを知らなければならないと教えている。（筆者の諺辞典、諺833を参照）

741. Loba (La) y la mujer, iguales son en escoger.
雌狼と女は、選びかたが同じ

— バロス：雌の狼は一番御しにくい雄を選ぶので知られている。
— コレアス諺集でコレアスも“女は雌の狼のように、愚かな男を自慢するものである”と言う、類義の諺“Loba（La）en el escoger, la anguilla en el retener. 雌の狼は選ぶことで、ウナギは捕まえることで（はずれる）”がある。これに更に女が加わるのであろう。
— 日本にも女は愚かであると謳っている諺がいくつかある；“女の猿知恵”、“女賢（さか）しうして牛売り損なう”、“女が口を叩けば牛の値が下がる”、“雌鶏（めんどり）うたえば家滅ぶ”などで、女は利口だと思っていても失敗しやすいという。また、孔子は論語の中で、“女子と小人（しょうじん）は養い難し”と言っている、女性と小人物は扱いにくいものだの意。

742. Lo bien dicho, presto es dicho.
上手な話し手は、敏速な話し手

— バロス：話す時は、簡潔に明確に話すのが良いと提唱している。
— 一般的にだらだらと話をする人は、何をいいたいのかさっぱりわからない人が多いものである。聞いているほうは、退屈でしょうがない。スペインの諺と同義で逆から言っているのが、“下

手の長談義”であり、無駄な多弁は慎めという意味では“言葉多きは品少なし”、“沈黙は金”などの諺がある。また、お喋りが好きな人には知識の浅いものが多いという“しゃべる者に知る者なし”がある。

743. Lo bien ganado perece, y lo malo, ello y su dueño.
正直に儲けた銭さえ消えうせる、悪銭なら、その身もろとも

— 同意義でこうも言う、“Lo bien ganado se pierde, y lo malo ello y su amo.”（コレアス諺集）

— スバルビィ：“Lo bien ganado se pierde, y lo malo, ello y su dueño.”同義でこうも言う、“Lo bien ganado se lo lleva el diablo, y malo, a ello y a su amo. 正しく手に入れたものさえ、悪魔が持ち去ってしまう、不正に手に入れたものは、その身もろとも”正直に働いて儲けたものさえ、いつかは使ってなくなる。不正な方法で手に入れたものは、そのものを失うばかりか、もうけた本人までが、いつかは法律により罰せられ、滅びてしまう。

— バロス：財産は使って素早くなくなるものである、それが不正に取得されたものであれば尚更である。

— 例題：ドン・キホーテ第二部54章、島の統治からドン・キホーテの元に帰るサンチョは、道中で同じ村のモーロ人に出会う、おれといっしょに来て、隠した財宝を掘り出す手伝いをしてくれと頼まれるが、サンチョは諺を引用してきっぱり断る、“...y déjame seguir el mío；que yo sé que lo bien ganado se pierde, y lo malo, ello y su dueño. わしにもわしの道を歩かせてくれ。正直にかせえだ金さえなくなる。悪銭はその身もろともっていうからな。”（続編三、高橋正武訳）

— 日本のことわざの“悪銭身に付かぬ”、“あぶく銭は身に付かず”と全く同じだが、スペインのはより手厳しい。

744. Lobo (El) está en la conseja.
噂をすれば影がさす

— “セレスティーナ”の注釈者、Bruno Mario Damiani（Cátedra, 1984）によると、この格言は、人々が噂をしているその当人がその場に現われた、或いは、その場にいるのでみんな黙るようにと、噂をしている人々に気づかせることを意味する。バロスによると、“El lobo anda en el rebaño. 狼が（羊などの）群れに紛れ込んでいる”も同意義の格言で、善良な人々の中に裏切り者、或いは悪人がいることを意味する。また、標題の格言は、その場に一緒にいる或る人には聞かせたくないような事を、人々が話し始めた時に、それを知らせるための表現でもある。

— 日本のことわざは、陰で人の噂をしていると、えてしてその当人がその場に現われるものだという意味で、見出しの諺の他に異表現のことわざが次のようにある；“嘘言えば主来る”、“人事言えば影がさす”、“誹（そし）れば影さす”など。岩波の“ことわざ辞典”によると、同義のものは次のように多いらしい；“狼の話をすると狼はすぐそこ”（チェコ）、“狼の話をするとその尾が見える”（フランス、イタリア、オランダ）、“悪魔のことを言えば悪魔がやってくる”（イギリス）、“悪魔のことを話すと角が見える”（スイス）など、狼や悪魔がたとえに使われているが、それは忌詞（いみことば）で、実際に口にすると災いが及ぶと信じられていたことの現れだという。

— 例題：セレスティーナ第17幕、カリストの従者の一人、ソシアの噂をしているところへその当人がやって来た、“Por los santos de Dios, el lobo es en la conseja. あれまあ、噂をすれば何とかだよ。”（魔女セレスティナ、大島正訳）

745. Lobo (El) muda de pelo, mas no el celo.
狼は毛が生え変わっても、性質は変わらぬ

— スバルビィの“諺辞典”には同意義で“Muda el lobo los dientes, y no las mientes. 狼は歯が生え変わっても心は変わらない”、“Pierde el lobo los dientes, mas no las mientes. 狼は歯がなくなっても、心はそのまま”などがある。“Genio y figura, hasta la sepultura. 人間の本性は、墓場まで”と同じ意味の諺で、外観は変わっても、性格は変わらないということ。日本のことわざでは、“三つ子の魂百までも”、“雀百まで踊り忘れず”、“産屋（うぶや）の癖は八十まで治らぬ”などがある。

746. Locos (Los) y los niños dicen las verdades.
愚か者と子供だけが、本当のことを言う

— 思慮の足りない人は、思いつくままに何でも率直に話してしまう。同意義でこういうのもある、“El loco en la frente trae el cuerno; y el cuerdo, en el seno. 愚者は額に角を生やし、賢者は、懐に生やす”思慮の浅い人は、すぐに自分の内密な事柄をぺらぺらと喋ってしまうが、賢明な人はそういうことはしない。（バロス、“バロス諺集”）スバルビィの諺辞典には“Los locos dan banquetes para los cuerdos. 愚鈍な人は、利口な人のために宴会を開く”が見られる。しばしば、抜けめのない利口な人は、他の人々の愚鈍さを利用するものである。（スバルビィ）同意義でバロスの諺集には、“Los locos hacen fiesta y los cuerdos gozan de ella. 愚鈍な人がパーティを開き、利口な人がそれを楽しむ”

— 日本では、つつみかくすところなく物を言うことを“歯に衣きせぬ”という。

747. Lo hecho vence a lo por hacer.
行われた事は　これからする事に勝る

— バロス：取るに足りないほんの小さい事でも、すでに行われた事は、これからしようと考えている意図より価値があるものである。
— このスペインのことわざがいわんとすることは、“言うは易く行うは難し”、“口では大阪の城も建つ”ということで、心に思っていることとか、口で言っていることを実行に移すのは、むずかしいものだと教えている。コレアス諺集にはこういうのもある、“Lo hecho bien, aguarda a lo por hacer. いい出来映えの仕事は、これからの仕事が待たれる”同じするにしても、よい仕事をすると皆から期待される。

748. Lo más guardado lleva el gato.
いちばん奥深くしまわれている物が　猫にさらわれる

— バロス：“De lo contado lleva el gato. 備えの充分なものが、猫にさらわれる”と同じで、どんなに用心しようが、盗みを防ぐことは出来ない。
— スバルビィの諺辞典には同義の“Lo más encomendado lleva el gato. いちばん大事にしまわれていた物が、猫にさらわれる”がある。（いちばん大切にされていた物が、どこかになくなってしまうのが常である。—スバルビィ）コレアス諺集には、同義の諺“Lo más acordado, más olvidado. 最もよく取り決められた事が、忘れられる”（いちばん大事な事が忘れられるのが常である。—コレアス）がある。反対の諺も載っている、“Lo mal guardado lleva el gato. きちんとしまわれていない物が、猫にさらわれる”

749. Lo mejor de los dados es no jugallos.
ダイスの最高の手は　振らないこと

— もっともである。始めから危ないことは避けるのが、いちばん賢いやり方である。
— コバルビアス：“El mejor lanze de los dados, es no jugallos.”（筆者－lanze-lance, ＜ゲームの＞手）このゲームは、兵士や若者の娯楽である。ダイス遊びで彼らは、時間、財産、良識、名誉そして命まで失う羽目になった。このゲームは長い時期にわたってそれぞれの自治体から支持されたり、或いは禁止されたりしてきた。偶然に頼るゲームなので、サイコロに細工をするような汚い真似をするペテン師などもいた。また、その他にもいろいろと不正な事が行なわれたりしたのでこのような諺ができたのだろう。
— “Lo mejor de los naipes y dados, es no jugallos. カルタとダイスの最高の手は、遊ばないこと”も同じ。“jugallos-jugarlos”類義の日本のことわざは、“危ない事は怪我のうち”、

“君子危うきに近寄らず”、“賢人は危うきを見ず”などがある。危ないことをすると怪我をする確率が高いので、最初から近づかないほうがよい、慎重で賢い人は危険には近づかないように注意するものであるということ。

750. Lo mismo es a cuestas que al hombro.
背負うも　肩にかつぐも同じ

— バロス：やり方はどうであれ、大事な事は実行することである。
— 実際に役に立たない空理空論より、成し遂げることが大切であるという。日本には次のような類似のことわざがある；“畳の上の水練”、“机上の空論”、“畳の上の陣立”など、滔々と理論を述べたり、方法に詳しくても実際の経験に乏しいために役に立たないものをたとえている。

751. Lo mucho se gasta y lo poco basta.
たくさんは尽きる　少々は足りる

— バロス：なぜなら、少ししかなければ大切に使うから。類似のことわざには“Más vale plaza cara que despensa barata.　高い市場は、安い貯蔵室に勝る”がある。
— コレアス：いい加減に使うか、きちんと使うかの違いである。
— われわれの日常生活に実際に起っていることを述べたことわざである。たくさんあれば、ぱっぱと消費するし、少なければ、一生懸命考えて大切に使う。反省させられるおしえである。日本には、わずかな金だからといって粗末にするなという“一銭を笑う者は一銭に泣く”というおしえがある。また、たまの大きな出費より毎日の細かな出費に心を配ることが大切であるという“大費（おおづか）いより小費（こづか）い”がある。
— バロス諺集とコレアス諺集には、“lo mucho”と“lo poco”の対比のことわざが次のようにいくつかある；“Lo poco agrada y lo mucho enfada.　少々は楽しませるが、たくさんは不快にさせる”（たいていの場合、過剰な分量は煩わしいものである。－バロス）日本のことわざでも“楽は貧にあり”、“無いが極楽知らぬが仏”などともいう。“Lo poco espanta y lo mucho amansa.　少々は驚かせるが、たくさんは慣らす”（少々の不運は人をびっくりさせるが、段々それが大きく積み重なると慣れてくるものである。－コレアス）

“Lo poco hace deudor, y lo mucho, enemigo.　少々は負債者をつくるが、たくさんは敵をつくる”（小額なら返済するのに苦にはならないが、多額の負債を抱えている者は、強制的に返済しなければならぬという気持ちから、結局は貸してくれた者を憎むようになる。－コレアス）“Lo poco mucho duró, y lo mucho se gastó.　少々（の金）は長い間もったけれど、たくさん（の金）はなくなった”

752. Lo olvidado, ni agradecido ni pagado.
忘れられた事は、感謝もされないし、払ってももらえない

— スバルビィ：受けた好意に対して常に知らないふりをする人がいるものである。それは、恩人が以前の彼と同じような境遇に置かれた場合に恩返しをしないとか、或いは、借りた金を返済しないとかいったような事である。そういう忘恩の人を非難していることわざである。

— たいてい、人は受けた恩は忘れやすいが、人にして上げた事は忘れないものである。また、人からしてもらえなかった事はいつまでもその人を恨んで覚えている。そういう厄介なものが人間である。同義に“喉元過ぎれば熱さを忘れる”があるし、もっと酷い人になると、“後足で砂をかける”がある。

753. Lo que con el ojo se ve, con el dedo se adivina.
目で見えるものを、言い当てる

— 同意義で次のようなバリエーションがある；“Lo que con el ojo veo, lo adivino con el dedo.”、“Lo que con los ojos miro, con el dedo lo adivino.”、“Lo que con el ojo veo, con el dedo lo señalo.　目で見えるものを、指し示す”コバルビアスの宝典には“Lo que con el ojo se ve con el dedo se adivina.”（自明の真理やわかりきった事を予言する。－コバルビアス）が収載されている。バロスの解釈によると、われわれにとって明白なことは、誰にも否定できないし、それをそのまま正しく言い当てたとしても自慢するには及ばないの意。

— 例題：ドン・キホーテ第二部62章、自分の長男の願いが何であるか、あまりにもわかりきったことを聞いてしまったと騎士が感想をもらす、“-Eso es-dijo el caballero-: lo que veo por los ojos, con el dedo lo señalo.＜なるほど＞と、騎士。＜己が掌（たなごころ）を指すごとし、とは正にこのことだ＞”（続編三、高橋正武訳）

754. Lo que con ira se hace, desplace.
怒りで行われることは、人を不快にする

— 人は怒っている時は、たいてい分別を失っている、分別のない言動は人をとても不愉快にする。怒りにかられた言葉を吐いたり、ふるまいをしたりして後で後悔をしてもとり返しがつかない場合がしばしばある。徳川家康の遺訓にあることばに“怒りは敵と思え”がある。怒りは自分の判断に冷静さを欠き、人の恨みや反感を招くようにもなるので、怒りは身を滅ぼす敵と思って慎むことが大切であると戒めている。同義のことわざには“怒りは愚かな者の胸に宿る”がある。

755. Lo que con unos se pierde, con otros se gana.
勝ったり　負けたり

— バロス：世間では人がどのように生きているかを教えてくれることわざである、ある時は、寛容な心で人に譲ったり、また、ある時はチャンスを狙って人を利用したりもする。
— “勝負は時の運”（太平記）、“負けるも勝つも運次第”と言い、勝つも負けるもその時の運、不運によるものであって、必ずしも実力によって決まるものではないと日本の格言はおしえている。

756. Lo que de noche se hace, a la mañana parece.
夜したことが　朝には現われる

— スバルビィ：夜の暗闇に乗じて悪いことをすべきではない、遅かれ早かれいつかは発見されるだろうから。或いは、その日のうちにするべき仕事を翌日までどっさり残さないようにと戒めている。
— バロス：人は自分が犯した過失によって、自分自身を苦境に陥れる。なぜなら、どんなに気をつけて隠したつもりでいても、終いには皆の知るところとなるであろうから。
— “Lo que de noche se hace, de día parece”（コレアス諺集、スバルビィ諺辞典）とも言う。自らが犯した悪事の報いは、自分自身で受けなければならないという意味のことわざには“自業自得”、“身から出た錆”、“悪事身に返る”などがある。

757. Lo que Dios da, llevarse ha.
神がお与えになるものは、受けとらなければならぬ

— スバルビィ：常にわれわれのためを思ってくださる神によって送られたものであると考えて、苦労でさえも良しとしなければならない。
— バロス：人生がもたらす試練を避けようとはせずに、それに耐えていかなければならないとおしえている。
— “人の一生は重荷を負うて遠き道を行くが如し”（東照宮御遺訓）と同義のことわざで、人間の一生というものは、長い道のりを困難に耐えて、着実に努力して歩いていかなければならないということ。

758. Lo que el niño oyó en el hogar, eso dice en el portal.
家で聞いたことを、子供は戸口で話す

— バロス：子供というものは、家で大人が話す事を無邪気にくり返すものなので、子供の前では重要な事を話さないよう気をつけなければならぬ。
— 日本には“子は親を映す鏡”とか“子は親に似る”ということわざもあるので、子供の前ではふるまいに気をつけなければならない。すぐに親の人柄、教養がわかってしまう。

759. Lo que en la leche se mama, en la mortaja se derrama.
吸った乳を　死装束にまき散らす

— バロス：“Lo que con el capillo se toma y pega, con la mortaja se deja.　洗礼用ずきんにこびりついたものを死装束に残していく”と同義のことわざ。
— スバルビィ：良くても、悪くても幼少の頃に学んだ事は生涯つきまとう。
— スペインの類似の諺の“Lo que se aprende en la cuna, siempre dura.”は、“三つ子の魂百まで”とぴったり同じで、その他にも“雀百まで踊り忘れず”、“産屋（うぶや）の癖は八十まで治らぬ”などがある。幼児からの癖、性格、習慣などは年をとっても変わらないということ。

760. Lo que es bueno para el hígado, es malo para el bazo.
肝臓に良くても、脾臓には悪い

— バロス：ある事柄やある人にとって有益な方法及び解決法は、それ以外の事柄や人にとっては、有害であるということをたとえて言う。
— つまり、“彼方（あちら）立てれば此方（こちら）が立たぬ”ということで、一方をよくしようとすれば他方が悪くなる、両方にとって都合のよいことはないの意で、日本の類似のことわざには、“あなたを祝えばこなたの怨み”、“右を踏めば左が上がる”、“出船によい風は入り船に悪い”などたくさんある。スペインの同義のことわざには、“Lo que es bueno para el vientre, no lo es para el diente.　腹に良くても、歯には悪い”がある。
— 例題：セレスティーナ第9幕、滔々と酒の効力について講釈するセレスティーナは、ことわざをもじって上等な酒は、“Así que con lo que sana el hígado enferma la bolsa.　だから、肝臓にはいいが、財布には悪いのさ”（魔女セレスティナ、大島正訳）

761. Lo que está de Dios, a la mano se viene.
神の御手にあるものは、手元に届く

— バロス：正当なものであれば、方法はどうであれ、いつかは手に入れることができるものである。
— スバルビィ：何かを欲しいと思っている人とか、或いは法に訴えたいと考えている人の自信がうかがえる格言である。
— “estar de Dios-pase lo que pase, que pase lo que tenga que pasar－起るべくして起る、不可抗力だ”類似のことわざには、“El hombre propone y Dios dispone. 人が考え、神が行う”がある。これにぴったりの日本のことわざは“人事を尽くして天命を待つ”であろうか。この世には人知、努力を超えたものがたくさんある、最後はただ神の意志に任せて平静な心境にあることが大切である。

762. Lo que has de dar al mur, dalo al gato, y sacarte ha de cuidados.
ネズミに上げるものは、ネコに上げよ、そうすれば心配しなくてすむ

— バロス：必要にせまられて上げるものは遅くならないように、また後で利益につながるように適時に、頼りになる人に上げなくてはならない。
— スバルビィ：どうしてもしなくてはならない事は、充分考えてから慎重にしなければならない。
— コレアス諺集には、次のようにユーモアのある後半の部分がついている、“Lo que has de dar al mur, dalo al gato, y quitarte ha de cuidado; aunque más come un gato de una vez que un ratón en un mes. ...；一ヶ月にネズミが食べる量より一回ネコが食べる量のほうが多いけれど”
— 例題：ドン・キホーテ第二部56章、公爵の馬丁トシーロスがロドリーゲスの娘と結婚したいと聞いたサンチョは、すかさず諺を口にして賛同する、“-Él hace muy bien-dijo a esta sazón Sancho Panza-; porque lo que has de dar al mur, dalo al gato, y sacarte ha de cuidado. ＜それが賢いというもんだ＞と、そのときサンチョ・パンサが言った。＜いずれ鼠に食わすなら、いっそ手近な猫にやれ。気苦労、手数がはぶけらあ＞”（続編三、高橋正武訳）

763. Lo que has de hacer hoy, no lo dejes para mañana.
今日しなければならぬ事は、明日まで延ばすな

— バロス：“Nunca dejes para mañana lo que puedas hacer hoy. 今日できる事は、明日まで延ばすな”と同じ意味。
— その日の仕事はその日にすませよ、明日はまた明日の仕事が待っているからということ。一日

いちにちの仕事をきちんとかたづけていかないと後で収拾がつかなくなる。“早いのが一の芸”と言って仕事を手早く仕上げる者を称えることわざが日本にある。むろん、その反対のことわざもたくさんある。

764. Lo que la loba hace, al lobo le place.
妻の好きなことは、夫の喜び

— バロス：好みも性格も似ている仲むつまじい夫婦を謳うことわざ。

— 性格や趣味が互いに似ている夫婦を日本では、“似た者夫婦”という。また、一緒に長い間いる夫婦が互いに影響しあって似てくるということにもいう。スペインのことわざの直訳は、“メス狼がすることは、オス狼を喜ばせる”で、つまり“妻、女”が主体で、その後に“夫、男”が従うほほえましい風景であるが、日本の“亭主の好きな赤烏帽子（あかえぼし）”となると、封建的な亭主関白の夫、それも風変わりな夫に妻なり、家族が従い、同調しないわけにはいかないということになる。その他にも、非常識でも家長の言い分は通ることをたとえて“亭主の好きな赤鰯”とか“亭主が好きなら菰（こも）でも被れ”などという。

765. Lo que los ojos no ven, el corazón no lo desea.
目から遠ければ　心から遠い

— 死んだ人は、年月が経てばだんだん忘れ去られていく、また、親しかった人でも、離れて顔を見なくなるとしだいにその仲が疎遠になっていく。スペインのことわざと日本のそれとがぴったり意味も表現も一致している。日本の類似のことわざは次のようにたくさんある；“去る者は日々に疎し”、“遠くなれば薄くなる”、“遠ざかるは縁の切れ目”など。スペインの同義のことわざは“Ojos que no ven, corazón que no siente.　目が見ないと、心は感じない”（バロス諺集）がある。また、嫌いな人の顔を見なくてもすむようになれば、心は平静でいられるという“Lo que ojos no ven, corazón no quebranta.　目が見ないと、心は苦しまぬ”（コレアス諺集）がある。

766. Lo que no acaece en un año acontece en un rato.
一年間に起こらなかったことが　つかの間に起こる

— “Lo que no acontece en un año, acontece en una hora.　一年間に起こらなかったことが、一時間におこる”ともいう。日本の諺の“天災（災害）は忘れた頃にやって来る”と同義で、天災というものは、その恐ろしさを忘れた頃になると起こるものだから、ふだんから用心する心掛けが必要であると戒めている。また、天災に限らず、えてして災難、不幸は起こると

なると数珠つなぎにつぎつぎとやって来るものだから、長い間何ごともなく無事平穏に過ごしてきたからといって、油断してはならないという意味もある。

767. Lo que no quieras para ti no lo quieras para tu prójimo.
汝が欲せざることは　人に施す勿れ

— “Lo que no quieras para ti, no lo quieras para mí; no lo quieras para otro.　汝が欲せざるものは、己れも欲せず；他者も欲せず”（コレアス諺集）ともいう。バロスによると、この諺のもともとの意味は、新約聖書のルカによる福音書（6-31）、マタイによる福音書（7-12）に基づく。大勢の弟子とおびただしい民衆の前でイエスがお教えになられたあの有名な“敵を愛しなさい”の中の御言葉である、“Hagan ustedes con los demás como quieren que los demás hagan con ustedes.　人にしてもらいたいと思うことを、人にもしなさい。”（ルカによる福音書、新約聖書、日本聖書協会）

— スペインの上記の見出しのことわざの直訳は論語の言葉そのままである。意味も同じで、自分が嫌なことは人も当然そのように思うであろうから、それを人にしてはならないと戒めている。同義で“我が身を抓って人の痛さを知れ”ということわざもある。

768. Lo que no se comienza, nunca se acaba.
始めないことは　決して終わらない

— バロス：強い意志と熱意があれば諸々の障害を克服できるにもかかわらず、新規のプロジェクトに難点を見つけては反対する人々に対していう。

— スバルビィ：怠慢から逃れなさいと忠告している。最初の難関を突破することができれば容易く目的を達することができるから。

— 日本には同義でためになる諺がいくつかある；“始めが大事”、“始めよければ終わりよし”、“本の一分は末の一丈”など、いずれも何事も始めが大事であると教えている。また、どんなに大きな目標を掲げても、まず手近なところから始めて一歩一歩堅実に努力を重ねていけば、必ずその目標に到達できるという“千里の行も足下（そっか）より始まる”（老子）、“百里の道も一歩から”、“大海の水も一滴から”、“高きに登るには卑（ひく）きよりす”（書経）など、いずれも貴重な教えである。

769. Lo que no se hace a la boda, no se hace a toda hora.
結婚式の日にしないことは、いつまでもしない

— コレアス：するべき時に必要なことをきちんとしないと、後になってからでは尚更しない。

— バロス：どんな物事でも、最大限の努力を発揮できる時機というものがある、その時期を失すると後になって同じような努力を何回もくり返せない。

— 類似のスペインの諺には、“Lo que no viene a la boda no viene a toda hora.　結婚式の日にやって来ないものは、いつまでも来ない”がある。バロスによると、好機がやってきたのにうかうかとそれを外してしまうと、後でもう一度捕まえようと思ってもとても難しいということ。史記の“時は得難くして失い易し”と同義で、好機はめったに巡ってこないものであるし、油断しているとすぐに過ぎ去ってしまうものでもあるから外してはならないと戒めている。日本のことわざにもぴったり合ったことわざがいくつかある；“物には時節”、“事は時節”、“好機逸すべからず”など。

770. Lo que no se puede comprar con dinero no se ha de vender por dinero.
金で買えぬものは、金で売ることは出来ぬ

— コレアス：貴族の称号は金で買うことは出来ぬ。故に財産が欲しいからといって貴族は平民と結婚してその身分を汚してはならぬ。

— 貴族の身分をスペインでは、“sangre azul－青い血”という。なぜ貴族階級を“青い血”と呼ぶようになったかはイリバレン（El porqué de los dichos）が、次ぎのように説明している；１）例えば赤い血のように、平民であれ、貴族であれ人間であれば必然的にたくさんの共通点があるにもかかわらず、どんなことにも平民とは同じでありたくないという虚栄心の強い貴族を嘲笑した言い方である。２）労働に従事しない支配階級は白い肌に静脈が青く透きとおって見えるところから、貴族階級をそう呼ぶようになった。また、西和中辞典（小学館）によると、貴婦人たちは白い肌を引き立たせるためにブルーペンシルで静脈を描いていたそうである。他のヨーロッパの国々と同じようにスペインでも貴族と平民の差は歴然としていた。しかし、コレアスが言っているように、零落した貴族は金持ちの平民と結婚することがしばしばあった。それにより、平民の血が混じると、いかにも貴族の血が汚されるように当時は考えられていたのであろう。この事はコレアスのコメントにありありとうかがえる。

— 日本の諺の“何謀より金かし”は、門閥がよくても貧乏であるよりは、身分が低くても金かしするほどの資産家の方がよいという。“それがしより食うがし”ともいう。

771. Lo que poco cuesta, poco se aprecia.
骨の折れぬことは、軽んぜられる

— “costar”には、“（金額を）要する”、“（労力、時間を）要する”、の意味があるので、上記のことわざは“金がかからぬものは、軽んぜられる”とも訳せる。同義のコレアス諺集には、

“Lo que poco cuesta, poco se precia; o poco se estima.”がある。言葉を変えていえば“Lo que mucho vale, mucho cuesta.　値打ちのあるものは、非常に高い”（或いは、“値打ちのある事は、骨が折れる”）労力や時間、或いは金をかけないでたやすく手に入れたものは、人は粗末にするものである。また、骨を折らずに簡単に手にいれられるようなものには、価値のないものが多い。評価というものは、しばしば人がある事やある物にどれだけの力をつぎこんだかによって決まる。“あぶく銭は身に付かぬ”というように、働かないで手に入れた金銭は、軽んぜられてすぐにつまらないことに使ってしまいすぐなくなってしまう。

— 例題：ドン・キホーテ第一部34章、情人のロターリオに自分の全所有をいっぺんに渡してしまったので、かるがるしい女と見られるのではないかと心配する美しいカミーラは、諺を引用する、“-También se suele decir-dijo Camila-, que lo que cuesta poco se estima en menos.＜けれどもね＞と、カミーラ。＜骨のおれないことは軽んぜられるともいうわよ。＞（正編三、永田寛定訳）

772. Lo que te dijere el espejo no te lo dirán en concejo.
鏡が言うことを　人は言ってくれない

— バロス：人はわれわれの欠点を率直には言ってくれないものである。

— コバルビアスの宝典によると、鏡は真実の友のシンボルである、そういう真実の友に相談すると、われわれに本当のことを言ってくれる、そこからこういう諺が生まれた、“El buen amigo es espejo del hombre.　よき友は、人の鏡である”日本には次ぎのように理にかなったとてもよい格言がある、“人こそ人の鏡”、“人を鏡とせよ”などで、これらは“人の振り見て我が振り直せ”、“人の上見て我が身を思え”ということである。他人の言動のよしあしを見れば、自分の行いを反省するためのよい手本になるということを教えている。

773. Lo que una vez y una edad apetece, otra lo aborrece.
年々歳々　人の望みは移ろいやすし

— 年齢によって、人は欲するもの、したい事など好みが変ってくる、特に、若い時と年寄りではその違いが顕著にあらわれてくるものである。スペインの諺の直訳は“ある時期に好んだ事を、ほかの時期では嫌悪する”あらゆる事には適切な時機というものがあるが、他方では“Más vale tarde que nunca.　遅くてもしないよりまし”という諺がある。自分がしたいと思いたった時がちょうどふさわしい時機と考えるのが一番いいのではないだろうか。ただし、“年寄りの冷や水”、“年寄りの夜歩き”など高齢者に対する世間の目は冷たい。

774. Lo que uno no quiere, otro lo desea.
ある者が望まないことを、別の者は望む

— バロス：“Lo que uno desecha, otro lo ruega.　ある者が捨てるものを、別の者はねだる”とも言う。人の性格、好みは多様であるから、ある者がいいと思うことでも、別の者はよくないと思ったりする。むろん、その反対もある。

— 人はそれぞれ違うということを理解しない者が世間には多い。自分の好きな物は、他人も好きだと思って、自分の好みを人に押しつけたり、自分の好みで人を判断したりすることをたとえて、日本のことわざは“我が好きを人に振る舞う”、“亭主の好きを客に出す”などという。

775. Lucen las galanas con los brazos de las malhadadas.
主役は　脇役の助けで　輝く

— バロス：他の者の労力で輝いている得な人々がいるものである。

— “Lozoya lleva el agua y Jarama tiene la fama.　ロソヤ川が水をひき、ハラマ川が名をはせる”（他の人々の労力に負いながら、自分を鼻にかけるような者を咎めている－バロス）も同義である。上記の見出しのことわざの直訳は、“美人は、不運な女の助けで輝く”よく美人と醜女のふたり連れが歩いているが、美人は引き立て役の傍でいっそう輝く。

— この世は、“縁の下の力持ち”、“楽屋の声嗄（か）らす”人と表に立つ人の両方から成り立っているということ。

776. Llagas (Las) duelen menos untadas.
傷口は　軟膏を塗らなければ　痛む

— バロス：心が傷ついていても、やさしい言葉や贈り物で気持ちが癒やされることをたとえている。

— コレアス諺集には、上記のことわざと共に“Llagas（Las）untadas duelen, mas no tanto.　軟膏が塗ってある傷口は痛みはするが、それほどでもない”がある。コレアスによると、怒っていたり、痛みを感じている人がやさしい言葉をかけられたり、道理を説かれたりして気持ちを和らげていることを意味する。傷ついている人に対しての処方せんを説くことわざである。

777. Llama (La) llama adonde viene la llama.
炎は　炎をよぶ

— バロス：特に、たがいに愛しあっている者同士をいう。

— コレアス：“Llama la llama, adonde viene la llama; o la llama llama adonde viene la llama. 寒い季節には、明かりは人を引きつけるものである；夜、山の中で道に迷った者は、牧人、或いは村の明かりに引きつけられる。海上では、船は陸の灯台の明かりに引きつけられる。また、悪は悪を呼び、不正は不正を呼ぶ、愛は愛を呼ぶという意味にも応用できることわざである。

— コレアスのように解釈を拡げていくと“Dinero llama dinero. 金が金をよぶ”（筆者のスペインの諺辞典、421を参照）、“El dinero se va al dinero, y el holgar al caballero. 金は金のところへ行き、無為は紳士のところへ行く”などのことわざと同義になる。

778. Llaves (Las) en la cinta y el perro en la cocina.
鍵はひもに　犬は台所に

— スバルビィ：本当は不注意なのに、注意深い振りをするような人を咎めている。

— バロスの諺集には、上記のことわざと共に“Llave en cinta hace buena a mí y a mi vecina. ひもに通してある鍵はわたしにも、隣人にも良いことだ”（自分のものを守れるし、隣人も盗む機会がなくなるから－バロス）がある。

— 注意深そうには見えるが、どこかスキのある人をたとえていうことわざ。

779. Llégate a los buenos, y serás uno de ellos.
寄らば大樹の陰

— バロス：“El que a buen árbol se arrima, buena sombra le cobija. 寄らば大樹の陰”（筆者のスペインの諺辞典、462を参照）と同義の諺である。

— スペインの見出しのことわざの直訳は“上の人々に身を寄せなさい、そうすればそのうちにその一人になれるだろうから”である。二番目のことわざは日本のことわざどおり、表現も意味もぴったり同じである。日本のほうにはいろいろなバリエーションがある；“寄らば大木の下”、“大木の下に小木育つ”、“犬になるなら大家の犬になれ”など、人に頼るなら勢力のある者に頼るほうがよいということ。

780. Llevando cada camino un grano, abastece la hormiga su granero para todo el año.
ひと粒づつ運んでいけば、蟻は穀倉を一年分充たす

— 貯蓄と勤勉さを謳っている。“塵も積もれば山となる”、“水積もりて川と成る”、“砂（いさご）長じて巌となる”と同義で、ごくわずかなものでもこつこつと積み重ねていくと大きなものに

なる、少しのものでもおろそかにしてはいけない、日々精進を重ねていきなさいということをおしえている大切なことわざである。

781. Llevarán del ladrón y no del glotón.
泥棒はさらっていけ、大食らいはだめだ

— コレアス：泥棒は何か持っているかもしれないが、大食いはただ浪費するばかりで、破産状態であるから。

— 働かずに遊んで暮らしていれば、いくら財産が山のようにあってもやがてはなくなってしまうという戒めで、“座して食らえば山も空し”、“居て食らえば山も空し”、“遊んで食らえば山も尽きる”と同義のことわざ。

782. Lloran los ojos de tu enemigo y enterrarte ha vivo.
涙を浮かべて　生きたまま葬る

— バロス：われわれを好いてくれない人が、やさしくしてくれても、やすやすとその手にはのらないようにと警告している。

— 偽善者はこわいということ。“El gato de Marirramos halaga con la cola y araña con las manos.　しっぽでじゃれつき　爪でひっかく　マリラモスの猫”（筆者のスペインの諺辞典、613を参照）と同義で、“鬼の空涙”、“鬼の空念仏”など、本当は残忍な人がうわべだけ情け深そうに見せかけることをたとえていう日本のことわざとも同じである。

783. Llorar a boca cerrada y no dar cuenta a quien no se le da nada.
口を閉じて泣きなさい　何もくれない人に気づかれないように

— バロス：不幸なこととか、身内の恥などは出来るかぎり外にもらすべきではない、特にわれわれの苦痛には無関心な人々に対しては隠すべきである。同義で“Quémese la casa sin que se vea el humo.　煙りが見えないように家を燃やしなさい”、“La ropa sucia se lava en casa.　汚れ物は家の中で洗う”がある。

— 一度、口から出たことはたちまち世間に知れ渡ってしまう、特に、内輪の事情など秘密にしておきたいことは、面白半分の人々には決して口外してはならないという戒め。同じような日本のことわざには、“口から出れば世間”、“吐いた唾は呑めぬ”などがある。コレアス諺集には見出しのことわざと共に、“Llorar a boca cerrada por no dar cuenta a no sabe nada.　何も知らない人に気づかれないように、口を閉じて泣く”がある。

784. Lloro (El) del que hereda : de gozo revienta.
相続者の涙は　喜びで飛び散る

— 肉親の死を本当に悲しむのは短い間で、悲しみの涙もやがては相続できるという喜びの涙に変わるという欲深な、人間の浅ましさを皮肉ったことわざ。コレアス諺集には、涙を扱った次のようなことわざがいくつかある；“Llorar para descansar.　休息するために泣く”、“Llorar poco y buscar otro.　少し泣いてから誰かを探しなさい”（未亡人を慰めて言う－コレアス）、“Lloro de hembra no te mueva, que lloro y risa presto lo engendra.　女の涙には動かされないように、涙と笑いはすぐに入れかわるから”すぐに泣き始めたり、笑いだしたりするのは女の特質であるということ。イリバレンの“格言の由来”には“La viuda rica, con un ojo llora y con otro repica.　金持ちの未亡人は、片目で泣き、片目で探す”（未亡人になっても金持ちなら、また、気にいった人と再婚できるので、片目で喪に服しながら、あとの片目できょろきょろあたりを見回しながら誰かいい人がいないかと探すこと－イリバレン）

M

785. Madre acuciosa, hija vagarosa.
働き者の母に、怠け者の娘

— コレアス諺集には、類義で“Madre aguciosa hace hija perezosa.　勤勉な母は、怠惰な娘をつくる”、“Madre aguda, cría hija tolluda. / Madre ardida hace hija tollida.　まめまめしい母には、のろのろの娘が育つ”などが収載されている。“aguciosa-acuciosa”、“tolluda, tollida-tullida、体の不自由な人、不随の、麻痺した”

— バロス諺集には、見出しの諺と共に、“Madre dispuesta, hija vaga.　てきぱき仕事をする母に、役に立たない娘”“Las madres hacendosas hacen las hijas perezosas.　よく働く母は、ものぐさな娘をつくる”（母親が何でもひとりでしてしまうので、娘はしなくなってしまう—バロス）などがある。しかし、こういう諺もある、“Madre holgazana saca hija cortesana.　無精な母からは、何もしない娘ができる”（悪い手本の結果はこうなると戒めている－バロス）同様に、スバルビィ諺集には、“Madre holgazana, cría hija cortesana.”（母親の無為、怠惰を娘が見て育つ危険を警告している—スバルビィ）、“Madre e hija visten una camisa.　母と娘は同じ一枚のブラウスを着ている”（母からしつけられる娘は、たいてい母と同じ考え方と気質を持っているものである－スバルビィ）などが収載されている。この最後のことわざは、バロス諺集では、次のような後半の部分もある、“Madre e hija caben en una camisa; suegra y nuera no caben en la tela.　母と娘は一枚のブラウスにはいるけれど、姑と嫁は一枚の布きれにもおさまらない”（義理の親子の難しさをいう－バロス）

— 上記の一連のことわざを見ても、どんなに育児、しつけが難しいかがわかる。一方では、勤勉な母から怠惰な娘ができ、他方では、駄目な母から駄目な娘ができる。まさに、日本のことわざにも両方の意味がある；“親は親子は子”、“親は親だけ子は子だけ”などといって、親は立派でも子は悪い場合や、その逆の場合もあって、必ずしも子は親に似るとは限らないという意、他方では、“親が親なら子も子”、“親が鈍すりゃ子も鈍する”、“子は親を映す鏡”、“瓜の蔓（つる）に茄子はならぬ”などといい、子は親に似るものであり、親が駄目ならその子も同じように駄目だと、親子を非難している。

786. Madre (La) y la hija, por dar y tomar son amigas.
母と娘、上げたりもらったりで、友だち同士

— コレアス：互いに上げあうといったような利害関係がなければ、ただ血が繋がっているだけでは、仲のいい友だち関係にはならない。

— スバルビィ：母と娘は気質がよく似ているので、とても仲がいい。

— バロス：こんなにも近い血縁関係にある者にも損得勘定が入りこんでいることをおしえている。
— 真実を鋭く突いていることわざである。実際には、血縁関係にある者同士の中においてこそ、どろどろとした利害関係が存在しているといってもよいのではなかろうか。それを“骨肉相食む”、“骨肉の争い”などという。

787. Mala (La) cama hace la noche larga.
悪いベッドでは　いつまでも夜が明けぬ

— バロス：どんな場所でも居心地が悪いと、時間が止まったようにとてもゆっくりと感じられるものである。
— 適材適所の大切さをいう。また、他方では、われわれ人間同士の意思疎通の問題で、職場にしろ、学校にしろ、家にしろ、どこにも自分の居場所がないと感じる人が多いのが現代である。どこにいても、“水を離れた魚”のように苦痛を感じる、その反対にぴったりと自分にあった居場所を見つけ、生き生きと活躍する人を“水を得た魚”、“魚の水を得たるがごとし”という。

788. Mala cuña es la de la propia madera.
同じ木材のくさびより　悪いくさびはない

— 同義で、少し表現を変えたバリエーションがいろいろとある；“No hay peor cuña que la de la misma madera.”、“Mala clavija es la del propio madero.”、“No hay tal cuña como la del mismo palo.” 敵に回った身内や友人ほど恐ろしい者はいないということ。バロスによると、その道に精通し、やり方を知りつくしている同じ穴の貉、つまり同類がいったん敵に回ると甚大な被害を及ぼす結果になる。コレアスによると、この比喩は真実をのべている、つまり悪人は、同類に対してより効果的に残酷さを発揮できる。例えば、インディオを罰するときには同じインディオにさせていた。（筆者－16世紀、スペインの支配下にあった中南米のインディオを指すのであろう）最後に、マリア・モリネールによると、同じ社会的階層から出た者や、職場などの同僚が出世すると、もしそのような状況下になければしないような過酷な仕打ちを昔の仲間に対してすることをいう。（筆者の諺辞典、諺393を参照）

789. Mala (La) fama vuela como ave y rueda como la moneda, y la buena, en casa se queda.
悪い評判は　鳥のように舞い上がり、コインのように転がる、
だけど、良い評判は　家にじっとしている

— バロス：“Cría buena fama y échate a dormir; críala mala, y échate a morir.　良い評

判をとってから床につきなさい、悪い評判をとったら、死の床につきなさい”、“La mala llaga, sana; la mala fama, mata.　怪我した傷は良くなるが、悪い評判は殺してしまう”などと類義の諺。

— それほど悪い評判は人の口から口へと素早く伝わっていくが、良い評判のほうはたいして人の話題にもならない。同義で“El bien suena, y el mal vuela.　よい噂は響くだけだが、わるい噂は舞い上がる”（筆者の諺辞典、諺140を参照）がある、又こういうスペインのことわざもある、“Mal va quien mala fama cobra.　悪い評判を得ている者のところに禍は行く”見出しのことわざとぴたりと表現の一致した日本の諺には“悪い噂は翼をもつ”と“好事門を出でず悪事千里を行く”がある。また、妬む人間の心理を表したものに、“他人の不幸は雁の味”というのがある。

790.　Mala (La) hierba, presto crece.
雑草はすぐ伸びる

— バロス：“Mala cosa nunca muere.　悪い事は決して死なない”と同じで、何か悪い事が起こるとわれわれにはそれが永久に続くように思われる。

— マリア・モリネール：1．“mala hierba”　1）隠喩的にどんな種類の事柄にも応用できる、特に、社会的な、或いは仕事上の発展を妨害するような人々。2）ならず者、悪党、つまり世間にとって有害だと思われている人々。2．“Mala hierba nunca muere.”雑草は決して死なない。—ユーモアをこめてその人がどんなに悪いかをいう時に使われる表現。3．“como la mala hierba”（不快な、或いは有害な事が発展していく様子について）非常に、とても早く。

— “La mala hierba, presto crece”も“Mala hierba nunca muere”も同じことを言っている。特に、人について言う時は、“憎まれっ子世に憚る”、“渋柿の長持ち”、などと同義で、人に嫌われているような悪党とか、取り柄のない者がかえって世間で威勢よく振る舞うものであるということ。

791.　Mal ajeno cuelga de pelo.
他人の不幸は　髪にひっかかっている

— バロス：すぐに行ってしまう心配事である。

— スバルビィ：他人の不幸は、自分自身のそれとは違い、ほとんど感じない。或いは自分の関心事には気を付けるが、他人のそれはほとんど気にも留めない。

— コバルビアスの宝典には、“Cuydado ageno de pelo cuelga.　他人の心配事は、髪にひっかかっている”がある。（われわれに関係ないことは、すぐに忘れられてしまう－コバルビアス）筆者の“スペインの諺辞典、諺363”を参照して下さい。

— 例題１：ドン・キホーテ第二部28章、ロバの鳴き声を真似して村人になぐられたサンチョは、ドン・キホーテが助けてくれなかったと、諺を引用して言う、“A la fe, señor nuestro amo, el mal ajeno de pelo cuelga, ...たしかにね、ご主人さま、他人の災難は見すごされがちでがす。”（続編二、永田寛定訳）

— 例題２：セレスティーナ第12幕、時間を非常に気にしている主人カリストが、いい加減な答えしかしないと、召使に向かい、諺を引用する、“No se dice en balde que: <mal ajeno de pelo cuelga> 他人の苦痛なんて毛がひっかかったようなもんだという諺は、無駄にあるのではないのだ。”（魔女セレスティナ、大島正訳）

— 他人の難儀は気にもとめないということ。ぴったり同義の日本の諺は、“人の十難より我が一難”（他人がたびたび災難に見舞われても気にもとめないが、我が身のこととなると、一度の災難でも大変な問題として受け止めるということ）、“人の苦楽は壁一重”（壁ひとつ隔てた隣の幸、不幸でさえも所詮は他人事としか感じられない）

792. Mala noche y parir hija.
大山鳴動鼠一匹

— 大騒ぎしたわりにはたいしたことがなかったという意。（筆者の諺辞典、諺516を参照）

— スペインのことわざの直訳は、“難産の夜明け、娘を生む”で、スバルビィによると、事業であれ、何か願いごとであれ、それの成功を勝ちとるために、非常に骨を折ったのに、いい結果がでなかったということ。同様に、コバルビアスによると、大変な仕事をしたのに、望んでいたような結果が得られなかったことをたとえていう。昔は、どこの親も娘よりも息子に家禄を譲るのが普通であった、故に最初の子供は男の子のほうが尊ばれたのである。日本でも昔は、スペインと同じように家の跡目を継ぐのは長男であった。それで、長男は妹や弟より大事に育てられることが多かった、“総領の甚六”ということわざは、そうして大事に育てられた長男はおっとりしてお人好しであるという意。

793. Mala (La) nueva, presto llega.
悪い知らせは、すぐ届く

— バロス：悪いニュースなら、それを言い触らすおしゃべり屋には事欠かないから。

— すでに見てきた“La mala fama vuela como ave y rueda como la moneda, y la buena, en casa se queda. 悪い評判は鳥にように舞い上がり、コインのように転がる、だけど、良い評判は家にじっとしている”（諺789. を参照して下さい）と同義である。故に、次のようなことわざにはとても納得がゆく、“Mal que no sabe tu vecino, ganancia es para ti mismo. 災いを隣の人が知らぬということは、不幸中の幸いである”（災いは隠せば隠すほどよい、そ

うすれば他人の噂の的にならなくてすみ、憐憫の目で見られなくてすむ－バロス）日本のことわざでも言うように、“他人の不幸は雁の味”がするらしいので、一生懸命隠そうと努力しても現実は、“天に口あり地に耳あり”、“壁に耳あり障子に目あり”である。また、次のスペインのことわざも真実を突いている、“Las malas nuevas siempre son verdaderas/o ciertas. 悪い知らせは、いつも当たっている”（人生には良い事より、悪い事のほうが多いから－スバルビィ）“nuevas－あちらこちらで、起こったばかりの事が語られるところから（las cosas）nuevasと呼ばれるようになった（コバルビアス）、新しい出来事、つまりニュース、知らせのこと。

794. Mal (El) año entra nadando.
泳ぎながら　悪い年が始まる

— バロス：一月のどしゃぶりの雨は、作物に害を与えるから。
— コレアス諺集には、単に“Mal año－（何かをするには）悪い年だ”という諺が載っている、コレアスの説明によると、人が、この“Mal año”と言う時は、何かを否定しながら言う、しばしば全ての意図に対して“Buen año－良い年だ”と言うかわりに、皮肉をこめて“Mal año”と返答する。

795. Mala (La) razón deja la ropa sana y lastima el corazón.
屁理屈は、衣服に傷をつけぬが、心を傷つける

— バロス：道理に適わぬ言葉というものは、誰をも傷つけるようには見えないが、常に心の奥深くに痛みを残すものである。
— 理屈に合わない無理を押し通そうとすることを“横紙破り”、“横車を押す”、“柄のない所に柄をすげる”などという、そういう行為により傷つけられる人が必ずいるということ。

796. Mala señal de amor huir y volver los ojos.
恋から逃げたり　目をそらしたりするのは　悪いしるし

— 恋に真正面から向き合わずに逃げるという臆病な行為では、愛は得られないということ。日本の諺“恋には身をやつせ”が言うように、恋をするということは、なまやさしい苦労ではできない。
— コバルビアスの宝典にもままならぬ恋についての諺がある。“Amor loco, yo por vos y vos por otro.　恋はむちゃくちゃ、わたしは君に、君は誰かに恋してる”、“Amor trompero quantas veo tantas quiero.　恋は曲者、出合った女は誰でも好きになる”

— 例題：セレスティーナ第７幕、カリストの召使いのひとりが、恋している女に対する自分の男らしくない行動について言う、“Y como dicen: mala señal es de amor huir y volver la cara.　諺にもあるように、愛の告白を逃げたり、顔をそむけたりするのは悪いしるしだよ。”（魔女セレスティナ、大島正訳）

797. Mal cobrador hace mal pagador.
だらしのない集金者は　だらしのない支払者をつくる

— バロス：直接利害のある事柄に関してきちんとした対応をしないと、他の人々も義務を放棄するようになる、故にしなければならぬ事は厳しくせよとおしえている。
— コバルビアス：“El mal cobrador, haze mal pagador.”なぜなら、地代とか賃貸料を催促しないで放っておくと、借りている方は借金が溜まるいっぽうになり、最後には支払うのが困難になるから。
— 金銭に関しては、誰であろうとも、シビアでなくてはならない。親子の間柄でさえも他人と同様にきちんとけじめをつけなくてはいけないと日本のことわざ“親子の仲でも金銭は他人”、“金に親子はない”はおしえている。競争の激しい商売のコツがわからなくて失敗するやり方を“土族の商法”、“武士の商法”と言う。

798. Mal (El) del milano, las alas quebradas y el pico sano.
病んでいる鳶（とび）は、畳まれた翼と　健康な嘴を持っている

— スバルビィ：臆病なのに勇気があるふりをしている者を咎めている、また病気だといって嘆いている者がよく食べるさまをたとえていう。
— バロス：病気のふりをして働かないのに、食べることは止めない者をたとえていう、また、から威張りをする者を非難している。
— コバルビアスの宝典によると、鳶は臆病な鳥であるが、爪と嘴で自身を守ったり、胸を上にそらせてタカに反撃を加えたりすることもある。“amilanarse-acobardarse、おびえる、縮み上がる”
— コレアス諺集には、表現の少々異なった同義のことわざが収載されている、“El mal del milano, las alas quebradas y el papo sano; o las alas caídas y el papo sano.　病んでいる鳶は、畳まれた翼と健康な餌袋を持っている”
— 一つ目の意は、具合が悪いなどと言って、体を動かさずにじっとしているのに、食事の時間がくると、真っ先に食卓に座り誰よりも食べる、二つ目は、本当の勇気のない者ほど虚勢を張るという意で、“えせ侍の刀いじり”と同じ。

799. Mal de muchos, consuelo de todos.
大勢の災難は、みんなの慰め

— 災難が同じように皆に降りかかると、我慢し易くなるということ。
— この諺にはいくつかのバリエーションがあり、意味も少しずつ変わっていく；“Mal de muchos, consuelo de tontos y de discretos.　大勢の災難は、愚者と分別ある者の慰め”（災難に襲われた人が多ければ、それを我慢でき易くなるということに反対している諺－スバルビィ）、“Mal de muchos, consuelo de bobos.　大勢の災難は、愚か者の慰め”（筆者－前のと同じ）、“Mal ajeno no pone consuelo. 他人の災難は慰めにならない”、“Mal de muchos, gozo es. 大勢の災難は、喜びである”（愚か者の慰め－バロス）、“Mal de muchos, conhorto es.”（コレアス諺集、conhorto-gozoと同義）
— イリバレン（格言の由来）によると、“..., consuelo de tontos.”は、近代になって付け加えられた表現で、何世紀も前には、“Mal de muchos, consuelo es o gozo es. 大勢の災難は、慰めである、或いは、喜びである”と言われていた。こちらの方が人間の本来の性質からいっても、近代のそれよりは、納得がいくし理屈に適っている。疑いなく、もし己の災いが他の多くの人々と共有されるなら、そのほうが慰めになるであろう、とイリバレンは言う。
— 同じ苦しみや悩みをもつ者は、互いの辛さがわかり、いたわり合うものであるという“同病相憐れむ”（呉越春秋）が類義のことわざ。

800. Mal (El) encantador, con la mano ajena saca la culebra.
悪党の蛇使い、他人の手で蛇をとり出す

— バロス：自身の才能、正当性などに自信がない者が、責任から逃れるために他人を利用することをたとえていう。
— “人の褌で相撲取る”がぴったりのことわざで、他人を利用して自分の利益を計ったり、目的を果たそうとすることをいう。その他にも類似のことわざがたくさんある；“人の牛蒡（ごぼう）で法事する”、“他人の念仏で極楽詣り”、“人の提灯で明かりとる”など。

801. Mal (El) entra a brazadas y sale a pulgaradas.
禍はどっさり入ってくる、でもほんの少ししか出て行かない

— バロス：たいていの場合、禍は突然ふりかかってくる、また、元の普通の生活に戻るまでとても時間がかかるから。同じように、“Los males entran por arrobas y salen por adarmes. 災難はたくさん入ってくる、でもわずかずつしか出て行かない”とも言う。
— スバルビィ：人は突然、病気になるのが常である、そしてなかなか治ってくれないものである、

更に、病後の回復期がゆっくりで、病気でいた間よりもっと時間がかかる。

— 故にこういう理に適った諺がある、“El mal que no es durable, es tolerable.　長引かない禍は、我慢できる”、また、“Mal que espera bonanza, no es mal de importancia.　快晴を待つ悪天候は、それほどたいしたことはない（繁栄を待つ不幸はそれほどたいしたことはない）”がある。

— “a brazadas－一抱えの量”、“a pulgaradas－一つまみ分”、“por arrobas－たくさん”、“por adarmes－わずかずつ、けちけちと”

— 禍は突然来て、長い間居座るだけでなく、度重なって起こる傾向もある、だから“禍は独り行かず”、“福重ねて至らず禍必ず重ねて来る”などという諺が存在する。

802. Mal haya el romero que dice mal de su bordón.
自分の杖に　苦情を言う巡礼者は　くそったれだ！

— スバルビィ：自分の持ち物にけちをつけたり、身内の悪口を言う者を咎めていう。

— バロス：道具が悪いと文句をつける職人や、自分の家族の悪口を言うような誠実でない者を非難している。

— “¡Mal haya...！　くそったれめ”“bordón－巡礼者が使う人の背丈より高い杖”

— 類似の日本のことわざには、“下手の道具調べ”、“下手の道具選び”がある。下手な職人に限って、あれこれ道具を選んだり、道具の苦情を言ったりするものであるということ。また、藪医者ほど立派な薬箱を備えているという“藪医者の薬味箪笥”がある。

803. Mal ladra el perro cuando ladra de miedo.
臆病な犬は　いやな吠えかたをする

— スバルビィ：われわれの意思に反して、命令で何かをいやいやさせられると、結果的にうまくいかないものである。

— バロス：空威張りをしていたり、はったりをかましたりする人をいう。

— 臆病な者が虚勢を張り、威張ってみせることをたとえて“負け犬の遠吠え”、“えせ侍の刀いじり”などと言う。

804. Mal me quieren mis comadres porque les digo las verdades;
me quieren mis vecinas porque les digo las mentiras.
本当のことを言うから　身内はわたしを嫌っている；
嘘を言うから隣の人はわたしを好いてくれる

— バロス：“Mal me quiere y peor me querrá al que dijere la verdad.　わたしをよく思っていない人がいる、本当のことを言ったらもっと憎まれるだろう”と類義のことわざで、本当のことは、人を不愉快にさせるのが常であるということ。
— 人に嫌われたかったら本当の事を言えばいい、しかし、みえすいたお世辞はもっと人を不快にするものである。“口に蜜あり腹に剣あり”、“二枚舌を使う”、“前で追従する者は陰で誹（そし）る”には、よほど用心する必要がある。

805. Malo (El) al bueno enoja que al malo no osa.
悪党は　善人にからんでくるが　同類にはあえてしない

— バロス：悪党は悪い上に卑怯者でもある。
— “Lobo a lobo no se muerden.狼と狼は、たがいに噛みっこしない”、“De cosario a cosario, sólo se pierden los barriles.　海賊船が互いに戦っても、なくなるのは樽ぐらい”などと同じで、同類は、ふつうお互いに傷つけ合わない、また、悪党は自分より弱い者にしか威張らない臆病者でもある。“鼬（いたち）なき間の貂（てん）誇り”、“鳥なき里の蝙蝠”、“貂（てん）なき山に兎誇る”などの諺は、自分より強い者がいない所で空威張りすることをたとえていう。

806. Malo (El) siempre piensa engaño.
悪党は　常にぺてんを考えている

— バロス：悪意を持っている人は、いつも他の人に害を及ぼす計画を練っているだけではなく、他の人も自分を騙すのではないかと思い込んでいる。類義で次のような諺がある；“El malo para mal hacer, achaques no ha menester.　悪党が悪事をするためには、口実なぞは必要ない”、“El malo siempre piensa ser engañado.　悪党は、いつも騙されないかと警戒している”、“Piensa el ladrón que todos son de su condición.　泥棒は、誰もが自分と同類ではないかと考えている”
— スバルビィ：悪意がある者は、悪さをするための弁解は一切しないし、更に、他の人々を警戒して用心深いという本性をもっているものである。
— 人は自分の持っているものさしで他の人も推し量る傾向があるから、善意な人は他の人も善意で行動すると考えるし、悪意のある人は誰もかれもが悪党だと信じている。

807. Mal (El) pajarillo, la lengua tiene por cuchillo.
口の悪い小鳥の舌は、身を切るナイフ

— スバルビィ：毒舌家とか、人を中傷する者は、他人を傷つけるばかりでなく、自分自身をも傷つけるということ。
— コレアス：きいきい声をあげるので、どこに巣があるかが分かり猟師に捕らえられてしまう。
— “舌の剣は命を絶つ”が、ぴったりのことわざである。しかしこちらの方には二つの意味がある、一つは、スペインの諺と同じく、ことばの過ちのために、自分の生命さえも失うことがあるということ、また他方では、悪意のある噂を流されて、一生を台なしにされることがあることにもいう。

808. Mal (El) paño en el arca se vende, mas el bueno verse quiere.
悪い布は箱に入れて売られ、良い布は見せて売られる

— コレアスの諺集によると、本来は“El buen paño en el arca se vende、良い布は箱に入れて売られ、...”の方が辻褄があうという。信用があれば、好い品物は売れるから。マリア・モリネールの辞書にもこちらのほうしか載っていない、よいものは宣伝する必要がないという意のことわざであると説明している。
— どちらの意味にも解釈できる諺である、悪い品物は箱に入れてあれば、少しの傷は見えないし、よい物はみせびらかしたいという心理もある、また、宣伝しなくてもよい物はすぐに売れるということも真実である。しかし、悪徳の商人も世の中には必ずいる、よい物を看板にかかげておいて悪い物を売る“看板に偽りあり”、“羊頭を懸げて狗肉を売る”などの諺がある。

809. Mal (El) para quien lo fuere a buscar.
求むる者に　災い降りかかる

— 同様な意味で“Quien busca el peligro, perece en él.　危うきを求むる者は、危うきに死す”がある、つまり、言い方を変えれば“Quien quita la ocasión quita el peligro.　触らぬ神にたたりなし”となる。
— 例題：ドン・キホーテ第一部20章、ためになる話を語って聞かせる時のきまり文句だとサンチョがドン・キホーテに説明してこの諺を二回繰り返して使っている、“...<Érase que se era, el bien que viniere para todos sea, y el mal, para quien lo fuere a buscar...>... むかしむかしにあったとさ、来るさいわいは皆さまに、わざわいは求めに出かけるその和郎に...”、“...<Y el mal, para quien le fuere a buscar>, que viene aquí como anillo al dedo... <わざわいは求めに出かけるそのわろに>ってのは、... 指輪が指にはまるように、ちょうど

この場合にはまりますだ。”（正編二、永田寛定訳）

— 日本の諺“藪を突っついて蛇を出す”と同じである。逆もまた真なりで、“Quien no se arriesga no gana nada./ La audacia ayuda a la fortuna./ Quien no se aventura, no pasa la mar. 虎穴に入らずんば虎子を得ず”などがある。

810. Mal (El) que de tu boca sale, en tu seno se cae.
天に唾す

— 類義には、“El que al cielo escupe, en la cara le cae.　天に向かって唾を吐くと、顔にふりかかる”がある、他人に害を与えようとして、かえって自分がひどい目にあうことをたとえている。

— 同様に仏教のおしえには“因果応報”、“自業自得”がある。いずれも、悪事には悪の報いがあるという、悪いほうの意味にいうことが多い。

— 旧約聖書続編、シラ書（集会の書、27－25）には、“天に唾す”の源となっている次の文が載っている、“Al que tira al cielo una piedra, le cae en la cabeza.　上に向かって石を投げれば頭の上に落ちてくる。”これに続いて、同義の文が繰り返される、“だまし討ちをすれば自分も傷つく、落とし穴を掘る者は自分がそこに落ち込み、罠をしかける者は自らそれにはまり込む。悪事を働けばその報いがわが身に返って来る。”（シラ書、27－26、27）全てこれらの文は、仏教のおしえの“因果応報、自業自得”を謳っている。

811. Mal se esconde el fuego en el seno, ni el amor en el pecho.
炎も恋も　懐の奥深くにさえ　隠せない

— 類義のことわざには、“El mal y el bien, en la cara se ven.　幸も不幸も、顔に出る”、“La cara es el espejo del alma.　顔は心を映す鏡である”などがある。恋している者の顔は輝いているし、心配事などに落ち込んでいる者の顔は、沈んでいて冴えない、“思い内にあれば色外に現る”、“心内に動けば詞（ことば）外に現る”も同様に、心の中に思っていることは、自然に表情や態度に現れるということ。

812. Mandan al mozo, y el mozo al gato, y el gato a su rabo.
主人は小僧に、小僧はネコに、ネコはしっぽに命じる

— スバルビィ：世の中の序列制度は鎖のように組み合わせられている、一番最後の鎖の輪にはどうでもいい人が繋がっている。

— バロス：常に誰かから命じられるより劣等な人が存在するものである。

— 上には上があり、下には下があるということ。例えば、“上見ぬ鷲”は、最高の地位に上り何者も恐れる心配がなく、悠々としている人をたとえて言う。ここまでくれば誰彼なく権力を振るうことができる。スペインの諺とぴったりなのが、“駕籠（かご）に乗る人担ぐ人、そのまた草鞋を作る人”ではないだろうか、世の中にはいろいろな身分、境遇の人がいることをたとえている。

813. Manda y hazlo, y, quitarte has de cuidado.
自分で命じて　自分ですれば、気をもまなくてすむ

— 本当にその通りである、人は自分の思うようには動いてくれないので、頼んだ事をしてくれるまでいらいらする。それよりも自分でさっさと片付けたほうが早いし、気にしなくてすむ。
— コレアス諺集には、次のような表現を少しずつ変えたものがいくつかある；“Manda y hace, y seréis bien servido.　自分で命じて、自分ですれば、よくもてなされるだろう”、“Manda y haz, que habrás asaz y no te perderás.　自分で命じて、自分ですれば、物持ちになり、途方に暮れないですむだろう”、“Manda y haz, y tendrás criados.　自分で命じて、自分ですれば使用人を持てるようになるだろう”など、いずれも自分が自分にするべき事を命じ、自身で遂行するほどきちんと物事が運ぶことはないとおしえている。そうせずに、人任せにしているとこうなる、“Manda y descuida: no se hará cosa ninguna.　命じても、放っておくと、何もされない”（命じても、遂行されたかをきちんと見届けないと無駄である－バロス）故に、大事なことは、“Mandar no quiere par.　命じるのに相手はいらない”（命令する人も、それをする人も同じ人でなければならぬ－バロス）ということになる。

814. Mano (La) cuerda no hace todo lo que dice la lengua.
まともな手は　舌が命じる全ての事をしない

— スバルビィ：かっとなっていろいろな事を言ってしまった瞬間でも、賢明な人はそれを実行には移さない。
— バロス：言葉で言うことは許されるとしても、それを実行するのはよくないということ。
— コレアス諺集には上記の他に類義で、“La mano cuerda no cumple lo de la loca lengua.　まともな手は、狂った舌の言うことなんかきかない”（脅迫とか脅し文句等を指す－コレアス）がある。
— けんかをしていて“殺してやる”などと口では言っても、まともな人はそれを実行しない。

815. Manos besa el hombre que quisiera ver cortadas.
切断されている手を　見たがっている　その手に口づけする

— コレアス諺集には、“Manos besa hombre que querría verlas cortadas; o quemadas.　切断されている／或いは、焦げた手を見たがっている、その手に口づけする”が記述され、スバルビィの諺辞典には、“Manos besa el hombre, o los cortesanos, que querría, o quisiera, ver cortadas.　切断されている手を見たがっている者／或いは、宮廷人が、その手に口づけする”（現にしている事に何らの考慮も払わない人々を皮肉っている－スバルビィ）が収載されている。バロスによると、必要にせまられて卑下したり、また値しないような相手を賞賛したりする者をいう。

— “すまじきものは宮仕え”が自然と思いだされる諺である。他人に仕えていれば、厭な相手でも世辞のひとつぐらいは言わなければならないし、納得がいかなくとも従わなければならない場合もある。日本の類義のことわざは“面従腹背”ではなかろうか、外と内がまるっきり反対である、うわべは服従しているようにみせかけ、内心では反抗している。

816. Manos blancas no ofenden.
白い手は　危害を加えぬ

— イリバレンの“格言の由来”によると、もともとは（19世紀初め）、宗教に携わるある扇動家のビスカヤ人は、“Manos blancas no ofenden.”と呼ばれていた。その後、皇女カルロタからサリカ法典（女性の王位継承を認めない法典）に関して平手打ちをされた大臣が皇女に向かってその格言を叫んだ。

— バロスによると、女性に侮辱されても、深刻に受けとめるべきではないという意。

— 確かに、女に頬を打たれてもたいして痛くはないだろう。しかし、女は執念深く、復讐心が強いという諺が日本にはある、“女の一念岩をも通す”、“女の仕返し三層倍”など、恐い女がいるのは事実である。

817. Manos (Las) del oficial, envueltas en cendal.
巧みな手、薄絹に包まれて

— 熟練を積んだ巧みな手は、尊敬に値するということ。

— バロス：“oficial－職人、勤労者、マエストロ、等”、仕事をしている者に対しては、それ相応の敬意を払うべきである。

— コレアス諺集には、“働く手”に関して次のような諺が見られる；“Manos del maestro son ungüento.　マエストロの手は、膏薬のごとし”（熟練した外科医の手は傷を治す意－コレア

ス)、“Manos duchas comen truchas.　熟練した手が、鱒を食す”（仕事をする者が手に入れる－コレアス)、“Manos duchas mondan güevos, que no largos dedos.　熟練した手が卵の殻をむくのであって、長い指ではない”（筆者－güevo-huevo）など、いずれも経験と年季の入った働いている手を称えている一連のことわざである。註：“Trucha－鱒”は、コバルビアスの宝典によると、よく知られた高価な魚で、“Ayunar o comer trucha.　断食するか、鱒を食べるか、どちらかだ”（中くらいに満足しない人をいう－コバルビアス）のような格言もある。

— 勤労の尊さをいったことわざには“一日作さざれば一日食らわず”がある。また、どんなことでも器用に上手にでき、人々には重宝がられ喜ばれるが、大成できないことが多く貧乏であるという一連のことわざも時にはある；“細工貧乏人宝（さいくびんぼうひとだから）”、“器用貧乏身が持てぬ”、“職人貧乏”など。反対のことわざには“一芸は道に通ずる”、“一芸は百芸に通ず”がある。

818. Manos (Las) en la rueca y los ojos en la puerta.
手は糸巻き棒に　眼はドアに釘付け

— 今していることに集中できない者をたとえていう。
— スバルビィ：今している事に注意を払わない人を咎めている。
— バロス：現在行っていることに思いを馳せるのではなく、遥か遠くへ思考をさまよわせている人をたとえていう。
— 上の空であること、つまり、学校で、職場で、家庭で、或いは書斎で、体はそこにあるが、心はどこかをさまよっている状態をいうのであろう。

819. Manos y vida componen villa.
人のたゆまぬ手が　町をつくっていく

— スバルビィ：時間をかけて勤勉に働けば大きな事が成し遂げられるということ。
— 長い年月をかけて、根気よく続ければ大きな成果が得られるという意のことわざには次のようなのがある；“雨垂れ石を穿つ”、“石の上にも三年”、“牛の歩みも千里”、“辛抱する木に金がなる”などいずれも、たゆまず努力をする大切さを説いている。

820. Mansa (La) respuesta, quebranta la ira.
優しい返事は、怒りを和らげる

— 類義の諺には、“Más apaga buena palabra que caldera de agua.　釜一杯の水より優しい言葉が火を消す”（柔らかい態度と言葉使いが怒りを鎮める－スバルビィ）がある。

— 日本では、“怒れる挙笑顔に当たらず”、“袖の下に回る子は打たれぬ”、“尾を振る犬は叩かれず”などと類義のことわざがある、高圧的な態度で出てきた相手には、優しい態度で接するほうが効果的であるという意で、また、弱い者がかえって強い者に勝つという意もあるのが、“柔能く剛を制す”である。

— コレアス諺集には“La mansa cordera mama a su madre y a la ajena.　おとなしい子羊は、ママのおっぱいもよそのおばさんのおっぱいも吸う”がある。柔軟性のある者は、適応力があって世の中を渡るのが上手である。“cordera－雌の子羊、控えめな女性”

— 標題のことわざは、旧約聖書の中の“箴言15－１”に見られる；“La respuesta amable calma el enojo; la respuesta violenta lo excita más.　柔らかな応答は憤りを静め、傷つける言葉は怒りをあおる。”（筆者の諺辞典、諺142を参照）

821. Manta y cobertor no son para buen bebedor.
酒飲みには　毛布もふとんもいらない

— コレアス：何故ならば、ワインは体を温めるし、また、酒飲みは飲むために金を浪費して、身代をつぶすことが多いから。

— 酒はほどほどに飲めば“酒は百薬の長”となるが、そうでないと、“酒は飲むとも飲まるるな”ということになる、故に、“酒は飲むべし飲むべからず”というとてもいい諺もある。

822. Manzana (La) podrida, pierde a su compañía.
腐ったリンゴは、仲間を腐らせる

— スバルビィ：“La manzana podrida pierde a su compañera, o a su compañía.”悪い仲間とつき合う者は、自分も堕落していく。

— バロス：果物にも人間にも同じ現象が起こるものである。

— 自分より優れている者とつき合えば間違いはない、“己に如かざる者を友とするなかれ”と、論語がおしえている。スペインのことわざとぴったりなのが、“朱に交われば赤くなる”、“親擦れより友擦れ”、“善悪は友による”であろう。いずれも、善にも悪にも友人の感化が大きいことを謳っている。

823. Mañanas (Las) de abril, dulces son de dormir; las de mayo, mejor, si no despierta el amor.
四月の朝は、甘い眠り、五月の朝はもっと夢の中、
もし愛が目覚めさえしなければ

— スバルビィの諺辞典では次のように少し表現が異なる；“Las mañanitas de abril son muy buenas para, o sabrositas, de dormir, y las de mayo, no tienen fin ni cabo, o y las de mayo, aún mejor que las de todo el año. 四月の朝は心地よい眠り、五月の朝はいつまでも明けず、うつらうつらと夢の中、そして、一年中でいちばん快適”まさに、“春眠暁を覚えず”（孟浩然・春暁）の境地である、春の夜は短い上に、暑くもなく、寒くもなく、眠るにはまことに快適である、夜が明けたのにも気づかずにうとうとと眠りこんで目が覚めない様子を描写している。

824. Mar (La) al más amigo pronto le pone en olvido.
海は　すぐに親友を　忘れさせてくれる

— 危険な目に合うと自分の事だけで精いっぱいだから。
— バロス：航海していると、危険なことが多いので友を信用することは出来ぬ、誰でも利己的になる。
— 危険に遭遇した場合は、自分が助かろうとして必死になるので他者のことは構っていられない、たとえいちばん親密な人でさえも。史記の“刎頚（ふんけい）の交わり”（その友人のためなら自分の首をはねられても悔いはないというほどの交友－故事ことわざ活用辞典、創拓社）のような深い友情は、この世俗にはまれである。スペインの諺には“Se conoce a los amigos en la adversidad. 人は逆境の時に友を知る”がある。真の友であるかどうか、われわれはそういう状況に出くわした時に試されるのである。

825. María, si bien estás, no te mudarás.
マリア、もし幸せなら、変化を求めないで

— バロス：今幸せなのに、もっと幸せになりたいと思っている人々には、とても良い忠告である。諺でもこう言っているではないか、“El que está bien, no para hasta que se pone mal. 幸せな者は、不幸になるまで立ち止まらない”
— “El que está bien, no para hasta que se pone mal. 健康な者は、病気になるまで立ち止まらない”（筆者のスペインの諺辞典、477を参照）とも訳せる。いわんとしていることは同じである。今の幸せに満足しなさいということ。まさに、“禍福己による”、“禍福門なし唯人

の招く所”である。幸不幸は本人の行いが招くものであるということを教えている。

826. Marido tras el lar, dolor de ijar.
炉端の夫は、横っ腹がしくしく痛む

— コレアス：“Marido tras del lar, dolor de ijar.”夫は何もしないで居間を占領してぶりぶりしているより、農場で働いていたほうが健康に良い。
— スバルビィ：“Marido tras del lar, dolor de hijar.”農園で仕事をしないで、一日中家にいる夫が、いかに健康によくないかを謳う。
— バロス：仕事をしない夫は、家でいつもうめき声をあげては家族をうんざりさせるものである。
— 仕事をやめた世の定年後の夫とそっくりである。やはり、どこでも、いつの時代でも、夫というものは外で働いているのが、本人にも家族のためにもいいらしい。
註：“ijar–ijada－わき腹、横腹”
— 一連の“marido－夫”に関するスペインの諺を見てみよう；“El marido, antes con un ojo que con un hijo.　連れ子のいる夫より片目の夫のほうがまし”（もめ事の原因となる連れ子のいる夫より多くの欠点がある夫のほうがましである－バロス）、“Marido celoso, nunca tiene reposo.　やきもち焼きの夫には、決して休息は訪れない”、“El marido bueno, viva; y malo, nunca se muera.　良い夫は長生きして下さい、悪い夫も決して死なないで”（どちらにしても、夫は妻の庇護者となり、妻の体面を守ってくれるので未亡人でいるよりましである－コレアス）
— 日本にも夫婦については、“女房にほれて家内安全”とか、“夫につくのが女の道”などのことわざがある。

827. Mar (La) que se parte, arroyo se hace.
海も分けると、小川になる

— コバルビアスによると、“La mar que se parte, arroyos se haze.”は、どんなに農園が大きくても、たくさんの相続者で分けると、ひとりずつの取り分はわずかなものであるという意である。
この事も長子相続権制度を作る根拠のひとつとなった。この制度の目的は、各家の長男が多数の家作を失わないように、必死なおもいでそれらを守ることにある。スバルビィによると、一般的に、どんなにたくさん物があっても、多人数で分けると、ほんの少ししか当たらない。また、バロスによると、これは、“Divide y vencerás.　分裂させよ、そうしたら勝つであろう”と同義で、一致団結した勢力は大変強いが、それがひとたび分裂させられるとその力が失われてしまう。

— 両方の解釈が成り立つことわざである、物でも、力でも分割すると、小さくなってしまい、いずれはなくなってしまうという意。

828. Marta la piadosa, que mascaba la miel a los enfermos.
情け深いマルタは、病人のために蜜を噛みくだいた

— 必要のない、いき過ぎた偽善的な行為をたとえていう。
— バロス：特に、偽善的な女性をたとえていう。
— コレアス諺集には、次のような一連のマルタものが出ている；“Marta la piadosa. 情け深いマルタ”（信心深い人についていうが、時には皮肉をこめて、軽率で有害な優しさを咎めていう－コレアス）、“Marta la piadosa, que daba el caldo a los ahorcados. 情け深いマルタは、絞首刑になった者にスープをあげようとした”、“Marta la piadosa, que mascaba el vino a los enfermos. 情け深いマルタは、病人のためにワインを噛みくだいた”、“Marta la piadosa, que mascaba la miel a los dolientes. 情け深いマルタは、病んでいる者のために蜜を噛みくだいた”、“Marta, la que los pollos harta. たらふく鶏肉を食べるマルタ”（厚かましい人を軽蔑こめていう－コレアス）
— コバルビアスの宝典には；“Bien canta Marta después de harta. 満腹した後のマルタは、上手に歌う”、“Allá se lo aya Marta con sus pollos. 鶏と一緒にマルタがあそこにいるよ”などが収載されている。これらの格言を見ると、同じマルタでも、いきすぎた優しさのマルタと厚かましいマルタの二種類がある。マリア・モリネールの辞書によると、“Marta－尼さんの居住している修道院の雑役婦”

829. Martillo (El) de plata rompe las puertas de hierro.
銀の槌は　鉄のドアを打ち破る

— バロス：金の力がいかに強いかを言う。
— コレアス諺集には、同じ銀でも“El martillo de argento rompe las puertas de hierro.”が載っており、“argento”となっている。類義では“Más ablanda el dinero que palabras de caballero. 紳士の言葉より金のほうがほろりとさせる”、“Dádivas ablandan peñas. 贈りものが岩をも溶かす”などがある。日本でも“地獄の沙汰も金次第”と言うように、どこでも、いつでも金の力は強いということ。

830. Marzo marceador, de noche llueve y de día hace sol.
三月らしい陽気、夜は雨、日中はお日さま

— 三月の変わりやすい天候をいう。ここでは、スペインの春、特に三月を言い表している一連の諺を見てみよう；“Marzo marcero, por la mañana rostro de perro, por la tarde valiente mancebo.　三月らしい陽気、朝は犬の顔、昼は勇敢な少年（筆者－午前中はどんよりしているが、午後は日が輝いている、tiempo de perros－ひどい天気）”、“Marzo ventoso y abril lluvioso y mayo pardo hacen hermoso el año.　風の強い三月、雨降りの四月、曇りの五月が一年を美しくする”、“Marzo ventoso y abril lluvioso, al buen colmenar hacen astroso.　風の強い三月と雨降りの四月が蜜蜂の巣箱をだいなしにする”（雨が蜂を殺すから－バロス）、“Marzo ventoso y abril lluvioso sacan a mayo florido y hermoso.　風の強い三月と雨降りの四月が、五月に花を咲かせ、美しくする”、“Marzo ventoso y abril lluvioso, hacen a mayo hermoso y al colmenero merdoso.　風の強い三月と雨降りの四月が、五月を美しくし、蜜蜂をだいなしにする”

831. Más ayuda la mañana que prima y hermana.
午前が　いとこや姉より　手伝ってくれる

— バロス：仕事をするにはその時間が最適である。
— コレアス：どんな仕事でも午前中がはかどる。
— 比喩の面白いことわざである。本当にすがすがしい朝は、まだ疲労していない頭と体が自然に動いてくれて、仕事がてきぱきと片づいていく。そういうわけで、“早起きは三文の徳”、“早起き三両倹約五両”、“早起きは千両”などという日本のことわざは早起きを奨励しているのである。

832. Más caga un buey que cien golondrinas.
一頭の牛は　百羽のツバメより　たくさん糞をする

— 一人でも力のある者のほうが、大勢の弱い者たちよりずっと多くのことができることをたとえている。
— たとえの異なる類義のことわざがコレアスとバロス諺集に収載されている；“Más come un gato de una vez que un ratón en un mes.　一匹のネコは、一匹のネズミが一ヶ月で食べる物を一回で食べる”（能力のある者が一度にすることを、そうでない者は何度にも分けてしなければならない。－バロス）、“Más vale león cansado que gozque enfadado.　くたびれたライオンのほうが、吠えている子犬に勝る”（衰退期にいる大物のほうが、盛んな時期の小

物より優れている－バロス)、また、これらとは反対のことわざがバロス諺集にある；“Más valen muchos pocos que pocos muchos.　多数の力なき者たちのほうが、少数の力ある者たちに勝る”こちらは、“muchos”と“pocos”の反意語を組み合わせて語呂合わせをしているが、見出しのほうは、ことわざ特有の動物をたとえにだして人間社会を巧みに言い表わしている。

— 日本の類義のことわざには、“千軍は得易く一将は求め難し”とか、“万卒は得易く一将は得難し”などがある。世の中には取るに足りない平凡な者はいくらでもいるが、優れた者はなかなかいないものであるとたとえて言っている。

833. Más caro es lo dado que lo comprado.
物を貰うは　買うより高い

— なぜならば、もらった物以上の事をして上げなくてはならない羽目になるから。(筆者の諺辞典、諺740を参照)

— 日本にも同義で、類似の表現のことわざがいくつかある；“ただより高い物はない”、“物を貰うはただより高い”、“買うは貰うに勝る”など。ただし、こちらには、“ただより安い物はない”とまるっきり反対のことを言っていることわざもある。

834. Más cerca están mis dientes que mis parientes.
己の歯は　親類より　近いところにある

— 人は誰でもまずは自分自身のくらしを心配しなければならない、他人の世話はその後である（コバルビアス)。食いしん坊で利己主義な者をたとえている（バロス)。

— “dientes－歯”と“parientes－親類”は同韻の組み合わせである。“歯”は食べ物を咀嚼する大切なものであるから、“身を養う－コバルビアス”と“大食らいする－バロス”の上記のような両方の解釈が成り立つ。

— コレアス諺集には、同義で“Más quiero para mis dientes que no para mis parientes.　親類のためより自分の歯のためにもっと欲しい”がある。

— 日本のことわざでは、利己主義者への軽蔑のことばに“人は悪かれ我善かれ”がある。上記のスペインのことわざと似たようなことを言っている。他人がどんなに困っていようとも自分さえよければそれでいいということ。

835. Más cura la dieta que la lanceta.
手術より　ダイエットが治す

— 食事療法のほうが病気の治療のためには、より安全で、危険が少ないということ。現代の飽食

の時代にも通じることわざ。“lanceta－（手術に使う）メス”

— 日本のことわざでも同じようなことを言っている；“腹八分目に医者いらず”、“腹も身の内”、“薬より養生”、“食い過ぎ飲み過ぎ病のもと”など、平素から暴飲暴食をつつしんで、養生を心掛ければ病気にかからず健康でいられると教えている。

836. Más da el duro que el desnudo.
ケチのほうが　丸裸よりくれる

— 何にも持っていない人よりは、たとえケチであっても、何かもらえるとまだ期待できるから。（バロス）

— コレアス：“Más da el duro que tiene, que franco que no tiene（o que maduro o blando que no tiene.）金持ちのケチのほうが、貧乏な気前のいい者よりくれる”（持っていれば、いくらケチでも、何にも持っていない気前のいい人よりも、まだくれる可能性がある。－筆者）

— ある意味では真実を突いていることわざである。“duroとdesnudo は語頭と語尾に韻を踏ませ、ケチと丸裸を対比している”たとえ善意があっても丸裸同然の貧乏人は他人に何もしてあげられないが、ケチでも金があれば、たとえ少々でも出すことができる。コレアスの諺集のことわざのほうがより具体的である。しかし、これらとは逆の意味のことわざもある、“Más da quien bien quiere que quien puede.　本当にしたい者ができる者よりくれる”こちらは、できるかどうかよりは、したいかそうでないかが大事であるということ。

— 日本では、次ぎのように語呂合わせをしてケチを誇張していることわざが多い；“くれる事なら日の暮れるのも嫌”、“出すことは舌を出すも嫌い”、“出すことは目の中の塵でも嫌”など、ことわざ特有の言葉遊びと誇張表現が見られる。

837. Más discurre un hambriento que cien letrados.
ひとりの腹ぺこのほうが　百人の学者より　名案がある

— 百人の学者も飢えが思いつかせる知恵にはかなわないということ。ハングリー精神を謳っていることわざ。

— バロス：“La mejor maestra, el hambre.　最良の教師は、空腹である”と同義で、ひもじさが創意に富んだ、巧妙な手段を思い付かせるものである。

— スバルビィの諺辞典には、次のような類似のことわざが見られる；“Más discurre un enamorado que cien abogados.　ひとりの恋している者のほうが、百人の弁護士より名案がある”（恋する者が情熱をかけて熟考したほうが、たとえ物知りでも熱意なき者よりよい解決策を思い付くものである。－スバルビィ）

— 誰も、本当に欲するものを手に入れたいという飢えている者や、惚れている者の情熱にはかな

わないということ。空腹が人を発奮させるという意のことわざとは全く逆のことわざが次ぎのように日本にはある；“人貧しければ智短し”、“貧には知恵の鏡も曇る”など。

838. Más es el ruido que las nueces.
クルミは音のほうが　中身より大きい

— 大げさに吹聴する者をたとえている。
— バロス：小さな事をしたのに、いかにもそれを大事な事をしたかのように宣伝する人に対して言うことわざ。
— こういう風に物事を大げさに言うことをたとえて“針小棒大”、“針ほどの事を棒ほどに言う”、“針を棒にとりなす”、などと言う。クルミの出てくるスペインのことわざには、類義で次のようなのがある；“Mucho ruido y pocas nueces.　泰山鳴動して鼠一匹”、こちらの方には、これからする事をおおげさに宣伝し、騒ぎたてたのに、結果はささいでつまらないことでしかなかったという意味あいがある。（筆者の諺辞典、諺516、792を参照）

839. Más fácil es de la obra juzgar que en ella trabajar.
あれこれ人の仕事を批評するのは　己が仕事するより易しい

— 口では何とでも言えるが、実際に行(おこな)うのは難しいということ。
— 類義のスペインのことわざには；“Más fácil es hablar que obrar.　口で言うのは、行うより易しい”、“No es lo mismo predicar que dar trigo.　説教するのと、小麦をあげるのは同じことではない”がある、いずれも実行の伴わない口先だけでの批判、忠告を戒めている。
— これとぴったり同じことわざが、“言うは易く行うは難し”（出典－中国の“塩鉄論”）、“口だけなら大坂城も建つ”、“口ほど重宝なものはない、何でも言うことすぐに出る”などがある。

840. Más fullero que Andradilla.
非常なぺてん師である

— ことわざというよりは、成句である。
— スバルビィ：ぺてん師、詐欺師を指して言う。
— “fullero－トランプ、サイコロなどの賭けごとで、仲間と組んでいかさまをしては相手から金を巻きあげたり、悪さをする輩をいう。（コバルビアス）”
— 例題：ドン・キホーテ第二部49章、領地の巡視中に、争っている二人の男を見つけたサンチョに、そのうちのひとりがカクスやアンドラディーリャの名を出して相手の男をこう詰る、“...,y el socarrón que no es más ladrón Caco ni más fullero Andradilla,...ところが、この

畜生め、カクスほどの大泥坊でも、アンドラディーリャほどの大いかさま師でもねえくせに、...”（続編三、高橋正武訳）註48：アンドラディーリャは、セルバンテスの時代か、そのまえごろの大いかさま師らしいという。また、Real Academia のドン・キホーテの注釈者の Martín de Riquer によってもこのアンドラディーリャは、誰であるかはっきりしないという。

841. Más gasta el escaso que el franco.
けちは　気前のいい者より　浪費する

― 何故なら、一度に買い物をしないから（バロス）。
― けちはおうおうにして、目先のわずかな出費を惜しんだり、損得だけを考えて金を遣うので後で大損をする羽目になる。日本のことわざには次ぎのように、将来の利益を考えて金を使いなさいと教えているのが多い；“一文吝みの百知らず”、“一文儲けの百遣い”、“一文惜しみの百失い”、“安物買いの銭失い”、“損せぬ人に儲けなし”など。

842. Más hace el querer que el poder.
したいが　できるより　物事を成就する

― 意欲があるほうが能力があるより勝るとずばり言っているのが“Más vale el que quiere que no el que puede.”である。
― スバルビィ：人を主に行動に駆り立てるのは人の意志である。また、その意志の力があれば一見不可能と思われるような事でも成し遂げることができるのである。
― “好きこそ物の上手なれ”、“好きは上手のもと”、“道は好む所によって易し”などのことわざと同じ主旨である。

843. Más hiede el pedo ajeno que el nuestro.
他人の屁は臭い

― まさに真実を述べていることわざである。自分の屁はちっとも臭くない。それと同じように人は自分のこととなるとなかなかわからないもので、自分の欠点には気付かないと言っている。
― バロス：他人の欠点は自分の欠点よりよくわかるということ。
― ずばり、同義で発想も表現も類似しているのが、“我が糞（くそ）は臭くなし”、“我が身の臭さ我知らず”、“息の臭きは主知らず”などの日本のことわざである。

844. Más ladra el perro cuando ladra de miedo.
怯えて吠える犬は　もっと吠える

— 人が虚勢（きょせい）を張っているのは、怖いからである。（筆者の諺辞典、諺615を参照）
— 同義の異表現には；“Mal ladra el perro cuando ladra de miedo.”がある。“mal ladra”には、尋常でない、いやな吠えかたをするという意味合いがある。コバルビアスの“宝典”（1611年）には、同義で“Perro ladrador, nunca buen cazador.　吠える犬は捕らず”が収載されている。同時代の日本の諺集には同義で“鳴く猫は鼠捕らず”のことわざが見られる。（岩波、ことわざ辞典）犬と猫が取り替えられているが、人の発想はどこでも同じらしい。
— 見出しのことわざは、犬が吠えるのは、相手が怖いから威嚇するために吠えるのであるということをずばり謳っている。日本のことわざにも同義で“吠える犬は噛みつかぬ”、“犬の遠吠え”、“負け犬の遠吠え”などがある。やたらに威張ってみせたり、虚勢を張ったりする者は、むしろ臆病で何もできないものだというたとえ。

845. Más mató la cena que sanó Avicena.
名医が治す数より　夕食が殺す数のほうが多い

— 寝る直前に食べる多量の夕食は体に悪いということ。
— 同義でこういうのもある；“De grandes cenas están las sepulturas llenas.　豪華な夕食で、墓場はいっぱい”、“Más vale un no cena que cien Avicenas.　一回の夕食抜きは、百人の名医に勝る”（“スバルビィ諺辞典”収載）どれもことわざ特有の誇張表現で、夕食は少なめに食べるのが健康にいいですよと言っている。見出しのことわざに出てくる具体的な名医の名前 Avicena は、コバルビアスによると、偉大な哲学者であり、アラビア人の間では名医の評判が高かったモーロ人。“cena”と“Avicena”は同韻で語呂合わせをしている。
— 現代の日本でもよく言われていることである。時間が遅くて、量の多い晩ごはんは肥満の元になるし、心臓に負担をかける。“腹八分目に医者いらず”、“腹八分に病なし”、“食い過ぎ飲み過ぎ病のもと”などが同義の日本のことわざ。

846. Más moscas se cogen con miel que con hiel.
蠅は蜜のほうが　胆汁より　よく捕れる

— 優しい方が厳しくするより効果があるということ。
— 同義のことわざで、“Más vale lamiendo que mordiendo.　なめる（ご機嫌をとる）が噛む（噛み付く）に勝る”というのもある。欲するものを手に入れたければ、厳しくするより優しくしたほうが効果があると教えている。具体的には、コレアスが言うように、商談をこちらの

思惑どおりにすすめるためにも、相手にお愛想を言ったり、よろこばせたりすることが必要である。スバルビィの諺辞典には、見出し形と少々表現の異なった“Más moscas se cogen, o cazan con miel, que no con hiel.”が見られる。（相手の気を引いたり、やる気を起こさせるための最良の手段は、優しさとおおようさである－スバルビィ）

― 同韻の“miel－蜜”と“hiel－胆汁”でやさしさ－厳しさを対比させている。

― 故に日本の諺は、相手にやさしい事やうまいことを言われてうかうかとその計略に乗せられてしまうことをたとえて、“口に甘いは腹に毒”、“口に甘きは腹に害あり”、“旨い物食わす人に油断すな”と言い、うっかりとおだてに乗らないように戒めている。

847. Más presto se coge al mentiroso que al cojo.
嘘つきは　びっこより　早く捕まえられる

― 嘘つきは記憶力がよくないと、自分でついた嘘を忘れてしまい、すぐばれてしまう。スペインの諺“El mentir pide memoria.　嘘ついたことは覚えていなければならぬ”は、その事をずばりと言う。（筆者の諺辞典、諺487を参照）

― コレアス諺集には、見出しと同義で“Más aína toman al mentiroso que al cojo.”が見られる。嘘つきは、自分では気がつかないでぼろをだすのですぐにばれてしまう。

― 例題：セレスティーナ第17幕、カリストの従者のひとりであるソシアが、世間のやつらが嘘っぱちなんだとことわざを例に出す、“...,como dicen, que: toman antes al mentiroso que al que coxquea,...世の譬えにもあるように、ちんばよりゃ嘘つきのほうが早くつかまえられるというもんさ。”（魔女セレスティナ、大島正訳）

― 日本には同音のことばをかけてしゃれて言った面白いことわざがある；“嘘と坊主の頭は結ったことがない”（“結う”に、“言う”）“嘘と牡丹餅ついたことない”、“嘘と大仏の鐘はついたことがない”など。

848. Más produce el año que el campo bien labrado.
豊作は　良い耕作より　良い天候

― 人の力より天の恵みはもっと大切であるということ。（筆者の諺辞典、諺896を参照）

― コレアス：小麦が豊かに実るのは、よく耕やされた畑によるのではなく、その年の恵まれた天候によるのである。

― 日本でも“水の恩ばかりは報われぬ”と言われているほど、水だけに限らず、自然の恩恵はあまりにも大きく、尊い。人間の働きはそれにはとうてい及ばないという意のことわざ。

849. Más puede Dios que el diablo.
神は　悪魔に　勝る

— 悪意より善意が強いということ。
— バロス：人はぺてんを使うより正当な手段を用いたほうが目的が達せられるものである。
— スバルビィ：このことわざにより、われわれは、たとえ悪意のあるじゃまものに出くわそうと、われわれの正しい目的は遂行できるのであると勇気づけられる。
— 人類の希望は、最後には善が悪に勝つということである。世の中には悪人ばかりでなく、仏や神のような善人もたくさんいるという“仏千人神千人”のことわざが日本にもある。頼もしい限りである。

850. Más quiero asno que me lleve, que caballo que me derrueque.
振り落とす馬より　乗せてくれるろば

— 危険のつきまとう派手な生きかたより、つましいが安定した生きかたのほうがよい。異表現には、“Más vale asno que os lleve que no caballo que os derrueque.”がある。ことわざ特有のたとえなしに、その事をずばりと言っているのが、“Más quiero poco seguro que mucho en peligro.　少なくとも安定しているほうが、危険に満ちたたくさんよりいい”がある。“derrocar–tirar，derribar－放り出す、振り落とす”
— コバルビィアスの宝典によると、次ぎのような解釈が見られる。“Más quiero asno que me lleve，que cavallo que me derrueque.”危険をともなう重要な地位にいるよりは、平凡な境遇にいることに満足している者を言う、或いは、忠実で善良な使用人のほうが思い上がった有能なそれより良いと言っている。
— 自分の能力や環境など、分相応のところで満足している心境を“足るを知る”（老子）と言う。“足るを知る者は富む”、“禍いは足るを知らざるより大なるはなし”とも言う。特にこの最後のことわざはぴったりスペインのことわざと同じ事を言っている。

851. Más quiero huevos hoy que mañana pollos.
明日の親鳥より　今日の卵

— たとえどんなに少なくとも、所有しているもののほうが、どんな約束事よりも確実である、また、少なくてもよいから、今もらったほうが、どうなるかわからない後で多く上げるという約束よりもよいということ。
— 異表現には、“Mejor es luego el huevo que mañana la gallina.　明日の親鳥より、すぐの卵”

― たとえるものが異なる類義のことわざがたくさんある；“Lo bebido es lo seguro, lo que en el jarro está quizá se derramará.　飲んでしまったものは、確実である、水差しにあるものは、もしかしたらこぼれてしまうかもしれない”、“Más vale un toma que dos te daré.　今、ひとつ上げるは、今度、二つ上げように勝る”（筆者の諺辞典、諺907を参照）、“Más vale pájaro en mano que ciento volando.　手の中の一羽の鳥は、飛んでいる百羽に勝る”、“Más vale pájaro en mano que buitre volando.　手の中の一羽の鳥は、飛んでいる禿鷹に勝る”（筆者の諺辞典、諺886を参照）、“Más vale una segura que dos en duda.　ひとつの確実なものは、二つのあやふやなものに勝る”など。

― 発想が同じで、表現もぴったり同じの日本のことわざがある；“明日の親鳥より今日の卵”、“明日の百より今日の五十”、“先の雁より手前の雀”、“来年の百両より今年の一両”など。

852. Más quiero libertad con pobreza que prisión con riqueza.
富みのある牢獄より　貧しい自由

― 貧しくとも気楽に自由を楽しむ生き方がいいということ。同じ主旨の日本のことわざには、“貧を楽しむ”、“無いが極楽知らぬが仏”（財産があれば、それなりの苦労がつきまとうが、ない者はそうした苦労を知らずに、貧乏に甘んじて安楽な生活ができる－故事、ことわざ活用辞典）など。

853. Más (La) ruin cabra revuelve la manada.
もっともみじめなヤギが　群れをひっかき回す

― いつでもどうしようもない無能な者が、他者を動揺させ、もっとも有害な者となる。

― たとえる動物が異なる類義には；“La más ruin oveja se ensucia en la colodra.　もっともみじめな羊が乳搾り器の中で粗相する”（コバルビアス宝典）がある。ここで、コバルビアスは、ことわざに具体的な意味を与えている、つまり、“信徒の敬虔な集まりを台無しにする者を指す”と、またコバルビアスの宝典では、“colodra”は、ヤギ、羊、乳牛などの乳を搾る時に使われる深い大きな桶である。又搾乳器の中で粗相するヤギの格言があるが、それは次ぎのように解釈される；“搾乳を終えたヤギは、足で桶を蹴ってせっかく搾った乳をまき散らしてしまう、こういうヤギの行為は、まさに、正しい振るまいをして長い年月をかけて獲得してきた（他者からの）よい評判を、一つの悪い行いをすることにより、台無しにしてしまう人と同じである。見出しのことわざでは、他者に害を与える者をたとえているが、ここでは、自分自身のキャリアを台無しにしてしまう者をたとえている。

854. Más sabe el diablo por viejo que por diablo.
悪魔は　老いているからこそ　知恵がある

— 年寄りは豊かな経験を積んでいるので、彼らの忠告は有益である。（バロス）
— ここで使われている“diablo－悪魔”には、“悪”の意味はない。ふつう、“悪魔”というと何百年も何千年も生きつづけて悪知恵の働く悪霊というイメージが喚起されるが、ことわざでは、年を重ねて経験を積んだ者が、いかに物の道理や分別をわきまえているかということを誇張して表現したもの。まさに“老馬の智”（韓非子）の故事ぴったりのことわざである。同義で異表現には、“老馬道を知る”、“老いたる馬は道を忘れず”、“馬に道まかす”などがある。しかし、加齢がさらに進むと、分別がなくなり、愚か者のようになるという前記とは反対のことわざ、“年寄れば愚に返る”もまた、真実である。
— スペインには経験豊富な年寄りはそう簡単には騙されないということわざもある。“A perro viejo, no tus tus/ A perro viejo nunca cuz cuz.　年季の入った犬には、＜おいで、おいで＞はきかぬ”（筆者のスペインの諺辞典、77を参照）

855. Más sabe el necio (el loco) en su casa que el cuerdo en la ajena.
ばかでも　自分の家のことは　よそ者の利口より　知っている

— 誰でも自分自身の事については、他者が口を挟む余地がないほど、よく知っているものである。
— 故に、他人の家のことに関して、あれこれ口を出して忠告したがる者を追っぱらうために、皮肉をこめてこう言う；“Más sabe el cuerdo en su casa que el necio en la ajena.　賢い者は、自分の家のことは、そよ者の愚か者よりよく知っている”（コレアス諺集）
— コバルビアスの宝典には、“Más sabe el loco en su casa que el cuerdo en la agena.”が収載されている。コバルビアスによると、ここで使っている“loco－気狂い、狂人”は、公けの大事な事柄に関しては分別のない者が、私的な事に関しては、都合がいいことと悪いことの区別をわきまえていて、なるたけ自分にとって損になるような事は避けようとする者を指すとしている。
— また、スバルビィ（諺辞典）は、これ（見出し形のことわざ）は、他人の秘密とか私的なことをあれこれ聞きたがる者に対して言う格言であるという。たとえ、それほど思慮深く見えなくとも、自分に関することは、どんなに物知りとはいえ、第三者より自分のほうがよく知っているものであるという意。（スバルビィ）
— 例題：ドン・キホーテ第二部43章、これから島の統治に赴くサンチョにドン・キホーテがあれこれ忠告する、サンチョは、それに対してたくさんのことわざで応酬する、そのうちのひとつがこれである、“...,y vuestra merced sabe bien que más sabe el necio en su casa que el cuerdo en la ajena.　それから、おめえさまがようくごぞんじのとおり、ばかでも自分の

家でなら、悧巧がひとの家でよりも物がわかるだよ。”（続編二、永田寛定訳）

856. Más saben unos durmiendo que otros velando.
眠っていても　徹夜している者より　知っている

― 利発な者を誇張して間抜けと対比させていることわざ。
― ことわざには、“賢い者”より“ばか者”を謳っているほうが多い、その理由のひとつは“馬鹿”を異なった視点から、いろいろなものにたとえて取り上げたほうが、ことわざ特有の面白味がでるからであろう。日本のことわざでもそうである、たとえば、“馬鹿と煙は高いところへのぼる”、“馬鹿と子供は正直”、“馬鹿の一つ覚え”、“馬鹿は死ななきゃ直らぬ”、“馬鹿に付ける薬はない”など、馬鹿にあきれたり、あきらめたり、あざけったりと容赦がない。また、利口すぎる人に対しても“賢い人には友がない”などとなかなか手厳しい。

857. Más sabe quien mucho anda que quien mucho vive.
旅を多くしている者が　長生きしている者より　知っている

― 長生きしている者は、毎日新しい事を聞くが、たくさん歩き回っている者は、新しい事物を聞きながら、同時に見ることもできるから。
― 旅は、当時はスペインでも危険が伴い、辛く、厳しいものであった。しかし、そうすることにより、いろいろ見聞したり、学ぶことができ、また自身を鍛えることもできた。そういう意味で旅は有益である。だから、日本にも“可愛い子には旅”、“いとしき子には旅をさせよ”などのことわざがある。

858. Más seso quiere un loco que no tres cuerdos.
馬鹿は　三人の利口より　頭がいい

― “馬鹿正直”という表現があるように、馬鹿はいつでも本当のことを言うから。ここでの“cuerdos”は、心に思ってもいないようなことを平気で口先だけで喋るが、世間では分別があると思われている人、“loco”は、いつも本音で話すので世間では常識がないと思われている人のこと。このことわざは、そういう分別のない者の視点から、逆説用法を使って、いわゆる常識のある人々を揶揄、或いは批判していて面白い。動詞の“quiere”は、“tiene”の意味。
― 日本では、いわゆるこういう世間から遊離して存在しているように見える者に対することわざがいくつか見られる；“馬鹿に苦労なし”、“馬鹿と鋏みは使いよう”、“馬鹿にかまうは馬鹿より馬鹿”、“馬鹿に付ける薬はない”など、世渡りの上手な人から謳われたことわざだと考えると更に面白味が増す。

859. Más tiene el rico cuando empobrece, que el pobre cuando enriquece.
俄貧乏は　俄長者より　持っている

— だんだん貧乏になっていく金持ちの財産と、これから少しずつ金持ちになっていく、裸一貫で築きあげた貧乏人の財産を比べると、まだ金持ちのそれのほうが多い。ゼロから這い上がっていくことの難しさを言う。（スバルビィ）ことわざの直訳は、“貧する金持ちは、富む貧乏人より持っている”

— 異表現では、“Más vale rico pobre que pobre rico.　俄貧乏は俄長者に勝る”がある。

— 主旨は少し異なるが、日本には、“俄長者は俄乞食”（急に大儲けして成金になった者は、無駄な散財などして、もとの貧乏人になるのも早い）、“どか儲けすればどか損する”などがある。

860. Más tiran tetas que carretas.
乳房が　荷車より　強く引っぱる

— 男を惹きつける女の情愛の力はどんなものよりも強いから。

— スバルビィ諺辞典には、異表現で、“Más tiran dos tetas que dos carretas.　ふたつの乳房が二台の荷車より強く引っぱる”、“Más tiran tetas que sogas cañameñas.　乳房が、麻の綱より強く引っぱる”、同義で、“Más tira moza que soga.　娘っ子のほうが、綱より強く引っぱる”が収載されている。人生のあらゆる時において、女の情、色気、媚びなどがいかに影響力が強く、男を支配するかを謳う。（スバルビィ）

— スペインの上記の一連のことわざと同じ発想、また、同じように誇張表現で、“女の髪の毛には大象も繋がる”（五苦章句経）、“女の髪の毛一本千人の男繋ぐ”などのことわざがこちらにも見られる。

861. Más va en la comadre que en lo que pare.
安産は　産婦より　産婆のおかげ

— おうおうにして、人の運は、他者の助力、能力に左右されるものである。

— 異表現では、まず、スバルビィ諺辞典では；“Más va en la comadre que en la que lo pare.　安産は、産婦より産婆のおかげ”がある、それによると、この世では、大部分のものは、他人の助力、能力、技術によって得られるものである。同じような環境、状況の下で、運のいい人とそうでない人がいるのを見るにつけても、そう納得させられることがしばしばある。たとえば、ある産婦はやすやすと安産し、別の産婦は、産婆の未熟さ、手際の悪さで難産となるのである。（スバルビィ）

— また、バロス諺集では、見出しのことわざと共に異表現の“Ello va en la comadre.　それ

は産婆のせいである”が見られる。スバルビィとは全く逆の解釈をしている。つまり、相手から親切な行為をしてもらったのに、そのお返しとして相手を咎めるような人を非難していることわざであるという。筆者としては、スバルビィの解釈のほうがより自然であると思われたのでそのように訳した。

862. Más vale aceña parada que el molinero amigo.
動いていない水車は　粉屋の友人に　勝る

― 場合によっては、チャンスをとらえるほうが、人から引き立てられるよりは、有益である。
― バロス諺集によると、“Más vale llegar a tiempo que rondar un año.　一年間渡り歩くより、時機に間に合うほうが、大切である”が類義のことわざである。ここでは、“rondar un año”は、人から人へ仕事のつてを求めて歩きまわることを意味するのであろう、それよりは、“llegar a tiempo”いい機会をすばやくとらえることのほうが大切であると言っている。
― 見出しのことわざのたとえは、スバルビィ諺辞典によると、次ぎのようなしだいである。粉ひき場では、誰も粉をひいていないので水車が動いていない。故に、いちばん最初に着いた者が、すぐに粉をひくことが出来る。もし、誰かに占領されていれば、粉ひき場の主人がいくら友人でも順番を待たねばならないので、何の役にもたたない。現在ではスペインでも、日本でも粉は買ってくるものなので、説明を聞かねばわからないことわざである。しかし、農村での米の脱穀風景を思い浮かべれば少しはわかる気がする。
― 日本のことわざでは、何事にも適した時機というものがあり、その機会をすばやくとらえることが何ものにもまして大切であるという、“好機逸すべからず”、“機失うべからず”、“物には時節”などがあるが、上記のスペインのことわざとは少しニュアンスが違う。

863. Más vale algo que nada.
ないより　あるがまし

― どんなつまらぬものでも、あるにこしたことはないから、粗末にすべきではない。
― 類義のことわざが、スバルビィ諺辞典に見られる；“Más vale ensalada que hambre.　ごたまぜ料理でも、空腹よりはまし”、スバルビィの解説によると、“ensalada”は、サラダとか、ごたまぜ料理のこと。たいした料理ではないが、それでも何も食べないよりはいいということ。
― また、コレアス諺集にも同義のことわざ；“Más vale duro que ninguno.　堅くても、ないよりまし”が収載されている。コレアスによると、“duro”は、パンが堅い、とか、その他似たようなものが堅いのを指し、また、厳しい夫のことでもいい。（筆者－“duro”には、いろいろな意味がある、たとえば、堅い、硬い、厳しい、非情な、冷酷な、頑固な、けちな、など。故に、物にも人にも使える形容詞である。）、“Mejor es pan duro que ninguno.　何にもな

いより、固いパンのほうがまし”（筆者の諺辞典、諺916を参照）も同諺集に見られる。

— 例題：ドン・キホーテ第一部21章、ドン・キホーテがマンブリーノの兜だと思いこんで金だらいを頭に被せる時に言う、“...la traeré como pudiere, que más vale algo que no nada;... どんなものでも、あればないにまさるからな。”（正編二、永田寛定訳）

864. Más vale antes que después.
用心は前にあり

— 何事も、事を行う前に失敗しないように、あらかじめ準備し、用心することが肝要である。（筆者の諺辞典、諺890、891を参照）

— 類義では、“Más vale un por si acaso, que cien pensé.　百回悔やむより、万が一の用心”（バロス諺集）がある、“後悔先に立たず”、“後悔と槍持ちは先に立たず”、などと同じ意。

— コレアス諺集には、見出し形のことわざと、それに関した滑稽な逸話が載せられている；けが、傷などをしないように、あらかじめ用心することを肝に命じている男が、道路工事をしている道を横切ろうとした時、大きな叫び声を上げ、あたかも頭にけがでもしたかのように、頭を両手で押さえた。連れのものが、一体、どうしたのか、何もけがなんかしていないのに、何故叫んだのかと問いただしたところ、“¡Más vale antes que después!　用心は前にあり”と答えた。これにぴったりの日本の諺は；“塩辛を食おうとて水を飲む”、“夕立のせぬ先に下駄はいて歩く”、“暮れぬ先の提灯”などがある。いずれも手回しがよすぎて役に立たないことをたとえている。

— 日本にも同義で、たくさんのことわざがある、見出しの訳もそのひとつである、その他には、“転ばぬ先の杖”、“濡れぬ先の傘”、“よういうちから養生”など。

865. Más vale a quien Dios ayuda que a quien mucho madruga.
神が助ける者は　早起きする者に　勝る

— おのれ自身の努力や苦労より、天の神の助けや幸運があるほうが、人は目的を達成したり、成功を手に入れたりすることができるものである。

— 類義の諺、“Más vale fortuna que caballo ni mula.　馬よりラバより、幸運が勝る”が、バロス諺集に収められている。ここでは、馬もラバも人が耕作であれ何であれ、使役のために使うことを指す。つまり、人にとってより大事なことは、労働より幸運のほうであると言っている。

— スバルビィ（スバルビィ諺辞典）の解釈は少し違う；たいてい人というものは、今日ある自分は神の御加護のお陰であると神に感謝するよりも、自分の勤勉さのためであると信じているが、決してそうではないと、ことわざは教えている。同辞典には、早起きを奨励する諺もある、“El que no madruga con el sol, no goza del día.　朝日と共に起きぬ者は、その日の恵

みを受けられぬ”自明のことではあるが、勤勉であり努力する者には、運も開けてくるものである。（例題：ドン・キホーテ第二部43章、“...,que el que no madruga con el sol, no goza del día.　朝日とともに起きい出ぬ者は、その日の恵みを受けられぬからじゃ。”－永田寛定訳）

― 例題１：ドン・キホーテ第二部34章、島の太守になったら、神様が助けて下さるだろうから、一生けん命するべきことをするであろう、島を上手に治めるであろうと殊勝なサンチョ、“..., y más vale al que Dios ayuda que al que mucho madruga,...早起きする者よりも、神様に目をかけていただく者が一めえ上だし、...”（続編二、永田寛定訳）

― 例題２：セレスティーナ第３幕、娼婦エリシアのせりふ、“神父さまは遅く来なすったが、<más vale a quien Dios ayuda>、etcétera.　なんとやらで、神さまがお助けになる者のほうがましですよ。”（魔女セレスティナ、大島正訳）

― 例題３：セレスティーナ第８幕、好きな女を簡単に手に入れることができたのもお前自身によるものではなく、とセンプロニオが仲間に向かって言うせりふ、“Por esto dicen:<más vale a quien Dios ayuda, que quien mucho madruga>. だから世間じゃこういうのさ。早起きする者よりゃ神さまがお助け下さる者のほうがずっといいのだとね。”（魔女セレスティナ、大島正訳）

― 天の神の偉大さについての格言はこちらにもたくさんある；“天道畏るべし”、“天道人を殺さず”、“天に眼”、“天は見通し”など。

866. Más vale buena esperanza que ruin posesión.
よい期待は　けちな所有に　勝る

― 今、提供されたわずかなものを受け取るよりは、またのよりよい機会を待つほうがいいということ。

― コレアスは、いつものごとくユーモアをこめたコメントをしている；あごひげのない男が、わずかなひげを生やしている男からやさ男とひやかされたので、揶揄を込めて、“Más vale buena esperanza que ruin posesión.”と返答した、このようにいろいろな意味に適用できる。（コレアス諺集）ここには、また“Más vale buena posesión que larga esperanza.　よい所有は、長い期待に勝る”という、ごく当たり前のことを言ったことわざも見られる。

― 例題１：ドン・キホーテ第二部７章、毎月給金をくれと要求するサンチョに対して、主人の武運が開けた時には...と、ドン・キホーテはことわざを引き合いにだしてこう続ける、“Y advertid, hijo, que vale más buena esperanza que ruin posesión, y...　わしの息子、よい希望はつまらぬ所有にまさり、...”（続編一、永田寛定訳）

― 例題２：ドン・キホーテ第二部65章、王国のひとつぐらい訳なく手にいれられる、そうしたらお前に領国を与えてやろうと、ドン・キホーテから言われたサンチョは、＜そうなってもれえ

てえもんだ>、と続ける、“...que siempre he oído decir que más vale buena esperanza que ruin posesión.　けちな持ち物より、うれしい望みの方がありがてえって、よく聞かされたもんよ”（続編三、高橋正武訳）

867. Más vale buena queja que mala paga.
よいぐちは　けちな支払いよりまし

— 遂行した仕事に対して報酬がつり合わないと考えた者が、それを受け取ることをきっぱり拒否することを指す。なまじっかもらって不満でいっぱいでいるよりは、拒否してぐちっている方がましということ。

— コレアス諺集には、同義の異表現；“Más vale buena queja que mal galardón,”、“Más vale bien quejoso que mal pagado.”などが、収められている。

— 例題：ドン・キホーテ第二部 7 章、先のサンチョの引用した<けちな持ち物より、うれしい望みの方がありがてえって...>のことわざのすぐ後に続く、“...y buena queja que mala paga.　よい嘆息はわるい支払いにまさる...”（続編一、永田寛定訳）

868. Más vale buen vecino que pariente ni primo.
よい隣人は　親戚に　勝る

— 何事につけ厄介でうるさい親戚よりは、近所の気の合った善良な他人のほうが頼もしいということ。

— 類義では；“Más quiero amiga llana que pariente falsa.　誠実な友人は、ずるい親戚に勝る”、“Más vale un amigo bueno que pariente y medio.　ひとりでも良い友人は、親戚に勝る”、“Más vale buen amigo que pariente ni primo.　よい友人は、親戚に勝る”、“Más vale un amigo bueno que un pariente sin remedio.　ひとりでも良い友人は、方策なしの親類に勝る”、“Más vale un amigo que mil parientes, ellos lejos y él presente.　遠いたくさんの親類より、ひとりの近くの友人”などがある。

— 日本には、“遠い親戚より近くの他人”、“遠い一家より近い隣”、“遠き親子より近き隣”などのことわざがある。これらのことわざは、遠方に住む血縁者と親しい近所の他人を比較して、近くにいる他人は、いざという時に助けてもらえるありがたい存在であると言っている。それに対して、スペインの一連のことわざのほうは、（一番最後のことわざは、日本の一連のことわざと同じ主旨）近い、遠いの距離の問題ではなく、いいか悪いか、気が合うか、合わないかの問題である。スペイン人は、自分の家族は大切にするが、親戚は厄介な存在らしくこういうことわざもある、“Más vale en paz y peregrino que entre parientes y con ruido.　気楽に放浪しているほうが、うるさい親戚の中にいるよりいい”（筆者の諺辞典、諺876を参照）

869. Más vale caer en gracia que ser gracioso.
気にいられる方が　気がいいより　得

― おうおうにして、人は、その人自身が持っている資質によるのではなく、幸運に助けられるものである。また、それほど人から気にいられるような性質を持っていなくとも、心からの歓迎を受ける場合がある。そういう時に用いられることわざでもある。

― “caer en gracia－人から気にいられる”と“ser gracioso－生まれつき愛嬌のある、気のきいた”の“gracia－名詞”と“gracioso－形容詞”は、しゃれた言葉遊び。

― 本来備わっている素質、能力以上に報われている人は幸運に恵まれているのである。上記の“caer en gracia”と“ser gracioso”の違いは、日本語的表現なら、“可愛げがある”と、“可愛い”の違いであろう。男でも女でも可愛いげがあると、人から気にいられ、引き立てられもする。その一番いい例が秀吉だと言われている。家康に目をかけられたのも秀吉に可愛いげがあったからである。

870. Más vale dar a ruines que rogar a buenos.
貧乏人に施す者は　金持ちにねだる者に　勝る

― “Más vale dar que recibir.与えるは受けとるに勝る”ということ。“与える”は、何にもまして、すぐれた行為のひとつであろう。これは、新約聖書でパウロが、主イエスの言われた言葉を思い出すようにと、発っせられた言葉である；“...recordando aquellas palabras del Señor Jesús:<Hay más dicha en dar que en recibir.>...主イエス御自身が＜受けるよりは与える方が幸いである＞と言われた言葉を思い出すようにと、...”（新約聖書、使徒言行録20－35）－“buenos”には、“善良な、立派な、名門の、上流の”など、その他にもいろいろな意味があるが、ここでは、“ruines－卑しい、みじめな、けちな、貧しい”の反対語として、“金持ち”と訳すのがいいだろう。コバルビアスの宝典によると、“rico”には、以前二通りの意味があった。一つは、家柄がよいこと、二つは、善良で正直であること。17世紀初めのコバルビアスの時代には、“rico hombre”は、“金持ち、財産、金のある人”を指すとしている。“bueno”は、“rico”の類義語でもある。

871. Más vale decir verdades que parezcan mentiras, que mentiras que parezcan verdades.
嘘に見える真実を言う方が　真実に見える嘘を言うより　いい

― 人は、話しをする時は、いつも正確に、本当のことを話さなければならないとおしえている。（コレアス）

— 全く反対を言う次のことわざもある；“Más verdades se han de saber que decir.　本当のことは、知らなければならぬが、言ってはならぬ”（本当のことを言うのは、とても不都合である、まず第一に、敵をつくる、いつでも真実を聞くということは、辛い思いをし、痛みを伴うからである。－バロス）

— 仏教では、“嘘を言うと地獄へ落ちる”という厳しいおしえも勿論あるが、他方“嘘も方便”とか、“嘘をつかねば仏になれぬ”など、場合によっては、嘘をつくことも認められると、寛容な精神を表している。

872. Más vale dejar en la muerte al enemigo, que pedir en la vida al amigo.
死を敵にゆだねる方が　生きて友に助けを乞うより　まし

— “命より名を惜しむ”ということ。不名誉な恥をかくより命を捨てたほうがよいという意。スバルビィは、日常的な意味では、人は、経済的にちゃんとしていれば、借金などして、恥をかいたり、苦しんだりせずに済むと言う。（筆者の諺辞典、諺889を参照）

— 同義で異表現には；Más vale dejar a los enemigos que pedir a los amigos.　敵にゆだねる方が、友に助けを乞うに勝る”、“Más vale dejar en la muerte a los enemigos que no demandar en la vida a los amigos.”、“Más vale dejar a los enemigos que pedir a los amigos”などがそれぞれバロス、コレアス諺集に収載されている。

— このことわざは広く、いろいろな場合に当てはまるであろう。スペイン人は傲慢ともいえるほどプライドが高く、名誉を重んじる国民なので、“死よりも名誉”を大切にする。以前は特にそうであった。日本でも、知られているように、“武士（もののふ）は名をこそ惜しめ”、“武士は食わねど高楊枝”、など武士のあるべき心構えを謂うことわざがある。

873. Más vale din de moneda que don sin renta.
金は　身分に　勝る

— 金や財産があるほうが、金がない家柄よりも大切であること。

— 異表現では；“Poco importa el don sin el din.　身分よりも金”があり、見出し形の短縮形には、“Más vale din que don.”がある。“din”は、貨幣の擬音語で、“don”との組み合わせのみで使われる、“el din y el don－富と名誉”

— まさに、短縮形のことわざ“Más vale din que don.”は、“家柄より芋茎（いもがら）”のように、簡潔で面白味があり、また両方ともに言葉の響きがよく、韻を踏んでいる。ことわざ特有の言い回しにも工夫が見られる。家柄は食えぬという主旨もぴったり同じである。こちらのほうにも、異表現があり、内容が具体的になっている、“家柄より食い柄”、“芋茎は食えるが

家柄は食えぬ”など。

874. Más vale el humo de mi casa que el fuego de la ajena.
我が家の煙りは　よその家の炉に　まさる

― 人は、たとえ自分の家（或いは母国、故郷）の所有物が貧弱であっても、よその家（或いは国、土地）の立派な物より尊く、愛情を感じるものである。

― 類義では；“Más valen granzas de mi era que trigo de la ajena.　我が家のもみ殻は、よその家の小麦にまさる”がある。

― ぴったり同じ意の日本のことわざには、“隣の白飯より内の粟飯（あわめし）”がある。こちらはより具体的に、他人の家で気兼ねしながらごちそうを食べるより、自分の家で気楽につましい食事をするほうがよいといっている。（故事ことわざ活用辞典、創拓社）

875. Más vale el ruego del amigo que el hierro del enemigo.
友の頼みは　敵の刃より　強い

― たいていの場合，人のやさしさとか柔らかな態度は，厳しさとか脅迫行為よりもずっと，効力があるとおしえている。たとえば，愛情をこめてお願いするのと，力ずくでいやいやながら従わせるのとどちらが効果があるかは明らかである。

― スペインのことわざとぴったり同じ主旨のことわざがこちらにもある；“頼むと頼まれては犬も木へ登る”，“頼めば鬼も人を食わず”，“頼めば越後から米搗きにも来る”など，いずれも，真剣に心から頼めば，どんなに難しい無理な頼みでも引き受けてやろうという心情になるものであるとたとえている。

876. Más vale en paz y peregrino, que entre parientes y con ruido.
気楽に　放浪しているほうが　うるさい親戚の中にいるより　よい

― たとえ，貧しい暮らしをしていても，気楽なほうが，お金に恵まれていても，気を使い，肩身の狭いおもいをしながら生きているよりはずっと楽しいとおしえている。（筆者の諺辞典の諺897を参照せよ）

― まさに，日本の“我が家楽（らく）の釜盥（かまたらい）”，“我が物食えば竈（かまど）将軍”などのスペイン版である。それにしても，日本版のほうは，釜を盥の代わりに使っているような不自由で貧しい暮らしをしていても，わが家ほど気楽で楽しいところはないという長い内容を“我が家楽の釜盥”という短い言葉で巧みにいい表している。ことわざは短いほど口に出しやすく，覚えやすいのは言うまでもない。しかし現在は，どちらのことわざも使われていない。

877. Más vale favor que justicia ni razón.
好意は　道理に　勝る

— 助けてあげるという親切な行為は、どんな正当な理由があろうとも、頼みを拒絶するよりは値打があるということ。
— 類義では；“Amigos, hasta en el infierno.　友人は、地獄まで”、“Más valen amigos en la plaza que dineros en el arca.　外にいる友人のほうが、内にしまってあるお金より値打ちがある”（友の信頼を得るためには、出費を気にせずに友のためにお金を使いなさい、何故ならば、友人というものは、非常に大切であるから。－コレアス）、“Más vale morir amando que vivir aconsejando.　愛しながら死ぬほうが、忠告しながら生きるよりまし”（さかしげな忠告をしたり、説教するより、愛とか友情のためには命を投げ出したほうがよい）などがある。

878. Más vale guerra abierta que paz fingida y cubierta.
明白な争いのほうが　見せかけの平和に　勝る

— 相手が敵だということがはっきりしていれば、それから身を守ることは、友人のふりをしている偽善者から身を守るより容易いから。
— 自明の理である。ある時代において密告が行われていた国々では、まず警戒しなければならなかった相手は、身内であり、友人であり、隣人であり、同志であった。

879. Más vale hasta el tobillo que hasta el colodrillo.
災難は　頭まで浸かるより　足までしか浸からない方が　まし

— 災難にあったら、それにどっぷりつかることなく無事にやり過ごすほうが、名誉も評判も台無しにしてさんざんな目にあうよりはましである。（コレアス）つまり、一度、災難とか不幸な目にあったら、なるたけ少しの被害にとどめ、それ以上広げないように努力すべきであるということ。
— バロスによると、“Del mal, el menos.　不幸中の幸い”と同義のことわざ。正確な訳は、“tobillo”は、“踝（くるぶし）”で、“colodrillo”は、“後頭部”のこと、それらの単語は、同じ韻を踏んでいる。災難は足のくるぶしの高さまでにとどめ、頭までどっぷりつからないように気をつけなさいと、ユーモアのある表現で言い表している。
— バロスのいう“Del mal, el menos”は、同じ不運、災難に会うなら、より小さいほうがましであるの意。

880. Más vale lo malo conocido que lo bueno por conocer.
知らぬ善より　知っている悪

― たとえ欠点があろうとも、すでに馴染んでいるもののほうが、変化を求めて損するよりはよいということ。（バロス）
― バロス諺集には、同義で、“Mal amo has de guardar, por miedo de no empeorar.　たとえ、悪い主人でも、仕えるべきである、それより悪くならないように”がある。
― 内容がぴったり同じのことわざ“知らぬ神より馴染の鬼”（疎遠な関係の者より、どんな人であっても、なれ親しんだ者のほうがよい－岩波、ことわざ辞典）、“知らぬ仏より馴染みの鬼”などが、日本にもある、また、ことわざ辞典（岩波）には、見出し形とぴったり同じ表現の“知らぬ善より知った悪”（北欧サーミ語）、“まだ知らない善より分かっている悪がまし”（英語）などが見られる。

881. Más vale mala avenencia que buena sentencia.
まあまあの和解の方が　立派な訴訟より　まし

― 訴訟が長びいて、弁護士など、諸々にかかる費用は相当な額になり、たとえ訴訟に勝ったとしても、それを償うことができないから。（コレアス）
― 異表現では；“Más vale mal ajuste que buen pleito.　簡単な和解の方が、立派な訴訟よりまし”、“Más vale mal concierto que buen pleito.”が、それぞれスバルビィ諺辞典及び、バロス諺集に収載されている。
― どこの国でも、いつの時代でも裁判には時間がかかるらしい。訴訟にまで持ちこんで莫大な費用と時間を浪費するよりは、たとえ充分に満足しなくても、いい加減なところで妥協して、和解するほうがまだましであるということ。現代にも通用することわざである。

882. Más vale maña que fuerza.
知恵は　暴力に勝る

― “Porque la astucia vence siempre a la fuerza bruta.　なぜならば、いつでも計略が暴力を打ち負かすから”暴力行為にうったえるよりも、頭脳を使って問題の解決を計ったほうがいいということ。すでに旧約聖書、箴言21－22には、こういう文が見られる；＜El sabio ataca una ciudad bien defendida, y acaba con el poder en que ella confiaba.　知恵ある人はひとりで勇士たちの町に上り、その頼みとする砦を落とすこともできる。＞
― ごく当たり前の事を言っていると思われることわざだが、特に問題が国家と国家の間では、実行はなかなか難しい。現代では国際間の問題を解決するには、“攻撃より外交”であろうか。

“知恵は万代の宝”、“知は金銀に勝る”などと日本のことわざが言うように、武器に頼る暴力を回避するためには、みんなで知恵をしぼるしかないであろう。

883. Más vale migaja de rey que merced de señor.
王様のパンくずは　殿様の引き立てに　勝る

— たとえわずかだとしても、より勢力の大きい者の恩恵のほうが、それより低い地位の者の大きな恩恵より、ずっと有益である。
— 異表現では、コレアス諺集に、“Más vale migaja de rey que zatico de caballero; o que ración o salario de señor; o más valen migajas de rey.　王様のパンくずは、騎士のひと切れのパン／殿様のひと皿／殿様の給金に勝る”が収載されている。
— 例題：ドン・キホーテ第一部39章、父親がせがれたちに、王様の御所にご奉公するのがいかに得かをことわざを引用して説いている、“...; porque dicen：＜Más vale migaja de rey que merced de señor.＞...それがってのも、＜王様のパンのおこぼれは殿様の御恩賞にまさる＞と言われるからよ。”（正編三、永田寛定訳）
— どうせ頼るなら、より大きな力に頼れということをスペインのことわざは、端的に言う。日本でも類義のことわざ；“寄らば大樹の陰”、“立ち寄らば大木の陰”がある。まさに内容はぴったり同じである。

884. Más valen dos bocados de vaca que siete de patata.
二かじりの肉は　七かじりのジャガイモに　勝る

— 少なくても質の良いものは、たくさんの質の悪いものより値打ちがある。（バロス）
— 同義では、“Más vale lo poco bueno que lo mucho malo.　少しでも良いもののほうが、多くても悪いものに勝る”がある。
— コレアスの解釈によると、“値段が安くても、危険とか何らかの問題がつきまとうようなものは、確実なものに比べて、それほど評価することができない。”しかし、その後でジャガイモについては、大変おいしく、初めは、インディアス（スペイン統治時代の新大陸）からもってきたもので、今や（1600年代後半）ここスペインのアンダルシア地方でも栽培されているというコメントをしている。事実、コロンブスの新大陸発見以前のスペインでは、ジャガイモはなかった。ここから、当時のスペインでは、ジャガイモを栽培し始めているとはいえ、まだまだ、新大陸からもってくる量のほうが多かったのであろうと推察される、何故なら、コレアスは、ジャガイモを危険で、問題があるものとたとえているから。そうでないと、現代ではこのことわざに対するコレアスの解釈は成り立たない。

885. Más vale onza de sangre que libra de amistad.
わずかな血縁は　たくさんの友情に勝る

― 名誉に関わる事柄や、何か重大な問題がある場合には、友人よりも血縁者のほうが頼りになる。（コレアス）
― 異表現には、“Más vale onza de sangre que libra de carne.　わずかな血は、たくさんの肉に勝る”（直系の血縁者のほうが、義兄弟、義姉妹のように血の繋がっていない親類より頼りになる－コレアス）が、コレアス諺集に見られる。
― “onza－スペイン、メキシコで用いられた重さの単位で28.76グラム”、“libra－古い重さの単位で国や地方により異なるがスペインのカスティーリャ（Castilla）では、500グラム”
― 日本にもぴったり同じ主旨の“血は水よりも濃い”がある。“兄弟は他人の始まり”とか“遠くの親戚より近くの他人”などとは反対に、やはり、いざという時に頼れるのは友人より身内であるという。

886. Más vale pájaro en mano que buitre volando.
手の中の一羽の鳥は　飛んでいる禿鷹に　勝る

― たとえどんなに少なくとも、所有しているもののほうが、どんな約束事よりも確実である。
― 類義のことわざは、次のように多い；“Más quiero huevos hoy que mañana pollos.　明日の親鳥より、今日の卵”（筆者の諺辞典、諺851、907を参照して下さい）、“Más vale pájaro en mano que ciento volando.　手の中の一羽の鳥は、飛んでいる百羽に勝る”（今日のスペインでは、見出しのことわざより使われている）、“Más vale un toma que dos te daré. 今、ひとつ上げるは、今度、二つ上げように勝る”、“Más vale una segura que dos en duda.　ひとつの確実なものは、二つのあやふやなものに勝る”など、最後のことわざは、一連のことわざの主旨そのものをずばりと謳っている。コバルビアスの宝典には、“Más vale pájaro en mano que buitre volando, y más vale un toma, que dos te daré.”というように、前半と後半に分かれてふたつのことわざが一つに収められている。（これから先どんな災難が降りかかるかもしれないから、不確かなたくさんのものを期待するより、今取得している確かなもののほうが価値がある－コバルビアス）。同義でたとえの違うことわざ、“Más vale prenda en el arca que fiador en la plaza.　長持の中の衣類は、市場の掛け売り人に勝る”（今、持っているもののほうが、これから手にはいるものより確かである）もある。
― コレアスによると、見出し形のことわざの由来は、訓練された鷹を空中で放って鳥を捕らえる“鷹狩り”にある。そこから、どんな種類の鳥であれ、すでに手の中に捕らえられている一羽の鳥のほうが、鳥の群れを追って空中を舞っている禿鷹にまさるとういことわざができた。
― 例題１：ドン・キホーテ第一部31章、ひとつの王国を持参する王女と婚礼をあげてしまえとサ

ンチョがドン・キホーテに意見する、なぜなら“..., y que más vale pájaro en mano que buitre volando, ...＜手にもつ小鳥は飛んでる禿鷹にまさる＞だ。”（正編二、永田寛定訳）

— 例題２：ドン・キホーテ第二部12章、いつものように何の獲物もなかった小ぜりあいで、サンチョがドン・キホーテに呟く、“En efecto en efecto, más vale pájaro en mano que buitre volando. まったく、じっせえ、手にもつ小鳥は飛んでる禿鷹にまさるだよ。”（続編一、永田寛定訳）

— 日本にも同義でたとえの異なったいろいろな諺がある。（筆者の諺辞典の諺907を参照）たとえば、“捕らぬ狸の皮算用”もそうであるし、“明日の親鳥より今日の卵”などは、ぴったり同じ表現のスペインのことわざもある。

887. Más vale pan con amor que gallina con dolor.
パンの食事で愛し合う方が　チキンを食べて憎み合うより　よい

— 一緒に住んでいる者同士の間に愛情がなければ、いくら金があっても役に立たない。それに反して、お互いが愛し合っていれば、たとえ貧しくてもそれに耐えていけるものである。（筆者の諺辞典、諺905を参照）

— 類義のことわざには；“Más vale pan solo con paz que pollos con agraz. パンの一片しかなくとも平安があれば、チキンを食べて争うよりよい”、“Más valen cardos en paz que pollos con agraz. カルドン（食用の葉っぱ－筆者）しかなくとも平安があれば、チキンを食べて争うよりよい”、“Contigo, pan y cebolla. あなたとなら、たとえパンと玉ねぎだけでも”（好きなあなたとならどんな貧乏暮らしも厭わない、一緒になりたいということ）などがある。

— 類義のことわざ“Contigo, pan y cebolla.”は、日本の“たとえ鍋釜をぶらさげても”と内容がぴったり同じである。夫婦にとっていちばん大事なのは、愛情であるということをもう一度思いださせてくれることわざ。

— 旧約聖書、箴言15－17の＜Más vale comer verduras con amor, que carne de res con odio. 肥えた牛を食べて憎み合うよりは、青菜の食事で愛し合う方がよい。＞が、諺の源となっているようである。

888. Más vale perder lo poco que perderlo todo.
全部なくしてしまうより　少しなくすほうが　まし

— どれくらい損害をだしたのかさえ分かれば、なくしたものは、もう取り戻すことはできないと割りきり、それ以上くよくよとその事を考えずに、自らの過失を正すほうが利口である。（コレアス）

― 類義のことわざに、“Más vale perder que más perder.　少しなくしたほうが、もっとなくすよりまし”などがある。

― たとえば、ギャンブルでも、株でもいいが、被害額がそれほどでもなかった時などに慰めのことばになる。こういう場合を“不幸中の幸い”というのだろうか。コレアスのコメントにもあるように、この時に、己の非を悔いてこれ以上深入りしないのが理性のある人間だが、そうでないと、なくした金を取りかえそうと、ますます多額の損害をだす。このことわざは、一見ごく当たり前のことを言っているように見えるが、世の中を見ていると、決してそうではないことがわかる。

889. Más vale perderse el hombre que perder el nombre.
命より　名を惜しむ

― 自分の命より名誉のほうが大事であるということ。（筆者の諺辞典、諺71、235、872を参照）

― 標題のことわざの訳は、曽我物語が出自である。不名誉な恥をかくより命を捨てたほうがよいという意。“命は義に縁（よ）りて軽し”、“武士（もののふ）は名をこそ惜しめ”などと同義。

― 異表現では、コレアス諺集に、“Más vale perderse el hombre que, si es bueno, perder el nombre.　命より名を惜しむ、もしそれにふさわしい名ならば”がある。見出しのことわざをちょっと皮肉ったことわざではある。確かに、“名誉より金”ということわざもあるほどであるからいつでも名誉が命より大事であるとは限らない。また、旧約聖書の箴言22－１では、＜Vale más tener buena fama y reputación que abundancia de oro y plata.　名誉は多くの富よりも望ましく、品位は金銀にまさる＞という教えが述べられている。

890. Más vale prever que lamentar.
悲嘆より　用心

― 後でどんなに悔やんだり、悲嘆にくれても、手遅れであるから、そうならないように、前もって用心せよとおしえている。（筆者の諺辞典、諺864を参照）

― 類義のことわざには；“Más vale un por si acaso que un quién pensara.　思いもしなかったより万が一の用心”（思いもしなかったと後で嘆くより前の用心が大切である－筆者）、“Más vale prevenir el mal con tiempo que después de venido buscar el remedio.　後で対策を講じるより、前もって災難に備えよ”、“Más vale un por si acaso que cien pensé.　百回悔やむより、万が一の用心”、“Más vale precaver que tener que remediar.　後で対処するより用心せよ”、“Toda precaución es poca.　用心に過ぎたるはなし”、“Más vale un hombre apercibido que dos descuidados y no prevenidos.　ひとりの用心深い者は、ふたりの不注意で、不用心な者に勝る”、“Hombre prevenido vale por dos.　用心深い者は、ふ

たり分の価値がある”などがある。

— 日本にも同じ内容のことわざが多数ある、たとえば、“後悔先に立たず”、“用心は前にあり”、“転ばぬ先の杖”、“念には念を入れよ”、“濡れぬ先の傘”、“よういうちから養生”、など、こちらのほうが、たとえが多様である。

891. Más vale prevenir que ser prevenidos.
注意される前に　注意せよ

— 人からあれこれ注意される前に、あらかじめ怠りなく自分のことは、自分自身で注意しなさい、また、前もって準備をしておけばあわてないですむという意もある。後者は、前の諺890の“Más vale prever que lamentar. 悲嘆より用心”と同義。（筆者の諺辞典、諺72を参照）

— 例題：セレスティーナ第16幕、あの世へ召される前に娘のメリベアの結婚の準備をしておこうという父親のせりふ、“Ordenemos nuestras ánimas con tiempo, que más vale prevenir que ser prevenidos.　われらは時間がある間に、心の準備をしておこう。とにかく前もって準備しておくにこしたことはないからな。”（魔女セレスティナ、大島正訳）

892. Más vale que nos tengan envidia que no lástima.
羨ましがられるは　同情されるより　まし

— 人から羨望されるのは、順調にいっているからであり、その反対に、同情されるのは、不幸な境遇にいるから。（筆者の諺辞典、諺918を参照）

— 共感と同情は、似て非なるものである。人に同情するのは、人を憐れむのと同じである。この感情には、さげすみが含まれているのではないだろうか、故に見出しのことわざの異表現として、“Más vale que nos tengan envidia que mancilla.　羨ましがられるのは、軽蔑されるよりまし”がある。日本には、同じ痛み、苦しみを持っている者同士は、互いに自分のこととして理解できるから、いたわり合うものだという“同病相憐れむ”がある。

893. Más vale rostro bermejo que corazón negro.
一時の赤面は　真っ黒な心より　まし

— 人に頭を下げて頼みごとをするにしろ、或いは、その反対に、人の頼みごとを断るにしろ、どちらの場合でも、一時の恥をしのんで決断するほうが、いつまでもくよくよ決めかねているよりはましである。（コレアス）一般的には、一時（いっとき）、恥をかいてでも、決意を固めて、思いきって物事を実行したほうが、いつまでも思い悩んでいるよりはましであるという意。

— 類義のことわざは、次のように多数ある；“Más vale vergüenza en cara que mancilla en

corazón.　顔に恥は、くよくよに勝る”、“Más vale una traspuesta que cien asomados.　一回で外に出るのは、百回のぞくに勝る”（出ようか、出まいかと戸の外を度々のぞくことを指す）、“Más vale una vez colorado que ciento descolorido.　一回の赤面は、百回の蒼白に勝る”（大きな決断を下さなければならぬときに感じる一時（いっとき）の赤面するようなおもいは、ぐずぐずと決意しかねていつまでも思い悩む苦しみよりましである、たとえば好きな女性に愛の告白をしたいのになかなかできない場合を思い浮かべるとわかる）

― それぞれの上記のことわざには、対になる言葉が用いられている；見出し形の“bermejo－赤い、朱色の”と“negro－黒い、暗黒の、暗い、陰鬱な”、類義のことわざの“vergüenza－羞恥心”と“mancilla－悲観的な、どんよりした”、“colorado－赤い、赤面した”と“descolorido－青白い、蒼白な”など。

― ここ、日本では、思いきって大きな決断をするたとえとして、“清水（きよみず）の舞台から飛び下りる”が、しばしば使われる。スペインのことわざの言い回しに似ているのは、“聞くは一時の恥聞かぬは一生の恥”である。

894. Más vale saber que haber (para no menester).
知恵は　財産に　勝る（困らないために）

― 知識のほうが、財産より大事であるということ。いくら使っても知識は、減ったり、なくなったりしないが、財産のほうは、いつかはなくなってしまうから。この諺は旧約聖書、箴言8－11＜Vale más sabiduría que piedras preciosas ; ¡ni lo más deseable se le puede comparar! 知恵は真珠にまさり、どのような財宝も比べることはできない。＞の教えと同義である。

― 反義のことわざに、“Fortuna te dé Dios, hijo, que el saber nada te vale. 息子よ、お前に神が富を授けて下さいますように、お前には知識は何の役にも立ちそうにもないから”がある。

― こちらには、ぴったり同じ内容の“知は金銀に勝る”があり、更に一歩先をいっているのが、“持つは知るより来る”であり、“知恵は万代の宝”である、優れた知恵はその人の一代限りの宝でなく、後世の人にも長く尊重され役立つ宝であるという意。

895. Más vale salto de mata que ruego de buenos.
しっぽふるより　逃げるが勝ち

― 何か欲しいものを手にいれたい時には、卑屈にお願いするよりは、直接行為にでたほうが簡単である。（バロス）或いは、人に頼んで詫びをいれるより、逃げてしまったほうが勝ちである（スバルビィ）

― コバルビアスの宝典によると、“salto de mata”は、たとえば、野原をずっと猟犬に追いかけ

られていた兎がいったん茂みに逃げこんだはいいが、とうとう捕らえられそうになったので安全な山の中に逃げようと茂みから跳びだすことを意味する、また、スバルビィの諺辞典によると、このことわざは、何か悪事を働いた人が、その筋の権威がある人に懇願して罰を逃れようとするよりは、安全な場所へ逃げてしまうほうが簡単であるという意である。

— 例題１：ドン・キホーテ第一部21章、サンチョがドン・キホーテに姫を盗みだすには、こういう手があると、ことわざを引用する、“...；aunque mejor cuadra decir: <Más vale salto de mata que ruego de buenos>...＜ばか正直に願うよりつかんで逃げるが勝ち＞ってえのは、もっとしっくりするだ。”（正編二、永田寛定訳）

— 例題２：ドン・キホーテ第二部67章、牧人として田舎に暮らしても、悪い奴はどこにでもうろうろ歩きまわっているから、近づかないほうがいいと、サンチョがことわざを引用する、“… y ojos que no veen, corazón que no quiebra ; y más vale salto de mata que ruego de hombres buenos. 目にうつらなきゃ胸にも響かねえし、君子は危きに近寄らねえってね”（続編三、高橋正武訳）註：14、Don quijote de la Mancha, Volumen ll, Real Academia, Martín de Riquer, “Más vale salto de mata que ruego de hombres buenos.”は、仲裁人を通じて懇願するよりは、一目散に逃げるが勝ちの意。また、高橋正武（註：223、続編三）によると上記の解釈と同じように、このことわざは、人に頼んで詫びをいれるより、初手から逃げよ、の意であるとする。

— まさに、日本でもよく聞かれる“逃げるが勝ち”、“三十六計逃げるに如かず”、“逃げるが一の手”などと同じ内容である。困ったとき、追いつめられたときに一番いい方法は、逃げることであるとおしえている。

896. Más vale sazón que barbechera ni binazón.
恵まれた天候は　野良作業に　勝る

— どんなによく耕された畑や、勤勉な農作業より、豊かな実りのために一番大事なのは、いい天候である。また、日常的な意味では、どんなに用意周到な準備、たゆまない努力にもまして大事なのは、いい機会に恵まれることである、これなしには、誰しもいい結果を得られない。（筆者の諺辞典、諺848を参照）

— コレアス諺集によると、“binar－適切な時期に２度耕す”、“barbechar－畑を鋤き返して休めておく”、“sazón－恵まれた天候”また、“sazón”には、“好機”の意味もある（筆者）

— 努力、実力だけではなく、人がいい結果をだすためには、時の運が大切であるという“運は天にあり”、“勝負は時の運”、“時に遇えば鼠も虎になる”、“人盛んなれば天に勝つ”などの諺がこちらにもある。

897. Más vale señero que con ruin compañero.
ひとりのほうが　いやな連れといるより　まし

― 旅のつれであれ、人生のつれであれ、良い人で、気が合う人なら一緒のほうがいいが、そうでなければ、ひとりのほうが気楽でよいということ。

― コレアスによると、語源的に“señero”は、“señal”と同じである、この“señal－目印、目標、etc.”が、道中にある木とか、岩、小川のような、“道しるべ”を意味するように、人が道中にひとりでいると、大勢の人と一緒にいるよりも目印になる、そこから、“señero”は、“ひとり”の意であるという。異表現には、“Más vale solo que mal acompañado. ひとりのほうが、悪いつれといるよりまし”がある。（筆者の諺辞典、諺269を参照せよ）

― 日本のことわざでは、つらい旅も、また、つらい人生でも連れがいれば心強いし、互いに助け合えるという、“旅は道連れ世は情け”、“旅は情け人は心”、“旅は心世は情け”などがある。ここでは、特に、人生という道中では互いに助け合う温かい思いやりの心が大切であるとおしえている。昔の旅は不便で、危険なこともいっぱいあったので、つらい人生にたとえるにはぴったりであった。

898. Más vale ser cabeza de ratón que cola de león.
ライオンの尾より　ねずみの頭

― たとえ小さい組織であろうとも、そこでお山の大将でいるほうが、大きい組織のびりっけつにいるよりよいということ。（筆者の諺辞典、諺68を参照）

― たとえの対象がそれぞれ異なる、類義のことわざが多数ある；“Más vale ser amo de cabaña que mozo de campaña.　荘園の小僧より、掘っ立て小屋の主人”、“Más vale ser cabeza de sardina que cola de trucha ; o de ballena.　鱒、或いは、鯨の尾より、鰯の頭”、“Más vale ser cabeza de sardina que cola de víbora.　まむしの尾より、鰯の頭”（筆者―ここでのまむしと鰯の比較はあまり、明瞭ではない）など。

― 次のような反義のことわざもコレアス諺集には見られる、“Más vale ser cola de león que cabeza de ratón.　ネズミの頭よりライオンの尾”など。

― 日本にも、ぴったり同じ内容のことわざが多数ある、その中には次のようにたとえがスペインの諺と類似しているのもある；“鯛の尾より鰯の頭”、“大鳥（だいちょう）の尾より小鳥（こちょう）の頭”、“鶏口（けいこう）となるも牛後（ぎゅうご）となる勿（なか）れ”など、また、反義のことわざには、“鰯の頭（あたま）をせんより鯛の尾（お）につけ”（小さなところの長になっているより、大きなところで人に従っているほうが、気楽で安全である）など。

899. Más vale ser buena enamorada que mala casada.
不幸な妻より　幸福な恋人

— 恋人である間は夢があるが、幸せでない妻にはつらい現実しかない。
— 類義には、“Más vale soltero andar que mal casar.　ひとり者でいる方が不幸な結婚よりまし”がある。反対の諺“Mejor parece la hija mal casada que bien abarraganada. 娘の不幸な結婚は、幸福な同棲よりよく見える”が“筆者の諺辞典、諺922”に見られるので参照して下さい。
— 例題：セレスティーナ第16幕、メリベアの両親は、大事な娘に結婚を望んでいる、しかし、目下恋愛中のメリベアは、親がすすめようとする縁談に少しも関心がない、ことわざを引用して女中にこう呟く、“No piensen en estas vanidades ni en estos casamientos ; que más vale ser buena amiga que mala casada.　お二人がそんなばかばかしいこと、あれやこれやの結婚のことなど、お考えになりませぬように。悪い妻よりは良い恋人のほうがよほどいいのですものね。”（魔女セレスティナ、大島正訳）
— 結婚をなかなかしたがらない現代にこそ通じることわざである。女性は仕事も恋愛もしたいが、結婚はしたくないと思っている。“惚れた腫れたは当座のうち”と言われているように、恋心はあまり長くは続かないものである、特に、結婚してしまうと、新鮮味がなくなって、単調な日常生活を繰り返すことになる。まだ、恋人同士でいれば、緊張感が保たれる。

900. Más vale solo que mal acompañado.
ひとりのほうが　気の合わぬつれといるより　よい

— 気の合う、好きな人でないならば、ひとりでいるほうがよほど良いということ。
— 異表現には、“Más vale estar solo que mal acompañado.　ひとりでいるほうが、いやなつれといるよりよい”、“Más vale señero que con ruin compañero.　ひとりのほうが、いやなつれといるよりまし”（筆者の諺辞典、諺897を参照せよ）がある。
— 例題：セレスティーナ第２幕、耳の痛い忠告をした従者のひとりに対して、主人であるカリストが、ことわざを引用して言う、“..., y así me padezco el trabajo de su ausencia y tu presencia; <valiera más solo que mal acompañado.>...センプロニオがいなくてお前がここにいるのはとてもつらい。気にいらぬ者といっしょにいるよりは、ひとりでいるほうがよっぽどいいのだ。”（魔女セレスティナ、大島正訳）

901. Más vale sudar que estornudar.
くしゃみするより　汗をかけ

― 寒がっているより、汗をかいているほうが健康に良いので、衣服は重ねて着たほうがいい、また、すき間風には気をつけなければならない。（スバルビィ）現代では、あまり、すき間風がはいるような家屋はないし、汗をかくなら、厚着をするより、運動したり、散歩したりして動きまわることによって汗をかくほうがよほど健康にいいだろう。

― “sudar”と“estornudar”は、語尾に韻を踏んでいる。異表現には、“Más vale sudar que gemir.　うめくより、汗をかけ”（薄着でいるからうめく－コレアス）、“Más vale sudar que toser y teritar（tiritar）.せきをしたり、がたがたふるえるより、汗をかけ”（寒さと風邪のせいで－コレアス）、“Más vale sudar que toser y más sufrir que gemir.　せきをするより、汗をかけ、うめくより我慢せよ”などがある。

902. Más vale tarde que nunca.
遅れてするほうが　しないより　まし

― たとえ、一番いい機会は、もう過ぎ去ってしまったとしても、何事か始めるのに遅いということはない。もう遅いからといって何もしないよりはよほどいいということ。

― 類義のことわざには；“Lo que se dilata no se pierde, si al fin viene.　遅れてきたものは、無駄にはならない、終いに来てくれるならば”、“Más vale año tardío que vacío.　晩熟の年は、凶作の年に勝る”などがある。（筆者の諺辞典、諺108を参照）

― スペインでは、現代でもよく使われていることわざである。イリバレン（El porqué de los dichos－格言の由来）によると、ギリシアの哲学者、ディオゲネス（前404－323？）が、晩年になって音楽を習おうとしたところ、友人が“lam senex discis.－君は、もう習うには年をとりすぎている”といったところ、“Praestantius sero doctum esse, quam numquam.　遅れてするほうが、しないよりまし”と、答えた、そこからこのことわざは来ているとしている。この逸話は、日本でよく聞かれる“年寄りの冷水”を思いださせる。年とってから、過激な運動や、危険な行いをしたり、或いは、何かを始めようとする者に対して、冷やかし半分に、または注意を促すために言う。

903. Más vale un día del discreto que toda la vida del necio.
賢い人の一日は　愚か者の一生に　勝る

― どう生きたかが、どれくらい長く生きたかより価値があるということ。

― コバルビアス（宝典）によると、“necio－愚か者”とは、“ほとんど知識のない、無知な者”

のことで、セネカも“Más vale ser pobre que necio.　貧しい者のほうが、愚か者よりまし”と言っている。何故なら、貧しい者は、金がないだけであるが、愚か者には、道理がないから。また、ある哲学者は、誰が一番哀れな者かと聞かれて、“一番哀れな者は、愚か者である、道理をなくした者が、権力を握った場合ほど悲惨なことはない”と答えたそうである。

— 例題：セレスティーナ第17幕、抜け目がなく悪賢いアレウーサを見習おうと、エリシアがことわざを引用して独り言を呟く、“No en balde se dice que : vale más un día del hombre discreto que toda la vida del necio y simple.　あの諺は無駄にあるんじゃないわ。ほら、賢い人と一日いるほうが、馬鹿で単純な人間と一生いるよりはいいっていうもの。”（魔女セレスティナ、大島正訳）

904. Más vale un gusto que cien panderos.
一つの道楽のほうが　百のタンバリンより　値打がある

— 人というものは、しばしばほんの気まぐれから身を誤ったり、また、本業を犠牲にしてまで慰み事に没頭するものである。

— イリバレンによると、アラゴン地方（スペイン北東部の地方）でよく聞かれるこの格言は、次のような逸話から来ている；“アラゴン地方の或る村の田舎者が、祭りが催されるサラゴサ（アラゴンにある県、県郡）の町に、百個のタンバリンを売りに行こうと向かっていた。途中、石橋を渡っていた時、一個のタンバリンが、橋の下の川に落ちてしまった。そのタンバリンは、川の渦にくるくると舞って、たちまちのうちに見えなくなってしまった。その光景がとても面白かったので、次から次へと残りの99個のタンバリンを川に落としては、その光景に打ち興じていた。それを見ていた見物人が、商売を放棄してまで何がそんなに面白いのかと聞いたところ、その田舎者はすましてこう答えた、＜Más vale un gusto que cien panderos.　気まぐれのほうが、百個のタンバリンより価値がある＞”

— “Pandero－タンバリン”は、祭りの日には、娘たちにとっては、欠かすことのできない楽器である。ある娘たちは、歌いながらタンバリンを鳴らし、他の娘たちは、その音に合わせて踊る。このように、タンバリンは、娘たちにとってのお気に入りの楽器であったので、“Más quiero panderico, que no saya.　スカートではなく、タンバリンが欲しい”と歌う民謡まである。

— 日本で、類似のことわざは、“粋が身を食う”、“芸は身の仇”、“芸は身を破る”などであろう。芸事や遊興の世界に深入りし過ぎて本業をおろそかにし、結局は、身を滅ぼすようになるという意。

905. Más vale un poco de pan con gozo, que la casa llena de riquezas con descontentamiento.
パンが一片しかなくとも喜びがあれば、富で家を満たして争うより　よい

― 夫婦が睦まじかったり、愛に満ちあふれた家族ならば、たとえ貧しくともうまくいくが、その反対に、愛情のない夫婦や、家族には、富はあまり役に立たない。

― 類義のことわざには；“Más vale pan con amor que gallina con dolor.　パンの食事で愛し合う方が、チキンを食べて憎み合うよりよい”（筆者の諺辞典、諺887を参照せよ）、“Más vale un pan con Dios que sin Él dos. パンが一片しかなくとも神と共にいれば、パンで食卓を満たして神を信じないよりよい”（旧約聖書、箴言15－16）には次の教えが述べられている；“Más vale ser pobre y honrar al Señor, que ser rico y vivir angustiado.　財宝を多く持って恐怖のうちにあるよりは、貧しくても主を畏れる方がよい。”、“Más vale vaca en paz que pollos con agraz.　牛肉の一片しかなくとも平安があれば、チキンで食卓を満たして争うよりよい”（筆者の諺辞典、諺908を参照）コレアスによるとチキンは、酢 <con agraz> で煮込むので、とても酸っぱく感じる。又、<con agraz> には、とげとげしい、無愛想な、苦々しいなどの意もある、また、この頃は、チキンは、ごちそうの代名詞でもあった。先にでてきた、“酸っぱい”に関連した単語、“vinagre－酢”には、“怒りっぽい人、始終不機嫌な顔をしている人”の意味もある。

― 例題：セレスティーナ第９幕、金持ちの屋敷で奉公するより、こうして自分ひとりが女主人みたいに、自由にちっぽけな家で暮らしたかったという娼婦に、セレスティーナは、お前は自分が何をしているか、よく知っているのかとことわざを引用する、“Que los sabios dicen que: <vale más una migaja de pan con paz, que toda la casa llena de viandas con rencilla.> 賢者は言っているものね。食べものは豊かだが、風波の絶えない家なんかよりは、平和に満ちたパンの切れはしのほうがいいのよ。”（魔女セレスティナ、大島正訳）

906. Más vale un rato de placer que ciento de pesar.
つかの間のよろこびは　長い苦しみに　勝る

― 幸せで短い人生のほうが、つらい思いをして長生きするよりよほど良いということ。

― 異表現には、“Más vale un día de placer que ciento de pesar.　一日の喜びは、長い苦しみに勝る”がある。

― “長生きは恥多し”と言うように、長生きすればいいということではない。長生きしていると、恥をさらすことも多く、つらい思いもする。また、忍耐を重ねながらたゆまぬ努力を続けて生きるのが人の一生であるという“人の一生は重荷を負うて遠き道を行くが如し”という真実を述べている格言もある。

907. Más vale un toma que dos te daré.
今、ひとつ上げるは、今度、二つ上げように勝る

— 少しでも実際に上げるのは、たくさんのものを口約束するより価値があるということ。
— この諺には、たとえるものが異なる類義のことわざが数多くある、筆者のスペインの諺辞典の“Más quiero huevos hoy que mañana pollos.　明日の親鳥より、今日の卵”（諺886）を参照して下さい。
— 例題１：ドン・キホーテ第一部31章では、類義で比喩の異なることわざがサンチョによって次のようにでてくる、“... y que más vale pájaro en mano que buitre volando,...手にもつ小鳥は飛んでる禿鷹にまさるだ。”（正編二、永田寛定訳）
— 例題２：ドン・キホーテ第二部７章、島を上げる、そこの太守にして上げるなど、口約束ばかりして、給金も払ってくれないドン・キホーテに、第三回の出発にあたり、証文にして、口約束はよすがいいとサンチョは、四つのことわざを使う、そのうちの諺がこれである、“...pues más vale un toma que dos te daré. ...＜さあやる＞一つは＜いずれはやろう＞の二つにまさる、と言うでがす。”（続編一、永田寛定訳）
— 例題３：ドン・キホーテ第二部35章、悪ふざけから、ムチで打たれる羽目になり、気がてんとうしているサンチョが、自分におくりものを持ってくるならまだしもと怒りながらここでも四つのことわざを使ううちのひとつ、“..., sabiendo aquel refrán que dicen por ahí,... Y que dádivas quebrantan peñas, y ..., y que más vale un “toma” que dos “te daré”?＜つかい物（贈り物）は岩をもくだく＞、...、それから、＜さあ取れ一つは、きっとやる二つにまさる＞も知ってのうえだろうによ。”（続編二、永田寛定訳）
— 例題４：ドン・キホーテ第二部71章、ドン・キホーテが決闘に敗北しサンチョと共に村に返る途中、サンチョが、ドゥルシネーア幻術解きのために残っていたムチ打ちを進んで引き受ける、それというのもちゃんと勘定を払ってもらうことになったからである、早くこの仕事を終わらせたいと立て続けに諺をいくつか言う“..., porque en la tardanza suele estar muchas veces el peligro ; ...y que más valía un “toma” que dos “te daré”、...＜遅れるは三文の損＞だし、...、＜やるよやるよが二声よりも、ただの一声、そらやるぞ＞、...”（続編三、高橋正武訳）
— 発想も表現も類似の日本のことわざには、“明日の百より今日の五十”、“来年の百両より今年の一両”、“明日の親鳥より今日の卵”などがある。

908. Más vale vaca en paz que pollos con agraz.
牛肉の一片しかなくとも平安があれば　チキンで食卓を満たして争うより　よい

— 少ししか物がなくても平安であれば、ものでいっぱいになった家で互いにいがみ合う生活より

良いということ。（筆者の諺辞典、諺887、905を参照して下さい）

― 単数形の“vaca－牛肉”は“少々のもの”、複数形の“pollos－チキン”は“たくさんのもの”を象徴していて、ここでは、単に比喩的に量を言い表していると思われる。一連のこれらの諺は、旧約聖書の箴言に典拠があると思われる、例えば17－1では、＜Más vale comer pan duro y vivir en paz que tener muchas fiestas y vivir peleando.　乾いたパンの一片しかなくとも平安があれば、いけにえの肉で家を満たして争うよりよい。＞の教えが述べられている。このように、旧約聖書の箴言には、スペインの諺の源となっている格言が数多くみられる。

― コレアスの諺集によると、“pollo con agraz”は、苦が酸っぱく味つけしたチキンのことで、当時のチキン料理の通常の調理法であった。それも度がすぎると苦味が勝り、不快感を与える。

― スバルビィ諺辞典には、異表現で同義の“Más vale cardos en paz que pollos con agraz.　カルドンしかなくとも平安があれば、チキンで食卓を満たして争うよりよい”が見られる。こちらの方が、ことわざの真意を表しているとコメントしている。比喩に使われている“cardos－カルドン”は、地中海地方産キク科の草で、葉と葉柄はあく抜きして食用にする、現在でもスペインでは一般に食されているが、食べ物としては、チキンのほうが上等である。この諺では、貧しいたべものと上等な食べものとを比べているので見出しの諺より分かりやすい。

― コバルビアス（宝典）によると、誰でも贅沢なたべものを日頃からたくさん食べていれば、いつかは生活が苦しくなり、払えない借金までしてしまう。また、時には、牛を飼育している牛舎は、屋根がなく、汚く、持ち主の手入れが行き届かぬ所と考えられていた。そこから牛の飼育者には、あまり裕福な者がいないとコバルビアスは言いたいのであろうか。

― セレスティーナ第９幕では、お金持ちの屋敷で働くより、自分ひとりで、ちっぽけな家で自由に暮らしたかったという娼婦のアレウーサに対し、同義で異表現のことわざを用いてセレスティーナがこう返答する、“Que los sabios dicen que : ＜vale más una migaja de pan con paz, que toda la casa llena de viandas con rencilla.　賢者は言っているものね。食べものは豊かだが、風波の絶えない家なんかよりは、平和に満ちたパンの切れはしのほうがいいのよ。”（魔女セレスティナ、大島正訳）

― 論語には、君子の心境を述べたことば“貧にして楽しむ”があるが、こちらのほうがもう少し奥深く、貧乏していても、人の道を身につけていれば、日々を楽しく暮らすことができるという意。（故事、ことわざ活用辞典）

909. Más vale vuelta de llave que conciencia de fraile.
お坊さん信用するより　鍵かけよ

― お坊さんのように、一見いちばん安心できそうな人でも、鍵のほうがわれわれの財産を守るためには、安全であるといって、どんな人であれ信用するなと教えている。“vuelta de llave-cerrar con llave.　鍵をかける（コレアス諺集）”

— スバルビィ諺辞典には、異表現の“Más vale vuelta de llave que consejo de fraile.　お坊さんの忠告より鍵かけよ”が収載されている。財産を守るためには、どんなに善意がありそうな人でも、その人を信用するよりは、われわれにとっていちばん安全だと思われる方法を自身の手でとるがいい。（スバルビィ）
— バロス諺集では、われわれの利益は、物理的に守られるべきであって、身近な人々の善意を信用すべきではないといっている。
— スペインのことわざの主旨をあからさまに表現しているのが、日本のことわざの“盗人を捕らえて見れば我が子なり”である、身近な親しい者でも油断できないことをずばりたとえている。

910. Mayo come trigo y agosto bebe vino.
5月にはパンを食べ　8月にはワインを飲む

— 5月には食べる量が増え、8月には水分を飲む量が増えること。
— コレアス諺集によると、5月にはパンが、8月にはワインが欠乏するので、それらは貴重なものとして扱われる。また、5月というのはとても美しい月なので長く感じられ、たくさん食べる、8月は暑い中で働くのでたくさん飲む。そこから、それらのものが少ない上に、多量に消費されるので、珍重される意となるのであろう。（筆者）
— バロス諺集でも同じように解説されている；5月は日がとても長いので働く時間が長くなる、そこから食べる量も自然と多くなる。また、8月は暑いのでたくさん飲むと。
— スバルビィ（スバルビィ諺辞典）によると、これらの月はそれぞれの実（麦の穂及びぶどうの実）がまっさかりに実る月に当たる。
— “格言の背景”によると、イリバレンはコレアスを引用して次のように説明している；“Más largo（o alto）que un mayo－5月より長い（高い）”というよく聞かれる表現は、一般的に言われているような5月という月を指すのではなく、5月柱（祭りの時に花、リボンなどで柱を飾りつけ、その周りで踊る）を指す。“Largo como un mayo y Alto como un mayo－5月柱のように長く、高い”という表現があるが、ここで使われている“Mayos”は、スペインのある地方における古いしきたりによって、5月に立てる長い柱を意味する。そこで、筆者がコレアス諺集を調べてみると、“Mayo el largo－長い（高い）5月”は、5月の日が長いことと、5月1日に高い柱を立てる両方の意味からきていると、説明されている。
— 5月に関連して次のようないくつかのことわざがコレアス諺集に見られる；“Mayo frío, mucho trigo.　寒い5月、たくさんの麦”、“Mayo hortelano, mucha paja y poco grano.　暖かく湿った5月、たくさんの麦わらと少しの実”（雨が多く、野菜に適した天候の時は、麦は実らない－コレアス）、“Mayo pardo, año harto.　どんよりした5月、豊作の年”、“Mayo pardo, señal de buen año.　どんよりした5月、いい年のしるし”、“Mayo ventoso, año hermoso；o marzo ventoso, mayo hermoso.　5月に風が強いと、美しい年になる；3月に

風が強いと、５月は美しくなる”など。スペインの５月は、まだ涼しく肌寒いような日もある、そこからこういう諺がある、“Hasta el cuarenta de mayo no te quites el sayo.　５月40日までは上っ張りを脱ぐな（５月が過ぎるまでは薄着をするな）”（西和中辞典）

911.　Mayor (El) enemigo del hombre es el hombre.
人間の最大の敵は　人間である

― 人間にとってこの地球上でいちばん怖いのは人間であるということ。

― 人間は知恵が働くだけに始末が悪い。動物界の中でも人間ほど残忍な動物はいない。故に“El hombre es un lobo para el hombre. / El hombre es un lobo para los demás hombres.　人間は人間にとって狼である／人間は自分以外の人間にとって狼である（西暦前200年には非常にポピュラーでありラテン語のHomo homini lupus. / Lupus est homo homini, non homo.　から来ている）”とまで言われている。しかし、これに対して、人間以外の動物は、“Un lobo a otro no se muerden.　狼同士はかみ合わない”というように同種の動物同士では、一般的に互いに攻撃したり、殺し合わないらしい。

― しかし、日本では、江戸時代から言われてきた“世の中に鬼はいない”、“人に人鬼はいない”、“浮世に鬼はない”などを含めて慈悲の心をもった人もいるという世の中を性善説で見る諺が多い（岩波、ことわざ辞典）、その中でもそれほど古くない“渡る世間に鬼はなし”が現在でもよく使われている。

912.　Mear claro y cagar duro, señal de sanidad.
澄んだ小水と　しっかりした排便は　健康のしるし

― 現在でもそういわれている。また、どんな場合でも清廉に、且つ確固たる態度で生きることをたとえている。

― 見出し形と同義の異表現が、バロス諺集とコレアス諺集に次のように収載されている；“Mear claro y cagar duro, señal de estar bueno el pulso.　澄んだ小水としっかりした排便は、脈拍の正常なしるし”コレアスによると、“mear claro－澄んだ小水”は“誰からも騙されたり、侮辱されずに、真実の人生を正直に生きること”をたとえ、また、“cagar duro－しっかりした排便”は、われわれを貶めようと機会を狙っている人たちに対して毅然たる態度を取り、いつも気力に満ちていることをたとえている。“cagar duro”は、“cagarse de miedo－ひどくおじける、びびる”の反対の意味である。

― 現在の日本のように健康志向社会は、珍しいらしいが、だれもかれもが、健康に関心がある。今、言われている健康のしるしが、毎日の排便、質のよい睡眠、そして健全な食欲の三つである。スペインのことわざの本来の主旨である精神的な面については、こちらではあまり言われ

ていないのはどうしてであろうか。しかし、日本のことわざには、己を侮ろうとかかっている者に対して、意地を見せたい時には、“一寸の虫にも五分の魂”があるし、身分が低い者でも、その志が堅固であるならば、だれもその志を動かすことはできないという“匹夫も志を奪うべからず”がある。

913. Mear claro y dar una higa al médico.
澄んだ小水し、医者にはあかんべえ

— 健康であれば、医者に頼る必要がなくなり、医者を拒絶するようになる意のことわざ。

— スバルビィによると、16世紀には使われていた諺。皇帝であり、兄であるカール５世の宮殿で暮らしていた皇子フェルナンドの代理人である Martín de Salinas の手紙の中にでてくる。1523年の日付けが記されている。現在、スペイン王立アカデミーに保存されていて、当時の肉筆書が残されている。諺の意味するところは、小水に濁りがなく、透明であれば、健康である証拠であるから、医者を必要としないどころか、かえって、医者を冷やかし、嘲笑することもできるということ。

— コバルビアスの宝典には、見出し形と共に異表現のことわざが見られる；“Mee yo claro y una higa para el médico.（オレが）澄んだ小便してやれ、そうして医者にはあかんべえだ”ことわざに使われている単語の“higa”は、コバルビアスによると、“握りこぶしを作って、人指し指と中指の間から親指を出して、人を指す嘲笑の仕草”ここから、“dar una higa al médico”は、“医者に向かってその仕草をする、つまり、医者を嘲笑し、拒絶する意”日本で使われている“あかんべい、またはあかんべ”は、国語辞典（講談社）によると、指で下まぶたの裏の赤い所を出し、軽蔑、拒絶の気持ちを表す動作である、とするところからもスペインの“dar una higa”の仕草の意味するところとぴったり一致する。

— 例題：ドン・キホーテ第二部65章、銀月の騎士に負かされ、すっかり意気消沈し、悲しそうに床についているドン・キホーテに向かい、サンチョがいつものようにお得意のことわざをいくつか口にのせて慰めるそのうちの一つ、“..., dé una higa al médico, pues no le ha menester para que le cure en esta enfermedad, volvámonos a nuestra casa y ...　お医者なんかは、くそくらえだ。この病気をなおすにゃ、お医者はいらねえ。わしらの家に帰りましょう。”（続編三、高橋正武訳）

— 病気の時は、医者にへりくだった態度で、何でも医者の言う通りにしなくてはならぬわれわれの心情をいい表していることわざである。日本には、“腹八分に医者いらず”、“大根おろしに医者いらず”、“柿が赤くなると医者が青くなる”（柿が色づくころは気候がよく、病人が少なくなるので医者が困る－ことわざ辞典、岩波書店）などの諺があり、どういう時に医者が必要でなくなるかをおしえてくれる。

914. Mejor es casarse que abrasarse.
愛に身を焦がすより　結婚したほうが　まし

― 苦しんでいるよりは、その苦しみの根を絶つような決着をつけなさいということ。

― スバルビィの諺辞典では、同義で異表現の“Más vale casarse que abrasarse.”が見られる。苦悩するよりは決断しなさいと言っているが、又、避けるのが難しい二つの不運からより少ない不運を選ぶ時にもユーモアをこめて用いられることわざである。バロス諺集でも同じような解釈がなされている。

― イリバレン（格言の背景）によると、この格言は、パウロがコリントの信徒への手紙（新約聖書、コリントの信徒への手紙、６－７－２）の中でみだらな行いを避けるために結婚したほうがよいとキリスト教徒に勧めた後で、未婚者ややもめに、本当はわたしのように独りでいるのがいいが、“pero si no pueden controlar su naturaleza, que se casen, pues más vale casarse que consumirse de pasión.　しかし、自分を抑制できなければ結婚しなさい。情欲に身を焦がすよりは、結婚した方がましだからです。”（コリントの信徒への手紙、6－7－9）と述べたところに拠る。

― 色欲は、キリスト教の中の七つの大罪（物欲、ねたみ、大食、色欲、傲慢、怠惰、憤怒）の内のひとつで、地獄で身を焼かれるような重い罪である。そこからこのような罪を犯すよりは、結婚の方がまだましであるといっているいかにも聖書に典拠がある格言である。

915. Mejor es estar so barba que so baba.
ひげの傍にいた方が　よだれの傍にいるより　よい

― 若造と結婚するより、年輩の男と結婚したほうがよいと女性に勧めていることわざ。（バロス）経験も家庭の運営の仕方も知らない若者より、充分にそれらを熟知した年輩のほうが上手くいくということ（コレアス）。

― “barba－ひげ”と同韻を踏ませるために、強引に“baba－よだれ”をもってきたと思われる誇張的な表現のことわざ。スペイン語では“barba－ひげ”は、経験豊かな男の象徴となっている。コバルビアスの宝典においても、“Hombre de barba, hombre de valor. －ひげの豊かな男は、価値ある男”、“A poca barba, poca vergüença. 少ししかひげのない男は厚かましい男”（慎重でない若造は、大胆でむこう見ずである）などの表現が見られ、上記のことわざの主旨を裏付けている。

― 日本には、妻が夫に代わって権勢をふるうようになると、家運が衰え災いを招き、ついには滅びるという“雌鳥うたえば家滅ぶ”、“雌鳥に突つかれて時をうたう”などの諺がある。スペインのことわざと相通じることわざである、ちなみに、ことわざ辞典（岩波）によると、前者の日本のことわざは、現代では女性差別のことわざとして批判の対象となっているらしい。

916. Mejor es pan duro que ninguno.
何にもないより　固いパンの方が　まし

— 飢えをしのぐことはできる。
— バロス諺集では、類義で異表現の“Más vale poco que nada.　何にもないより、少しあったほうがまし”が見られる。何にもなければ、それでお終いだが、少しでもあれば、どうにか生き延びることはできる、そうすれば、まだ成功するチャンスが残っているということだろう。
— コバルビアスの宝典には、類義で異表現の“A grande hambre no ay pan malo. とってもお腹が空いていれば、不味いパンはない”が、収載されている。スペインで現在よく使われているのは、“A buen hambre no hay pan duro. ひもじい時に、まずい物なし”（筆者の諺辞典、諺3を参照）の方である。同宝典では、その他、次のようにパンに関することわざが多い；“Todos los duelos con pan son menos.　苦労もパンがあれば、たいしたことない”（筆者のスペインの諺辞典、455参照）、“Por mucho pan nunca mal año.　パンがたくさん出来る年は、良い年である”、“Agua de mayo, pan para todo el año.　5月に雨が降れば、一年中パンには困らない”など、それぞれが生きていくために必要なパンの大切さを謳っている。
— 見出しのことわざと類義の日本の諺には、“飢えては食を択ばず”、“空き腹にまずい物なし”、“ひもじい時にまずい物なし”などがある。

917. Mejor es que el vellón se pierda que no la oveja.
羊毛がなくなった方が　羊がいなくなるより　まし

— 元も子もすっかりなくすより良いということ。（筆者の諺辞典、諺533を参照）
— コレアス諺集では、見出し形と共に同義で異表現の“Mejor es que la lana se pierda que no la oveja.”が収載されている。“vellón も lana も羊毛の意”
— バロス（諺集）によると、商売で明らかに損失が出た場合、それを取り戻そうとしてすっからかんになるよりは、直ちに商売をやめた方がいいとたとえていることわざである。
— 現代では常用語句のひとつで、跡形もないほどの損害を蒙ることをたとえて、“元も子も失う”、“元子を失う”、“元も子もない”と言う。（岩波、ことわざ辞典）

918. Mejor es ser envidiado que apiadado.
同情されるより　妬まれる方が　まし

— 同情される惨めな境遇にいるより、人から嫉妬されるような恵まれた環境にいた方がいいということ。（筆者の諺辞典、諺892を参照）
— コレアス諺集には、見出し形と共に、類義で、“Mejor es que hayan envidia que mancilla.

名誉を傷つけられるより、妬まれる方がまし”が見られる。そうはいっても、人からひとたび妬まれると、それがいわれのない中傷に発展し、名誉を傷つけられるようにまでなる場合が多々あるのではなかろうか。

― 自分と同じ苦しみ、悩みを持っている同類に対しては、“同病相憐れむ”、“同気相求む”だが、少しでも自分より優れていたり、自分が持っていない物を持っていたりすると、羨ましく、ねたみ心が起こり、“隣の牡丹餅は大きく見える”、“隣の花は赤い”などと思うのである。

919. Mejor es tener al bajo por amigo que al grande por enemigo.
小さな友を持った方が　大きな敵を持つより　よい

― どんな友でも、友達なら持っている価値があるということ。

― バロス諺集によると、“Es bueno tener amigos hasta el infierno.　地獄にいてさえも友を持つことはいい”と同じく、友とのつき合いが、一見役に立ちそうもなく、つまらなく思われても、決してその友情を侮ってはならぬとおしえている。

― コバルビアスの宝典では、“De los enemigos, los menos.　敵は少なければ、少ないほど良い”、“Al enemigo la puente de plata.　逃げ行く敵には銀の橋（去る者は追わず）”、“Quien su enemigo popa, a sus manos muere.　敵にへつらう者は、その手にかかって死ぬ”など、敵は持つな、なるたけ遠ざけよと言う。友を持つことの大切さはすでに見てきたが、それは、“Ganar amigos es dar dinero a logro y sembrar en regadío.　友を得るということは、高利で金を貸し、溜め池に種を蒔くようなもの”（筆者の諺辞典、諺612を参照）、“El que no tiene amigos, tema a los enemigos.　友人がいない者は、敵を怖れよ”（筆者の諺辞典、諺494を参照）などの諺にも見い出される。

― 自分より劣った者は、道を修める上で力にはならないから、友としないほうがよいというおしえの“己に如かざる者を友とするなかれ”、“益者三友損者三友”が論語の中にある。これらは、友を持つならためになる友を持ちなさいとおしえている。スペインのことわざとは、対照的な孔子のことばである。

920. Mejor (El) maestro es el tiempo, y la mejor maestra, la experiencia.
最良の師は、時と経験である

― われわれにいちばんよくおしえてくれるのが時と経験であるということ。今まで気がつかなかった事も、時が経つにつれ、分かるようになり、経験を積むことによって賢くなる。類義のことわざには、“Dos adivinos hay en Segura : el uno experiencia, el otro cordura.　ふたりの古い師がいる：ひとりは経験という名、もうひとりは思慮という名”（筆者の諺辞典、諺449を参照）がある。

— 経験を多く積んだ者は、物事の方針を誤らないという“老馬の智”（中国、韓非子）、“老いたる馬は道を忘れず”、“老馬道を知る”などが、こちらではよく知られている諺である。

921. Mejor (El) nadador se ahoga.
よく泳ぐ者は　溺る

— 時には、その道に長じた人でも失敗することがあるというたとえ。
— コレアス（諺集）によると、一般大衆は、そう考えるらしいが、それは誤りである。泳ぎの達人は、人力が及ばない何らかの力が加わらない限り、溺れるようなことはないから。しかし、この格言は、分別のある人が大きな間違いを犯すこともあるというたとえにはなる。
— バロス諺集には、類義で、“El mejor escribano echa un borrón.　達人の書記でも、書き損じ（弘法にも筆の誤り）”が、見られる。バロスによると、充分な経験に富み、分別ある人でも間違いを犯すことがあるの意。
— 類義の日本の諺は次のようにたくさんあるが、まずスペインのことわざと表現がぴったり一致しているのから見てみよう；“泳ぎ上手は川で死ぬ”、“川立ちは川で果てる”（川になれている者は、とかく油断して川で命を落すことが多いの意で、人は得意な分野でつい気を許して失敗し、身を滅ぼすことのたとえ－故事、ことわざ活用辞典）、“よく泳ぐ者は溺る”、“水を知る者は水に溺る”、“河童の川流れ”など、その他ここで、よく知られているのは、“弘法にも筆の誤り”、“猿も木から落ちる”であろう。

922. Mejor parece la hija mal casada que bien abarraganada.
娘の不幸な結婚は　幸福な同棲より　よく見える

— 世間の目からは、そう見える。（筆者の諺辞典、諺899を参照）
— スバルビィの諺辞典でもそう言う、どんなに不幸でも合法的に結婚していれば、世間にふしだらな愛欲関係と映る同棲よりはましであると。
— コバルビアスの宝典によると、“abarraganados”は、“amancebados－内縁関係の、同棲の”、“abarraganarse”は、“amancebarse－同棲する、内縁関係を持つ”と同義語。
— 例題１：ドン・キホーテ第二部５章、娘に釣りあいのとれた真面目な結婚を望むサンチョの妻テレーサは、どうもあの子は、亭主を持ちたがっているらしい、“..., Y, en fin en fin, mejor parece la hija mal casada que bien abarraganada.　なんといっても、女の子はね、いたずらして楽にくらすよりも、嫁にいって苦労する方が見よいのさ”（続編一、永田寛定訳）
— 例題２：セレスティーナ第16幕、メリベアは、両親には内緒で恋人のカリストを熱烈に愛している、わたしにとっては、“...; que más vale ser buena amiga que mala casada. Déjenme gozar mi mocedad alegre, ... 悪い妻よりは良い恋人のほうがよほどいいのですものね。.....

妾の輝かしい青春を楽しませてたもれ。”（魔女セレスティナ、大島正訳）ここでは、うら若い恋している娘の視点から諺を変えて使っている。母と娘の考えていることは、この時代（1499年）から、このようにまるっきり異なるのである。

― 現代では、女性は結婚するもしないも随分自由になったが、それでもまだ、世間体を気にする者がいる。ましてや、ドン・キホーテ（第一部、1605年）の時代なら当然そう考えられる。つい最近までの日本もそうではなかったであろうか。江戸時代には常用され、一般的な倫理感覚として長く言い継がれてきた、“女三界に家なし”（岩波、ことわざ辞典）のようなことわざを見ても、どんなに女性にとってこの世は住みにくいかがわかる。スペインの反義の諺“Más vale ser buena enamorada que mala casada. 不幸な妻より幸福な恋人”はすでに諺899に出てきたので参照して下さい。

923. Mejor (La) salsa es la hambre y buenas ganas.
いちばんおいしいソースは　空腹と食欲

― どんなものでも、お腹が空いていて、食欲があれば、おいしく感じられるということ。すでに見てきた、“A buen hambre no hay pan duro.　ひもじい時に、まずい物なし”（筆者の諺辞典、諺３を参照）と類義のことわざ。また、コバルビアスの宝典には、“A mucha hambre no ay pan malo.　空きっ腹に、まずいパンはない”が収載されている。空腹なら、パンが堅かろうが、味つけが悪かろうが、そんなことは問題にならない。そこから、一見つまらなく思われるようなことでも、意欲、欲求さえあれば人はどんな事にも満足が出来るの意。

― 例題：ドン・キホーテ第二部５章、島の太守になれると思わなかったら、死んだ方がましだというサンチョへ、賢いテレーサが、ことわざを用いてこう返答する、“La mejor salsa del mundo es la hambre ; y como ésta no falta a los pobres, siempre comen con gusto.　世界で一番いい味の素がひもじさでね、ひもじさは、貧乏人ならきっと持ってるで、いつもおいしく物がたべられるだよ。”（続編一、永田寛定訳）

― 日本にもぴったり表現まで同じの“空きっ腹にまずい物なし”がある、ことわざ辞典（岩波書店）を調べてみると、あちこちの国で非常に似たことわざがある；スペインの見出しのことわざの基ともなっているラテン語の“飢えは食べ物の調味料”を始めとして、その他“空腹は最高のソース”（西欧、デンマーク）、“空きっ腹に堅いパンなし”（ポルトガル、バスク）、“空腹は美味しいスープを作る”（エストニア）、“腹が空いている時は何でも美味しい”（ベトナム）がある。

924. Mejor se aguarda lo que con trabajo se gana.
あぶく銭は身につかぬ

— 働かずに、または、よくない手段で得たお金、或いは物は本当の自分のものにはならずにすぐになくなってしまうものである。スペインのことわざの直訳は、そのことを裏返していっている、“働いて（苦労して）得たものは、よく保つ”と。

— バロス諺集によると、手に入れるのに大変苦労したものは、とても大切にされるの意。“con trabajo”には、“働いて、苦労して、骨折って”、また、“con mucho <gran> trabajo”には、“大変な努力をして、やっとのことで”などの意味がある。バロスの解釈は、お金に限らず、いろいろなものに、広範囲に適用できる。

— コレアス諺集には、異表現の“Mejor se guarda lo que con trabajo se gana”がある、“se aguarda も se guarda も同義”

— 日本のことわざには、見出しの訳と共に、常用されている“悪銭身に付かず”がある、また、他人から借りた物や取り上げた物は、自分の物にはならぬ意の“人垢は身に付かぬ”（故事、ことわざ辞典）もある。

925. El melón y el casamiento, acertamiento.
メロンと結婚は、当たりはずれ

— おいしいメロンをぴたっと当てるのも、いい結婚に当たるのも偶然であるということ。試した後でがっかりさせるのがメロンと結婚である。それほど当たりはずれが多い。故に、おいしいメロンに当たるのも、いい結婚に当たるのもまぐれ当たりである。ことわざ特有の比喩が面白い。また、“casamiento”と“acertamiento”は、同韻で語呂合わせをしている。

— スバルビィ（諺辞典）は、両方とも良いのに当たるかどうかは、偶然と選び方による場合が多いからという。また、同辞典には、“El melón y la mujer malos son de conocer.　メロンと女は、食べるとまずい”（見た目でだまされることが多いのは、この両方である－スバルビィ）、“El melón y el casamiento ha de ser acertamiento.　メロンと結婚は、うまく当てなければならぬ”などが収載されている。

— コレアス諺集にも異表現で、“El melón y el casar, todo es acertar.　メロンと結婚は、うまく当てることだ”、“El melón y el yerno, como saliere ; acertamiento.　メロンと婿の当たりはずれは、出たとこ勝負”、“El melón y la mujer, a la cala han de ser.　メロンと女は、まず試食しなければならぬ”など辛らつだがユーモアたっぷりの一連のことわざが収載されている。

— イリバレンの格言の背景にも類義で、“Tres cosas hay, que nadie sabe cómo han de ser: el melón, el toro y la mujer.　後でどのように出るか誰も知らない三つのものがある：メ

ロン、闘牛、そして女”（食卓でのメロン、闘牛場での闘牛、結婚してからの女－イリバレン）、“El toro y el melón, como salen son.　闘牛とメロンは、出たとこ勝負”（闘牛は、どんなに良い体型、血統、成績を持っていようが、当日の闘いの結果を予想するのが難しい、同じようにメロンは、外観、生産地、音、触感では、本当においしいか食べてみるまでわからない－イリバレン）など、闘牛の盛んなスペインらしいことわざが見られる。

― スペインの一連のことわざの真実を裏付けているのが、日本のことわざの“選んで粕を掴む”、“選（よ）れば選り屑”、“器量好みする人は醜婦を娶る”である。さんざん選んだ末に悪いものをつかんでしまったということ。

926. Memoria (La) del mal, despacio está ; la del bien, presto se va.
悪い思い出はいつまでも残り、良い思い出はすぐ消える

― 人の悲しい精神構造をいい当てている。人は過去に起こった厭なことはなるたけ忘れたいと思っている、しかし、意識下に追いやってもそれが一生涯トラウマとして残る。それよりも、一つひとつ記憶を思い出していったほうが、精神衛生上よいと提唱しているのが、近代の精神医学者や心理学者である。ことわざの方は、人は、通常悪いことはなかなか忘れられないが、良いことはすぐに忘れてしまうという傾向があるということを述べている。

― バロス諺集に類義のことわざ“La memoria de agravio y de injuria, mucho más que de beneficio dura.（人から受けた）侮辱、無礼の記憶は、親切にされた記憶よりずっと長く残る”が見られる。見出しのことわざを具体的に表現したもの。

― 日本のことわざも具体的に“怨みほど恩を思え”と言い、史記では怨みの気持ちが非常に強いことをたとえて“怨み骨髄に入る”という。人が強い怨みを抱くのはいろいろな理由からであろうが、その中でも人から受けた屈辱、罵詈雑言、無礼な態度、裏切り、物質的損害などは一生忘れられないであろう。

927. Menea la cola el can, no por ti, sino por el pan.
犬が尾を振るのは、パンにであって、君にではない

― 人が儀礼をつくすのは、あなたの人格のためではなく、何らかの利益のためであるとたとえて言う。

― コバルビアスの宝典には、類義で、“Si quieres que te siga el can, dale pan.　犬についてきてもらいたかったら、パンを上げなさい”が収載されている。コバルビアスによると、“can－犬”という単語は、カスティーリャ語（もともとはスペインの中央部、北部にまたがる地方の方言であるが、いわゆる標準スペイン語といわれるもの－筆者）ではなく、ラテン語の“canis”から来た“perro－犬”のこと。筆者－ここでの一連の諺に“can”をもってきたのは“pan－パン”と韻を合わせるためである、また、“カン－can、パン－pan”と口に出して発音すると、

響きがよいことが分かる。日本の諺の“憎い者には餌を与えよ”、“憎き鷹へは餌を飼え”は、ニュアンスは少し違うが、発想は同じである。こちらの方は、反抗して従わない者を力で屈服させるよりは、利益を与えて手なずけたほうが賢明であるの意。（故事、ことわざ活用辞典）基本的には、利益を与えなければ、味方でも、敵でも従わせることができないということであろう。

— バロス諺集にも、類義で“Por el pan baila el can.　パンのためなら犬でも踊る”がある、人というものは、利益のためならどんなことでもするものであるという意。例えば、会社の宴会で音痴でも皆の前で歌を歌わなければならず、芸のない者なら裸踊りでも披露しなければならない、そういう場面を思い浮かべると、このスペインのことわざが切実にきこえてくる。

— 日本にも、金の力の前にはなびかぬ者はないことをたとえて“銭あれば木仏も面を返す”（木仏は、感情の冷ややかな人のたとえ－故事、ことわざ活用辞典）、“銭あれば木仏も面を和らぐ”などの類義のことわざがある。

928. Mentira (La) no tiene pies.
嘘つきには　足がない

— だから、すぐに“真実”から追いつかれる。（バロス）

— 一連の類義のことわざがバロス諺集に次のように見られる；“La mentira presto es vencida.　嘘はすぐにばれる”、“Antes se coge al embustero que al cojo.　嘘つきは、びっこより前に捕まえられる”、“Más pronto se coge al mentiroso que al cojo.　嘘つきは、びっこより早く捕まえられる”（筆者の諺辞典、諺847を参照）、“El mentir pide memoria.　嘘ついたことは、覚えていなければならぬ”日本でも“嘘は後からはげる”というように、いちいちついた嘘を覚えていないと、いつかは発覚してしまう。

— 同じく、コレアス諺集でも、“El mentiroso ha de ser memorioso; o ha menester tener mucha memoria.　嘘つきは記憶力が良いにちがいない；嘘つきは優れた記憶力を持つ必要がある”、“El que miente ha menester mucha memoria.　嘘つきは、記憶が良くなくてはならぬ”（筆者の諺辞典、諺487を参照）などがある。また、いままでの一連のことわざとは意味は違うが、こういうのもある、“Mentir no es deshonra mas es palabra de ruin persona.　嘘をつくということは、不名誉ではないが、卑しい人の言葉である”

— 日本では、“嘘つきは泥棒の始まり”とか“嘘を言うと地獄へ落ちる”などと、誰でも日本人なら、子供の頃は親から言われたにちがいない。ここでは、嘘をつくことは、とても恥ずかしい不名誉なことであると考えられている。そう言われて育ってきたはずの大人の日本人が、この頃は、平気で嘘をつくのはどうしてであろうか。スペインの一連の嘘つきのことわざはいずれも着想がおもしろく、ユーモアがあるが、日本の方は、子供に恐怖感を与える。

929. La mesa y la mujer, sujeta.
食卓と女は　押さえつけよ

― 食卓はがたがた揺れないように、女はふらふら出歩かないように、しっかりと押さえつけておくのがいいということ。

― バロス（諺集）は、二つの解釈があるとしている；一つは、テーブルは、がたつかないように、女は、あまり動きまわらないように、押さえつけておくこと、二つは、食べることにも、女に対しても欲を押さえよ、そうしないと健康に悪いですよと忠告している。同諺集には、類義で“La mesa sojuzgada y la olla reposada.　食卓はしっかり押さえよ、ナベ料理はゆっくり蒸らせ”がある。（sojuzgada-bien sujeta しっかり押さえる、固定させる）sojuzgada と reposada は、同韻で、ここでは反意語にもなっている。sojuzgar には、支配する、隷属させるの意味がある。（宝典、コバルビアス）また、reposar は、くつろぐ、ゆったりする、休息するの意。

― 二番目のバロスの解釈によると、“腹八分目に医者いらず”、“腹八分に病なし”となる。スペインのことわざの方は、それに女が加わり、健康でいるためには、暴飲暴食、度の過ぎた色欲は慎みなさいと戒めている。

930. Métanme el dedo en la boca, y verán si aprieto o no.
わたしの口の中に　指を入れてごらん、そうしたら　どう噛むか見れるから

― 馬鹿にしたり、あなどったりする者に対し、自分の意地を示す時にいうことばだが、悲愴感にはほど遠く、ラテン系のユーモアいっぱいの表現。

― スバルビィ諺辞典によると、人が考えているようには、自分は馬鹿ではないという事を示したい時に用いられる。

― 例題；ドン・キホーテ第二部34章、いつものように、ドン・キホーテがサンチョが言ったことを疑ってかかったので、（島の太守になったら）上手に統治してみせまさ、とサンチョ“...¡No, sino pónganme el dedo en la boca, y verán si aprieto o no!... なんならね、わしの口へ指を入れてみなせえ。かみ方がきくかきかねえか、すぐわかるでさ！”（続編二、永田寛定訳）著者－ここでは、皆から身分が低く、単純で馬鹿だと思われているサンチョが、ドン・キホーテに対して精一杯、己の意地や志しの堅固さを示しているのがこの表現によってよく表わされている。論語では、身分の低い男でも、その志しが堅ければ、だれもその志しを動かすことはできないことを“匹夫も志を奪うべからず”という。（匹夫－身分が低い者）

931. Mete el mendigo en tu pajero y hacérsete ha heredero.
庇を貸して母屋を取られる

— 情をかけて人によくしてあげたのに、感謝されるどころかひどい仕打ちを受け被害を蒙ること。スペインのことわざの直訳は、“乞食をわら置き場に入れたら、相続人に指定させられた”で、日本のことわざと全く同じ意味で、自分の所有している一部を貸したがために、つけこまれてついにその全部を奪われるたとえ。
— バロス諺集には、類義で、“Por la caridad entra la peste.　慈善によって厄病神が入ってくる”がある。バロスによると、人が憐れみからある物を譲り渡すことを心よく承諾したのに、後になって、その恩恵を受けた者が、やりたい放題をするようになることをいう。
— コレアス諺集には、見出し形の他に、異表現で、“Mete al ruin en tu pajar, y quererte ha heredar.　卑しい者を小屋に入れたら、相続人に指定させられた”がある。
— 日本にも見出しの訳以外に、類義で“鉈を貸して山を伐られる”、“飼い犬に手を噛まれる”など多数ある。

932. Meter aguja y sacar reja.
海老で　鯛を釣る

— 少しあげて大きな利益を得ること。（筆者の諺辞典、諺560を参照して下さい。）
— スバルビィの諺辞典には異表現で、“dar, o meter, aguja y sacar reja. 針で格子を引き上げる”たくさんとってやろうとして、少しばかりの施しをするたとえ。
— コバルビアスの宝典には、“Dar aguja y sacar reja.”が収載され、わずかな労力で大きな収穫を得る時に用いられる、また、少し上げて、大きな利益を得る人についていう。
— 例題：セレスティーナ第４幕、やり手婆のセレスティーナのやり口を知っている屋敷の女中が、セレスティーナを評して、“¡Algo es lo que yo digo! En mi seso estoy, que nunca metes aguja sin sacar reja. あたしが言ったことはまんざらでもないわね！お前さんたら、転んでも、ただでは起きない人だと思うわ。”（魔女セレスティナ、大島正訳）註：Bruno Mario Damiani–“nunca metes aguja sin sacar reja”は、“siempre das poco para sacar mucho”の意、いつも大きな利益を得るために少し上げること。
— 日本のことわざ“海老（蝦）で鯛を釣る”と全く同義で、小さな資本で、大儲けしたり、わずかな労力やけちなもので大きな収穫を得ることのたとえ。同義でたとえる物を変えて、“麦飯で鯉を釣る”、“雑魚で鯛釣る”などもある。

933. Meterse uno donde no le llaman, o en lo que no le toca, o en lo que no le va ni le viene.
余計なことに、或いは、かかわりのない事に、口を出す

― ことわざというより成句。スペインではよく使われる口語的表現。（筆者）関係のないことにお節介する、介入する、干渉すること。（スバルビィ諺辞典）
― コバルビアスの宝典には、成句“meterse donde no le llaman.”が収載。
― マリア・モリネール、スペイン語辞書によると、同義の成句“meterse alguien en lo que no le importa, meterse en lo que no le va ni viene, meterse donde no le llaman は、entrometerse－でしゃばる、口を鋏む、干渉するの意。”
― 例題：ドン・キホーテ第二部62章、悪ふざけの的になっているドン・キホーテを見かけた同郷のカスティーリャ人が、早くうちに帰れ、ばかもんとキホーテに叫んだ、そこで一緒にいたその騒ぎの張本人である富裕な騎士が、ことわざを使う、“..., y andad enhoramala, y no os metáis donde no os llaman.　とっとと先へ行かれるがいい。頼みもしないのに忠言めいたことはおやめなさい。”（続編三、高橋正武訳）
― 日本でぴったりの表現は、“人の頭の蝿を追う”ということわざで、頼まれもしない余計な世話をやくことをたとえている。また、“人の頭の蝿を追うより己の頭の蝿を追え”とする表現もよく使われる。（岩波、ことわざ辞典）

934. Meter la pata hasta el corvejón.
へまをやらかす、どじを踏む

― 口語的表現の成句。
― バロス諺集によると、“equivocarse mucho－多くの間違いをする、或いは、ser muy inoportuno－生憎な、折りの悪い”
― 宝典（コバルビアス）にも、コレアス諺集にもこの表現は見当たらない、ということは、17世紀には用いられていなかったのかもしれない。ニュアンスは異なるが、類義で見出し形の短縮表現がある。今日ではこちらの方がスペインでは、ずっとよく使われているポピュラーな口語的成句“meter la pata－無礼な言動をする、へまをやる、いらぬ口出しをする”も、コレアスにもコバルビアスにも収載されていない。イリバレン（格言の背景）も、“meter la pata”という今日では大変ありふれた成句は、17世紀には使われていなかったようであると指摘している。“meter la pata－足を入れる、突っ込む（文字通りの訳）”の表現は、“人か動物が、ぬかるみとか、どこか汚い場所に足を突っ込んだ”といったような行為から来たのではないであろうかと推測している。

935. Metí gallo en mi cillero, hízose mi hijo y mi heredero.
穀倉に雄鶏入れたら　息子になり、ついには相続者になった

— 先に見た“Mete el mendigo en tu pajero y hacérsete ha heredero. 庇を貸して母屋を取られる”と同義のことわざ。（筆者の諺辞典、諺931を参照）

— 自分の意思で人を家に迎えいれたはいいが、後になって、力づくか、或いは、狡猾さでその人に家を乗っ取られてしまうことをいう。（スバルビィ諺辞典）

— 通常は、婿を指すが、一般的には、商売に加わっていた者が、しまいにはその商売を一人占めにしてしまうことをたとえていう。（バロス諺集）

— コレアス諺集には、同義の異表現で、“Metí el gallo en mi cillero y hízoseme hijo heredero; metí el ratón en mi cillero: lo mismo.　穀倉に雄鶏入れたら、相続者の息子になった；穀倉にねずみ入れたら、相続者の息子になった”が、類義では、“Mete el gallo en tu pajero, hacérsete ha heredero.　わら置き場に雄鶏入れたら、相続者にさせられた”が、収載されている。コレアスによると、わら置き場に入れられた雄鶏は、我が物顔にわらを掘じくりかえして、他の家畜に食べさせようとしない、また、羽をそこら中にまき散らして、それを飲み込む家畜を病気にし、しまいには殺してしまい、わら置き場の主人になってしまう。同様に、“Mete el gallo en tu muladar, y hacérsete ha heredero.　掃きだめに雄鶏入れたら、相続者にさせられた”の方は、こういう逸話による；何人かのガリシア（スペイン北西部の地方－筆者）出身の若者たちが、スペイン中に聞こえるほどの名声を得ていた、それをいいことにして、欲しいがままに国家から給料を払ってもらっていた。

936. Metióte en la huerta y no te dio la fruta de ella.
果樹園に入れてくれたのに　果物くれなかった

— 口約束はするが、後でそれを果たさない者をたとえていう。

— スバルビィ諺辞典には、類義で、“Mi comadre la gargantona, convidóme a su olla y comiósela sola o toda.　おしゃべり好きなおばさん、ナベ料理によんでくれたのに、ひとりで／全部平らげてしまった”たくさん勧めはするが、少ししか、或いはほとんど何も上げない人を咎めている、また、他人に気前がいいことを自慢している者が、本当は自分の利益につながることだけに注意を払うことをたとえていう。（スバルビィ）これと同じ表現のことわざは、バロス諺集、コレアス諺集にも収載されている。見出し形よりよく用いられているのかもしれない。

— 宝典（コバルビアス）によると、“comadre”は、“産婆、助産婦、代母、近所の親しいおばさん、おかみさん、etc.”ここには、見出しのことわざは見られないが、“comadre”についてのことわざが以下のように収載されている；“Riñen las comadres, y dízense las verdades.

おかみさんたちがけんかし、互いに本当のことを言い合っている”（怒りにまかせて言い合う、怒っていなくても秘密をすぐばらしてしまう女たちをいう－コバルビアス）、“Mal me quieren mis comadres, porque les digo las verdades.　近所のおばさんたちは、わたしを嫌っている、何故なら私が彼女たちに本当のことを言うから”

937. Miel en la boca y aguarda la bolsa.
開いた口には蜜を　だけど財布の口は閉めて

― ねだられたものを上げられない時には、せめて丁寧な言葉でその言い訳をせよ。（スバルビィ）、贈り物はほどほどにしなければならぬが、断る時にはやんわりと。（バロス）

― コレアス諺集には、異表現で、“Miel en la boca y guarda la bolsa. 同訳”コレアスによると、財産を守るために人が慈善的な行いをすることが出来ない時には、礼儀正しくそのことを言わなければならぬ。

― “boca－口”と“bolsa－財布”は、同韻で“人の口”と“財布の口”を掛け合わせたと思われるいかにもことわざらしい表現。コバルビアスによると、当時（17世紀）の財布は、貨幣を入れておく皮でできた小さな袋。

― 日本では、“言葉は身の文（あや）”といって、言葉にはその人の品性や教養が自然と滲みでてくるものであるとおしえているが、スペインのことわざでは、同じ断わるにしても、言葉遣いは礼儀正しくしなければならないということを言っている。

938. Mientras el discreto piensa, el necio hace la hacienda.
賢い者が考えている間に　愚か者は財産を成す

― 優柔不断を咎め、大胆さを賞賛している。（バロス）

― コレアス（諺集）は、次ぎのように解釈している；通常慎重で分別がある者は、意気地がないと思われているから、或いは、反語的に、本当は賢い者が、自身を謙虚に愚か者と呼び、財産を成す、そして、本当は決断するまでに時間のかかる愚か者は自身を賢い者（分別のある者）と呼びはするが、時間が過ぎるに任せているがために心の中では愚か者と感じている。なんともややこしい説明であるが、同諺集には、見出し形と反対の“Mientras el necio piensa, el cuerdo hace la hacienda.　愚か者が考えている間に、賢い者は財産を成す”がある。ことわざの面白みが意外性にあるとしたら、見出し形の方がおもしろい。両ことわざで用いられている“el discreto”も“el cuerdo”も同義で、思慮分別のある人、慎重な人、賢人の意。“el necio”は、頑固な人、ばか者、高慢な人、etc.

― “el discreto”に、“el necio”、“piensa”に、“hacienda”というように、それぞれ韻を踏ませている。

— スペインのことわざの慎重な人は、“石橋を叩いても渡らない”ような慎重すぎる人であり、“君子危うきに近寄らず”の君子である。日本のこれらのことわざは、あまりにも慎重すぎる人をひやかしたり、皮肉って言うとしている。それに対して、スペインの愚か者は“虎穴に入らずんば虎子を得ず”、“危ない橋も一度は渡れ”などを実行した者である。確かに、こういう危険を冒す者は、一見おかしい、正気ではないと思われる。スペイン文学では、ドン・キホーテがいい例である。スペインの歴史では、17世紀に黄金郷を求めてアマゾン川を上っていった新大陸の征服者たちである。

939. Mientras el lobo caga, la oveja se salva.
狼が糞を垂れてる間に、羊に逃げられる

— 油断大敵であるということ。近くにいる羊を見ながら、狼は気持ちよさそうに糞をしていたのであろう、“あの足の遅い羊めが、オレ様の用をたしてからゆっくり捕まえてやるからな”と、そういう情景が浮んでくることわざである。
— バロス諺集によると、決断が遅いことを非難していることわざ。
— 日本のことわざには、類義で“足下の鳥は逃げる”がある、足下にいる鳥を捕り損なって逃げられてしまう意から、手近なところに手抜かりがあることをたとえている。（故事、ことわざ活用辞典）

940. Mientras en mi casa me estoy, rey me soy.
わが家にいれば　王様でいられる

— 自分の家はいちばん気楽で居心地がいい、誰にも気兼ねする必要がなく、何をしても自由であると、自分の家にいる幸せを謳っている。
— スバルビィ諺辞典では、自分の運に満足していれば、他人の援助をあてにする必要がない、の意。
— コレアス諺集では、見出し形と共に、同義で異表現の“Mientras en mi casa me estó, rey me so. 同訳”がある。コレアス註：estó, so は、それぞれ estoy, soy のこと。また、類義で“Cada uno en su casa rey. 人は誰でも、家では王様”（筆者の諺辞典、諺199を参照）がある。
— スバルビィの解釈と反対のことわざが宝典（コバルビアス）に見られる、“Por mejoría, mi casa dexaría.　もっとよくなるためには、わが家を後にするだろうに”（わが家、わが祖国は、とても居心地がいいが、もし誰かがもっとよくなるチャンスを提供してくれれば、よろこんで家を離れるだろう－コバルビアス）
— 日本のことわざにも、“我が家楽の釜たらい”（釜をたらいの代わりに使うほど不自由な生活を

していても、自分の家はいちばん気楽でよいもの－類別ことわざ辞典)、“内ひろがりの外すぼり”（うちの中でばかり威張っていて、外にでればからきしいくじがない－同辞典）などがある。この最後のことわざの真意は、スペインのことわざにも通じる。外では、一日中他人に頭を下げていなければならないサービス業に従事しているものでも、いったん家に帰れば王様のように威張っていられるということ。そういう意味では、現代の日本の亭主族を見ていれば、おのずと理解できることわざである。

941. Mientras se duerme, todos son iguales.
寝ている間は，誰もかれも同じ

― 眠るということは、死と同じく、階級とか、身分の区別なしに全ての人が共有するものである。（スバルビィ）

― 例題：ドン・キホーテ第二部43章、島の太守にいよいよなろうとしているサンチョを不安がっているドン・キホーテに向かい、肩書きのないサンチョでもたましいは大事にすると、ことわざを持ち出す、“...y más, que mientras se duerme, todos son iguales, los grandes y los menores, los pobres y los ricos；ましてね、人間寝てえるうちは、身分の高え者も低い者も、貧乏人も金持もみんな同じでさ。”（続編二、高橋正武訳）

― 日本でよく聞かれる“寝る間が極楽”、“寝るほど楽はない”などは、どんな心配ごとや厭なことがあっても、寝ている間は忘れていられる、それらから解放されるの意であるが、スペインのことわざとは同じではないが、根底では相通ずるところがある。こちらの方は、せめて寝ている間は、現実世界での階級差、身分の差、貧富の差、もろもろの差別から解放されるという意味で、社会の下層にいる者にとっては、おおいなる慰めとなる。“寝た間は仏”という類義のことわざが、日本にはあるが、誰もかれも寝ている時は、悪人、善人の区別なく同じであるという意味であろう。よりスペインのそれに近いといえる。

942. Migajas (Las) del fardel, a las veces saben bien.
ずた袋のパンくずも　時にはおいしい

― なぜなら、ものが欠乏する時期がやってくると、以前粗末にしていたものが急に大事に思われてくるから。（バロス）

― コレアス、バロス諺集には、同義で異表現の“Las migajas del zurrón, a las veces buenas son. 同訳”が見られる。“fardel, zurrón－羊飼い、旅人などが背負う食料などいろいろなものをいれるずた袋”

― スバルビィ諺辞典には、見出し形が収載、たいてい人というものは、あまり価値がないものは軽視するが、いやおうなくそれを使わなければならない時が必ずやってくるものであるの意。（スバルビィ）

— “飢えては食を択ばず”、“ひもじい時にまずい物なし”、“空き腹にまずい物なし”などと類義であるが、スペインのことわざの方は、腹が空いている時は、どんなものでもおいしく感じられるの意にとどまらず、普段あまり大事にされていないようなものでも、時には顧みられるような事態が起こるものであるの意も表している。

943. Mi gozo, en un pozo.
わたしの喜びは　井戸の中へ

— 落ちてしまったということ。則ち、希望がかなえられなかった時にいう。
— コレアス諺集には、“Mi gozo en pozo ; nuestro gozo en pozo. / Nuestro gozo, en el pozo. / Mi gozo（o su gozo）, en el pozo.　わたしの喜びは井戸の中へ、われわれの喜びは井戸の中へ／われわれの喜びは井戸の中へ／わたしの（彼の、彼女の）喜びは井戸の中へ”が収載されている。コレアスによると、計画していたことや、期待していたことが、実現されなかった時に用いられる表現で、その他もろもろな事に応用できる。
— 宝典（コバルビアス）には、“Nuestro gozo / goço, en el poço.　われわれの喜びは、井戸の中へ”このことわざは、“goço, gozo, poço”のそれぞれの項目に収載されている。解釈は以下の通りである；1）われわれが期待していたうれしいことがその通りにならなかった時に用いる。2）われわれが期待の喜びで胸をいっぱいにしていたにもかかわらず、それが本当にはならなかった；これは次ぎのような話しから来ているに違いない、“われわれが喜んで飼っていた動物が、一緒に遊んでいた時に、あちこちと飛び跳ねてとうとう井戸へ落ちてしまい、溺れてしまった”というような。3）われわれがあれこれと思い巡らしていた希望が消えてしまった時にいう。
— バロス諺集には複数形“Nuestros gozos en un pozo.　われわれの喜びは井戸の中へ”が、見られる。
— “gozo－喜び”と“pozo－井戸”が対になった同韻で、語呂を合わせている、“ゴソ－ポソ”と、ことわざらしい短く、響きがいい言葉が用いられている。このように言葉が短く、響きがよく発音し易いのは、ことわざの大切な一要素であろう。
— 期待がはずれてがっかりすることをたとえたことわざが、こちらにもある；“開けて口惜しき玉手箱”、“開けて口惜しき浦島の子”、“開けて見たれば鳥の糞”など、前者ふたつは、浦島太郎の伝説からとったもの。
— 例題：セレスティーナ第21幕、最愛の娘メリベアを失った父親プレベリオが奥方に向かって嘆き悲しんでこういう、“¡Ay, ay, noble mujer! Nuestro gozo en el pozo. Nuestro bien todo es perdido. ¡No queramos más vivir!　ああ、奥よ！　われらが楽しみは元も子もなくなったのだ。われらの全財産が消滅したのじゃ。われらはこれ以上生きていたいなどとは思うまいぞ！”（魔女セレスティナ、大島正訳）

944. Mirar por el virote.
念には　念を入れよ

― スバルビィ諺辞典によると、大事な事柄には、充分過ぎるほどの入念さと、注意深さであたるようにという意で、“virote”は、ラテン語の“verutun”からきた。矢じりで補強された矢の意味で、矢にじっと視線を当てて、敵を倒すために狙いをつける意からきた熟語表現である。
― コレアス諺集には、“Mirar por el virote, ojo al virote. 同訳”が、収載。コレアスによると、弓の射手が（矢を放った後で）矢がどこへ落ちるかをずっと目で追うように、自分自身や物事に目を向けて気をつけよとおしえている。
― 宝典（コバルビアス）によると、“virote”は、“vira－矢”のことで、これは、兎、野兎、或いは、しゃこのようなある種の鳥を殺すのに用いられる。“mirar por el virote”は、それぞれの見張り役が、しなければならぬ事に気をつける意。これは、兎狩りで狩人たちが、自分たちの決められたそれぞれの持ち場から、追い立てられた兎に向かって矢を放ち、その間は、持ち場にじっとしていなくてはならない、そして、全てが終わった時に持ち場を離れて矢を捜しに行くという兎狩りからきた表現であると説明している。
― スペイン語辞書（スペイン王立アカデミー、1970年）によると、“大事なことには、細心の注意で気を配らなければならぬという意の口語的表現”
― 例題：ドン・キホーテ第二部49章、サンチョの賢い言葉で、人はみんな、めいめいが目を見張って、警戒しようという、“Yo gobernaré esta ínsula sin perdonar derecho ni llevar cohecho, y todo el mundo traiga el ojo alerta y mire por el virote, ...わしはこの島を権限も棄てず、わいろも取らずで、治めていぐだ。みんな々、めい々がしっかり目をあけてな、めい々が油断は禁物だ。...”（続編三、高橋正武訳）註：mirar por el virote－自身のことに気を留める。（Martín de Riquer）
― 物事は、注意の上にも注意して手落ちのないようにせよという“念には念を入れよ”がぴったりのスペインの口語表現である。

945. Misa y rezar, y casa guardar.
ミサもあげ　家も守る

― 家業と信仰を両立させるということ。現代風にいえば、仕事を怠らずに、ボランティア活動をするということになる。
― バロス諺集では、義務と信心は両立できるということ。
― コレアス諺集では、異表現“Misa misar y casa guardar. 同訳”が、見出し形と共に収載されている。
― 宝典（コバルビアス）には、類義で“Oyr missa y dar cevada, no estorvó jornada.　ミサ

も聞いて、大麦も（家畜に）食べさせて、一日の仕事を無事終えた”が見られる。

— “misa ミサ－casa 家”、“rezar ミサをあげる、祈る－guardar 守る”がそれぞれ同韻で対になっている、そのように見出し形では、語の配置がされている。

— スペインのことわざは、家業をおろそかにしないで、教会に行ってミサを聞き、お祈りもして、信仰を忘れないということを謳っているが、日本のことわざでは、その反対に信心が度を越して、仕事を怠り、生活に困るようになったり、迷信にはまりこんだりして、本来は幸せを願う信心のはずが、現世の地獄にもなるという“信心過ぎて極楽通り越す”がある。

946. Mocedad (La) holgada trae la vejez trabajada.
若い時に　怠けていたら、年とってから　苦労する

— いちばん知識の吸収力もあり、エネルギーが満ち溢れているはずの若い時に、勉強もしなければ、仕事もしない怠惰な生活をしていれば、当然年を取ってから、そのつけがまわってくるということ。

— コレアス諺集には、見出し形と共に異表現で、“La mocedad holgada trae la vejez arrastrada. 若い時の怠惰な生活、年とってからの苦しい生活”、“Mocedad ociosa, vejez trabajosa. 若い時の楽は、年とってからの苦”（筆者の諺辞典、諺60を参照）、“Mocedad sin bien es la vejez, más negra que la pez. 若い時に勤勉でないと、年とってからは真っ暗”などがある。また、同諺集には、類義で“Mientras moza, bien pasar ; después de vieja, trotar. 毎日楽しく過ごす娘っこは、年とったら、駆けずり回らなければならない”がある。バロス諺集にも、類義で“El que de joven no corre, de viejo trotar. 若い時に走らなかった者は、年とって速歩（はやあし）で駆ける”がある。註（筆者）：“trotar－駆けずり回る”の名詞 trote は、コバルビアス（宝典）によると、馬の速歩（はやあし）を意味し、歩くよりも速く、駆けるよりも遅い。“trotar las mugeres”は、女たちが、あちこち寄り道をしながら急ぎ足で歩く意。スペイン語辞書によると、trote には、口語的表現で、駆けずり回る、せわしく動く以外にも、骨の折れる仕事、激務の意味がある。ここからも、後者二つのことわざは、“駆けずり回る”に“骨の折れる仕事をする”をかけている。

— 例題：セレスティーナ第７幕、ぐうたらな娼婦に、やり手婆あのセレスティーナが、ことわざを持ち出してお説教する、“Y cuando seas de mi edad, llorarás la holgura de agora. Que <la mocedad ociosa acarrea la vejez arrepentida y trabajosa.> そしてあたしぐらいの年になったら、いま怠けていたことを泣くだろうよ。若い時に怠けると、年をとってから悔やまれもするし、つらい目にも会うもんだわさ。”（魔女セレスティナ、大島正訳）

— スペインのことわざを補足するように、日本では、言葉を変えて同じことを言う、“若い時の苦労は買ってもせよ”、“若い時の辛労は買（こ）うてもせよ”と。どこの国でも若い者に対する大人の気持ちは同じであるらしい。こちらの方は年取ってからどうのこうのとあからさまに

表現してはいないが、若い時に苦労しておけば、後あと役に立つから、自分からすすんで苦労しなさいと、おしえている。

947. Molino (El) andando gana.
回る水車は　儲ける

― 成功するためには、求めること、働くことが大事である。（バロス）
― コレアス諺集には、異表現で同義の“El molino andando gana, que no estando la rueda parada.　水車は止まったままではなく、回るから儲けるのである”、“El molino, mientras anda, gana. 水車は、回っている間は、儲ける”、“Molino que no anda, no gana.　回っていない水車は、儲けぬ”、“El molino va al agua. 水車は水を求める”などがあり、類義では、“El molinero andando velando gana, que no estándose en la cama; o velando.　水車小屋の番人は、ベッドにいるのではなく、寝ずに監視しているから稼ぐのである”、“Molinero de viento, poco trabajo y mucho dinero. 風車小屋の番人は、少ししか働かないが、たくさん稼ぐ”（水車小屋の番人に比べてそれほどたいした労働ではない－コレアス）などが見られる。
― 日本のことわざで、類義でたとえの水車まで同じなのは、“精だせば凍る間もなし水車”であろう、（たえず努力し、精出して働いている人は、さびつかないということ）、また、“転がる石には苔が生えぬ”（いつも生き生きとしていることのたとえ）、“流れる水は腐らない”（いつも仕事や勉学に励んでいる人は、停滞することがない）、“使っている鍬は光る”などこれら一連のよく聞かれることわざは、努力と日々の精進の大切さをたとえている。スペインのことわざのようにずばりと謳っているのもある。精出して、一生懸命働けば、貧乏するはずがないをたとえて、“鍬を担（かた）げた乞食は来ない”という。

948. Mona (La) , aunque la vistan de seda, mona se queda.
絹の衣装を着せても　猿は猿（猿に冠）

― いくら立派に身なりを整えても、地は隠せないということ。外観の装いをこらしても中身はそのまま変わらないので、表にあらわれるものである。（筆者の諺辞典、諺109を参照）
― バロス諺集によると、人の本性は、どんなに覆い隠そうとしても、そのまま現われ出るものであるというたとえ。
― イリバレン（格言の背景）によると、コレアス諺集（17世紀初め）に収載されているこのことわざは、ずっと以前にあったらしい。
― “猿に冠”というぴったりのことわざがあるが、スペインの諺の直訳は“猿に絹の衣装を着せても猿は猿である”。この表現に類似しているのが、“衣ばかりで和尚はできぬ”、“衣は僧をつ

くらず”であろうか。形だけをまねても何の役にも立たないことをたとえていう。スペインにも、日本にもこれとは反対のことわざが次ぎのようにある；“Compuesta, no hay mujer fea. おめかしすれば、ブスはいない（馬子にも衣装）”

949. Morder blando hasta tentar el bocado.
一口噛みつく前に　そっと歯を当てよ

— 歯が折れないように。（コレアス）人はいつでも物事に慎重でなければならない、時には、本格的な実行に移る前にあらかじめ準備し、用心することが肝要である。
— バロス諺集によると、歯を大事にするためにいう、また、商売を始めるにあたって、それが本当に利益につながるかどうかを調査するまでは、あまり熱を入れ過ぎたり、雑にするのではなく、用心深さが大切であるということを比喩的にいう。
— 日常的にたいていの人が経験していることに基づいた、たとえのおもしろいことわざである。固いものを噛んであっと思ってももう遅い。同じように、日本にもためになる諺がいくつかある；“転ばぬ先の杖”、“濡れぬ先の傘”、“よういうちから養生”など。こちらの方もたとえが日常的な経験に基づいていて頭にすっと入ってくることわざである。そのためか、現在でもよく用いられている。

950. Mostrar la horca antes que el lugar.
場所を見る前に　絞首台を見せられる

— コレアス諺集によると、人が何かと事を面倒にし、否定的な言葉で、相手の期待を打ち砕くような時に用いる、このことわざは、時代と人物により、意味が変わっていく。
— バロス諺集では、交渉が始まる前に、すでに面倒なことが持ち上がる時に使われるたとえ。
— コバルビアス（宝典、1611年）によると、“Mostrar primero la horca que el lugar.　最初に場所より絞首台を見せる”という格言は次ぎのような事実によるものらしい。小さな村では、丘の上に絞首台が高く立ててあるので遠くからでもそれがまず目についた、故に、たいていの場合、その場所を見る前に絞首台のほうが見えてしまうのは、当たり前のことだった。そこから、われわれを心よく受け入れてくれそうだと考えていた場所へ行ってみることにしたが、そこへ行き着く前に、はやるその気持ちをそぐような不適当なことや否定的なあれこれを見せられた時に用いる。
— スペイン語辞書（スペイン王立アカデミー）によると“enseñar, o mostrar, la horca antes que el lugar.”は、口語的俗語表現で、悪いニュースを予測する、或いは、何事かを否定するために不利な点や、障害になることなどを並べ立てること。
— いろいろな解釈があるが、現代でも使われているのは、いちばん最後に引用したスペイン語辞

書（1970年版）によるものであろう。コバルビアスの由来に関する説明がなければ現代ではたとえが難しい格言である。その当時はよく見られた光景であったらしいが。

951. La moza garrida, la casa cagada y la puerta barrida.
きれいな娘っ子、家の中はきたないが、掃除してある玄関

― 見栄っぱりで、おめかし好きの娘は、外からよく見える部分はきれいにするが、見えない所はほったらかしにするということ。家の中の汚れ、外の掃除を、人の外見と中身にたとえている。この諺では、定冠詞を含めて、全ての言葉の語尾が同韻である。（筆者の諺辞典、諺1001を参照）

― コレアス諺集、バロス諺集には、異表現で、“La moza de la plaza, la puerta barrida y la casa cagada.　気取りやの娘っ子、ごみだらけの家の中、掃除してある玄関”がある。

― 上記の諺集、同様にスバルビィ諺辞典には、“la moza－娘っ子”のことわざがいくつか次ぎのように見られる；“La moza como es criada ; la estopa como es hilada.　娘っ子は育てられたように、糸くずは紡がれたように”（なるということ。人には教育が、物にはどう扱うかが大事である－バロス）、“La moza en el tejado, no anda buen recado.　屋上にいる娘っ子は、いい用事のためではない”（人がいないようなさびしい所や、あまり使用されていない場所に若い娘がひとりでいるのは、よい目的のためではない－バロス）、“La moza en su componer, y el viejo en beber, gastan todo su haber.　娘っ子はおしゃれに、年寄りは飲むことに、全部のお金をつぎこむ”、“Moza galana, calabaza vana.　着飾る娘っ子は、中身のないヒョウタンのよう”（おしゃれをすることにしか興味のない娘は、あまり頭がよくないということをいう－スバルビィ）註：（筆者）“calabaza－ヒョウタン”には、薄のろ、間抜けの意味がある。“Moza garrida, o bien ganada, o bien perdida.　きれいな娘っ子、勝つか負けるかのどちらかだ”（若いきれいな娘は、すぐにいい結婚するか堕落してしまうかどちらか－バロス）、“Moza, guarda la lana, que oro mana.　毛糸をしまっておく娘っ子は、金（きん）を生む”（働くことを軽蔑しないようにと若い娘におしえている、それが幸福と繁栄をもたらすのだから－スバルビィ）、“La moza que bien lava, siete veces la hierve el agua.　よく洗濯する娘っ子は、７回湯をわかす”（よく働く娘は、労を惜しまず全てをこなす－バロス）、“Moza que muchas veces va a la plaza, alguna vez se embaraza.　よく外出する娘っ子は、いつか妊娠する”、“Moza que asoma a la ventana a cada rato quiérese vender barato.　しばしば窓からのぞく娘っ子は、安売りしたがっている”（窓から顔をだしている女たちは、純潔ではないと考えられている－スバルビィ）、註：（筆者）“venderse barato－自身を安売りする、相手を択ばない”に対して、反対の表現は、“venderse caro－えり好みする、お高くとまる”である。“Moza, sabe estotro : que de la perdiz el pecho y del conejo el lomo.　娘っ子よ、このことを知りなさい：シャコは胸を、ウサギはロースを”

（利己主義をおしえている、他の部分には目もくれずに、最上の部分をとるようにと－スバルビィ）、“Las mozas por bien parecer y las viejas por no aborrecer.　娘っ子たちは、よく見えるように、年とった女たちは、嫌悪されないように”（化粧をし、おしゃれをしなければならない－バロス）

— 若い娘たちについてのことわざをずらずらと見てきたが、コレアスの時代（17世紀初め）も現代でも、彼女たちの考えていることは同じである。だから今、これらに目を通していても少しも飽きず面白く感じられるのである。中に、しばしば窓からのぞく娘っ子のことわざがあったが、これはスペイン人の習慣といってもよいであろう。若い娘に限らず、主婦であれ、年寄りであれ、窓際に座って、外を歩いている人々を眺めるのが好きである。スペイン文学の中でも、現実でも、若い男が窓辺にいるきれいな娘をちらっと見て恋に落ちることがしばしばある。また、スペイン（他のヨーロッパの国々でも同じ）では、歩道にあるカフェがとても人気があるが、これは、座っていて歩いている人を眺めるのが楽しいからでもある。また、散歩している人は、座っている人々を見ながら歩いていくのが楽しいらしい。知った顔をみつけるとすぐに会話がはずむのもあけっぴろげな気質のスペイン人らしい。日本人だったら、見て見ぬふりをして通り過ぎてしまうだろう。さて、若い娘にふれている日本のことわざでは、“鬼も十八番茶も出花”、“娘一人に婿八人”、“娘一人に婿三人”、“酸漿（ほおずき）と娘は色付くと虫が付く”、“娘を見るより母を見よ”、“娘の子は強盗八人”（娘を大きくして嫁にやるまでには莫大な費用がかかる－岩波、ことわざ辞典）などがある。

952. Mozo de ruego, ruégote que hagas.
お願い来てと　呼んだ小僧に、お願いこれして

— 使用人でも、だれでも雇用している者を一度丁重に扱うと、いつでもそうしないと、用事をしてくれないということ。

— コレアス（諺集）によると、主人のところに来てくださいと、小僧にお願いすると、（傍に来た小僧に）これこれをして下さいともう一度お願いしなければならない。

— 小僧の使用人についての類義のことわざが次ぎのように見られる；“Al moço mal mandado, ponle la mesa y embíale al recado.（コバルビアス、宝典収載）／Al mozo mal mandado pónle la mesa y envíalo al recado.　怠けものの小僧には、食卓の支度をまず始めよ、それからお使いに行ってもらえ”（寄り道しないですぐに帰ってきてもらいたかったら。また、一般に怠慢な者を動かすには、何らかの褒美が必要である－スバルビィ諺辞典）、“El mozo y el amigo, ni pobre ni rico.　小僧と友は、貧乏でも、金持ちでもないのがいい”（なぜなら、貧しい使用人は盗みを働くし、貧しい友はねだるから、反対に、金があると、彼らはすべき義務をしないから－コレアス諺集）、“El mozo y el gallo, un año. / no más de un año.　小僧も雄鶏も、一年限り”（或る期間が過ぎると、使用人はあまりにも馴れ馴れしくなるので、

又、雄鶏は、雄としての繁殖力を失うので、それぞれ新しいのと取りかえる必要がある－スバルビィ）、“Al mozo nuevo, pan y huevo, y andando el año, pan y palo.　新米の小僧には、パンと卵、年が経つと、パンと棒きれ（懲らしめるため）”（いつでも来たばかりの小僧はかわいがられる－バロス）、“Mozo bueno, mozo malo, quince días después del año.　小僧は良いか、悪いか一年と十五日”（人の資質を本当によく知るようになるまでにはかなりの日数がかかる－スバルビィ）、“Ni mozo dormidor, ni gato maullador.　居眠りこっくりの小僧も、ニャーニャー鳴きのネコもいらない”、（役に立たない小僧も、うるさい猫も家には置きたくない－スバルビィ）、“Ni mozo pariente ni mozo rogado, no lo tomes por criado.　親戚の小僧も、頼んで来てもらった小僧も、使用人として使うな”（これら二つの場合には、自由に命令できないから－スバルビィ）

― “人を使うは苦を使う”という日本のことわざが自然に頭に浮かんでくる一連のスペインのことわざである。また、いかに使用人にてきぱきと気持ちよくたくさんの仕事をしてもらうか、主人はいろいろ心配り、気配りをしなければならない、そういうことをずばりと言い表しているのが“使う者は使われる”（人を使うということは、逆にその人に使われるようなものである－岩波、ことわざ辞典）である。

953. Mucha (La) conversación acarrea menosprecio.
おしゃべりが過ぎると　見くびられる

― あまりにも気安くしすぎると、相手から無作法な振るまいをされ、ぞんざいな扱いを受ける羽目になるということ。

― バロスによると、人とあまりにも打ちとけてぺらぺらと内輪の事情まで話してしまうと、しかるべき丁重な扱いをしてもらえなくなる。

― 見出し形とともに、スバルビィ諺辞典には、異表現で、“La mucha confianza, o satisfacción, o conversación, o familiaridad, es causa de menosprecio.　信頼、／償い、／おしゃべり、／なれなれしさなどが過ぎると、相手から見くびられる”（自分より下の者に寛容な態度で接する場合でも、あまりにもくだけ過ぎると、同等の者のように相手からみなされてしまう－スバルビィ）、また、コレアス諺集にも異表現で、“Mucha (La) conversación, es causa de menosprecio en el necio.　おしゃべりが過ぎると、愚者から見くびられる”がそれぞれ収載されている。

― 人に打ち解け過ぎると、相手から急になれなれしい態度をとられ、ぞんざいな返事が返ってきたりして戸惑うことがあるのは誰でも経験があるだろう。特にあまり教養がないサービス業に従事している者がそうなる場合が多い。スペインのことわざに相当するのが、“心安いは不和の基”であろうか。こちらの方は、一般的にあまり親しくなり過ぎるとお互いに遠慮がなくなり、かえって不和の基になるというおしえで、類義で“親しき仲は遠くなる”、“親しき仲にも

礼儀あり”などがあり、友人、家族、親戚など、同等の者を指すが、スペインの場合は、どちらかといえば使用人など自分より目下の者を指すように思われる。

954. Mucha (La) cortesía es especie de engaño y de falsía.
礼過ぎれば　偽りとなる

— こちらにはいくつかの類義のことわざがあるが、いちばん近いのが“礼繁（しげ）ければ実心衰う”であろうか。丁寧過ぎるのは、かえって真心からでているのではなくて、口先だけの礼儀に思われていかにも嘘っぽいということ。類義の“礼も過ぎれば無礼になる”、“慇懃無礼”などは、よく用いられることわざである。また、“礼過ぎれば諂（へつら）いとなる”というのもある、度を過ぎた礼儀はいかにも相手のご機嫌をとっているようで、いい結果は招かないといっている。何事にも程度というものがあり、程度を超えたものは、足らないものと同じようによくないとおしえているのが“過ぎたるは猶及ばざるが如し”（論語）である。

955. Mucha diferencia hay de las obras que se hacen por amor a las que se hacen por agradecimiento.
愛ゆえにする事と　感謝ゆえにする事には　おおいなる違いあり

— 人に何かしてあげるのでも、愛しているからするのか、単に感謝しているからするのか、行為は一見同じように見えるかもしれぬが、その本質は全然違うといっている。

— 例題：ドン・キホーテ第二部67章、公爵家の腰元のひとりが自分に惚れていたと思いこんでいるドン・キホーテは、その娘が自分にしてくれたことに対して、騎士というものは感謝の念を忘れてはならぬといって、ことわざを口にする、“...mucha diferencia hay de las obras que se hacen por amor a las que se hacen por agradecimiento. ...恋ゆえにすることと、感謝ゆえにすることとは、大ちがいなのじゃ。”（続編三、高橋正武訳）

956. Mucha parte de la salud es querer ser sano.
健康の大部分は　健康でありたいという気力から

— 本人の気力しだいで、病気が悪くなったり、良くなったりするということ。いつも健康でありたいと願っていれば、病気にはならないという、人間の精神と肉体との密接な関係に基づいていることわざである。日本のことわざでも同じことをいっている；“病は気から”、“百病は気から起こる”、“諸病は気より”、“病気は気で勝つ”など。

— バロス諺集によると、われわれに起こる不幸な出来事の対処法は、おおかたそれを克服したいというわれわれの意思の力と、適切、且つ効果のある手段によるものである。同諺集には、健

康についてこういうことわざもある、“Mucha salud no es virtud.　非常に健康であるということは、美徳ではない”（天の恵みである健康を自慢する者を咎めている－バロス）

― 見出し形の異表現には、“Gran parte es de la salud, desearla.　健康を願うことが、健康の秘訣”（筆者の諺辞典、諺623参照）、“Gran parte es de la salud conocer la enfermedad.　己の病を知ることが、健康の秘訣”（同上、諺622参照）がある。日本のことわざの視点が＜病はなんとか...＞から始まっているのに対して、スペインのそれは＜...de la salud 健康は...＞から始まっているその相違が面白い、これは国民性の違いからきているのだろうか。一般的にスペイン人は、楽観的だし、日本人は悲観的である。

957. Muchas candelitas hacen un cirio.
たくさんの小さなロウソクも　大きなロウソクとなる（塵も積もれば　山となる）

― ごく小さなものでも、たくさん集まれば大きなものになるというたとえ。

― コレアス諺集によると、“Muchos pocos hacen un mucho.　たくさんの小さなものも大きなものとなる”の意。小さなたくさんのロウソクを夜見ると、大ロウソクの炎のように見える。また、昼間からちびちびと何回かに分けて飲む酔っぱらいについてもいう。

― バロス諺集には、同義で“Un grano no hace granero, pero ayuda al compañero. ひと粒も積もれば、穀倉をいっぱいにする（塵も積もれば山となる）”（筆者の諺辞典、諺621を参照）、“Grano a grano, hincha la gallina el papo.　一粒ずつメンドリは、餌袋をいっぱいにする”などがある。

― スバルビィ諺辞典には、異表現で“Muchas candelillas hacen un cirio pascual.　たくさんの小さなロウソクも、復活祭の大ロウソクとなる”がある。些細なことでも度重なればおおきな結果になることをたとえていう（良いことにも、悪いことにも両方に使う）。

― 同義でたとえの異なることわざが日本にはたくさんある；“土積もりて山を成す”、“小さな流れも大河となる”、“水積もりて川と成る”、“砂（いさご）長じて巌となる”など。

958. Muchas cosas parecen sin razón que quien las sabe en sí buenas son.
見たと　嘗めたは　大違い

― 外から見て判断したことと、実際の内容がまるっきり異なっていることをいう。

― スペインのことわざの直訳は、“本来善い事でも、多くの場合悪いと思われている”バロス諺集によると、正しく事の善悪を見分けるためには、その事柄について深く知る必要がある。

― 浅薄な判断は慎むべきだといっている見出しの訳の日本のことわざも、見ただけと、実際に味わってみたのとは大きな違いがあることから、外見と内容がひどく異なっていることをたとえ

ている。こういう間違いをわれわれはしばしば犯しているとスペインのことわざは忠告している。類義の日本のことわざには、“聞くと見る（見ると聞く）とは大違い”（噂と事実は違うものだということ－岩波、ことわざ辞典）、“聞いて極楽見て地獄”などがある。

959. Muchas hijas en casa, todas son brasa.
大勢の娘たちが寄れば、囲炉裏の赤い炎となる

— 皆が熱くなってかっかとしている。女が数人集まるとすぐ言い争いになり、いがみ合うということ。
— バロス諺集によると、女が集まると、互いにけんかをしたり、口論を始めるから。これは女に備わっている特質をいう。
— スバルビィ諺辞典では、異表現で“Muchas hijas en casa, toda se abrasa.　大勢の娘たちが家にいると、皆が熱くなる”がある。娘たちが大勢寄り集ると、それぞれのふるまいがおおげさになること。コレアス諺集には、“Muchas hijas en casa, todas son brasa; o todas son brasa.”が収載。
— 次ぎの一連の単語“muchas-hijas-todas”、“casa-brasa”の語尾は、それぞれ同韻の組み合わせ。
— 日本のことわざで表現がいちばん近いのが“女三人寄れば囲炉裏の灰飛ぶ”であろう。このことわざからは、女たちが盛んにおしゃべりしていてやかましいというより、スペインのことわざのように互いにけんけんがくがくと言い争っているような印象を受ける。また、ことわざ特有の誇張表現を用いているのが、類義の“女三人寄れば富士の山でも言い崩す”である。女たちがそれぞれ勝手な主張をしてやかましいさまがよく出ていることわざである。現在でもよく使われているのが、“女三人寄れば姦しい”である。

960. Muchas manos a un plato, pronto tocan a rebato.
大勢の手が　一皿に伸びると　すぐに警鐘が鳴る

— 大勢の人が集まって使い始めると、すぐに使い果たす。（バロス）
— スバルビィ諺辞典には、“Muchas manos en un plato pronto tocan a rebato. 同訳”大勢の人が同じ仕事に加わると、すぐにそれを終えることができる、一人だけの義務として仕事をするよりずっと早いということ。
— バロスとスバルビィの解釈がそれぞれ異なっているが、バロスのほうが正しいと思う。それは“tocan a rebato”という意味による、スペイン語辞書（スペイン王立アカデミー）によると、1）今日では使用されていないが、敵による突然の襲撃の危険がある場合には、村人に対してすぐに防衛体勢に入るように、警鐘が速く打ち鳴らされた。そこから、“危険を告げる警鐘を

ならす意”

２）比喩的表現で、どんな種類の危険であれ、その事を知らせる警告を発すること。

上記の説明を見ても分かるように、ことわざの後半の部分“pronto tocan a rebato”は、“すぐに底が尽いてしまうと警告を発している”と解釈すべきである。

― 少人数の核家族と大家族が一ヶ月に食料に使う費用を比較すればすぐ分かることわざである。日本の類義のことわざには“人跡繁ければ山も窪む”、（大勢の人が行き来して踏めば、山も次第に窪んで低くなる意から、わずかなことでも度重なれば大きな結果になることのたとえ。－故事、ことわざ活用辞典）、“塵も積もれば山となる”などがある。

961. Muchas veces el necio dice un buen consejo.
愚か者でも　たびたび　良い忠告してくれる

― 一見価値がないように見える者の忠告でも、簡単に退けるなとおしえている。（バロス）

― こちらにも同じような発想のことわざがいくつかある；“愚者も賢者に助言を与え得る”、“愚者も一得”（愚か者でもたまには名案を持つ－出典は史記）、“能なしの能一つ”、“馬鹿にも一芸”、“負うた子に教えられて浅瀬を渡る”（賢い者や経験の深い者でも、時には愚かな者や未熟な者から教えられることもあるというたとえ－故事、ことわざ活用辞典）、“三つ子に習うて浅瀬を渡る”、“腐り縄にも取り所（どころ）／腐り縄にも取柄（とりえ）”（捨ててしまうような価値のない物でも、用い方次第で役立つことがある意－岩波、ことわざ辞典）など、いずれも通常の社会では評価されていないような者でも、何かしら取り柄があるものであるといっている。

962. Muchas veces, el que escarba, lo que no quería halla.
首を突っこむ者は　たびたび　見つけたくない物を　見つける

― 好奇心が強く、あれこれと詮索好きな者に対する警告のことわざ。

― 宝典（コバルビアス）には、“Muchas vezes el que escarva, lo que no quería halla. 同訳”が収載。あまりにも好奇心が強い者が、いろいろなことに首を突っこんで嗅ぎ回っているうちに、自分の害になるようなことに出くわしてしまう時に用いられる。

― スバルビィ諺辞典には、“Muchas veces, el que escarba, lo que no quiere halla. 同訳”が収載。われわれに被害をもたらすような困難な事態にあまり深入りしないようにとおしえている。

― スペインの類義のことわざには、“El que escucha, su mal oye.　耳をそばだてる者は、自分の悪口が聞こえる”がある。（筆者の諺辞典、諺475を参照）

963. Muchas veces se ríe de cosa que después se llora.
今笑っていることで　たびたび　後では泣くことになる

— 現在、幸せで満ちたりているとしても、それが長く続くとは限らない、いつどんな災難がふりかかってくるかもしれない、だからいつでもどんなことにも謙虚な振るまいをしなさいと、特に傲慢な人に対していう。

— 類義のスペインのことわざには、“No diga el caminante de este agua no beberé.　旅人よ、この水は飲まないと言いなさんな”、“Nadie diga de este agua no beberé.　誰もこの水は飲まないと言いなさんな”などがある。いずれも、この世はくるくると変わり、確かなことは何ひとつない故に、断言するようなことは口にすべきではないとおしえている。

— 人の運命の変化、無常なこの世を謳っていることわざは、こちらにも多数ある。見出しのスペインのことわざに近いのは、“昨日は人の身今日は我が身”（人の身に起こった災難を他人事と思わないで自身への戒めとせよ）、“人の上に吹く風は我が身に当たる”、“明日は我が身”など、いずれも人の運命は予測できないことをたとえている。

964. Mucho comer trae poco comer.
大食は　小食を　もたらす

— 何故なら財産を食い尽くすから。（コレアス）　終いには、健康は損なわれ、貯えもなくなり、少ししか食べられなくなるから。（バロス）

— “mucho comer－多食”と“poco comer－少食”の反意語を対句とし、語尾には韻を踏ませている。ことわざの特徴のひとつは、短く言い易いことであるが、これなどはその典型的なものであろう。現代は予備軍も含めて糖尿病を患っている人が多数いるが、今でも通じることわざである。同義で異表現の“El que más come, menos come.　大食は、小食なり”（筆者の諺辞典、諺485を参照）がある。

— 日本には、働かないでただ遊びほうけて食べていれば、どんなに財産があってもいつかは尽きるとおしえていることわざが多数ある、“座して食らえば山も空し”、“居食いをすれば山も尽きる”、“遊んで食らえば山も尽きる”など。

965. Mucho corre la liebre, pero más el galgo que la prende.
兎はとても速く走るが　それを捕らえる　猟犬はもっと速い

— 優れた能力を備えている故に、自分には出来ないことはないと考えている狡猾な人をいう。（バロス）

— コレアス諺集には、異表現で“Mucho corre la liebre, pero más el galgo, pues la prende.

同訳”、“Mucho corre la liebre, pero más el galgo que la alcanza y toma por el rabo. 兎はとても速く走るが、それに追いつき、尻尾で捕らえる猟犬はもっと速い”がある。

― 宝典（コバルビアス）によると、とても速く走ることができる者、特に走って逃げている者を指して、“No le alcançará el galgo.　猟犬でも追いつけないだろう”という。

― スペインの類義のことわざには、“Mucho sabe la zorra, pero más quien la toma.　狐はずる賢いが、捕る者は、もっと賢い”、“El que toma la zorra y la desuella ha de saber más que ella.　狐を捕え、皮をはぐ者は、狐より利口でなければならぬ”（筆者の諺辞典、諺511を参照）がある。

― 上には上があるものである。少し能力があるからといってあまり自慢しないほうがいいともとれることわざである。スペインのことわざに類似しているのが“上見ぬ鷲”であろうか。鳥の中でも最強の鷲は、上からの襲撃を気にかける必要がないように、何者も恐れる心配のない最高の地位の者は、悠々としている、また、傍若無人なふるまいをしておごり高ぶっているということ。

966. Mucho el lobo se huelga con la coz de la oveja.
狼は　羊の足蹴りが　とても楽しい

― 力のある者は、弱者のおどしをあざ笑う。（バロス）

― コレアス諺集には、古語で、“Mucho el lobo se güelga con la coz de la oveja. 同訳”が収載。筆者－同義の成句では、“dar / tirar coces contra el aguijón.　無駄な抵抗をする、かなわぬ人に楯突く”がある。

― ことわざにはよく動物が比喩に用いられるが、さしずめ、狼と羊、先きの兎と猟犬などは人気のあるカップルである。必ず、弱者と強者の組み合わせになっている。われわれの世相を反映していて面白い。これはむろん日本のことわざでも同じである。弱い者が、自分の非力を顧みずに強者に手向かうことをたとえて“蟷螂（とうろう）の斧”というが、“蟷螂”は、かまきりのことである。同義のことわざも全て動物をたとえて言っている。“鰐（ごまめ）の歯軋り”（ごまめは、片口鰯を干したもの）、“蜘蛛網張って鳳凰（ほうおう）待つ”、“竜の髭を蟻が狙う”など、こちらも弱者と強者が極端に小さいものと大きいものの組み合わせになっていて誇張的に表現されている。こちらの方が、スペインのそれより想像力が豊かで、意外なたとえになっている。

967. Mucho estirar hace quebrar.
引っ張り過ぎると　裂ける

— 物事は急いでしたり、限度を越えると結局は取り返しのつかぬことになるということ。（バロス）

— たとえが当り前すぎることわざ。類義のことわざでは、日本のそれの方がたとえが面白いのがある、“慌てる乞食は貰いが少ない”（慌てるとかえって貰うものが少ない、平静さを失うな）、“慌てる蟹は穴へ入れぬ”など、また逆の発想による“急がば回れ”、“ゆっくり急げ”、“近道は遠道”などがある。見出しのことわざにぴったりなのが“急いては事を仕損じる”であろう。

968. Mucho gasta el huésped que viene, pero más el que le recibe y casa mantiene.
来る客は　とても金を使うが、宿を維持し　迎える主人は　もっと使う

— 旅をするには、宿に泊まったり、いろいろ費用がかかるが、旅館の維持費はそれどころではないとそのままを伝えていることわざ。

— スバルビィ諺辞典には、異表現で“Mucho gasta el que va y viene, pero más el que casa mantiene.　来る客は金を使うが、宿を維持している主人はもっと使う”がある。旅人を泊まらせる宿屋がその維持費に莫大な金がかかると誇張している。こういう風にいうのも無理はない、何故なら、“Los gastos de una casa se parecen a las penas del infierno.　宿の経費は、地獄の刑罰に似ている（終わりのない苦痛である）”から。

— コレアス諺集には、同義の異表現で、“Mucho gasta el güésped que viene, pero más el que le atiende, el que le recibe y casa mantiene.　来る客は、とても金を使うが、宿を維持し、迎え、もてなす主人はもっと使う”、“Mucho gasta el güésped que viene, pero más el que los manteles tiende.　来る客は、とても金を使うが、テーブルクロスを広げる主人はもっと使う”、“Mucho gasta el que va y viene, pero más el que reside y el que la casa mantiene.　来て帰る客は、とても金を使うが、宿に住み、維持している主人はもっと使う”などがある。

— 一軒の普通の家をきちんと整えて維持するのも大変である、修理、修繕にも費用がかかる。ましてや、客を迎える宿がどんなに経費がかかるかをいろいろな表現で言い表わしている。どんな商売であれ、接客業の大変さをいう。それに対して金を払って帰っていく客のほうは気楽でいいとも受け取れることわざである。

969. Mucho hablar, mucho errar.
言葉多ければ　間違い多し

― 口数の多い者には、えてして知識が浅薄な者が多い。だから話している中に、ボロが出てしまい無知をさらけだしてしまうということ。これを日本のことわざでは、“しゃべる者に知る者なし”という。

― 話すことについては、次ぎのようなことわざがいくつかある；“El mucho hablar es daño y el mucho callar no es provecho.　しゃべり過ぎは損である、黙りこくっているのも得ではない”（これを日本のことわざで置きかえると＜多言は身を害す、言わぬ事は聞こえぬ（大事なことは念を押しておくがよいということ）＞となる)、“Mucho hablar y mucho reír, locura dan a sentir.　しゃべり過ぎたり、笑い過ぎると、気違いだと思われる”、“Mucho hablar y poco saber, mucho gastar y poco tener, mucho presumir y poco valer, echa muy presto al hombre a perder.　よくしゃべるが無知で、よく出費するが貧しく、よく自慢するが無能であると、人はすぐにも破滅の道たどる”

― 上記のスペインの一連のことわざを見ると、おしゃべりはよく思われていない、しかし、どちらかといえば、スペイン人は話し好きの国民である。初対面の人間同士でもすぐに会話がはずみ意志の疎通がうまくいく。これはスペイン人の良い面であると思う。日本のことわざでも“言わぬは言うに勝る”、“言わぬ言葉は言う百倍”、“多言は一黙に如かず”、“沈黙は金”などと、多言を戒めているのが断然多い。

970. Mucho sabe la zorra, pero más quien la toma.
狐はずる賢いが、捕る者は、もっとずる賢い

― 悪知恵があると思われていた者より、さらに悪知恵のある者がいるというたとえ。

― 同義で“El que toma la zorra y la desuella ha de saber más que ella.　狐を捕らえ、皮をはぐ者は、狐より利口でなければならぬ”（筆者の諺辞典、諺511、965を参照)、“Mucho sabe el ratón, pero más sabe el gato.　ネズミは利口だが、ネコはもっと利口”などがある。

― 例題：セレスティーナ第19幕、性悪女に騙されるな、あの女の悪さのうわてをいけよ、とカリストの従者のひとりが仲間にことわざを用いていう、“...：que <quien engaña al engañador...> ya me entiendes. Y <si sabe mucho la raposa, más el que la toma>.　つまりごまかす奴をごまかす者はだ...、お前は俺の言うことが判っているな。女狐めにどえらい知恵があるのなら、そいつを捕らえたやつはもっと知恵者なんだぜ。”（魔女セレスティナ、大島正訳）筆者：“raposa”-zorra と同意で女狐のこと、また、口語的表現で、ずるい人、狡猾な人。

― 日本のことわざの“上には上がある”と類似のことわざだが、スペインの方は、たとえに

“zorra, raposa－女狐、悪知恵が働く、狡猾である、ずるい”をもってきている、そして、それを捕らえる者は、さらに悪知恵が働かなければならぬと悪い意味に使っている。しかし、日本のことわざの方は、“岩波、ことわざ辞典”によると、“人間や物事の評価で、最上と思われることにもさらに上があるということ”の意で、さらに優れた者、さらに優れた事を指して、良い意味に用いられている。

971. Muchos ajos en un mortero, mal los maja un majadero.
ひと鉢に　たくさんのニンニク　一本のすりこぎでは　上手にすりつぶせぬ

— 一人で一度にいくつもの商売をやっていくのは、とても難しい、或いは、一人で多数の人々の合意を得るのは難しい。（バロス）

— 類義では、“El que / Quien mucho abarca, poco aprieta.　一度にたくさん持つと、しっかりと握れない”、“El que / Quien mucho corre, pronto para.　速く走る者は、すぐとまる”（筆者の諺辞典、諺488を参照）、“El que dos liebres sigue, tal vez caza una; y muchas veces ninguna.　二兎追う者は、一兎を得るかもしれず、しかしたいていは一兎をも得ず”（同上、諺473を参照）などがある。いずれも、ゆとりを持って最後まで楽しく遂行できる事以外には、人はあれこれと手を出すべきではないとおしえている。

— “ajo－ニンニク”は、スペイン料理やスペイン人には欠かせない食べものである。スペイン特産のオリーブ油で炒めると香ばしく、そのままでも食べられる。筆者が下宿していた所の奥さんは、よく米とニンニクをナベでいっしょに炒め、よい香りがしたところで水をさし、ごはんを炊いていた。そのようにして炊きあがったごはんは普通に炊くより、何倍もおいしくなる。コバルビアスの宝典には、次ぎのような格言がある；“Vino puro y ajo crudo, hazen andar al moço agudo.　純正のワインと生のニンニクは、若造をきびきびさせる”（農作業や仕事で－コバルビアス）、“Ajo crudo y vino puro, passan el puerto seguro.　生のニンニクと純正なワインで、峠をしっかりと越えていく”（当時、旅に欠かせない食べ物は、ニンニク、玉ネギ、ワイン、パンなどであった、特にニンニクとワインは活力とエネルギーを与え、体を温めてくれるので、険しい冬山の峠を登っていくのもそんなに辛くはなかったの意－筆者）

— 日本には、“二足の草鞋（わらじ）を履く”といって、同時に二つの仕事を行う場合に用いることわざがあるが、ことわざ辞典（岩波）によると、本来は、草鞋を比喩と見て、両立しがたい二つのことを行うことに使われていたそうである。（二足の草鞋を同時に履くことは無理だから）スペインの見出しのことわざは、後者の解釈に類似していると言えるだろう。

972. Muchos amenes al cielo llegan.
何回もアーメン　唱えれば　天に届く

— 強く願うと、欲するものをいつかは手に入れたり、望むことを成し遂げることができるということ。
— バロス諺集には、類義のことわざ“Pobre porfiado saca mendrugo.　しつこくねだる乞食は、パンのかけらを得る”がある。バロスによると、粘り強く頼めばいつかは、欲しいものを得ることができる。一般的には、われわれが計画していることを実現させるために、他者からの協力を求めるような時に用いられる。
— コレアス諺集には、“Muchos amenes al cielo llegan; o suben al cielo.　何回もアーメン唱えれば、天に届く、或いは天に昇る”が収載。
— 宝典（コバルビアス）には、異表現で“Amén amén, al cielo llega.　アーメン、アーメン唱えれば、天に届く”が収載。コバルビアスによると、何らかの傷を負わされた人々が、屈辱に対する正義を求める時、或いはありがたいご利益を願う時、彼らの祈りや声が神の耳にまで届いていくということ。
— 日本の類似のことわざには“蟻の思いも天に昇る／天に届く”（蟻のように無力な者でも一心に努力すれば、その願いは天に届き、望みを達することができる）、“一念天に通ず”などがある。表現も意味もよく似ているが、日本のことわざの方は、強く願うだけではなく、一心こめてやれば必ずできると、大変な努力を求めているのが、いかにも日本人らしい。その反対にスペインではコツコツと地道な努力をする人より才気ある人が好まれたり、天からもたらされた才能ある鬼才や、生まれつき華のある人がもてはやされるお国柄である。数多くの天才が輩出したのもこの国である。最後に、次ぎのようなスペインのことわざもあることを付け加えておく；“A Dios rogando y con el mazo dando.　槌をふるいながら神に祈れ（天は自ら助くる者を助く）”（人は努力すれば神に助けてもらえるが、怠けていながら神の助けだけを望まぬがよいという意－筆者の諺辞典、諺15を参照）

973. Muchos amigos en general y uno en especial.
普通の友人はたくさん　特別な友人はひとり

— 人は誰とでも、うまくつきあうべきだが、信頼を寄せて、誠実なつき合いが出来るのは、それに応えてくれる一人の親友だけであるということ。（バロス）
— 類義では“Amigo de muchos, amigo de ninguno.　全ての人の友は、誰の友でもない”（筆者の諺辞典、諺58を参照）がある。
— 喜びや悲しみを共感できる真の友をみつけるのは、本当に難しい、一人でもいれば運がいいほうである。中国では、極めて親密で破れることなくいつまでも続く堅い友情をいろいろな比喩

で言い表わしている；“金石の交わり”（漢書－金属や石のように堅い)、“金蘭の契り”（易経－金属のように堅く、らんの花のように美しい)、“水魚の交わり”（三国志－魚が水を離れては生きていけないような親密な友情)、“断金の交わり”（易経－金を断ち切るほど強い）など、その他まだ多数あるが、いずれも男の友情が、どんなに堅く、強いかがその用いられている比喩によってよく分かる。

974. Muchos gozques a un can, mal trato dan.
小さな犬でも　多勢でかかれば　大きな犬を噛む

— 弱小であっても多勢ならば、強力な敵を倒すことができるとたとえている。(バロス)

— コバルビアス（宝典）によれば、“gozque－小さな犬”とは、貧しい下層階級の人々が飼う小さな体型の犬のこと、その足は短く、体と鼻面が長い、昼間は一日中眠っているので、夜になると一晩中、目を光らせ、吠える。故に、隣近所にとってはうるさく、女のもとを訪れる恋人には迷惑であり、泥棒には憎まれる。

— 日本の類似のことわざはいくつかある；まず“多勢に無勢”は、単に大人数と少人数を比較して、多勢を相手に少数でかかっても勝ち目はないということ。また、“窮鼠（きゅうそ）猫を噛む”は、弱い者であっても追いつめられれば、かえって強者に刃向かい、苦しめることがあるというたとえであり、“闘う雀人を恐れず”、“戦う者はその身を忘るるものなり”は、非力な者でも、夢中で行えば、思わぬ力を発揮できることをそれぞれいっている。

975. Muchos parientes hay para sólo reñir y aconsejar, mas no para socorrer y remediar.
援助し、手を打ってくれるためではなく　小言を言い
忠告するためにだけ　たくさんの親戚がいる

— 何故なら、助けが必要になると、親類であることに知らぬふりし、義務を果たさなくてもいいように、親戚関係を拒否する。(バロス)

— 親類はいざという時には、頼りにならないということ。何の役にも立たぬ口先だけの忠告はしてくれても、本当に必要な手は貸してはくれない、とスペインのことわざは言う。こちらにも類義で、“遠い親戚より近くの他人”、“遠水近火を救わず”、“遠き親子より近き他人”などがある。いずれも、事がさし迫ったような場合には、遠くに住んでいる親戚縁者より近くにいる他人のほうがずっと頼りになるから、隣近所のつき合いを決しておろそかにはするなとおしえている。

976. Muchos pocos hacen un mucho.
たくさんの小さなものも　大きなものとなる
（塵も積もれば　山となる）

― ほんのわずかな物でも、積もりつもれば莫大なものとなる。
― 同義では“Muchas candelitas hacen un cirio. たくさんの小さなロウソクも、大きなロウソクとなる”（筆者の諺辞典、諺957を参照）、“Un grano no hace granero, pero ayuda al compañero.　塵も積もれば山となる”（同上、諺621を参照）、“Grano a grano, hincha la gallina el papo. 一粒ずつメンドリは、餌袋をいっぱいにする”などがある。
― 例題：ドン・キホーテ第二部７章、サンチョは、三度目の出立にあたり、月いくらときまった給金が欲しいと、ドン・キホーテにいくつものことわざを用いてもっともな要求をする、“En fin, yo quiero saber lo que gano, poco o mucho que sea; que sobre un huevo pone la gallina, y muchos pocos hacen un mucho, y mientras se gana algo no se pierde nada. つまりね、わしゃ、多い少ねえはどうでも、自分のかせぎ高を知りてえね。にわとりも玉子のあるそばに玉子を生むだし、ちり積もって山となるだし、いくらかずつでも稼げれば、損じゃけっしてねえだ。”（続編一、永田寛定訳）
― スペインでも、こちらでも同義、類義のことわざは多数ある、また“ことわざ辞典、岩波”によると、似たような表現は、古代中国でもいく通りもあったらしい。そうすると、ヨーロッパ、アジアなど広い範囲で用いられてきたことわざだと推察される。

977. Muchos son los que tienen honra y pocos los que la saben guardar.
多くの人が名誉を有するが　少しの人しかそれに従わない

― 要職につきながら、正直且つ公正にふるまうことができない人々を指していう。（バロス）
― 特に、政治に携っている人間にはこのことわざがぴったりである。どこの国でも政治家の汚職が絶えない。しかし、大物の悪事は次ぎのことわざのように見逃されることがしばしばある；“米食った犬が叩かれずに糟食った犬が叩かれる”、“皿嘗めた猫が科を負う”（魚を盗んだ猫が逃げてしまい、後からきて皿を嘗めていた猫が酷い目にあうように、巨悪は裁かれずに、小物ばかりが罰を受ける－故事、ことわざ活用辞典）、“網にかかるは雑魚ばかり”など、実際にこの社会で起こっている真実を鋭く突いている。

978. Muchos van a casa del muerto y cada uno lleva su duelo.
多くの人が死者の家を訪う　それぞれのお悔やみを抱えて

― われわれの近くにいる人々がどんなに違った考えや、利己心を持っているかが透けて見える時

にいう。（バロス）類義では“Muchos van al mercado, cada uno con su cuidado.　多くの人が市場に行く、それぞれの心配事を抱えて”、“Cada uno habla de la feria según le va en ella.　人は誰でも、儲けに応じて市を話す”（筆者の諺辞典、諺203を参照）などがある。

— 人は誰でも、自分の経験に基づいて物事を見たり、自分の利害に応じた思惑を抱いているということをたとえている。例えば見出しのことわざは、葬式の時に、生前の死者と死者を取り巻いている人々の間の利害関係や愛憎関係がはっきり分かると言っている。日本には、欲だけは忘れない人間の浅ましさを皮肉った“泣く泣くも良い方を取る形見分け”ということわざがある。親兄弟さえもそうなのであるから、後は想像がつくであろう。

979. Mucho va de Pedro a Pedro.
同じペドロでも　大違い

— 同じような状況にいる人間の資質に大きな差があることをたとえていう。例えば同じ職場にいて似たような仕事をしていても出来る人と、出来ない人がいる、その差を言い表わしている。

— バロス諺集によると、人の資質、値打ちなどの相違をいう。

— スバルビィ諺辞典には異表現で、“¡Cuánto va de Pedro a Pedro!　どれくらいペドロとペドロは違うのだろうか！”、“Tanto va de Pedro a Pedro.　それほどペドロとペドロは、違う”がある。スバルビィは、同じような環境にいる二人の人間がする正反対の行動から、このような格言が生じたのであろうと言う。

— “Pedro－ペドロ”は、男子の洗礼名、“San Pedro”は、聖ペトロのこと。“Pedro”を用いた熟語“como Pedro por su casa－わがもの顔で”、“entrar o colarse como Pedro por su casa.　あたかも自分の家へ入るように、他人の家へ何の気兼ねもなく入ること、或いは入りこむこと”（イリバレン、格言の背景）諺には“Bien se está San Pedro en Roma.　聖ペトロは、ローマに居れば安全（そのままにして変えないほうがよい）”（筆者の諺辞典、諺139を参照）がある。

— 例題１：セレスティーナ第７幕、セレスティーナと同じような環境で生きていたパルメノ（カリストの従者の一人）の母親が、自分より度胸もありずっとやり手だったとセレスティーナのせりふ、“¿No sabes que dice el refrán: <que mucho va de Pedro a Pedro>?……¿No has visto en los oficios unos buenos y otros mejores?　ペドロとペドロでも大違いという諺を知っちゃいないのかい？……ほんとに仕事というものにはね、よくやるといっても、差があるということを、お前さんお判りじゃなかったかい？”

— 例題２：ドン・キホーテ第一部47章、主人から島がもらえることに望みをかけているサンチョに“とんだ約束にひっかかったもんだね”と床屋に言われて、サンチョはだれにもひっかかりゃしねえ、“...; que no es todo hace barbas, y algo va de Pedro a Pedro.　...ひげを剃るばかりが能じゃねえし、太郎べと太郎べでも、どこかにちがいがあるだからね”と、たとえ

貧しい愚か者でもこのわしにいんちきはならねえと息巻く。（正編三、永田寛定訳）

― 日本では反対に、どれもみな似たり寄ったりで大きな違いがないことをたとえて“団栗の背競べ”とか、“大同小異”、“五十歩百歩”（孟子）などということわざがよく聞かれる。凡人の中に一人際立って優れた人がいると“掃き溜めに鶴”という。その反対に優れた人の中につまらぬ者が交じっているのを“雑魚の魚（とと）交じり”、“蝦の鯛交じり”などという。

980. Mucho vale y poco cuesta, a mal hablar buena respuesta.
たいしてかからず　値打ちがあるものとは　悪口に　良い応答

― どんな場合でも礼儀正しい態度と柔らかな応答で接することができる人は、とても価値があるということ。相当に人間ができていないと己を冷静にコントロールすることは難しい。そう出来なくて、高い地位を追われ、或いは、自分から去っていった者たちが過去から現在までどれくらいいるであろうか。それほど“言うは易く行うは難し”の行為である。

― 類義のことわざには“La blanda respuesta, la ira quiebra; la dura, la despierta.　柔らかい返答は、怒りを鎮め、烈しい返答は、怒りをかき立てる”（筆者の諺辞典、諺142を参照）がある。また旧約聖書（箴言、15－1）には、同義で“La respuesta amable calma el enojo; la respuesta violenta lo excita más.　柔らかな応答は憤りを静め、傷つける言葉は怒りをあおる”がある。

― スペインのことわざが言うように出来ない凡人は、“言いたいことは明日言え”を心掛けて、いったん頭を冷やしてよく考え、後で言うようにすると失敗したり、後悔しないですむ。その場で黙っていることができないと“売り言葉に買い言葉”になってしまい、負けずに悪口をいいかえす羽目になってしまう。

981. Mudado el tiempo, mudado el pensamiento.
時が変われば　考えが変わる

― 時が経過するにつれて、価値観が変わっていくということ。深く勉学を積めば積むほど、今まで表層的に見ていた物事を、透徹した見方で捉えることができるようになる。また、年をとってきて、若かった時に抱いていた物事に対する考えが単に変わるとも解釈できることわざである。

― バロス諺集によると、時が経つにつれて、物事に対する評価が大いに変わっていく。

― “ことわざ辞典”（岩波）によると、出典が中国の“易経”には、君子は時代の推移に従って自己改革を遂げ、豹の毛が美しく変わるように自己を一新する、とある、そこから“君子豹変す”（徳があり人格の高い人物は、たとえ過ちを犯してもすぐに改める）の格言がでてきた。しかし、現代では、上に立つ者が悪い方に激しく急に変わる場合に使うことが多くなっている。

これなどは、時が変わるとこんなにも解釈が変わるというスペインのことわざのいい例になるだろう。現在、格言の本来の意味を知っている日本人はどれくらいいるであろうか。

982. Mudar costumbre es a par de muerte.
習慣を変えるのは　死と同じくらい辛いもの

— 習慣というものは、身についてしまうとその人の生まれつきの性質と同じようになるため、それを変えるということは、その人自身も死んだように感じられる。（筆者の諺辞典、諺389を参照）

— コレアス諺集には見出し形と共に、異表現で“Mudar condición es a par de muerte.”が収載されている。コレアスは、“習慣というものは、第二の天性であるから、それを変えると死んだように感じる。”と解説している。しかし、コレアス同諺集の“Múdanse los tiempos, múdanse las condiciones.　時が変わると、習慣も変わる”という諺に見られるように、人の長い一生の間には習慣を変えなくてはならないことが度々起こるものである。バロス諺集には、類義で“Dejar lo usado es cosa fuerte, que mudar costumbre a par de muerte.　習慣を変えるのは、死と同じくらい辛いもの”（筆者の諺辞典、諺389を参照）が見られる。

— 例題：セレスティーナ第15幕、セレスティーナがいなくなってひとりぼっちになったエリシアは、従妹から一緒に住もうと誘われるが次ぎのように言って断わる、“Pues ya sabes cuán duro dejar lo usado y que mudar costumbre es a par de muerte y <piedra movediza que nunca moho la cobija>. だって、あんたももう判っているよね。手馴れたことをやめるのは、どれ位つらいことか、また習慣を変えることは死ぬのと同じだし、転がる石には絶対に苔がつかないということをね。”（魔女セレスティナ、大島正訳）

— 特に年を取ってから居場所とか習慣を変えることは死ぬほど辛いとはよく言われていることである。“習慣は常となる”、“習い性となる”、“老い木は曲がらぬ”、“三つ子の魂百まで”など数多くの日本のことわざが言い表わしているように、良くても悪くても習慣というものは一度身についてしまうと変えるのが難しいし、無理に変えようとすると、人はその変化によって影響され、たいていの場合は悪くなるものである。

983. Muera Marta y muera harta.
マルタが死ぬときゃ　満腹して死ぬ

— 甚大な被害を蒙るかもしれないのにほんの思いつきを本当にやってしまうような人をいう。

— スバルビィによると、結果的に、少なからぬ害が我が身にふりかかってくるかもしれないとわかっているにもかかわらず、わがまま、気まぐれ、思いつきなどを躊躇なく実行してしまう人をいう。

― コレアス（コレアス諺集）は、具体的な例をあげてこう解説している；病いによって喉の渇きを訴えている人、或いは、どんな事にも貪欲な人など、それぞれが後で害を及ぼすかもしれぬのに喉の渇きを癒したい、欲望を満たしたいと、熱心にこう言う、“飲ませてくれ、それから死なせてくれ、だけど喉が渇いたままでは死なせないでくれ”と、また、こうも言う、“もし、もう救いようのない状態で、お腹が空いているのなら、慈悲心から食べさせてあげるのがよい、空きっ腹で死なすのは可哀想である、飢えに苦しみながら死ぬほど哀れなことはないから。”

― 例題：ドン・キホーテ第二部59章、凶暴な牛どもに、踏んづけられてすっかり意気消沈したドン・キホーテは食欲もなく、このままいちばんむごい死に方である飢え死をさせてくれとサンチョに頼む、それに対し、サンチョは諺を引き合いに出してこう返事する。“-Desa manera-dijo Sancho, sin dejar de mascar apriesa-, no aprobará vuestra merced aquel refrán que dicen <muera Marta, y muera harta>. “そいじゃね”と、サンチョは、いそがしく咀嚼することを止めずに言った。“おめえさまは、あの＜マルタ死ぬなら、たらふく食って＞ということわざ、感心しねえかね。”（続編三、高橋正武訳）

― マルタという女性がでてくる諺はこの他にもいくつかあるが（筆者の諺辞典、諺828を参照）、見出し形のように“Marta-harta（同韻）”の組み合わせの諺には、“Marta, la que los pollos harta.　たらふく鶏肉を食べるマルタ”、“Bien canta Marta después de harta. 満腹した後のマルタは上手に歌う”などがある。

― 養生のために酒、タバコなどを節制している男たちを自然に思い起こさせる諺である。きまって彼らは好きなものを我慢してまで長生きしたくないという。日本の諺には“酒は飲むとも飲まるるな”、“酒は飲むべし飲むべからず”などがあるが、これらは、酒に限らず、人の諸々の欲望についても言えるのではなかろうか。

984. Muerte (La) es sorda.
死神は　つんぼ

― 死神は、来るのを引き止める人々の叫び声など聞こえないから。（スバルビィ）

― 死（la muerte）に関する諺がコレアス諺集に次ぎのように見られる；“La muerte a nadie perdona.　死は誰をも容赦しない”、“La muerte a unos da buena, a otros mala suerte. 死は、ある者には凶を、又、ある者には吉をもたらす”（ある者は遺産を相続し、ある者は庇護してくれていた者を亡くしたことにより困窮する－コレアス）、“La muerte a unos desacomoda y a otros acomoda.　死はある者の調子を狂わせ、ある者を落ち着かせる”、“La muerte lo iguala todo, lo ataja todo, lo barre todo.　死は全てを等しくし、全てを阻止し、全てを運び去る”、“Muérese el rey, y el papa, y el que no tiene capa.　王様も、法王もコートのない貧乏人も、みんな死んでしまう”など。

― 例題：ドン・キホーテ第二部７章、サンチョは死についての蘊蓄を滔々と披露して、賢く分別

あるサンチョの本領を発揮している、“...，y que nadie puede prometerse en este mundo más horas de vida de las que Dios quisiere darle; porque la muerte es sorda，y ... 神様がくれなさる時間より余計に長らえることを約束できる者はいねえでがす。なぜってえと、死神は耳がねえからで、...”（続編一、永田寛定訳）

— “死神は、つんぼ”とは、うまいことをいったものである。来て欲しくない死神が訪れれば、人のお願いなど何の効き目もない。日本にもこの世に生きているものには、遅かれ早かれいつかは死が訪れるという意のことわざがいくつかある；“生き身は死に身”、“生ある者は死あり”、“生き物は死に物”、“生者必滅”、“会うは別れの始め”など、こちらの諺には無常感、悲愴感が漂っていて、スペインの一連の諺のようなおかしみはない。

985. Muerte (La) , tan bien come cordero como carnero.
死神は　親の羊も食べるし　子の羊も食べる

— 死神は、いつも腹を空かし、がつがつしていてより好みすることなく手当たりしだいに何でも食べるということ。

— スバルビィ：死はあらゆるものにとって同等であり、区別なしにやってくる。“La muerte no perdona al rey ni al papa，ni a quien no tiene capa.　死神は、王様も法王も貧乏人も容赦しない”と同じ主旨の諺。

— 例題：ドン・キホーテ第二部20章、ここでも、サンチョはドン・キホーテに向かって諺を引用しながら死の講釈をする、“...，que no hay que fiar en la descarnada，digo en la muerte，la cual también come cordero como carnero.　骸骨、つまり、死神ほどあてにならねえものはねえだ。親の羊も食えば、子の羊も食うだからね。”（続編一、永田寛定訳）それに続けて、古代ローマの詩人ホラティウスの詩歌に由来する類義の格言を口にする、“...，y a nuestro cura he oído decir que con igual pie pisaba las altas torres de los reyes como las humildes chozas de los pobres.　わたしたちの和尚さまも言いなさったが、死神は、王様がお住まいの高え塔も、貧乏人のいやしい小屋も、おんなじ足で踏むってね。”（同上）

986. Muerto (El) al hoyo y el vivo al bollo.
死んだ者は墓へ　生きている者はパンへ

— たいてい人というものは、親族、友人を亡くしてもすぐに慰めを得るものである、また、葬式が終わると、それぞれの用に馳せつけたりするものである。

— コレアス諺集には、同義で異表現のことわざが次ぎのように収載されている；“El muerto a la fosada y el vivo a la hogaza.　死者は墓へ、生者はパンへ”（fosada は、huesa，fuesa，墓の意）、“El muerto a la huesa y el vivo a la mesa.　死者は墓へ、生者は食卓へ”、“El

muerto a la mortaja y el vivo a la hogaza.　死者は経かたびらを、生者はパンを”、“El muerto en el cementerio y el fraile en el monasterio.　死者は墓地に、僧侶は僧院に”など。各々の諺における対句が次ぎのように同韻である；“hoyo-bollo, fosada-hogaza, huesa-mesa, mortaja-hogaza, cementerio-monasterio”

― イリバレン（格言の背景）によると、一連の上記のことわざの古い表現は、1555年の“Refranero－格言集、Hernán Núñez”に収載されている“El muerto a la fosada y el vivo a la hogaza.　死んだ者は墓へいけ、生きている者はパンへいけ”であるらしい。

― コバルビアスの宝典には“El muerto a la cava y el vivo a la hogaza.　死んだ者は墓穴へいけ、生きている者はパンへいけ”が収載されている、コバルビアスは“生きている者がどんなに悲しみの感情を死者に対して持っているとしても、死者を葬ってしまえば、食事をするために家に戻ってくるものである。”とコメントしている。

― マリア・モリネールによると、<El muerto al hoyo y el vivo al bollo> の後半の部分はたいていは、＜…＞に入れ替えられるとしている。

― 例題：ドン・キホーテ第一部19章、罪のない者たちに襲いかかったドン・キホーテにこの場から早く逃げ出したいサンチョがこう言う、“...como dicen, váyase el muerto a la sepultura y el vivo a la hogaza.　世間でも、＜死んだものは墓へいけ、生きているものはパンへいけ＞と言いまさ”（正編二、永田寛定訳）註：イリバレン（格言の背景）によると、セルバンテスは、度々サンチョにことわざを間違えて使わせている。

― ことわざの主旨は違うが、同じような誇張表現を用いたのが日本にもある；“親が死んでも食（じき）休み”、“親は死んでも子は食休み”、“倅が死んでも今一服”、“隣が火事でも先ず一服”など、いずれもどんなに忙しくても、食後の休憩はとらなければいけないという意である。

987. Los muertos abren los ojos a los vivos.
死者は　生きている者の眼（まなこ）を　開けてくれる

― 生きている者は、良くても悪くても死者の生前の行いから学んだり、戒めとしたりすることができる。

― コレアス：死者は生きている者たちの手本となる、こういう諺もある；“Los que dan consejos algo ciertos a los vivos, son los muertos.　生きている者たちへ、何か確かな忠告を与えられる者は、死者である”

― スバルビィ：死者たちが生前した行為は、われわれの手本となる、それを真似るか、或いは、それを訓戒とするかによって。

― 宝典（コバルビアス）によると、“Abrir el ojo-estar con advertencia　用心する、Poner los ojos en una cosa-apetecerla　欲する、気をそそる、tener ojo en una cosa-mirar por ella　気にかける、留意する、mirar de mal ojo-mostrar odio　憎悪を表す、en un abrir y cerrar

de ojos-en un momento　瞬時に、hasta los ojos-del que está metido en la hondura de algún negocio　何らかの用件の深みにはまって動きがとれない、etc.

— 例題：セレスティーナ第17幕、生前は、やり手婆あであったセレスティーナのもとにいたアレウーサが仲間の女に婆さんが死んで二人には良かった、暮らしも前よりはよくなったと言い、こう続ける“Por esto se dice que los muertos abren los ojos de los que viven; a unos, con haciendas, a otros, con libertad, como a ti. だからさ、こんなことを世間じゃ言うのね。つまり死者は生きている人の目を開かせてくれる。財産で開かれる者もあれば、お前みたいに、自由でもって開かれる者もあるってのさ。”（魔女セレスティナ、大島正訳）

988. Muerto (El) y el ido, presto en olvido.
去る者は　日々に疎し

— 死んだ人は、年月がたつにつれて、次第に忘れ去られていくし、親しかった人も、遠くに行ってしまうとだんだんとその間柄が疎遠になるということ。（筆者の諺辞典、諺65を参照）

— “岩波、ことわざ辞典”によると、筆者が訳として用いた見出しの日本語表現は“徒然草（つれづれぐさ）”で用いられたもので、その出典は中国の“文選（もんぜん）”にある詩で、そこでは<去れる者は日（ひび）に以て疎まれ、生ける者は日に似て親しまる>と詠まれ、死者と生者が対をなしている、としている。ここでいう“去る者”も、スペインの諺で具体的に言い表わしている“el muerto－死者”および“el ido－（遠くに）いってしまった人”を指している。人が感じる思いは東洋でも西洋でも少しも違いがないと思わせる表現である。

— 例題：セレスティーナ第20幕、恋人のカリストが転落死したことにより、メリベアも同じ死を選ぼうとする、何故なら、“No digan por mí: <a muertos y a idos...>. Y así contentarle he en la muerte, ･･･わたしのことで<去る者は日日に疎し･･･>などとは言われたくありませんもの。さて、こうしてわたしが死ぬことで、あの方を満足させてあげましょう。･･･”（魔女セレスティナ、大島正訳）註：Bruno Mario Damiani（La Celestina, Cátedra 1984年）によると、<a muertos y a idos の後には pocos amigos（ほとんど友人がいない）の文を続ける。

— 日本には次ぎのような類義のことわざがある；“目から遠ければ心から遠い”、“遠ざかる者日々に疎し”、“遠ざかるは縁の切れ目”、など。

989. Muéstrame a tu mujer y decirte he qué marido tien.
妻を見れば　どんな夫かわかる

— 夫婦は長年つれ添ううちに、性格、行動、趣味などがだんだん似てくるから。

— バロス：妻は夫の性格、教養を忠実に反映している。

― スバルビィ：“Muéstrame tu mujer, decirte he qué marido tien, o/y te diré qué marido tiene.　奥さんを見せてくれれば、どんな旦那か言ってあげよう”目下の者の振るまいから、目上がどのように治め、気を配っているかがわかる。

― 日本のことわざでは、“似た者夫婦”、“破(わ)れ鍋に綴蓋(とじぶた)”、“夫婦はいとこほど似る”、“夫婦は一心同体”、“夫婦は二世”などというように、夫婦生活を長く続けて苦楽を共にしているうちに、夫婦は自然にあらゆる面で似かよってくるし、堅く結びつくようになる、その親密な間柄はこの世ばかりでなく、来世まで続くと言っている。スバルビィのコメントは、夫婦関係を生涯の伴侶、同志、相棒、ととらえずに上下関係としてとらえている、そこから一般的に管理する者とされる者にまで意味を広げている。“夫婦同志は持ち合い持たれあい”（夫婦は互いに持ちつ持たれつの生活をするものである）の日本のことわざは、夫婦は同等であることをはっきりと言い表わしていて、スバルビィのコメントとは対照的である。

990. Mujer (La) aliñada, antes que se viste hace la cama.
まめまめしい女は、着変える前に　ベッドを整える

― 働きものの女は、おめかしをしたり、着飾る前に家を整える。（バロス）

― バロス諺集には、類義で“La mujer aseada, la cama hecha y la cabeza tocada. きれい好きな女は、ベッドも整え、髪も整える”（清潔でこまめな女は、家事もよくするし、身なりもいつもきちんとしている－バロス）がある、また、それとは反対に、“La mujer cuanto más se mira a la cara, tanto más destruye la casa. 女は鏡を見れば見るほど、家をだめにする”、“La mujer algarera, nunca hace larga tela. おしゃべりな女は、少ししか仕事をしない”（La que mucho habla poco trabaja. のことで、おしゃべりしているうちに、エネルギーが口からでていってしまうから－スバルビィ諺集）などの諺もある。

― “la mujer algarera-la mujer charlatana y ruidosa おしゃべりで騒々しい女”、“hacer larga tela－仕事をたくさんすることの比喩”

991. Mujer (La) artera, el marido por delantera.
利口な女は、夫の後ろに隠れて

― 自分の思いどうりに事をすすめるために夫をいい訳につかう。

― コレアス（コレアス諺集）によると、妻にとって都合の悪いことをしたくない時、例えば、人に何かをあげたくないとか、貸したくないような場合、夫の許可がでないのでとか、それをすると夫が怒るからとか何とかかんとか言って夫を口実に逃れる、結婚している妻にとっては、夫をこのようにもちだすのは慎重な断わり方といえるだろう。スバルビィも同じように、抜け目のない妻は、自分にとって都合のよくない事をしないですませるために夫を口実に使うと説

明している。

— バロス諺集には、類義で“La mujer aguda, con el marido se escuda. 鋭敏な妻は、夫を口実にする”がある。

992. La mujer blanca encubre ciento y una falta.
色の白いは　七難隠す

— 色白の女性は、たとえほかに多少の難があっても、それを覆い隠して美しく見えるということ。

— 日本の諺のように“七難”、“十難”（ともいう）どころか、スペインのそれは“百一難”と誇張している。それほど色白はたくさんの難点を隠してくれて美人の形容になっている。どこの国でも美人の基準が共通しているのがおもしろい。

— 類義の日本の諺で、美人を表現しているのには、“米の飯と女は白いほどよい”、“髪の長い女は七難隠す”、“卵に目鼻”などがある、反対の諺には“色の黒きは味よし”、“炭団（たどん）に目鼻”などがあり、色の黒いのは不美人の形容となっている。

993. Mujer (La) brava es la llave de su casa.
勇ましい女は　家の鍵となる

— こういう女は、家をしっかりと守ってくれるし、繁盛させてくれる。

— しかし、あまり勇まし過ぎると、“A la mujer bigotuda, de lejos se la saluda. 口ひげのある女には、遠く離れて挨拶”、“Mujer barbuda, de lejos se la saluda, con dos piedras, que no con una. ひげのある女には、遠く離れて挨拶、それも手にはひとつではなく、ふたつの石を持って”などと、敬遠されてしまう。ここではひげのある女は、勇ましい、しっかり者、しかし少々荒っぽく、おっかない女の比喩となっている。

994. Mujer (La) buena, de la casa vacía la hace llena.
良妻は、空っぽの家を　いっぱいにしてくれる

— かいがいしく働き、無駄使いしない妻は、夫をよく助けて家を繁盛させてくれるということ。

— スバルビィは、働きものの妻というものは、ひとりで少しずつ質素でみすぼらしい家を居心地のよい家に変えていくものであるという。スバルビィ諺集には、良妻について“La mujer buena, corona es del marido. 良妻は、夫の冠である”（夫にとって妻が与える名誉ほどの名誉はないから－スバルビィ）が、また、コレアス諺集には、“La mujer que es buena, plata es que mucho suena. 良妻のいる家では、銀貨の音がよく響く”、“La mujer que mucho hila, poco mira. よく紡ぐ女は、ほとんど鏡を見ない（気をそらさない）”などが、それぞれ収載

されている。その反対の悪妻については、コレアス諺集では、“La mujer que no sabe cocinar y la gata que no sabe cazar, nada val. 料理が下手な女と、ネズミ捕りの下手なネコは何の価値もない”、“La mujer que mucho mira, poco hila. 鏡ばかり見ている女は、ほとんど紡がない”、“La mujer que poco hila, siempre trae mala camisa. ほとんど紡がない女は、いつもだらしのない衣(ころも)を着ている”などが、また、バロス諺集では、“La mujer pulida, la casa sucia y la puerta barrida. 念入りに化粧した女、家の中はきたないが、玄関はきれい”（筆者の諺辞典、諺1001を参照して下さい）などがそれぞれ収載されている。これらの諺から、スペインだけでなく、以前の日本でも考えられていた良妻、悪妻の概念がわかって面白い。日本でも、家計のやりくりが上手で財産を増やしてくれる、なおかつ夫を大事にしてくれる年上の女房を称えて“姉女房は身代(しんだい)の薬”、“姉女房倉が建つ”、“姉女房は子ほど可愛がる”などがある。

995. Mujer (La) casada y honrada, la pierna quebrada y en casa, y la doncella, pierna y media.
結婚している律儀な女は、足折って、家の中、
また、まっとうな娘も、同じ

― 結婚している女も、結婚前の娘も、外を出歩いてばかりいて家事をおろそかにするのはよくない、自由がありすぎるのは困りものだと戒めている。

― 異表現の“La doncella honrada, la pierna quebrada y en casa. まっとうな娘は、足悪くして、家にいる”は、すでに見てきた。（筆者の諺辞典、諺432を参照）

― 例題：ドン・キホーテ第二部５章、ドン・キホーテと三度目の遍歴に出かける、島の太守になれるかもしれないと、うきうきしているサンチョに妻のテレーサが、おまえさんは、どこにでも出かけなさい、娘とわしは、この村を一歩も離れない、“...: la mujer honrada, la pierna quebrada, y en casa; y la doncella honesta, el hacer algo es su fiesta. 堅気な女は足がよわく、うちにいるもんだし、たしなみのいい娘は、働くのをたのしみにするだわよ。”と殊勝なことを言う。（続編一、永田寛定訳）第二部34章、49章でも、サンチョがこの諺を使っている。（筆者の諺432を参照のこと）

― バロス諺集には、類義の諺“La mujer en casa y el hombre en la plaza. 女は家に、男は外に”（それぞれが自分の仕事に精をだすのがいいと言っている－バロス）。“La mujer maridada, no viva descuidada. 結婚している女は、気を配って生きよ”（夫、子供、家庭のことなどに関する諸々の仕事をしなければならぬし、また、特に己の評判を汚さないように気をつけなければならぬから－バロス）などがある、また、スバルビィ諺集には“La mujer compuesta, a su marido quita de puerta ajena, o quita al marido de otra puerta. おめかしした女は、よそのドアの亭主を取ってしまう”（亭主が外で女をつくらないために、妻はいつもきちんと

化粧し、きれいにしていなければならぬ－スバルビィ）がある。一連のこれらのことわざは、家事を完全にこなし、貞淑であり、夫が浮気しないようにいつも身なりをきちんとしていなければならぬなど、昔の典型的な良妻賢母を謳っている。

996. Mujer (La), con el marido, en el monte tiene abrigo.
夫のいる妻は、山中でも避難場所がある

— 夫に守られている妻は、どこででも受け入れられ、敬意を払われる。
— 同義で異表現のことわざが、スバルビィ諺集に次ぎのように収載されている；“La mujer casada, en el monte es albergada. 結婚している女は、山中でも守られている”、“La mujer con su marido, en el campo encuentra abrigo. 夫のいる妻は、野原でも避難場所がある”など。
— 現在は、世界的に結婚しない男女が増えているので、独身のままでも世間から奇異な目で見られることもなくなったが、以前はそうではなかったことが、これらの諺からもうかがい知れるだろう。特にひとり身でいる女性にとって世間の偏見の目は厳しかった。言わんとしているニュアンスは少々異なるが上記のことわざと反対のもある；“Mujer casada, nunca asegurada. 結婚している女でも、安心できない”（ひとりの女をしっかりとひきとめておくのは難しい－バロス諺集）

997. Mujer (La), cuando se irrita, muda de sexo.
女は、腹を立てると　性が変わる

— 通常はやさしく、女らしくても、我を忘れて怒れば、男のように荒っぽくなるということ。
— 普段、見せない顔を見せてしまっては、後で悔やんでも遅い、人からがっかりされたり、恨み、反感を抱かれたりと、怒りは身を滅ぼしかねない、故に、“怒りは敵と思え”、“怒りは愚かな者の胸に宿る”などと言って、こちらでは怒りを戒めていることわざがある。
— （男の目から見た）女の性癖についてユーモアをこめてこう言っている諺もある；“Las mujeres sin maestro saben llorar, mentir y bailar. 女は師匠に教えられなくとも、泣き方、嘘のつき方、踊り方を知っている”（バロス諺集）、“La mujer, cuando piensa sola, mal piensa. 女はひとりで考えている時は、よからぬことを考えている”（同諺集）、“La mujer en la iglesia, santa; ángel en la calle; buho en la ventana; en el campo, cabra, y en su casa, urraca. 女というものは、教会では聖女、街では天使、窓際ではフクロウ、野原ではヤギ、家ではカササギ”（ちなみに、大きく目を見開いて外を眺めている様子がフクロウに似ている、又、buho には、比喩的に persona huraña－人間嫌いな、引っ込み思案な人を指す意味もある、あちこちと飛び跳ねている様子はヤギだし、カササギはお喋りの比喩－筆者）など。

998. Mujer enferma, mujer eterna.
一病息災

― 虚弱なタイプの人や、或いは、常にどこかに軽い故障、痛み等があって、体調がすぐれないことを口にだして嘆いているような人は、病気一つしないと自慢している人に比べて、かえって長生きするものであるということ。

― スペインの諺の直訳は“病気の女は、永遠に生きている”である、バロス諺集によると、女だけではなく男についても次ぎのように同様の諺がある；“Hombre enfermo, hombre eterno. 病気の男は、永遠に生きている”

― 日本のことわざの“一病息災”と同義のスペインの諺である、こちらも、少しの持病程度なら無病の人よりも健康に気をつけるのでかえって長生きするという意。病気にかからず元気でいるという意の“無病息災”という諺もある。見出しの類義には“病上手の死下手”がある。

999. Mujer hermosa, viña e higueral, muy malos son de guardar.
美しい女、ブドウ園、イチジクの木、守るのが難しい

― これら三つのものは、人の食欲をひきつけるとても甘いものである。どんな小さな被害であれ、避けるためには熱心に管理しなければならない。（スバルビィ）

― スバルビィ、バロス諺集にはそれぞれ“mujer hermosa －美しい女”について次ぎのような一連の諺がある；“La mujer hermosa, al desdén se toca. 美しい女は、無造作に髪をとかす”（美しい女は、念入りに身繕いしなくても自然のままで美しい－スバルビィ、さりげなくしているほうがより美しい－バロス）、“La mujer hermosa, o loca, o presuntuosa. 美しい女は、常軌を逸しているか、うぬぼれているかのどちらかだ”（自分の美しさをよく知っている女は、確かに思い上がったり、まっとうな女がしないような途方もない行為をするようになることもある－スバルビィ）、“La mujer hermosa quita el nombre a su marido. 美しい妻は、夫から名を奪う”（妻が美しくて評判になると、誰もが彼女を知っていて、誰々の夫人とは呼ばれなくなる。反対に夫のほうが名前で呼ばれるよりは、誰々の夫と言われるようになる－スバルビィ）、“La mujer hermosa, un poco roma, mas no tanto que parezca mona. 美しい女は、ちょっと鼻が低い、猿に見えるほどではないが”（本当に少し鼻ぺちゃだととても愛嬌がある－バロス）、“La mujer, hermosa, y la galga, golosa. 女は、美しく、食いしん坊は、甘いもの好き”（であるにちがいない－バロス）

― 日本のことわざで美人を謳っているのは；“佳人薄命”（現在では“美人薄命”のほうがよく知られている、岩波ことわざ辞典によると、源は中国の代表的美人で、とても病弱だった）、“美女は悪女の仇”（美人は醜女からしっとされる）、“美人に年なし”（いくつになっても若く見える）、“美人は言わねどかくれなし”（美人はだれが言わなくても自然に世間の知るところとなる）など。

1000. Mujer (La) loca, por la vista compra la toca.
軽薄な女は　見てくれで　帽子を買う

— その物自体が役に立つかどうかより、それに付いているたいして重要でない飾りものの方に注意を払う人をたとえていう、また、事柄の表面だけに重点を置いて判断するような人を批難している。（バロス）

— スバルビィ諺集には、異表現で“La mujer loca, o por el cabo, o por los cabos, o por la lista, o por la vista compra la toca. 軽薄な女は、帽子に付いているリボンで／見てくれで帽子を買う”が収載されている。スバルビィによると、人とか物の良さを判断する時に、それらの本質を見極めないで、単に外見が魅力的か、素敵であるかないかで決めるような人を咎めている。

— “toca －女性が被るベール、（修道女の）ずきん、帽子”

— 人とか物の本質が大切なのであって、体裁とか見てくれではないということ。そうはいっても、人が物を選ぶ時は、単に実用的かどうかよりはなるたけ体裁のよいもの、美しいものを欲する傾向がある、特に人の場合は、立派で感じのいい魅力的な外見は一目で良い印象を他者に与えてしまう、故に、日本には“人は見かけによらぬもの”、とか“人は見目より只心”のようなことわざがある、このような表面的な外見に惑わされないようにとおしえているのである。

1001. Mujer (La) pulida, la casa sucia y la puerta barrida.
念入りに化粧した女　家の中はきたないが　玄関はきれい

— 自分の身なりに気を配りすぎる女は、家庭をおろそかにする傾向がある。己の身のまわりなど、外見ばかり気にして飾り立てる女をたとえていう。（バロス）

— 見栄っ張りの体裁屋は、他人の目につくところは、きれいにするがそうでない所には少しも気を配らないということだろう。本人に関していえば、中身を磨くよりも外見を飾り、家の中を掃除するより玄関だけはきれいにするといったように。

— 類義では、怠慢な女を謳ったものが次ぎのようにコレアス諺集に見られる；“La mujer que mucho mira, poco hila. 鏡ばかり見ている女は、ほとんど紡がない”（仕事に気を配るよりおしゃればかりを気にする女をたとえている－スバルビィ）、“La mujer que no sabe cocinar y la gata que no sabe cazar, nada val. 料理が下手な女とネズミ捕りの下手なネコは、何の価値もない”（ネズミを捕らぬネコに女をたとえた辛辣な諺－筆者）、“La mujer que poco hila, siempre trae mala camisa. ほとんど紡がない女は、いつもだらしのない衣（ころも）を着ている”（筆者の諺辞典、諺994を参照）、“La mujer que poco vela, tarde hace luenga tela. 夜なべをほとんどせぬ女は、長い布を織るのに時間がかかる”など。スペインの諺には、女の家庭での仕事の代表格が“hilar－紡ぐ、cocinar－料理をする、barrer－掃除をする”などになって

いる。また、たとえにでてくる動物の中でもネズミとネコの取り合わせは、スペインでも日本でも際立って多いと言えるだろう。

1002. Mujer (La) rogada y la olla reposada.
女は望まれて　ナベ料理は蒸らして

― 女は熱心に懇願されると、それだけ高い敬意を男から払ってもらえる、また、ナベ料理は火から下ろした後、完全に蒸らしてから食べるととても美味しくなる。（バロス）
― 慎み深い女はいかに称賛されるかを言い表わしたことわざ。（スバルビィ）
― 女が男を好きでも、自分のほうからは積極的に男に告げずにじっと男から所望されるのを待っている、そういう控えめな女性を、熱い火から下ろされて美味しく食べられるのを待っているナベ料理にたとえたことわざである。恋愛でも料理でも、何にでも最良の時期があるということだろう。両者に関しては、かっかかっかと一番熱い最中ではよくない、少し冷ましてからということだろうか。“rogada”と“reposada”には、韻を踏ませている。

1003. Mujer, viento, tiempo y fortuna, presto se muda.
女と風と時と運は　すぐ変わる

― これら四つのものは全く当てにならないということ。女の男に対する心は常にふらふらしているし、風向きはいったいによく変わる、時は常にとどまることなく移り変わっていくし、また、人の運も水車や風車のようにくるくると回っている。
― コレアス諺集には、異表現で“Mujer, viento y ventura, presto se muda. 女と風と運は、すぐ変わる”が、類義で“Mujer, vino y caballo, mercaduría de engaño. 女と酒と馬は、いんちきな商品”（買った後で騙されたと気付くことが多い－筆者）が収載され、またバロス諺集では“Mujer, viento y caballo, mercaduría de engaño. 女と風と馬は、いんちきな商品”が見られる。
― 日本のことわざでは、変わりやすいものとして“女心と冬の風”、“男心と秋の空”、“女心と秋の空”などがある、また、どう変わっていくか測り知れないという意の“水の流れと人の末”、“水の流れと身の行方”などがある。スペインでも日本でも変わりやすさの筆頭が女心とはおかしい気がするが、“岩波、ことわざ辞典”によると、日本のことわざの方は、古くは、“男心”形が“女心”より圧倒的に優位だったようである。

1004. Mujer (La) y el fuego y los mares son tres males.
女と火事と海は　三つの恐いものである

— 人の力が及ばない天災は誰でも恐い、火事、地震、台風、ハリケーン、津波、そして変わりやすい風向きに影響される海もとても恐い。それらの恐いものの筆頭に女を持ってきたのはいかにもスペイン人らしい。筆者もスペイン生活が長かったので知っているが、確かにスペイン人女性は強い、あまり男性に媚びたりせずしっかりと自己主張するし、結婚にも恬淡としていて、好きな男性に巡り会うのは天の定めと考えている女性が多いような気がした。

— さて、日本では、この世の中で恐いのは次ぎの四つ“地震雷火事親父”である。しかし、現代では“岩波、ことわざ辞典”が指摘しているように、どれくらいの子供たちが親父を怖がっているだろうか疑問である。日本では父親の権威はなくなってしまったようであるが、スペインではまだまだ女性の権威は存在しているから上記のことわざは生きていると思う。

1005. Mujer (La) y el vidrio siempre están en peligro.
女とガラスは　いつも危険にさらされている

— 脆く、壊れやすいということ。

— スバルビィによると、女というものは、細心の注意深さで貞潔を守り、いつでも慎み深くなければならぬ。ガラスのように壊れやすい女をうたう詩句をスバルビィが引用しているが、それと同じものがドン・キホーテ第一部、33章にも次ぎのように引用されている。

“Es de vidrio la mujer;	女はガラスじゃ。さりながら、
pero no se ha de probar	こわれるものかこわれない
si se puede o no quebrar,	ものかと試しちゃなりませぬ、
porque todo podría ser."	ひょんなことにもなろうでな

（正編三、永田寛定訳）

この章、“とてつもない物好きの小説が読まれる章”では美しい妻を持った夫が、妻の貞潔を試そうとして、結局は妻も親友も己の名誉もなにもかも全て失うことになり破滅するという話しである、女はガラスと同じなのだから女を試そうとするなんてとんでもないということになる。

— コレアス諺集には、類義で“La mujer y la espada nunca ha de ser probada; o tentada. 女と剣は決して試すべきではない”、“La mujer y la espada puede ser mostrada, mas no confiada. 女と剣は見せることはできるかもしれぬが、誰かに託すことはできぬ”などがある。

1006. Mujeres (Las) y el vino hacen a los hombres renegar.
女と酒は　男の信仰を　捨てさせる

― 酒と女はそれほど強い影響力を男に与えるということ。

― 類義では、“La mujer y el vino sacan al hombre de tino. 酒と女は、男から理性を奪う”が、コレアス、バロス諺集に収載されている。人間にとって、理性と信仰は非常に大切なものである、これら二つのものをなくせばどうなるか、Fernando de Rojas の La Celestina の中で恋に盲目となったカリストがわれわれに教えてくれる。その第１幕、初めて美しいメリベアに出会い夢中になってしまった御主人、カリストに対し従者が女に溺れて堕落した男どもの例をずらずらと列挙したそのうちの一つ、“<Las mujeres y el vino hacen los hombres renegar>；do dice <Esta es la mujer, antigua malicia que a Adán echó de los deleites de paraíso. ...女と酒は男の信仰をなくさせるとか、アダムをして楽園の快楽から追い出したその昔のわる者は女であるとか、...”（魔女セレスティナ、大島正訳）

― こちらの“とかく浮世は色と酒”には、上記のような悲愴感は漂ってはいない、それどころか、日々の生活を営む中での女との色事と飲酒をおおいに楽しんでいる様子が感じられる。また、男にとって酒は憂さを捨てさせ、辛い事、心配事などを忘れさせてくれるありがたいものであると、酒を讃えたことわざ“酒は愁いを掃う玉箒”、“酒は天の美禄”、“酒は百薬の長”などがある。やはり、スペインのことわざのように酒というものは何かを捨てさせ、忘れさせるという効能があるのであろうか。時には、良薬にもなるし毒薬にもなるということだろうか。そして、男にとっての女にも酒と同じくらい強い効き目があるということだろう。

1007. Mujer (La) y la cereza, por su mal se afeitan.
女とサクランボは　己の危険も知らずに　おめかしする

― 女は男の気をひくためにおしゃれをし、化粧するが、それにより自身を危険にさらす場合が多々ある、同様に、リンゴ、サクランボなど、諸々の果物は色づくことによりそれが熟したことを人に教えるのである。（バロス）サクランボは、人に食べられるために色づき、女はおめかしをすることにより危険を招く。（コレアス）

― 異表現の“La mujer y la camuesa, por su mal se afeitan. 女とリンゴは、己の危険も知らずにおめかしをする”がスバルビィ諺集に収載されている。スバルビィによると、１）たいてい女というものは、自分の欠点を隠すために化粧し（por su mal－自分の欠点のために）、リンゴは色づきが良くなり、一番美味しく見える時にはもう中身がくさりかけている。２）色づき始めた果物が、人の食欲をそそって手に取られるのと同じように、女も化粧し、おめかしすることにより男の食欲をそそり、純潔を失う危険にさらされる（por su mal－自分の危険のために）。

— 女と化粧は切っても切れない関係だが、日本のことわざでは、それをあからさまに“女は化け物”（女は化粧で年令をかくせる）、“女見るなら忙しい時に見よ”（忙しい時に見ると、化粧しないありのままの姿が見られる）などと言う、これらは、男に化粧した女には騙されるなという一種の警告であろう。スペインのことわざは、それとは対照的にほんのりと色気がつきはじめた初々しい若い女を、色づきはじめ、ふくいくといい香りを放つ果物にたとえてとても詩的である。そしてそういう若い女に悪い虫がつかないようにあまりおめかししないようにと警告している。

1008. Mujer (La) y la cabra es mala siendo flaca y magra.
女とヤギは　痩せて肉がついていないのは　よくない

— そういう女は魅力がないし、痩せているヤギの乳の出はよくない。
— しかし、痩せて小さい女が良いということわざの方が多い；“La mujer y la galga, en la manga. 女も猟犬も、袖口に入るほど”（小さければ小さいほどよい、女はより繊細である－バロス）、“La mujer y la sardina, cuanto más pequeña, más fina. 女も鰯も、小さければ小さいほど上質である”（小さい女は一般的に鋭敏である－バロス）。“La mujer y la sardina, pequeñina. 女も鰯もとても小さい”（だから良い－筆者）
— これら一連のことわざは、小柄な女をヤギ、猟犬、鰯にそれぞれたとえて良いの悪いのといっているが、小さい方が、繊細で鋭敏であると賛美しているのが圧倒的に多い。日本のことわざでも鰯をたとえに用いているのが多いが、魚の中では、最も下等で小さな魚の代表であり、つまらぬもの、粗末なものの比喩として使われている。スペインのリゾート海岸では捕れたての鰯を網で焼いて供しているが、あつあつの鰯ににレモンをかけて食べるととても美味しい。

1009. Mujer (La) y la gallina, por andar se pierden aína.
女もメンドリも　出歩くと　すぐにいなくなる

— 家の中にじっとしていない女にふりかかる危険を警告している。（ スバルビィ）
— 異表現がコレアス諺集に次ぎのように収載されている；“La mujer y la gallina, por andar anda perdida; es perdida. 女もメンドリも歩いているうちにいなくなる”、“La mujer y la gallina, por andar se pierde aína. 女もメンドリも、外に出るとすぐにいなくなる”など、また類義では、バロス諺集に、“La mujer y la gallina, hasta la casa de la vecina. 女もメンドリも隣の家まで”（行ってもいい、もし家の外に出たいならば－筆者、女にはあまり自由を与えてはならぬ、メンドリのように家からあまり遠くに離れるのはよくない－バロス）、“La mujer y la gallina, a casa con el día. 女もメンドリも日中に家に戻りなさい”（夜になると危険がいっぱい－筆者）、また、コレアス諺集には、“La mujer y la oveja, con tiempo a

la cabañuela. 女も羊も、余裕をもって家へ”（連れ戻しなさい、夜の外は危険でいっぱいだから－コレアス）などのことわざが見られる。庭の外に出るとすぐに迷子になってしまうメンドリに女をたとえたこれら一連のことわざは、ユーモアがあって面白いが、現在でも女性にとって世の中は危険でいっぱいであるから決して古くさいことわざではない。日本人の女性が外国で災難に出会うケースも多い昨今であるが、活発な女性は世界中を駆け巡りじっとしてはいない。

― 同じメンドリをたとえに用いた他のことわざが次ぎのようにある；“La mujer y la gallina, para vendimias. 女もメンドリもブドウの取り入れまで”（メンドリは羽が生え変わり、女は野良仕事で日焼けして肌の色が変わる－バロス）、“La mujer y la gallina siempre pica. 女もメンドリもいつもついばんでいる”（女はメンドリのようによくつまみぐいをする－筆者）など。

― スペインでは、上記のように gallina－メンドリは、すぐにいなくなり、いつもついばんでいる食いしん坊である、などの比喩の他にも、臆病な男をたとえて“Es un gallina－彼は腰抜けた”という言い方がある。“岩波、ことわざ辞典”によると、日本でもにわとりは物忘れの代名詞で、人間の言うことを聞かない〈馬鹿〉と見なされているそうで、見出しのことわざに表現も意味もよく類似している“鶏は三歩歩くと忘れる”がある（すぐに物忘れすることのたとえ、よく忘れる人をからかったり、あなどって言う言葉－岩波、ことわざ辞典）。スペインのことわざは女に警鐘を鳴らしてはいるが、こちらのように決してからかったり、あなどったりしてはいないと思う。

― 例題：ドン・キホーテ第二部49章、島の夜回りをしていて男装の娘を捕らえたサンチョは、娘に例のごとくいくつかのことわざを巧みに混ぜてお説教をたれる、“...；que la doncella honrada, la pierna quebrada, y en casa; y la mujer y la gallina, por andar se pierden aína;... まっとうな娘御は足弱のもの、家におるもの。女と鶏は、出歩くとかならず身をほろぼす。”（続編三、高橋正武訳）

1010. Mujer (La) y la pera, la que calla es buena.
女もナシも　黙っているのが　上等

― 女はお喋りではないのが、ナシは切る時に音がしないのがいいと言う。

― コバルビアスの宝典にも収載されているところを見ると古いことわざである、“La muger y la pera, la que calla es buena.”コバルビアスによると、他の果物と同様にナシにもいろいろの種類がある。コレアスは、切る時に音を立てない種類が良いと言い、スバルビィは、食べる時に音がしないナシの種類が良い、また、音を立てるのは、よく熟していない旬のものではないので固くて不味いと言う。スペインのナシはいわゆる西洋ナシで甘く、香りがよく、柔らかいので確かに切る時も、食べていても音はしないが、対照的に日本のナシはサクサクと音がす

るのが上等で味も美味なのではなかろうか。

— 女を果物にたとえたのが、先にもでてきたが、こういうのもある；“La mujer y la naranja no se ha de apretar mucho porque amarga. 女もオレンジも、あまりきつく搾ってはならぬ、苦くなるから”日本には“立てば芍薬座れば牡丹”など花にたとえることわざはあるが、果物にたとえたことわざは、筆者の知る限りでは見当たらない。さきほどから見てきているが、スペインでは、女のたとえかたが多種多様であることがわかる。それに比べて日本のことわざは、“女”という項目を調べてもたとえがほんのわずかである。こういうところからも、スペイン人の発想は奇抜で想像力も豊かであるということが言えると思う。

1011. Mujer (La) y la seda, de noche a la candela.
女も絹も、夜にろうそくの下で　見よ

— 本当よりきれいに見えるから。（バロス）女は実際よりふっくらと美人に見える。（コレアス）

— 異表現の“La mujer y la tela, a la candela. 女も布も、ろうそくの下で見よ”、“La mujer y la tela, a la candela; o a la vela. 同訳”（売りに出す時には－コレアス）、“La mujer y la tela no se ha de escoger a la candela. 女も布も、ろうそくの下では選ぶな”などが、コレアス諺集に収載されている。

— コバルビアス（宝典）によると、“candela-vela de sebo, o cera 獣脂ろうそく、（集合的）ろうそくの意”同宝典には、“candela”を用いた諺“Media vida es la candela, pan y vino la otra media. いのちの半分はろうそくで、後の半分はパンとワインで”（ここでのろうそくはわれわれを外側から暖める火で、ワインは内側から暖めてくれる。寒さはいのちと相反するもので、ちょうどよい暖かさがわれわれの生命を維持してくれるのである－コバルビアス）が収載されている。

— 日本でも、夜の薄暗がり、遠くから見た時、そして笠をかぶっていて顔が陰になっている時などは、人の顔がはっきり見えないので実物よりよく見えるの意の“夜目遠目笠の内”という諺がある。ここでは女とは言っていないが、“岩波、ことわざ辞典”によると、カルタの絵札には女を描いたものがほとんどだそうである。また、“笠”を“傘”とみる見方もあるようである。

1012. Mula (la) y la mujer, por halago hacen el mandado.
雌ラバも女も、喜ばせると　いうことときく

— 頑固なラバのような女もお仕置きでは、いうことときかないから。（バロス）われわれが欲することを両者にしてもらいたい時には、力づくではなく、愛情と説得が必要である。（スバルビィ）

— ラバと女を謳った諺が、その他にもいくつかある；“La mula como la viuda, gorda y

andariega. ラバも寡婦も、太っていて出歩き好き”、“Mula que hace hin y mujer que parla latín, nunca hicieron buen fin. ヒィヒィーンと鳴くラバもラテン語を喋る女も、よい結果にはならぬ”（このような音を発するラバも、女に相応しくない仕事に携わっているのもよくないと言っている－スバルビィ）、“La mula y la mujer, a palos se han de vencer. 女もラバも、こらしめて言うことをきかせなければならぬ”（見出しの諺と反対をいう－筆者）、“La mula y la mujer con pan se quier. ラバも女も、パンでいうこときく”（財産のこと－コレアス、quier-quiere）など、女をラバ扱いしているのが辛辣な一連の諺である。

― “mula－ラバ”には、“testarudo－頑固者、強情っぱり、necio－間抜け、愚か者”の意味がある。

1013. Muy caro compra el que recibe, y más caro vende el que da a quien lo agradece.
もらう者は　とても高く買うことになる、
あげる者は　感謝されるなら　とても高く売ることになる

― 前半は、“ただより高い物はない”、“物を貰うはただより高い”と同じで、人からただで物をもらうと、無理な依頼を断わることが出来ない羽目になったり、返礼のための出費もかさんで、結局はとても高いものについてしまうということ。後半は、前半の裏返しで、あげた相手が感謝し恩を感じてくれるなら、こちらの無理な頼みも聞いてもらえるし、結局は大きな利益になって返ってくるということ。類義の日本のことわざには、“海老で鯛を釣る”、“損して得取れ”などがある。

1014. Muy presto llega a la puerta el que trae mala nueva.
悪いニュースは　すぐ届く

― よい噂はなかなか伝わらないが、悪い噂話しはすぐに人から人へと伝わるものである、また、悪い事柄は、世間にぱっと広がる。

― 類義の諺には“El bien suena, y el mal vuela. よい噂は響くだけだが、わるい噂は舞い上がる”（筆者の諺辞典、諺140を参照）がある。

― 悪い噂の伝わりかたの早さを謳って日本のことわざは“ささやき千里”という、それぐらい早い、また、早いだけではなく、話しをより面白くするために人から人へ伝わるうちに尾ひれがついて“人のうわさは倍になる”のである。